
Last Game

じょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Game

【Nコード】

N6522F

【作者名】

じょん

【あらすじ】

少年は目覚めると、記憶を失っていた。出身、身分、年齢、自分の名前さえも。自分の過去を知るため彼は旅立つが、それが後に世界の運命を左右する冒険の始まりになるとは、誰も予想だにしなかった。

プロローグ

僕の家は、山を削って造られた土地に建てられている。つまり、坂の上にあるのだ。

この坂は結構な傾斜で、自転車で下ると40キロ以上出る。計ったことはないことはないが、絶対そうだ。きっと、たぶん。

そして当然のことながら、登るのはつらい。しかも、家は坂の一番上にあるものだから、なおのこと嫌になる。見上げると心が折れるので、傾いたアスファルトを見つめながら、一步一步登っていく。家に着くころには汗だくで、ドアを開けた第一声は、いつも

「母さん、水……。」である。僕が運動嫌いなのはこの家のせいかもしれない。

だが、今日は違う。心臓破りの坂を、ママチャリで登り切った。足はマラソン大会の時よりもパンパンで、今なら注射針もささらない気がする。肺は空気を求めて、しきりに酸素を吸う。苦しくて倒れそうだ。地面に座り込みたくなる。いつもならとくにそうしている。そもそも、僕がこれほどまで肉体を酷使すること自体あり得ない。僕はつらいことはやらない主義なのだ。

だが、今日は違う。今日の僕は、家に帰るためなら軍隊だってへっちゃらだ。……こう、某潜入アクション風に、見つからないようにね……？

限界を超えた体を、かつてない決意で鞭うって家の中になだれ込む。ドアってこんなに重かったつけ。

「母さん、水……。」蚊の鳴く声でいつもの文句を告げる。

「卓哉、帰ったの？」母さんの声が家の奥、台所のほうから聞こえてきた。ただいまと返事をしたかったが、今の僕にその力は残されていない。ってか、よく聞こえたな母さん。モスキートンもびっくりの聞こえづらさだったぞ。

震える指で靴ひもをほどいている間に、母さんが玄関へやってき

た。いつものように、僕専用のマグカップを持って。そこには並々と水が満たされているはずだ。

「もう、ただいまくらい言ったらどうなの？」母さんのいつものお叱り。いつかこれを懐かしむ時が来ると言うが、ただか15までしか生きていない僕にそれを理解できようはずもない。それより今は、もっと大事なことで頭がいっぱいだ。

「とにかく、水を……。」「母親の持つマグカップに手を伸ばす。早く、早く飲まねば、ミイラになってしまう。

母さんは呆れかえりながらも、僕にマグカップを渡した。

ありがとう母さん！なんだか今日は、女神に見えるよ！

受け取るなり、一息に飲み干す。冷たい液体が口内を満たさぬまま、勢いよく喉を流れる。今はとにかくのどに流し込みたい。

「ん、ん、ん……ぶはあ、生き返る！」正確には生き延びた、の気がするが、そんなことはどうでもいい。水という重要なエネルギーを補給した今、体力はMAXまで回復したのであった！

「って、あれ？」そう都合よくは行かなかった。立ち上がるうと膝を立てたはいいが、そこから全く動かない。体を持ち上げられない。ソナバカナ。

「ふん……！」もう一度、今度は歯を食いしばってみる。脳から「立ち上がれ」と命令を下す。

だが、一向に動かない。力み続けて頭がくらくらする。片膝を立てたまま、顔を真っ赤にしている僕を、母は不思議そうに見ている。「もしかして、立てないの？」

「ハハハ、何をおっしゃる。いくら僕が運動音痴で体育？、マラソン大会では散歩しているお爺さんにぬかされる超インドア派だからと言って、立ち上がれないなんてことは……フン！」

ほら、立ち上がった。流石だ僕、限界を超えてなお立ち上がる。

思いつきり、母親を支えにしてみました。

結局母親に自室へと連れて行ってもらい、そこでやっと重い腰を

下ろした。や、重いのは体全体なのだが。

「卓也、ゲームもいいけど、ちゃんと勉強しなさい。」母さんは最後に一言残して去って行った。母親だけあって、僕がこれだけ頑張った理由が分かるらしい。

まあ、数日前からずっとその話をしていたのだから当然と言えば当然なのだが。

すまん母さん。勉強はまた今度で。

最後に片づけたのがいつかもわからないゲーム機の電源を片足でつけないが、カバンに手をつ込む。手はすぐに目的のものを引っ張りだした。と同時にゲームの起動が終わり、タイトル画面が流れ始める。

「やべ、ソフト替えるの忘れてた。」あわててゲームのパッケージを探し出し、抜き出したソフトをはめ込む。一か月遊び倒したが、なかなか飽きのこない、良ゲーだった。

「でも、こいつはそれ以上の良ゲーになると信じてる。」ハイテンションで思わず独り言を漏らしながら、カバンから取り出したもの、新作のゲームソフトの封を破る。

タイトルには「Last Game」と書かれている。発売一年前から目をつけ、予約開始前夜に店頭に並び、実は今日も並んだのだった。

「今日が開校記念日で本当によかった……。」不意にこみあげそうになった涙をぐっとこらえ、ソフトを挿入する。

画面が暗くなり、次いで、スポンサーが流れる。OPは飛ばす。店頭で何度も見たし、ネットでもチェックしていた。逸る気持ちを抑えられない。

スタート画面にて、初めからを選ぶ。キャラクタークリエイト画面へと飛んだ。

「やっぱり男だよな……。」仲間内では、男はありきたりすぎる、と言われてしまっているが、やはり自分と同じ性別のほうが感情移入しやすくていい。

次に名前を考える。

「名前かぁ。なんかいいのあるかな。うゝん、ランダムで行くか。エレン、ちよつと女っぽいな。ジョン、平凡すぎ。おじいさんA、なんでこんなの出るんだ。」と何度もランダムで表示される名前に突っ込みを入れていると、気に入ったのが出た。

「イエリシエン、うん、いいんじゃないか。よしこれにしよう。決定つと。」ボタンを押し、名前を決定する。画面にこれでいいですか、とキャラクターの名前と性別が表示される。ハイを選択すると、キャラ情報が消え、一つの文が画面に表示された。

「Welcome to The Last Game」

プロローグ（後書き）

気分転換に編集してみました。でも、途中で面倒臭くなってしまいましたw

久々に読んでみると、ひどいですね。よくこれを上げたなど。過去の自分の自信過剰さがうかがえます。

何、今も変わらない？知ってる知ってるorz

でも、少しは成長したんだな—と思うわけですよ、自分のを読んでもみると。少なくとも、直すべきところが見えるようになったけど、ましかなど。あの頃は、見返しても「良し！」とか思っていましたからねwアー恥ずかしい。改めて、皆さんよく読んでくれるな、と思いました。本当にありがとうございます。

これからも、気が向いたら改訂しようかな、なんて思っています。新しく読む人が増えればいいな、なんて。

第一章 第一話：目覚め

眩しさに目が覚めた。重い瞼をゆっくりと開けると、どこからか光が差し込んでゐるのに気づいた。やがて完全に目が覚めると、それは頭のほうにある窓から差し込む日差しであることがわかった。

「ここは……？」寝たままの体勢で、あたりを見回した。

そこは小さな四角い部屋だった。僕はその部屋にある数少ない家具の一つである、質素ではあるが清潔なベッドに寝ていた。隣には腰ほどしかない低い、小さな棚と、椅子が一脚置かれていた。

とりあえず起き上がろうとすると、突然激痛に襲われた。

「つつつ！！」あまりの痛み思わず声を漏らした。すると、ベッドの向かいにある扉のほうから足音が聞こえ、次いでドアが開いた。入って来たのは少女だった。背は特別高くはなく、布製の質素な服を身にまとっていた。顔は少し日に焼けた色をしていたが、生来の整った顔立ちを損ねてはいなかった。

少女はそのかわいらしい瞳を大きくして、僕をまじまじと見つめた。

「気がついたのね。」少女は言った。僕は何のことかわからなかった。少女はゆっくりとベッドのほうへとやってきて、置かれていた椅子に腰かけた。

「すごく驚いたわよ、突然上流から人が流されてくるんだから。おととい、私が川に魚を取りに行ったら、あなたが流されてきたの。それで、うちに連れてきて、ここに寝かせたの。もう、今日で三日目なのに、全然起きる気配がないから、このままずっと寝たままなんじゃないかって心配していたのよ。」少女は身を乗り出し、心底心配そうに僕に顔を近づけた。僕は自分の顔が赤くなるのを感じた。彼女は可愛かったが、特に目がきれいだった。色や形ではない、彼女の力強さともいうべき光を宿していた。

「そ、そうだったのか。ありがとう、助けてくれて。そういえば、

「ここはどこだい。」僕はあわてて尋ねた。少女は椅子に座りなおして答えた。

「ここはソースウッド、サン国の領土の小さな村よ。私はクリス。そつえば、まだ名前を聞いていなかったわね。あなた、名前は？」

「ああ、僕は……。」言いかけて、沈黙した。

「僕は？何？」クリスが促した。

「僕は……誰だ？」僕はクリスに尋ねた。

「え？」クリスはあつけにとられた。

「なるほど。自分がだれで、どうして川に流されたのかもわからず、全く記憶がないわけね。」クリスが先ほどまでの話をまとめた。僕はまだ動揺を隠せないままうなずいた。

「済まない。どれだけ思い出そうとしても、まったく思いだせないんだ。起きる前の記憶が全くないみたいなんだ。」クリスは僕の言葉にうんうんとうなづいた。彼女は名前もわからない僕の言葉を信じてくれたようだ。

「まあ、仕方ないわ。あなた、体中傷だらけだったんだから。それにずっと起きなかったし。多分頭を強く打ったんじゃないかしら。きっとそのうち思い出すわよ。」と、クリスは請け合った。僕はクリスが僕の不安を感じ取って、勇気づけてくれようとしてくれていたのを感じたが、自分がだれかわからない不安をぬぐい去ることはできなかった。

「そうだ、思い出すまでのしばらくの間、名前がないと何かと不便ね。そうだ、イエリシェンなんてどう？」クリスは思い出したように言った。

「イエリシェン。うん、いい名前だね。どういう意味があるんだい？」僕は尋ねた。クリスはいたずらっぽく笑った。僕はまた顔が赤くなった。

「内緒。さあ、おなかすいてるでしょ、何か持ってきてあげる。」クリスは立ち上がり、部屋を出て行った。

彼女が部屋を出て行ったのを見届けると、窓の外を何ともなしに眺めた。

「イエリシェンか」ぽつりとつぶやいた。

自然と先ほどの不安が消え、小さな笑みが浮かんだ。

第二話：ヤコブ爺

クリスの家で目覚めて三週間が過ぎた。僕は家の裏庭に当たるところで薪割りをしていた。一週間もすると傷の痛みもなくなり、じつとしていられなくなった。クリスはもう少し安静に言ったが、何日もベッドに寝たままで、いい加減体を動かしたくなったのだ。ついにはクリスも折れ、僕に仕事をさせることにした。最初は村の買物につきあわされたりしていたが、やがて家事や力仕事も任された。

その中で、薪割りが一番好きだ。最初は斧を振り下ろすのもただとしく、クリスにはらはらせてしまったが、今はまっすぐ一振りで薪を割れるようになった。筋肉痛になやまされることもなくなった。

僕が一心不乱に薪を割っていると、老人がひょっこり家の陰から姿を現した。

「ちゃんとやっているようだの。結構結構。」老人は僕に近づいてきた。僕は斧を振るう手を止めた。

「こんにちは、ヤコブ爺さん。今日も元気そうですね。」ヤコブ爺はふおつふおと笑った。

「あたりまえじゃ、わしを誰じゃとおもつとる。その名を国中に知らしめた、冒険者ヤコブじゃぞ。」ヤコブ爺は空を見上げると、思いつくように言い始めた。

「あれは三十年もまえかのう、わしはそのときすでに一流の冒険者として知られて……」

「まあまあ、そういう話は食事のときにとっておいってくださいよ。」僕は途中でヤコブ爺の話を使った。ヤコブ爺は残念そうな顔をして、そうかと呟いた。

ヤコブ爺の昔の話、特に冒険者だったころの話は、話し始めると終わりがないのだ。前は話を聞いているうちに夜が明けてしまい、

しかも終わらなかった。クリスは話の間にさつさと寝てしまった。ヤコブ爺の話が長くなることは昔から知っているのだ。ヤコブ爺の話聞くのは嫌いではないが、話を聞くだけで一日を終わらせたくない。

僕はどうもヤコブ爺に気に入られているらしく、しよっちゅう昔の話に僕に聞かせてくれる。彼の話が全て本当かどうかはわからないが、昔冒険者だったのは本当のようで、以前ヤコブ爺の家で夕食をとったとき（ヤコブ爺は呼ばれなくてのクリスの家に夕食を食べに来る）、彼は部屋の壁にかざられている武器一式を見せてくれた。防具は傷だらけで、凹みがたくさんあったし、さやや革のベルトは擦り切れてちぎれてしまいそうだった。

中でも、彼の愛用の剣は素晴らしかった。何の意匠も凝らしてはいなかったが、刀身はさざ波のような模様があり、さやから抜き去ると高音の澄んだ音が家の中に響いた。聞くと、これはダマスカス製の剣なのだそうだ。

ダマスカスとは、二種類の金属を混ぜ合わせて作る製法で作られたものを指す。二種類の金属を混ぜて使うことにより、個々の金属の特性を剣に反映させることができるのだが、反面非常に作るのが難しく、その技術を継承できるものは少ない（技術を得ようとダマスカスの武器を作るものに弟子入りするものはたくさんいるのだが）。

ヤコブ爺の剣は、その技術を持つ友達が作ってくれたらしい。ヤコブ爺は、よくその人の話をしたがる。

「あいつとはしよっちゅう喧嘩しての。だが、はっきり親友と呼べるやつじゃった。今頃どうしているのかのう。」と、パイプをくゆらせながら天井を見上げていた。

「それで、何か用があつて来たのではないのですか？」僕はヤコブ爺に尋ねた。

「ふおっふお、ただの気まぐれじゃわい。ちよいと冷やかしに来たのよ。」と老人は答え、横倒しになっている木に座り込んだ。

「なあ、お主。クリスをどう思っておる？」突然の質問に僕はうろたえた。

「ど、どうって？」

「クリスを好いておるか？」

「ぶっ！！！」予期せぬ質問に今度は吹いてしまった。ヤコブ爺は僕のそんな様子を見ていった。

「なるほど、脈はアリと……。」ヤコブ爺はクックと笑った。

「な、なんでそんなこと聞くんですか！？」僕は思わず大声をあげた。途端に恥ずかしくなり、家のほうをちらりと見た。

「クリスなら森にいつとるじゃろ。何を気にしとる。それとも、クリスのことが嫌いなのかな？」ヤコブ爺は意地悪い質問をした。

「嫌いなわけではないじゃないですか。命を助けてもらって、傷の手当てや食事、寝るところまで提供してくれているし……。」

「ほう。」ヤコブ爺は語尾を釣り上げて笑った。僕は降参した。

「ええ、確かにクリスは可愛いです。器量もいいし、しっかりしている。それに明るい性格をしています。」

「明るいね。それは、お前さんが来てからのじゃぞ、イエリシェン。」ヤコブ爺は言った。

「え？それはどういうことです。」僕は尋ねた。

ヤコブ爺はポケットからパイプを取り出し、火をつけた。ヤコブ爺はクリスの過去を語り始めた。

第三話：クリスの過去

クリスの父親は、ヤコブ爺と同じ冒険者だった。ヤコブ爺はそのころすでに引退していたが、クリスの父、エナデイルはヤコブ爺が現役だったころを知っており、彼の旅の見上げ話を聞いて育った。

エナデイルは自分の知らない世界にあこがれ、冒険者となった。

クリスの母、クラリスは理解のある人で、いつも家を空ける夫を責めず、彼が冒険にいきやすいように手を貸していた。

両親は互いに愛し合っていたし、クリスも両親が大好きだった。いたずらすると怖いけど、やさしいおかあさん。いつも家にいないけど、時々帰ってきては旅のお話や、いろんな土地のお土産を持って帰ってくるおとうさん。普通の家庭とは呼べなかったかもしれないが、クリスは幸せだった。

だが、幸せは唐突に終わりを告げた。今から十年前のこと、クリスはまだ七歳だった。クラリスが病気にかかった。村の医者が診ても治らず、村のだれもがクラリスの死を予感した。だが、エナデイルだけは違った。

「クリス、母さんはきつと良くなる。以前旅した山の頂上に、どんな病にも効く薬草が生えているんだ。それを取ってくる。クリス、それまで母さんを頼むぞ。」クリスは母が助かると聞いて喜び、笑顔で父を見送った。

しかし父は帰ってこなかった。数日、数週間、数か月。半年が過ぎた。クラリスは死んだ。

葬儀になっても父は帰ってこなかった。クリスは葬儀の間中、一度も泣かなかった。クラリスは村の共同墓地へ埋められた。

村では、クリスの父、エナデイルがひどい中傷を受けていた。死にかけて妻を置いて冒険、しかも一人娘を残して。以前からエナデイルが冒険家であることを村人は感心していなかった。だが、クラリスは一言もそのことについて文句を言うことはなかったし、クリ

スが幸せそうだったので何も言わなかったのだ。それもクラリスの死で人々の意見が変わった。クリスは父が悪く言われるのはいやだったが、父は母がづらい時そばにいてあげなかったのも事実だった。葬儀が終わって二日後のこと。外はひどい雨で、クリスはテーブルに突っ伏していた。クリスの面倒をみるため、ヤコブ爺と一緒にいた。

真夜中ごろ、扉が開いた。入って来たのは父だった。彼は雨に濡れ、泥だらけなうえ、ひげが伸び放題になっていた。肌が露出している部分には、家を出る前にはなかったたくさんの傷があった。だが顔は生き生きと輝いていた。

「帰ったぞクラリス！！薬を手に入れた！今なおしてやるからな！」エナデイルは開口一番にそういった。エナデイルはクリスを見つけた。

「クリス！ただいま！母さんはどこだい、薬を見つけたんだ。母さんは治るんだ！」エナデイルは歓喜して叫んだ。だが、やがてクリスの様子がおかしいことに気づいた。

「どうしたクリス、具合でも悪いのか。」エナデイルはクリスの顔を覗き込んだ。クリスは小さい声で、しかしはつきりと言った。

「おかあさんは死んじゃった。」静寂が訪れた。エナデイルは一瞬何のことかわからなかったようだった。やがてうるたえていった。

「死んだ・・・母さんがか・・・？・・・ばかな、そんなことはありえない・・・。」クラリスに限ってそんな・・・そんな・・・。」エナデイルは助けを求めるようにヤコブ爺を見た。ヤコブ爺うつむいたまま、首を横に振った。

「うそだ。おれは信じないぞ。嘘だ、クラリスが死ぬなんて嘘だ！」エナデイルは叫んだ。

クリスは席を立ち、父を殴った。

「嘘じゃないわよ！！どうして早く帰ってきてくれなかったの！？どうして旅になんかでてしまったの！？どうして母さんのそばにいてやらなかったの！？どうしてわたしのそばにいてくれなかったの

！？どうして！？ねえどうしておとうさん！？どうして！？」クリスは父親よりも大きな声で泣き叫んだ。クリスは父をたたき続け、泣きわめき続けた。それに疲れると、父親の服をつかんでそれに顔をうずめた。

幼いクリスだって、父親に非がないのはわかっていた。だが、彼女は母親の死という衝撃的な出来事を、たった一人で受け止めなければならず、支えるべき父はそばにいてくれなかった。幼いクリスにそれは辛すぎた。

父親はクリスを抱きしめ、大声で泣いた。ヤコブ爺も泣き声を上げず泣いていた。

翌日、皆でクラリスの墓に行った。妻の墓を見て、改めてクラリスがいなくなったことを思い知ったエナデイルは、墓のまえに膝をつき、墓石を抱いて泣いた。

そのころには、エナデイルが帰って来たことが村中に知れ渡っていた。村人は帰ってきたエナデイルを冷たく扱った。不貞の父親と呼ぶものもいた。妻が病気の間に他の女と遊んでいたといううわさが流れていたのだ。無論事實は違うが、村人の大半はその説を気に入って、彼がどうして旅に出たかを知っていた人でさえ、どこかで遊び呆けていたのだと思うようになっていた。

クリスは父を蔑む噂を聞きたくなくて、だんだんと家にこもりがちになった。エナデイルはというと、自分の部屋の日記をひたすら読み返し、何かブツブツと呟いていると思ったら、時々メモを取っていた。

そしてある夜、父は旅支度をしていた。

「父さん、どこ行くつもり？この期に及んでまだ冒険をしようというの？」クリスは父を引き留めようとした。だが父の決意は固かった。

「日記を見返して思い出したんだ。ある島に、死んだ人を生き返らせる魔術師がいるって。骨さえあれば、その人をよみがえらせることができるんだ。今度こそ父さんは失敗しない。帰ってくると

きは、母さんを連れてもどるからな。そしたら、もうどこにも行かない。皆ですつと一緒に暮らそう。」父は笑ったが、その目には希望と狂気が入り混じっていた。そしてエナデイルは出て行った。クリスが止めるのも聞かず。冷たい雨が降る夜だった。

「翌日、クリスが母の墓を訪ねると、掘り返された跡があった。確かめてみたら、遺骨は既に取り去られた跡だった。」ヤコブ爺は淡々と語った。僕は何も言えなかった。

「結局クリスはまた独りぼっちになり、父親は今も帰ってこぬ。あの子はずつとそのつらい過去から立ち直れていなかった。」僕はぽつりと言った。

「あなたは、ずっとそばにいたんですね。」ヤコブ爺は悲しげな顔をしてうつむいた。

「確かにワシは、ずっとあの子のそばにおった。あの子の父親が旅立った時も、クラリスが死んだ時も、エナデイルがまた出て行ってしまった時もな。じゃが、わしにはあの子の心を慰めることはできないんだ。あの子はわしに心配をかけまいと明るく振る舞っておったが、心の中ではいつも泣いておった。じゃが」と、僕の顔を見つめるヤコブ爺。

「お主が来てからあの子は変わった。久しぶりじゃ、あの子の心からの笑顔を見たのは。それもこれも、お主のおかげじゃ。」僕を見つめるヤコブ爺の瞳には感謝の念が感じられた。

「そんなことは……僕は何も……。」ヤコブ爺は首を横に振って僕の言葉を否定した。そして腰かけていた大木から腰を上げると、僕に頭を下げた。

「頼む。これからあの子のそばにいてくれないか。」僕は困惑した。

「頭を上げてください、ヤコブ爺さん。僕はそんな大層な人間じゃないです。」ヤコブ爺はすまなそうに頭をあげた。

「突然こんなことを言われたら驚くのはわかってる。じゃが、お主のおかげで確かにあの子は変わったんじゃ。わしはあの子に幸せになってほしい。頼む。」ヤコブ爺はまた頭を下げた。

「僕は……。」僕はどうしていいか分からず、ヤコブ爺の視線を避けた。すると、驚くべきものが目に飛び込んだ。

「ヤコブ爺！あれを！」僕は自分が見つけたものを指差した。ヤコブ爺は僕の指さす先を見て、驚愕の表情を浮かべた。

村から煙が上っていた。

第四話：襲撃

僕らが村に着いてみると、それがただの火事でないことがすぐに見て取れた。あちこちで略奪の跡があり、数人の村人も倒れている。「なんでこの村に盗賊が……」言いかけて、一人の盗賊がこちらに向かってくるのに気付いた。血に飢えた目をした、短剣を振りかざして向かってくる男に恐怖を覚え、身がすくんでしまった。

と、そこにヤコブ爺さんが男に向かっていき、突然飛びかかった。男は老人が襲ってくるとは思えなかったので、その行動にたじろぎ、武器を払い落されてしまった。驚きから我にかえて爺さんに殴りかかる。だが、ヤコブ爺さんはすばやく身をかわすと、相手のあごをきれいに打ち抜き、一撃で倒してしまった。

「お主はクリスを探すんじや。きつとあの子のこと、村の煙に気づいて急いで村に帰って来ているはずじや。」爺さんは男の剣を手に取り言った。

「ヤコブ爺さんはどうするんです？」

「わしを誰じやとおもつとる。その辺のごろつきには負けはせん。」
そういうと、悲鳴が聞こえる方へ駆けて行った。

僕はどうすればいいか分からず、しばらくその場に突っ立っていたが、とにかくクリスを探そうと村中を走り回った。家々はほとんど火を放たれていて、何人も村人が倒れていたが、クリスを探すことで頭がいっぱいで、誰かを助けるなんて考えは浮かばなかった。

その注意力のなさか、はたまた運がないのか、ばったりと略奪をおこなっている場面に出くわしてしまった。敵は二人で、一人がこちらに気づき、下卑た笑みを浮かべながらこちらにゆっくりと歩み寄って来た。その顔は殺しの歡喜に歪み、そのいやらしい顔をさらにいやらしくしていた。

僕は男から逃れようと近くの家に飛び込んだ。そこはたまたまヤ

コブ爺さんの家で、壁に飾ってある剣に目がいった。藁にもすがる気持ちで壁に走り寄って剣をつかみとる。振り返ると、男がすでに背後に迫ってきていた。

悲鳴を上げながら剣を抜きざま新割りの要領で男に剣をたたきつけた。男は不意の反撃に対応できず、脳天をたたき割られた。ダマスカスの剣は、素人の僕の手でもやすやすと男の脳天をかち割った。僕は自分のやったことに驚きながら、家を出た。

「もてあそぶのもほどほどにしておけよ。」ともう一人の男がこちらを振り向きながら言った。だが、声をかけた相手が仲間でなく殺されたはずの村人であるのに気づくと、驚きの表情を浮かべた。

「てめえ、よくもザザを。ぶっ殺してやる。」男がいきり立って襲いかかる。だがその動きは頭に打ち抜かれた矢によって止まった。矢が放たれた方向を見ると、そこにクリスが矢を放ったままの体勢で立っていた。

「クリス！」僕は叫んだ。

「イエリシェン、無事？」クリスは走り寄って来た。

「ああ、ぼくは大丈夫だよ。君を探してたところだったんだ。」

「村に帰ろうとしたら、火の手が上がっているのに気づいたの。とにかく、みんなを助けなくちゃ。ほかの人たちはどこ？」

「わからない。そうだ、ヤコブ爺さんに会わなかったかい。一人で盗賊たちを倒そうと走って行ってしまったんだ。」クリスは少しむっとした顔をした。

「それで………？」

「それでっ？」

「それで、あなたは一人で行かせたの？自分は逃げ惑って、老人に全部任せて？」クリスは初めて僕に怒りの表情を見せた。

「逃げ回ってただなんて。ただ、僕は君が心配で。」言葉尻がだんだん小さくなるのを感じた。クリスは眉を吊り上げた。

「一人で行かせたのね。ヤコブ爺さんはまだ若い気にいるからすぐ無理をするのよ。急いで探さなきゃ。手伝ってくれるわよね？その

剣は飾りじゃないもの。」「そこで、剣が血に染まっているのに気づくクリス。僕は視線の先に気づき、先ほどの戦いの話をした。

「それなら戦えるわね。私を手伝って頂戴。」

僕は村の広場で教会のある場所に向かった。村人が避難するとしたらその場所だからだ。用心深く進んでいくと、前方に盗賊が三人ほどこいるのが見えた。

「私がやるわ。あなたはできるだけ敵を引きつけて。」そういうと近くの家のかげに隠れた。僕はどう引き付ければいいか分からなかったが、とにかく敵の注意を引こうと敵のいる中へ飛び込んだ。

自分を鼓舞するように叫びながら近くの敵に突進する。相手は不意の攻撃にひるみ、もんどり打って倒れた。残りの二人が僕の存在に気づき、味方が窮地に立っているとわかると、剣を抜いて援護に向かってきた。しかし、上から矢の襲撃を受け、あっという間に二人とも倒された。クリスはいつの間にか屋根に上がっていたのだ。

僕は起き上がろうとする敵にのしかかり、何度もこぶしで殴った。そのうち、クリスが止めに入った。男はぐったりとし、僕の拳は血だらけで、額に玉の汗が流れているを感じた。

「もういいわ。もう終わったの。」クリスがやさしく言った。

「そう、終わったのだよ」不意に声をかけられた。広場の方から盗賊たちがぞろぞろとやってきた。二十人ほどだろうか。

二人で相手をする事ができる数ではなかった。その中から一人の男が歩み出た。

鉤鼻につりあがった目。ジャラジャラと首飾りを鳴らし、上等の服を身にまとってはいるがそれは男のいやしさを隠すほどではなく、いかにもお頭、といった人物であった。

「随分と部下をやってくれたな。そんなお前たちに、俺からプレゼントだ。」

男が片手をあげると、子分たちが何かを引きずってきた。こちらに投げられたそれは、ヤコブ爺さんだった。

「ヤコブ！」駆け寄ってだきかかえるクリス。ヤコブ爺さんはか細

い声で言った。

「すまないのお。やられてしもうたわ。」頭はイエリシェンたちの反応に満足そうにうなずいた。

「抵抗するな。諦めて、素直に従えば殺しはしない。」クリスはきつと相手を睨んだ。

「殺しはしないですつて。あれだけ村人を殺しておいて、よくそんなことが言えるわね。」

「あれは部下が勝手にやったものだ。うちの連中はとにかく荒つばかりでな。略奪より殺しが好きな連中もいる。それに、おれたちがどういうことができるのかの見せしめにもなる。」不意に自分の内側から黒い感情が湧きあがるのを感じた。そして心の中でそれを喜んでいる何かの存在を感じた。僕は剣を抜いて、言い放った。

「僕と勝負しろ、卑怯者。」

「卑怯？何の事かな？」

「一人じゃ何もできないのか。たくさん部下がいないと何もできないのか、腰ぬけめ。」

その言葉が逆鱗に触れたらしい。

「ほう。よっぽど死にたいらしいな。来い、相手してやる。」頭は剣を抜くと、僕を手招き、教会の広場にいざなった。教会には村人たちが縛られ数人の盗賊に囲まれていた。僕も剣を抜く。

「ほう、いいものを持ってんじゃねえか。おめえには惜しすぎる、お前を殺したらおれがもらってやるよ。」

「いいだろう。だが、僕が勝ったら、さっさとこの村から出ていくよう約束しろ。」僕は自分が意図せず口にする言葉に驚いていたが、怒りで自分の急激な変化などどうでもっ良くなっていた

「いいだろう。」その言葉が言い終わった瞬間、頭はいきなり頭を狙って切りかかった。あわてて受け止める。だが、相手は間髪入れず二の太刀をいれ、かわしきれずに胴を浅く切られる。

「ほらほら、さっきの威勢はどうした？」絶え間なく続く斬撃を防ぎきれず、腕やら肩やらの傷であらわされる。何とか反撃しようと、

苦し紛れに突きを繰り出した。だが、それも払われ、袈裟がけに切りつけられてしまった。「イエリシェン！」クリスが僕を呼ぶ声が遠くに聞こえる。痛みで意識がもうろうとしてきた。だんだんと視界がぼやけ、やがて意識が途絶えた。

第五話：内包せしは闇

クリスはイエリシエンが倒れるのを見た。「ひやはははは！こいつ、偉そうなこと言って、一撃も返せなかったじゃねえか。困るんだよなあ、こういう英雄気取りってやつは。」クリスは怒りをあらわにしてどなった。

「あなたみたいな卑怯者よりましよ！彼は村を守ろうとしたのよ。それは立派な行為だわ！」

「ふん、で、その英雄様はもう死んでしまわれたのでないかな？死んでしまえば、英雄も何もないだろうが。」その時、イエリシエンがむくりと起き上がった。

「イエリシエン！ああよかった。生きてたのね。」クリスが駆け寄ったが、イエリシエンは答えず、クリスをおしのけ、頭の前にいった。

「おれは死んでないぞ。さあ、続きをやるう。」

「イエリシエン………？」イエリシエンの妙な態度を不審がるクリス。

「ち、浅かったか。まあいい、今度こそ終わらせてやる。」そういうと、猛然と切りかかった。

イエリシエンはにやりと笑うと、それを平然と止めた。頭は驚き、今度は先ほどよりも素早く、何度も切りつけた。それを平然といなすイエリシエン。

「な、なんなんだてめえ！？」頭は先ほどと天と地ほど違う相手の動きに驚き、後ずさった。

「もう終わりか。なら、こちらから行くぞ。」威圧的で、冷笑を含んだ声だった。とてもイエリシエンのものとは思えない。

その剣撃も全く違うものだった。その激しい打ち込みは、片腕であるのに受けた頭の両腕をしばれさせた。さらに素人には捕えられない速さで剣をふるい始めた。頭はさっきと逆の状態で、イエリシ

エンにいたぶられていた。

「つくそ、このやる。野郎ども、やっちまえ！」頭の呼び声に応え、手下たちが総出で襲いかかった。その時クリスは、イエリシェンが笑うのを見た気がした。

イエリシェンは最初に襲いかかってきた男の手首を切り落とし、二人目の喉を引き裂いた。男たちが切りかかるも、それを踊るようにかわしながら一太刀ごとに一人、また一人と切り捨てて行った。イエリシェンは満面の笑みで山賊たちを切り捨てていった

「なんだあいつは！くそ、化け物め！」頭は一目散ににげだした。

「あ、お頭あ、おいてくなんてひでえ！」あわてて追いかける部下たち。

そんな山族たちに、イエリシェンは片手をかざした。そして、口の中で何やらつぶやいたかと思うと、腕から放射線状に黒い何かがいくつも飛び出し、山賊たちに向かっていった。

山賊の最後尾の男がそれに気づいて恐怖の叫びをあげた刹那、男はその黒い何かに飲み込まれた。ほかの男たちは叫んだ男を見、ついで彼を襲った何かが自分たちにも向かっていることに気づいたが、かわすこともできずに、全員最初の男と同じ運命をたどった。

頭は誰よりも前にいたため、それに気づいて間一髪かわすことができた。ほっとして胸をなでおろしたのもつかの間、その胸は闇に包まれてはつきりとは分からない剣らしきものに貫かれていた。驚いたことに、出血はしていなかった。ただ凄まじい勢いで自分が吸い取られていくのを感じた。今際の際、首をめぐらせると、遠くに笑っている顔が見えた。人殺しに歓喜する悪魔の顔を。それが頭が見た最後の光景だった。

クリスは今自分が見た光景を信じることができなかった。やさしいけど頼りない風のイエリシェンが、急に強くなって山賊を全員殺し、魔法を使い、笑いながら人を殺していた。黒い何かに包まれてしまった山賊たちは全員が自ら命を絶っていた。顔は恐怖にひきつり、何かから必死に逃げようとしたかのようにだった。

「・・・・・・イエリシェン・・・・・・？」
「クリスはおずおずと尋ねた。イエリシェンは返事をせず、ゆっくりと頭をめぐらせた。クリスのはつと息をのんだ。イエリシェンではなかった。いや、顔はイエリシェンそのものだった。ただ、何かが違った。その瞳の奥に宿る光が違っていた。イエリシェンにはやりと笑い、くずおれた。」

第六話：旅立つ者と巣立つ者

眩しさに目が覚めた。以前起きたように、昼前の日差しが窓から差し込んでいた。違っていたのは、窓があげ放たれて、時折吹く快い風にカーテンが揺らめいていることだった。

「目が覚めたか。」声をかけられたほうへと向いた。ベッドの傍らに置いてある椅子に、ヤコブ爺が座っていた。

「ヤコブ爺……。あれ、僕はどうしてここに？」

「お主、また記憶喪失か？お主は切られたのじゃよ。」ヤコブ爺は言った。

「切られた……！」「一瞬にして記憶がよみがえる。村の火事、山賊、頭との決闘。

「あれからどうなったのですか。山賊は？村は？クリスは！？」僕は起き上がるうとして、胸が痛むのを感じ、傷が開きそうになった。「お主、覚えておらんのか！？」ヤコブ爺は心底驚いた表情を浮かべた。僕はきよんとした。

「覚えてないも何も、僕は気絶したんですよね？」ヤコブ爺は首を横に振った。そして、僕が切りつけられてからのことを話した。

「僕が……殺した……！？」

「その様子を見ると何も覚えておらんようじゃな。お主は急に強くなったうえ、黒魔法まで使いおった。」

「黒魔法？」僕は聞き返した。ヤコブ爺は過去のことを思い返す癖でパイプをくゆらせながら天井を見つめたが、いつもの笑顔の代わりに、その顔には嫌悪が満ちていた。

「そうじゃ。昔、黒魔術師と戦った経験があったんじゃが。あれは人の心に恐怖を与える魔法じゃ。人の持つとも強い恐怖を目に映す。普通の人間は恐怖から逃れようと、自ら命を絶つんじゃ。最も恐れられている魔法の一つじゃ。じゃが、その分非常に扱いが難しいはずじゃが……。」と、僕の顔をじろりと見た。

「な、なんですか？」僕はたじろいだ。ヤコブ爺はため息をついた。
「つまり、お主は黒魔術師ということじゃな。しかも高位の魔術師
のようじゃ。」僕は愕然とした。

「僕が、黒魔術師………？」ヤコブ爺は難しい顔をしてう
なづいた。僕はショックで黙り込んだ。

不意に、外から人の話し声が聞こえた。いや、先ほどから話し込
んでいたようだが、ヤコブ爺との会話に気を取られていた上、今ま
で声をひそめていたようだ。だが、だんだんと議論は激しくなっ
ていた。僕は耳をすました。話しているのはクリスと村人たちだった。
「……は村を救ったのよ！なのに村を追いつくなんて」

「だが、彼は危険すぎる。あれは明らかに危険な魔法だった。」賛
同する声が上がった。また別の村人がいった。

「それに、奴は笑っておった………。人を殺して、楽しそう
に笑っておった。」人々があの時のイエリシエンの顔を思い出して、
沈黙した。クリスは反論した。

「でも、イエリシエンは村を守るために戦ったのよ、それに私たち
を襲ったわけじゃないじゃない。」

「今まで襲わなかったからといって、これからもそうだとは限らな
いじゃないか。」口々にそうだという声が上がった。イエリシエン
はこの言葉を聞いて申し訳なくなっただが、次の言葉を聞いて、出て
いく決心をした。

それは子供の声だった。イエリシエンが村にきて、一番最初に絡
んできて、一番イエリシエンと一緒に遊んだ子だった。

「あの人、怖い。」

イエリシエンはベッドからはね起き、服を着替えた。跳ね起きた
時に胸の傷が痛んだが、それを無視した。

「どこに行くつもりだ。」ヤコブ爺が訪ねたが、彼はすでに答えを
知っていた。

「村を出ます。これ以上は村の人にも、クリスにも迷惑がかかりま
す。」ブーツをはき、クリスが僕のためにもらってきてくれた服を

見下ろすと、傷とは違う痛みが胸に走った。

「クリスに伝えてください。助けてくれてありがとうございます。」僕は後ろ髪をひかれる思いを振り払い、部屋を出ようとした。

「待て。これを持って行け。」振り返ると、ヤコブ爺が剣を投げ渡した。それはあのダマスカス製の剣だった。

「そんな……。」受け取れません。」僕は返そうとしたが、ヤコブ爺は頑として受けとらなかった。

「わたしにはもう必要ない。おそらく、おぬしには苦難の道しか待ち受けておらんじやろう。わたしはどんな苦難もそいつとなら潜り抜けることができた。今必要なのはお主のほうじやて。」

「ヤコブ爺……。」僕はうれしさで胸がいっぱいになった。「村を出て分かれ道に出たら、左の道を行け。道なりに沿って進めば、やがてイギリスという小さな町に出る。町の本道を少し離れたところに酒場がある。看板に馬が書いてある酒場じや。酒場の店主にその剣を見せる。何か手を貸してくれるはずじや。」ヤコブ爺はその間一度もこちらに顔を向けなかった。僕は何も言わずに頭を下げ、裏口から家を出た。

家の玄関口からはまだ言い争っている声が聞こえた。気づかれないうのを祈りながら、背後の森に入り、身をかがめながら森の淵を進み、村の出口へと向かった。

「もう、なんでイエリシエンを追い出せなんていうのよ。」クリスは悪態をつきながら家の中へと入った。それでも、村人の不安はよくわかっていた。あんなにやさしく、少し度胸がない感じのイエリシエンが、あの日だけはちがっていた。だが、クリスはあれをイエリシエンではないと考えていた。見た目も声もイエリシエンそのものののだが、何か違うものを感じていた。

「そう、イエリシエンが光なら、あれは闇……。」クリスはイエリシエンが眠る部屋へ入った。そしてそこにイエリシエンの姿がないことを認めた。部屋にはヤコブ爺しかいなく、ヤコブ爺は

クリスを見つめていた。

「イエリシェンは？」ヤコブ爺は当然のように言った。

「行ってしまったよ。お前に迷惑をかけたくはないとき。それから、助けてくれてありがとうだそうだ。」クリスはヤコブ爺に掴みかかるいきおいだった。

「どうしていかせたの！？きつとさっきの話を聞いていたのね。私がそんなことさせないのに。」老人は悲しそうに首を振った。

「あいつはそうすることで、お前がまた傷つくことを恐れたんじや。」

「クリスはその言葉の意味に気づいた。」

「私のことを話したの！？」

「ああ。あ奴には知る権利がある。」

「どうして勝手に話したの！？」クリスはいきり立って叫んだ。ヤコブ爺は立ち上がった。

「いつまで過去にとらわれているつもりだ。お主はもう充分に待った。そろそろ追いかけることを知れ、クリス。」クリスは当惑した。ヤコブ爺は調子を変えて尋ねた。

「なあクリス、お前は どうしたい？」

「どうしたいって……。」

「おまえはもう七歳の、父親の帰りを待つだけしか出来ぬ小さな子どもじゃない。追いかけることのできる大人になった。あいつを助けてやれ。もう待つな、追いかける。」ヤコブ爺は今まで心に納めていた言葉を出し切った。クリスは身支度を始めた。

「ヤコブ爺に言われたから行くんじゃないわ。私が助けたのよ、最後まで助けるのが私の役目よ。」そしてクリスはイエリシェンを追っかけていった。ヤコブ爺はうれしそうにつぶやいた。

「二人の前途に幸あれ」

森をぬけて、街道というより山道のような道へと出た。道を振り返っても村はもう見えなかった。そのまましばらく歩いて行くと、ヤコブ爺の言っていた通り、分かれ道に出た。

「確か左だったな。」左の道を行こうとして、森の端に動くものを見つけた。

森から出てきたのはゴブリンだった。全部で三体。背が低く、ぼろぼろの獣革の服を着ており、手には錆びついた刃物を持っていた。彼らは奇声をあげて襲いかかった。あわてて剣を抜き去り、最初に飛びかかって来た一体に切りつけた。ゴブリンはナイフでそれを防ごうとしたが、ダマスカス製の剣は錆びついたナイフをやすやすと切り、ゴブリンに手傷を負わせた。

だが、ゴブリンはそのまま止まらず、僕に掴みかかって来た。僕は引き倒され、ゴブリンは馬乗りになったが、あわてて剣を引き戻していたので、ゴブリンは剣に覆いかぶさる形となり、背中からさざ波模様の切っ先が突き出ていた。

しかし、ゴブリンに突き刺した剣は引き抜くことができず、僕は二体のゴブリンにたいして無防備になってしまった。ゴブリン達は死体にのしかかられて動けなくなっている僕を殺そうと刃物を振り上げた。僕の自分探しの旅はここで終わってしまうのか。

すると、一体に矢が刺さった。突然仲間が倒れたことに驚いた最後のゴブリンは、とっさに矢が飛んできたほうを見やった。それが間違이었다。

ゴブリンは自分を貫く矢を目の前で見て、脳天を貫かれた。僕は矢が飛んできたほうを見やった。50メートルほど離れた所にクリスの姿を認めた。

僕はクリスが近寄ってくる間に、何とかゴブリンの体をのけて（ゴブリンは僕の胸にも達さない身長だというのに、妙に重かった）、剣を引き抜いた。クリスは僕の傍らにきていた。

「大丈夫イエリシェン？怪我はない？」僕は剣についた血をゴブリンの服でぬぐった。

「ああ、大丈夫だよ。」

クリスはそう、というと、僕の顔を平手打ちした。あまりの強さに歯が抜けそうなほどだった。僕は驚きをもってクリスを見つめた。

「なんで勝手に出ていくのよ！私に断りもなく！」

「なんでって、君に教えたら君は引き留めるだろう。それに、きみにはもう迷惑をかけたくなかったんだ。」

「あたりまえよ、勝手に出て行くななんて許さない。第一、迷惑をかけたくないって言うけど、そういう無駄な気遣いが迷惑なのよ。いい、私はあなたを助けたの。だから、最後まであなたを助ける義務がある。私も一緒に行くわ。」クリスは一気にまくし立てた。僕は驚いていたが、同時にうれしくもあった。

「なるほど、僕はまだ君の手が必要なわけか。」僕は苦笑した。あれだけクリスにはもう関わるまいと思っていたが、クリスの顔を見てホッとしている自分がいた。

「そうよ、文句ある！？」クリスはまだ怒った顔をし、眉を吊り上げて顔を覗き込んだ。

「ないよ。やっぱり君がいると安心する。むしろぼくがお願いしたい、僕の旅について行ってくれるかい？」僕はクリスの目をじっと見つめていった。クリスも僕の目を見つめ返した。

「勿論よ。あなたの記憶が戻るまでは、一緒にいてあげるわ。」

そして僕は歩き始めた。僕の心に先ほどまでの不安はなかった。

第1話：噂のゲーム

ある一軒のインターホンを、一人の女性が押していた。彼女の名前は井上はるか、政治面の新聞記者である。だが、彼女はここに取材に来たのではなく、友人に会いに来ていたのだ。友人の名前は斎藤^{さいとう}卓哉^{たくや}、彼は高校生だった。

彼らはオンラインゲームで知り合った。はるかは仕事に集中するあまり、同僚とのコミュニケーションをとるのが苦手だった。美人ではあるが、いつでも仕事熱心で、政治面の記者でもあるために、同僚が彼女に話しかけることはなかった。はるかは人と気兼ねなく付き合える場がほしくてオンラインゲームをしていた。そこで出会ったのが卓哉だった。ネットで仲良くなり、オフ会などで何度も会ううちに、気づいたら家までたずねていた。卓哉の母は最初、春香が家に来た時、息子は何か危ないことをしているんじゃないかと思ったようだが、二人が健全な、ただの友人であり、はるかも（社会的に）ちゃんとした人物だとわかると、帰って歓迎してくれた。

はるかがインターホンを押しても、だれも出ることはなかった。春香の不安は一層膨れ上がった。卓哉は最近、ネットゲに出てこないいや、ちかじか新しいゲームを買って籠るといつていたので、ゲームに出てこないのはわかるが、もう二週間以上経つというのに、メールの返事もなく、電話をしてもつながらなかった。はるかの不安をかき立てるのはそれだけではない。

最近、あるゲームをやって意識不明になるものが相次いでいる。普段のはるかならそんな話など全く気にしないが、ゲームのタイトルが卓哉が買うといていたゲームな上、それから何ん連絡もないのが春香をさらに不安にさせた。

はるかは何度もインターホンを押してみたが、結局あきらめて帰ろうとした。

「あれ、はるかさんじゃない。」声をかけてきたのは、卓哉のお母

さんだった。お母さんは買い物袋を手提げしていた。

「意識不明!？」はるかには驚いてお茶をこぼしそうになった。

「そうなのよ。夕飯ができたから呼んだのにこなくて、きつとゲームに夢中になってるんだろうと思って部屋に行ったら、案の定あの子ゲームやってね。私が早く来なさい、ご飯で来たわよ、って言うても動かないの。それでテレビに気づいたの。」

「気づいた?何をです?」

「画面が真っ暗なのよ。不思議に思ってたあの子の正面に回ったら、コントローラー持ったまま固まってたわ。私がゆすると、そのまま倒れたの。それで病院に搬送、あの子は今も意識を取り戻さないわ」
「お母さんはだんだん言葉尻が小さくなっていった。はるかはお母さんが泣きそうになっているのも構わずに尋ねた。

「卓哉君は何のゲームをやっていたのですか?」お母さんは涙をぬぐって答えた。

「さあ、私はゲームのことはさっぱり。でも、あの子の部屋はあの時のままだから、きつとまだ入れっぱなしじゃないかしら。」

「見てもよろしいでしょうか?」

「ええ、どうぞ。卓哉の部屋は二階です。」お母さんは、はるかが何度も家に来たことを知っていることも忘れていた。はるかは一礼してから立ち上がると、卓哉の部屋へと向かった。

卓哉の部屋は散らかっていた。もともと整理するほうではないが、これだけゲームや漫画が散乱しているのは、きつと救急隊員が入ってきたからだろう。転がっていたゲームには、踏まれて割れてしまっているのもあった。

春香の目はテレビの前のゲーム機に注がれていた。かがみこみ、ソフト取り出しボタンを押す。ボタンを押す手はいつの間にか汗でべたべたしており、意識せずにあのソフトが入ってないことを祈っていた。

ゲームソフトが出てきた。はるかはそれを見て、予想はしていた

けれど、大きなショックを受けた。

それは卓哉が買っていたゲームだった。タイトルは「Last Game」今もつとも有名で、98人の意識不明者を出しているゲームだった。

第1話：噂のゲーム（後書き）

どうもジョンです。いきなりUPの速さが上がって驚いた人も多いでしょう。ご安心ください、またペースが落ちますので。とりあえず、これで一章は終わりとなります。二章はイエリシェンの旅が遂に始まります。まさか、あらすじの部分まで書き終えるのにこんなに大変になるとは思いませんでした。少しのつてきて、読者もこのスピードに慣れていただいたでしょうが、残念ながらここから急にペースが落ちます。いろいろあるんです私にも、誘惑が。というわけですので、続きが読みたい方は十日ぐらい待ってから見るのがいいかもしれません。コメントで「早く書けコラ」とか言ってもらえると、少し速くなるかもです、はい。それほどコメントがほしいです。

第二章 第一話：道の町 イギリス

二日ほど歩くと、木がまばらになり、森が終わった。深い森に挟まれたでこぼこした道から多少舗装された街道を一日半ほど歩くと、目指していた町が見えてきた。ぼくは前方に見える塊を指差した。

「あれかな、イギリスって。」

「そうよ。あと一時間ほどかしら。」僕は結局五十分ほどで町に着いた。目的地が見えると歩みは速くなるものだ。

イギリスは町の境界線と思えるものがなく、街道に身を寄せ合うようにして建物が建っていた。建物といっても、木造の簡単な作りのものが多く、石造りのものはほとんどなかった。

町に入ると、街道の両側は露店で隙間がないほどであり、たくさん商人が声を張り上げて客を呼びこんでいた。

「ブクラシユ産の生きのいい魚はどうだい！アイロダの卵も今日入ったところだよ！」

「焼き立てのパンはいらんかね！長旅に美味しいチーズはいかが！」

「そこのお嬢さん、帝都のはやりの服の服はどうだい？」商人の一人がクリスに商品を突き出した。その手は赤く染められた絹のドレスを持っていた。スカートにはたくさんの襷がついており、商人が持ち上げて回してみせると、スカートがしなやかな草原のようになり、びいた。

「ごめんなさい、そんなにお金はないの。」クリスは気のない返事をしたが、僕はクリスがちらりとドレスを一瞥したときにその瞳がきらめいたのを見た。

「お連れの方はどうだい、プレゼントは女性の心をつかむのに大切ですね。」商人は僕に売り込む対象を変えた。

「えっと、ぼくは……。」僕は商人の持つ絹のドレスとクリスを交互に見て、これをクリスが来ている様子を想像した。自然と顔があかくなりそうになるのをこらえた。

「いえ、お金を全く持つてないもので……。」商人はあからさまに嫌そうな顔を見ると、僕らにはもう関心を払わず、道行く人に声をかけ始めた。

「ねえ、ここつていつもこんなかんじなの？」大通りを歩きながらクリスに尋ねた。街道は町の中心に向かうにつれてだんだんと道幅が広くなり、荷馬車が二台でも楽々とおれるようになっていた。

「私も何度かしか来たことないけど、ここはいつも賑やかよ。出店がない日はないそうよ。」

「どうしてこんなににぎやかなんだい？」

「それはね、この町からたくさん街道がでているからよ。そもそも、この街は街道ができるまでなかったの。街道が整備されて、道の分岐点に井戸が置かれたの。そしたら、隊商やら旅人やらがここで野営するようになったの。それで、別の土地からきた隊商や旅人達が、自分たちの旅した地で手に入れた珍しいものや食料品とかを交換するようになってね。そのうち、ここに来ればいろんなものが手に入るっていう噂が広まって、だんだんと人が来るようになったの。そうになると、そう人たちのために宿屋ができて、噂話をするために酒場ができて……」って具合に建物が建ち始めたの。そうしてできたのがこの町、イギリスよ。」クリスはぐるりとあたりを見渡した。そして困ったように肩をすくめた。

「そういうわけで、残念なことに、ここの建物はみんな秩序だててたてられていないわ。ヤコブ爺の言ってたお店を見つけるのは、案外大変かもね。」クリスの言ったとおりだった。本道をそれた店についてても、そんな店はいくらでもあるし、酒場なんてそれこそ星の数ほどありそうだ。僕はクリスに言った。

「ねえ、少しお金をくれないかい？」クリスはこうして、という顔をした。僕がいいからという、クリスは財布から銅貨を一枚くれた。僕は周りを見渡して、目指す人を見つけた。通りを少しふらついた足で歩いている人だ。僕は彼に近づき、その手に銅貨を握らせた。

「すみません、看板に馬が描かれた酒場を知りませんか？」男は手を握って銅貨の感触を確かめてから言った。

「馬車馬亭のことかね？それなら、その宿屋の裏をずっと行つたところにある。」

「ありがとうございます。」男はうなずくと、銅貨を握ったままその場を立ち去った。

「イエリシエン、どうしてお金なんかあげたの？」クリスがけげんそうに尋ねた。

「こういう街じゃ、普通に尋ねても教えてくれるとは思わなかったからね。」僕はこともなげにいった。

「へえ。でも、あなたこういう街に来たことがあるの？」クリスに言われて初めて気付いた。僕は困惑した。

「たぶん。なんとなく、そうしたほうがいいと思ったんだ。」僕はかたをすくめ、おどけた調子で言った。クリスはとりあえず納得してくれたようだった。

「まあいいわ。早く馬車馬亭とやらに行きましょうよ。ヤコブ爺の話なら、一日くらい止めてもらえそうだし。野宿も悪くないけど、今日ぐらいは柔らかいベッドの上で寝たいわ。」クリスは大きく伸びをした。その拍子にクリスのおながなった。僕は笑った。

馬車馬亭は、本道から少し離れたところにあつた。革製品を扱っている店や、肉屋に挟まれており、両側の店と比べると古臭い印象を受けたが、落書きなどはなく、こぎれいなたたずまいだった。扉の上に横棒が道に向かって突き出しており、そこに荷馬車を引く馬が絵が荒れている看板が掛けられていた。

「馬車馬亭。」クリスは確認するように看板の字を読み上げた。僕はうなずき、櫓でできた扉を引き開けた。

店内はこころなし暗かった。明かりは天井近くにある窓から取り入れられており、それが唯一の光源だった。まだ開店前というのに、常連客と思しき一団がテーブルの一角を占拠しており、ちびちびと

酒を飲んでいる。ほとんどは酔い潰れ、テーブルに突っ伏して寝ていたが、その背中には毛布が掛けられていた。

僕は酔っ払いの視線を感じながらカウンターへと向かった。カウンターにはヤコブ爺くらいの年輩の女性が、グラスを磨いていた。よく梳られた髪はほとんど白かったが、幾筋か赤が混じっており、若いころの真つ赤な髪を容易に想像することができた。髪は肩より少し長くたらされており、それを後ろに束ねていた。目じりと口元にしわが広がっていたが、今は不機嫌そうな顔をしている。店主は目も上げず、ぶっくらばうに言った。

「今は開店前だよ。宿をとりたいなら、一泊銅貨三枚。一枚足せば夕食ぐらいは出してやる。」

「ヤコブ爺にここを頼れと言われたんですが……。」「店主はグラスを落とす勢いで、カウンターから身を乗り出した。

「ヤコブがかい？あいつ、なんて言ってた！？」僕は相手が急に態度を変えたことに驚いた。その声には、どことなく嬉しそうな響きがあった。常連の何人かも、こちらを見ている。

「いや、特には何も。ただ、これを見せれば力を貸してくれると。」そう言つて、剣帯から鞘ごとはずすと、身を乗り出している店主に手渡した。店長は鞘を入念に見たあと、剣を引き抜いた。済んだ鈴のような音色が店内に響き、眠っていた者たちが目を覚ました。彼らは踊り手あたりを見回し、その視線が剣をとらえると、皆一様に目をみひらいた。

「なるほど、確かにあいつの剣ね。それで、私にどうしてほしいんだい。」店主は僕に剣を返していった。

僕は簡潔に自分の境遇を話した。自分が川から流されてクリスに救われたこと、意識が戻ったら記憶がないこと、村に山賊がきて、僕が倒したこと。クリスに言われたとおり、僕が黒魔法を使ったことは伏せておいた。

「ふーん。それで、あんたはどうしたいんだい？」店主は尋ねた。「記憶を取り戻したいんです。だから、僕を知っていそうな人を知

りませんか？」店主は毒づいた。

「ヤコブめ、なんも連絡よこさないと思ってたら、やっかいことをわたしにおしつけやがって……。」クリスがおずおずと尋ねた。

「手を貸してくれないんですか？」

「いや、貸してやってもいい。だが条件がある。あんた、腕は立つんだろ。最近、夜にふらつと出かけてから、姿を消すやつがいてな。人さらいなんて噂まで出てきちまつてる始末だ。人さらいなんて信じちゃいないが、人がいなくなってるのは事実だし、客足が途絶えるのも困る。だから、何がこの町に起きてるかを調べてほしい。もし犯人がいるんだったら、ここに連れてくること。そうしたら、あんたを知ってるやつを教えてやろう。」

「僕のことを知ってるんですか？」僕はほとんど叫びだしそうだった。こんなに早く見つかるとは！

「別に私はあんたなんか知らないよ。あんたを知ってる人を知ってるんだ。」店主は謎めかしていった。

「それはどういう……。」「店主が途中で遮った。

「これ以上は教えないよ。さあ、やるのかやらないのかはつきりしな。」僕はまだ聞きたいことがあったが、クリスが引き留めた。

「大丈夫。私もいるから、人さらいなんてへっちゃらよ。」と、肩にかけた弓を揺らした。女のクリスがやる気なのに男の僕がしり込みするわけにもいかなかった。

「わかりました。引き受けます。」こうして僕は、最初にたどり着いた町イギリスで、人さらい探しをすることになってしまった。

第二章 第一話：道の町 イギリス（後書き）

どうも、ジョンです。この前の更新からずいぶん時間がたってますね。その間に読者数も増えていて、私としては踊りたい気分です。

……踊っちゃおうかな？

まあ冗談はさておき、ここから第二章が始まります。はたして、イエリシエンは記憶を取り戻すことができるのか。まあ、それは後々わかることです。

第二話：二度目の出会い

「さて、これからどうすればいいんだろう？」酒場を出て、ひとりごちた。外はまだ昼を半ばまで過ぎたばかりであり、人々の往来は激しく、この中に探し求める犯人がいたとしてもそいつを特定することは不可能だった。

「襲われているのは夜だから、やっぱり夜になるまで待たなきゃだめね。それまで、いなくなった人のことを知っている人を探しましょうよ。」クリスが提案した。僕はうなずいた。夜まで今出てきた酒場で過ごすのは気が引けるし、露店の商品を見て回っても、それを買う金銭的な余裕は僕らにはない。クリスは全財産を持ってきたといっていたが、どれだけ長くなるかもわからない旅で、無駄遣いをするわけにはいかないからだ。

さっそく街の人に聞いてみることにした。だが、噂を知っている人はたくさんいたが、いなくなった人を知っている人はほとんどいないうえ、知っていたとしても名前しか知らないような関係の人がほとんどだった。しかし、無理もないことなのかもしれない。この町は、その規模にしては驚くほど人々が多くゆきかう。住んでいる者、通りかかっただけの者、ここを拠点に行動している者などその内訳は様々だ。誰かがいなくなったからといって、その人個人に関心を寄せるものは少ない。

ようやく行方不明者の知り合いを知っている人に出会った時には、日が暮れかけ、西の空が朱に染まっていた。

「夜中にいなくなったやつ？ああ、それならボランとこの爺さんじゃなかったか？ほら、この道を少し行っただころだよ。」と、露天商のおじさんは本道から離れたところを指差した。僕らはまたため息をついた。

僕らがボラという人の家にたどり着く間に、夕日は完全に沈んでいた。露店はすべてたたまれ、本道の喧騒がやんだ代わりに、酒場

や宿がにぎやかになり始めた。ドアをノックすると、中から赤らんだ顔の大柄な男が出てきた。

「なんでえ、お前たちは。」男は眉をひそめて僕らをにらんだ。

「馬車馬亭の店主に頼まれて、行方不明の原因を調べています。あなたのお父さんがいなくなられたとお聞きしたのですが……。」「クリスはすらすらと答えた。ここはクリスに任したほうがいいと考え、僕はうなずいて見せるだけにした。男は馬車馬亭の名前と、かわいらしい女の子がいるのに機嫌を良くした。

「そうかい、ナリサの野郎がねえ。それなら、信用してやってもいいな。ほら、立ち話も何だ、入れよ。」男は扉からのいて僕らを家に招き入れた。外は少し肌寒かったので、招かれたことに感謝しながら家にお邪魔した。

ちょうど夕食の最中だったらしく、かつぶくのいい奥さんと小さな男の子が一人、低い小さなテーブルについて食事を取っていた。

「あら、お客さん？」奥さんが赤ら顔の亭主に尋ねた。

「馬車馬亭のやつだとよ。おやじのことで訊きたいことがあるらしい。おれはおやじがいなくなったときいなかったから女房に聞いてくれ。」亭主は妻の質問に答え、僕たちに質問するよう促した。

「行方不明の原因を調べているんですが、何か心当たりはありますか？」クリスが尋ねた。

「さあ、お父さんは夜に散歩するのが趣味ですから。あの日もいつものように出て行って、それっきりなんですよ。」

「時間はいつごろですか？」

「夕飯の少しあとぐらいかしら。そうだ、この子なら、お父さんがどの道を通って散歩していたか知ってるはずよ。時々この子連れで歩いていたら。」男の子は自分が話に出てきたことに気づいていなかった。クリスは子供の目線までかがんだ。

「ねえ、おじいさんがどこをお散歩していたか教えてくれる？」子供はうんとうなずいた。

「少しこの子に手伝ってもらってもいいですか？」クリスは母親と

父親に尋ねた。

「構わんよ。おれもこいつも親父が帰ってこなくて心配してるんだ。たまにしばらく帰ってこないこともあったんだが、今回はさすがに長すぎるし、何か嫌な予感がするからな。遠慮なく使ってくれ。」
まだ食事中だったので、男の子が食べ終わるのを待ってから出発することにした。奥さんは僕らを食事に誘ってくれ、スープとパンを
ごちそうになった。

「こつちだよ。」男の子は家を出ると、クリスの手を引いて町の入り組んだ道を通って行った。迷路のような街の中を、男の子は迷いなく歩いて行く。途中分かれ道に來ると、こつちは本道に出るとか、ここは酒場への近道だとか教えてくれる。

「すごいな。どのみちがどこにでるかぜんぶわかるのかい？」僕は少年の記憶力に感心していった。

「あたりまえだよ。この町に住んでる人ならどのいえにだれが住んでるかも知ってるよ。」少年はこともなげに言ったが、その声は若干誇らしげだった。

「おじいちゃんはいつもここに座ってたよ。」男の子は傍らの井戸に手をあてた。

「これは？」

「これはこの町ができる前からあった井戸だよ。でも、古くなって中がふさがっちゃって、今は使われてないんだ。」男の子は答えた。確かにつるべ落としが壊れていた。中をのぞいてみたが、暗くて底は見えず、崩れたがれきがあるかどうかは分からなかった。

「それにしても……、夜になるとすごい静かだね。昼の姿が嘘みたいだ。」僕は通りを見渡していった。ここはちょうど町の中心にあたり、ここからすべての本道が見渡せたが、人影はほとんど見当たらなかった。

「そうね。怖いくらい静かだね。」クリスがいった。

「露天商の人はこの町に住んでない人も多いし、昼と比べたら夜は驚くほど人がいなくなるんだ。」と男の子。しばらくあたりを調べ

てみたが、争った形跡やおじいさんの持ち物などは見つからなかった。その場を後にした。

三時間ほどまわって、男の子の家に戻った。ぼくらはボラさんにおじいさんの行きつけの店などを聞き、一応あたってみることにした。僕らが別れを告げようとすると、男の子が心配そうに言った。

「おじいちゃん、見つけてくれる？」僕は笑顔を作った。

「うん、きつと見つけてみせるよ。安心しな。」男の子は元気良くうなずき、僕らに手を振った。

「お店には何日も顔を出してなかったみたいね。」クリスは教えられた酒場を出ると僕にいった。仕方なく、先ほど男の子が教えてくれた道をもう一度たどることにした。

「ねえ、見つかると思う？」クリスが道すがら尋ねる。

「みつけないや。約束したんだから、あの子と。」僕は答えるというより、自分に言い聞かせるように言った。クリスはそんな僕の顔をじっと見ている。僕は居心地悪くなっていた。

「な、なんだい？」

「いや。そういう顔もするんだな。」

「そういう顔？」そんなに変な顔をしていたかな、と首をかしげる。「うん。なんていうのかな、びしとした感じ。いつも頼りなさそうな顔してるのに、急にそんな顔するからびつくりしちゃった。」

「そんなにぼくって情けない顔してるのかい？」僕は少し落ち込んでいった。クリスはうんというて、僕をさらに落ち込ませた。

「冗談よ。それだけ意外だってこと。でも、イエリシェンらしいかもね、そういうところ。」とクリスは言った。

「僕らしい？なにが？」

「それはね……」その時、小さな悲鳴が聞こえた。僕は走り出した。クリスもあわてて追いかける。悲鳴は井戸のほうから聞こえてきていた。

たどり着くと、そこには誰もいなかった。僕は息を切れ切れにし

ていった。

「おかしいな、確かに聞こえたのに。」急に走って疲れたので井戸に腰かけた。と同時に跳ね起きた。

「つめた！なんで濡れてるんだ？」僕はズボンの尻の部分に手を当て、井戸に目を向けた。井戸のあたりはまるで水をまいたかのように水浸しだった。よく見ると、井戸には先ほど気づかなかったが、こすったような跡があった。更に目を凝らしてよく見用とすると、井戸の底で何かが動いた。僕はとっさに飛び退くと、間一髪井戸から飛び出してきたものをかわした。

「なんだ！？」僕は思わず声を上げた。

井戸から出てきたのは、触手だった。人の腕ほどの太さのタコのように赤い触手。タコと違うのは、吸盤のあるべきところのにこぎりのように返しがびっしりと並んでいること。驚きをもって井戸を見てみると、触手がいくつも這い出してきてこっちに向かってきた。僕は剣を引き抜き、足に絡みかかって来た触手をあわてて切った。

「何これ！？」クリスが半ば混乱して叫んだ。

「僕にも分らない！でも、こいつがきつと人さらいの犯人だ！」僕は最初の衝撃から立ち直ると、他の触手を切りにかかった。今まで酔っ払いを相手にしていたからなのか、触手はかわせないほどの速度では襲ってこなかった。というより、とらえる対象を探しているようで、見当違いのところを這っていた。しかし、触手は切っても切っても次から次へと井戸から触手が伸びてきた。

「くそ、一体何本あるんだ！？」僕は剣を振り回した。クリスは弓ではなくナイフで触手を相手にしていた。

突然、触手は攻撃をやめ、井戸のほうへと引っ込み始めた。

「終わったの？」クリスは問いかけるといふより、むしろ願望に近い言葉を口に出した。だが、ぼくの直感はその否定していた。残念ながら、僕の直観は正しかった。

触手は井戸の中へは入らず、淵の近くで止まり地面に返しを引つけた。触手は地面を少しひっかきながら何かを引っ張り出してい

るように見えた。僕らは何が出てくるのかを待ち構えた。

口。出てきたのはとても大きな口だった。絵に描いたようなぎざぎざの歯をもった口が、井戸の中から現れた。口の中には、先が大きな眼になっている舌。胴体は口と同じ胴回りの蛇の体で、尾は井戸から出ていなかった。

「化け物……」。「クリスは恐怖に身をすくませていた。僕も驚いていたが、なぜか化け物の姿よりも、そいつがここにいることに驚いていた。

「ギエビエリーだ」僕は知らず知らずそいつの名を口にしていた。クリスは僕がなぜ名前を知っているかは聞かなかった。おそらく、そんな余裕はなかったのだろう。

ギユベリーはその巨大な口から舌を突き出した。それが左右を向いて、僕と目が合う。すると先程とは打って変わり、獣が飛びかかるように触手が飛んできた。あわててやみくもに剣を振り回すも、次々と繰り出される繰り出される触手をすべて打ち払えることはできず、いくつか僕を打ちつけた。

触手の返しは服を突き破って中の体をひつかいた。さほど返しが長くないので傷は深くなかったが、やがて服はぼろ布のようになり、裂けた服からのぞく肌には血が滴った。

「イエリシェン！」クリスは僕を助けに触手を切りながら近づいてこようとしたが、僕は身ぶりで近寄らないように指示した。クリスまで巻き添えをくらわすわけにはいかない。クリスはそれでも近づくこととしたが、僕は叫んだ。

「だめだ、こつちへくるな！」クリスはかなり驚いたようで、近寄ろうとするのはやめてくれた。僕はほっとしたが、自分がピンチなのは違いがない。剣を振り回す腕はしびれてきたし、痛みが意識をもろろとさせる。その時、クリスが弓を構えるのを目の端でとらえた。

クリスは弦を目一杯引き、矢を放った。矢は空を切って飛び、ギユベリーの舌、巨大な目に刺さった。ギユベリーは鐘のような叫び

声をあげて攻撃の手を緩め、一瞬井戸へと落ちるかに見えた。

だが、井戸には落ちず、先ほどよりも激しく触手を振り回し始めた。目が見えていないので正確な攻撃ではなかったが、数が多い上その激しさは異常だった。僕はあわてて身を伏せたが、クリスは突然の敵の反撃に反応できず、一本の触手に絡まれてしまった。すると、いくつもの触手がクリスに絡みつき、締めあげた。クリスは苦痛に悲鳴を上げた。

「クリス！！」僕は触手が体をたたくのも構わず立ち上がった。からみつく触手を切りながらクリスのもとへと駆け寄る。だが、触手はずるずるとクリスを引き寄せ始めた。その先には巨大な口が大きく開かれ、獲物を待ち構えている。

僕はただクリスを助けたいという考えだけが頭を絞め、大きく振りかぶって剣を投げた。剣は唸りを上げて飛んで行き、大きな口の中へと入り、舌を切り裂いた。

ギユベリーは再び悲鳴を上げた。また井戸へと落ちそうになって触手が緩み、クリスを地面へと落とす。クリスは気絶こそしていないものの、締めつけられた痛みで身動きが取れない。幸い、返しは服を引っかけてだけで、どこもけがを負ってはいなかった。

「クリス、大丈夫か！？」僕はクリスを抱き起した。

「ええ、なんとか。助かったわ、危うく……危ない！」クリスは警告の声を発したが、僕は反応できなかった。触手は今度は僕に絡みつき、僕を持ち上げた。僕の体は宙に上がり、やがて井戸の真上にきた。

「イエリシエン！」クリスは叫び、落ちた弓を拾おうとした。だが、ギユベリーは僕を離れた。僕は落ちながら口が迫ってくるのを見た。

「イエリシエン！」私は叫んだ。ダメ、このままではイエリシエンが死んでしまう！しかし、私にはイエリシエンが化け物の口へと落ちていくのを見ているしかなかった。

その時、イエリシエンは文字通り胸に手をつ込んだ。胸から引

き出された手には、山賊の首領をやった時と同じ黒い何かが握られてあった。イエリシエンは落ちながら体勢を整え、口の中へ投げ込んだ。化け物の体に震えが走り、イエリシエンはそのまま口の中へ入っていった。

化け物は震え続けたかと思うと、ずるずると井戸の中へ落ち始めた。胴体が消え、口が井戸に入ろうとしたその時、イエリシエンが口から悠々と出てきた。その手にはヤコブ爺の剣と黒い剣が握られていた。イエリシエンは口から出ると、化け物に向きなおった。

「なぜ貴様がここにいるかは知らんが、俺を食らおうとした罰だ、死ぬ。」イエリシエンは黒い剣を化け物に突き刺した。化け物は断末魔の叫び声をあげた。

「いい、すごくいい！もつとだ、もつとその声を聴かせる！」イエリシエンは快楽に酔った声を出し、剣をねじった。化け物はさらに大きな声を上げた。剣の一突きなど蚊に刺される程度だと思われた化け物だが、イエリシエンの剣を突き刺されてから目に見えて弱り始めていた。イエリシエンがさらに深く突き刺すと、化け物の震えは止まり、体を支えていた触手がだらりとした。その瞬間、化け物は井戸の中へと落ちていった。

私はゆつくりとイエリシエンに近寄った。顔は陰になってみえないが、どんな顔をしているのかはわかった。イエリシエンはゆつくりと振り返った。その顔は予想通り笑顔だった。それしいつももの朗らかな笑みではなく、人を恐怖させる狂気じみた笑顔だ。

「あなた、誰？」私は尋ねた。イエリシエン、いや、イエリシエンの顔をした男は心底おかしそうに笑った。

「誰？誰って、見ての通りイエリシエンだよ、クリス。」からかうような声。違う、イエリシエンは人をあざ笑ったりしない。

「とぼけるのはよして！私にはわかるんだから！」私はかっとなつて叫んだ。男はふむつというと、態度を改め、急に口調を変えた。

「なるほど、貴様に嘘は通じないか。なかなか賢しいな、女。確かに俺はお前の知っているイエリシエンという男ではない」

「じゃあなたはだれだつて……」男は遮つて言った。

「だが、同時にイエリシェンでもある。この意味、貴様にわかるまい。」

「どういう意味よ！」私はいきり立つて叫んだ。この男はひらひらと質問をかわそうとしていると思った。

「そのままの意味だ。それより、これ以上過去を詮索するな。おれだけじゃなく、こいつも破滅することになる。」男はぎつと私を睨みつけた。その視線は鋼が突き刺さるように鋭く、あまりにも強い殺意にくらくらしたが、私は反論した。

「嫌よ、あなたの言うことなんか聞かない。それより、イエリシェンの過去つてなんなの、知ってるんでしょ。」男は私を睨みつけたまま言った。

「それを今知られるわけにはいかん。俺にはこいつが必要だからな。もう貴様と話すことはない。」言い終えると、男の体はくずおれ、剣が地に落ちた。男の黒い剣は消えていた。

私が駆け寄つて抱き起すと、男は静かな寝息を立てており、その顔は私の知っているイエリシェンのものだった。

「なんだ、どうしたんだ。」気づくと、人々が家から出てきて来ていて、周りには人ばかりができていた。

「おい、大変だ！この男、血まみれだぞ！」

「なんだこれ、触手か？気持ちわりい」次々とヤジ馬がやってくる。私は馬車馬亭の店主を呼ぶよう頼み、その間にヤジ馬のひとりに何があつたかを伝えた。馬車馬亭の店主に同じことを伝え、証拠の化け物が井戸から引き揚げられたところには夜が明けていた。私はその間、男の言った言葉の意味を考えていた。

第二話：二度目の出会い（後書き）

どうも、ジョンです。いや、勢いっていいですね、すらすらと書けちゃう。ずっとこのモチベーションなら半年で終るかも、この物語。でも勢いに任せすぎるのも考え物です。誤字は多いしね。話が支離滅裂だったら教えてください。しかも、九時すぎから書いてたのに一時を大きく過ぎちゃいました。むう、明日（いや今日か？）は一日中眠気と戦うことになるな。まあ、勝敗は目に見えてますが、ということ、ずいぶん間が空いたりすぐに続きが出たりと思いきり不定期な更新をしています私。次の更新は明日か、はたまた一ヶ月後か。それは俺にもわかりません。

第三話：道を指し示す者

天井を見つめていた。クリスの家の天井である平屋根ではなく、斜めになった天井にかかる梁のしみをみつめていた。そうしながら、なぜここにいるのかを思い出そうとしていた。

真夜中の探索、井戸に現れた化け物、迫る口、口、口……。布団を跳ね飛ばす勢いで体を起こす。

「あれ……。いきてる……。？」自分の手を見、次いで体全体をなでて自分の体が偽りでないことを確かめる。その時、不可解なものが視界に入った。

床に敷かれた僕の布団の隣にもう一つの布団。それだけならまだいい。問題なのは、そこにクリスが寝ていることだ。

その時の衝撃は言い表せない。僕は人は驚くと思考が停止して固まってしまうことを初めて知った。クリスはすうすうと静かな寝息を立てて寝ている。その寝顔があまりにも可愛くて、つい見とれてしまった。

「ん……。」「クリスが小さな声を漏らして寝がえりをうった。その時、布団がはがれ、胸元がはだけてしまっているのが目に入ってしまった。クリスはいつもの旅の装いではなく、うすいシャツを着ていた。

「……。！」「あわてて視線をそらした。ふいにここにいたらまずい気がして、クリスを起こさないように息を殺しながらそっと部屋を移動し、扉を慎重に開けてすり抜けた。

「ふう……。」「部屋を出て後ろ手に扉を閉めると、ほっとして息をついた。

「あれはやばいな、うん……。」「などつぶやき、狭い廊下を歩いて行くと、突きあたりは階段の踊り場になっていた。いままでたくさんの人がつかんだのだろう、人の手に握りやすくなった手すりにつかまりながら階段を降りた。

「おや、起きたのかい。」カウンターの店主が声をかける。僕は自分がりて来た階段を見上げ、一人合点した。

「上は宿になってたんですね。」

「相部屋にさせたけど、一緒に旅してきたのなら別にかまわなかったろう？それ、飯は作つといたから、早く食べな。」店主はカウンター奥、厨房へと行き、バターを塗ったパンやスープがはいった深皿を持って戻って来た。僕がカウンターに着くと、皿を静かに前に置いてくれた。僕はスープに取り掛かりながら、僕が気絶した後どうなったかを尋ねた。

化け物は僕が倒した事になっているらしく、僕は化け物の触手に締め付けられながら、相手の脳天を貫いたそうだ。そして化け物は死んで井戸に落ち、僕は気絶した。騒ぎを聞きつけた町民が事の次第をクリスから聞き出すと、野次馬の一人が思い切って井戸の下に降りた。男は化け物を見つけて騒ぎ、大慌てで上がって来た。それから化け物を引き上げる事になり、力自慢の男たちが十数人で引き揚げた。化け物は体長約8メートルの大蛇に似た体をもっていたが、頭の部分には数十本もの触手が生え、目はなく、大きな口だけがあつた。した先にある眼には矢が突き刺さっており、のどの奥には刺し傷があつた。井戸の底にはいくつもの白骨化した遺体が転がっていた。怪物を解体すると、その夜取り込まれた酔っ払いが出てきた。残念ながら、だれとも判別できないありさまだった。

「それで、ボラのおじいさんは見つかりましたか？」僕は一番気になって聞いたことを聞いた。店主は悲しそうに首を横に振った。

「そうですか……。」守れなかった。あの子と約束したのに、おじいさんを助けることができなかった。自分のふがいなさ、約束を守れなかったことへの後悔と悔しさがまぜこぜになった感情が腹の中でもがく。知らず知らず、スプーンを強く握りしめていた。「おーう、ナリサー、久しぶりに顔出しに来たぞ。」一人の酔っ払いが酒場に入ってきた。

「ボラ、あんた死んだんじゃなかったのかい!?」店主が驚きもあらわに叫んだ。僕も驚いて立ち上がり、危うくスープをこぼすところだった。酒場に入って来た老人は僕らの驚きように酔いがさめてしまったようだった。

「な、なんでい。生きてちや悪いんかい。」と老人。

「あんた、今までどこにいたんだい? あんたんとこの家族が捜してたんだよ。最近、いなくなる奴が多いから心配してたんだよ。」と店主は母親が叱るような口調で言った。老人はからからと笑った。

「東から来た隊商のやつと酒場で意気投合してな、北にあるナファネンヒまで行きたいが、道がわからないつつからよ、案内してやつたんだ。ここから歩いて一日で着く所だからな。でもよ、道が途中でふさがれてたりして結局ついたのは三日後。それからこっちに帰る隊商を待つのに三日かかってよ。やつと帰ってきたのが今日。ほんと今着いたとこなんだよ。」老人は悪びれる様子もなく語った。「それで、うちには帰ったのかい?」店主はあきれたように言った。「いや、ただだけど?」

「さつさと帰って安心させてやりな。ほら、とつと帰った。」店主は老人をまわれ右させると、ドアのほうへと押しやった。

「そうかい? じゃあ、顔出すのはまた今度にするよ。」ボタン。店主は大きなため息をつく、僕に向きなおった。あきれながらも、ほつとしたような顔をしていた。

「まったく、人騒がせなやつだ。昔からああなんだ。」僕は苦笑して相づちを打った。

「でも、よかつたです、いきててくれて……。」店主はうなずき、テーブルを拭き始めた。僕はスープを飲み干し、パンにかじりついた。そうやってしばし会話もない時間が過ぎた。

僕が食べ終えたころ、階段から足音が聞こえ、クリスが下りて来た。

「やあ、おはようクリス。」僕はクリスに声をかけたものの、朝の記憶が戻ってつい胸元に目がいってしまった自分を恥じた。

「もうおはようって時間でもないわよ。」クリスは苦笑いを浮かべた。店主はグラスを磨いているところだった。

「二人とも起きたことだし、話をしようかね。」店主はグラスを棚にしまうと、話を切り出し始めた。

「そうだ。すっかり忘れてた。約束の話ですよ。」僕が確認すると、店主はうなずいた。

「あんたを知っている人を知っているといったね。残念ながら、私にはあんたのことを知らないが、この町に、誰のことでもわかる人がいる。その人に尋ねな。」

「その人はどこにいるです？」とクリス。店主はにっと笑った。

「もうここに呼んであるよ。さつきからそこにいるじゃないか。」と、酒場の隅のテーブルを視線でさした。なぜ今まで気づかなかったのか、目深にフードをかぶった人が座っている。

「ハギア、こいつがさつき話した子だよ。」店主が声をかけると、フードの人物がこちらへ顔を向けた。

年はいくつなのだろうか、まるで樹木のようなしわしわの顔、骨ばって干からびた手には水晶が乗せられてある。目はまるで線を引いたかのように細い。

老婆はおもむろに席を立つと、こちらへ歩み寄って来た。僕の前に来ると、水晶を持ってない手を僕に差し出した。僕がどうすればいいか分からず、何もしないでいると、店主が言った。

「その手をつかむんだよ。」僕が不安そうに老婆の顔を見ると、相手はにつこりとやさしい笑みを浮かべた。僕はなぜこんなことをしなければならぬのかと思いつきながら、ためらいがちに手をのばして、老婆の骨と皮だけになった手を握った。

「ほほ、何とも。恐ろしく不安定、表と裏が入れ替わる。表と裏は表裏一体、なのに表と裏が分かれ始めてある。過去は裏が知っておる。裏はそれを隠しておる。」

「裏？裏とは何のことです？」僕は尋ねたが、老婆は質問には答えなかった。老婆は水晶を持ち上げ、水晶をすかして僕を見つめ始め

た。ややあつて、老婆は口を開いた。

「二つの道が見える。待つか、進むか。時を待てば過去はもたらされる、表と裏が入れ替わることによって。進んだ先に何かがあるのかは見えぬ。しかし苦難は必定。待つは易く、進むは険しい。」老婆は僕の目をまっすぐに見つめた。

僕はその眼に星を見た。たくさん星と大きな星。まるで見上げた夜空のようだった。この老婆は僕を見ていない。僕の先にある何かを見通していた。僕は僕を見ながら僕を見ていない目をまっすぐに見つめ返した。

「僕は待たない。僕は進むために旅をする、そう心に決めています。」老婆は僕の答えに満足そうにうなずいた。老婆は水晶を懷にしまい、握っていた手を離れた。

「ならば、道を示そう。自らの過去は自らが探すがよい。東へ向かえ。過去を直視せよ。そなたの過去は暗い。逃げてはならぬ。見つめるのだ。過去を、自らを。」老婆は言い終わると、踵を返して酒場から出て行った。僕らはそれを見送った。老婆が出ていくと、酒場の雰囲気が変わり、日差しを強く感じた。僕は老婆の持つ雰囲気がこの場を支配していたことに気づいて驚いた。

「それで、あれだけ？」店主はうなずいた。

「あれはそういう奴なんだ。でも、ここまではつきりしない道を示したのはあんたが初めてだよ。」と、僕を見て言った。

「十分です。前に進む、少なくとも自分が向かう道は間違いじゃないとわかりました。それに、方角も示してくれた。」

「そう、それよ。東だったって、どこまで行けばいいのよ。」クリスはぷりぷりして言った。

「ここから一番近い東の町って言ったらベルデンだよ。まあ、町というより村に近いね。」店主はカウンターの下から地図を取り出した。そして地図の一点を指し示した。

「ここがイギリス。街道を東にまっすぐ行ったらここ（と、指を右に走らせて、イギリスよりも少し小さな点の上で止めた）ボルノ

ーにつくけど、途中少し南に折れる（イギリスとボルノーの間、ややイギリスよりのところから小指分下のほうで止める。地図には名前しか載っていなかった）とベルデンにつくよ。あんたら、徒歩で行くんだろ？ だったらベルデンに寄って食糧の補給をしたほうがいいね。隊商でもボルノーにつくには五日かかるよ。徒歩なら二、三週間とところだね。ベルデンは歩いて六日ぐらいだけど、うちの客にベルデンに向かう商人がいるから、乗せてもらうようかけ合ってるよ。今日出るから、明日の昼ごろにはつくだろうさ。」と、店主は請け合った。

「そこまでしてくださるのですか？」

「ヤコブの知り合いじゃあ、邪険にするわけにもいかないよ。貸せただけの手は貸してやるさ。」と店主は言った。

「ありがとうございます。」僕とクリスは頭を下げた。

「礼には及ばないよ。ほら、さつさと準備しな。」店主は少し照れながらシッシと手をやった。僕らは顔を見合わせて、また頭を下げた。

「少し揺れるが、かんべんしてくれよ。座るところは自分たちで作ってくんな。」商人はイギリスで買った品物を部下に命じて馬車に積ませていた。

「いえ、乗せてくれるだけでもありがたいです。」と、クリスは言った。商人はそんなクリスと、荷物の積み上げを手伝っている僕を見比べ、僕を小突いた。

「なんだ、二人旅かい？ いいねえ、相手がこんな可愛い娘で。」僕は急に顔が赤くなるのを感じた。

「僕を助けてくれてるだけです。」

「おれも助けてくれる女がほしいよ全く。こんな仕事してるとな、なかなか一つ所にとどまることはできないんだよ。あゝあ、いい加減嫁がほしいな。」

「おやつさんは一生無理っすよ。」積み上げをしている一人が言っ

た。他の仲間はげらげらと笑った。

「うるせえ！今笑ったやつ、給料からしよつ引くぞ！」と、商人が
となると、男たちは不平を漏らした。

「まったく……。」商人はため息交じりにつぶやいた。僕は
商人と仲間たちのやり取りを見な柄積み上げを手伝い続けた。

ようやく積み荷がすべて馬車に積まれ、出発の準備ができたころ、
こちらに走ってくる小さな人影を認めた。

近寄って来たのはボラさんの息子だった。少年は息を切れ切れに
して言った。

「ぜえ……ここに……いるって……きいて……。」僕は少
年に息を整えるように促した。少年は少し息を継いで、僕をまっす
ぐに見て言った。少年は笑顔だった。

「ありがとう！」少年はそれだけ言うと、また走り去っていった。

僕は走っていくその背中が見えなくなるまで見ていた。

「どうしたの、イエリシェン？何かいいことでもあった？」クリス
が声をかけた。クリスはもう馬車に乗っていて、商人が早く乗るよ
う促していた。僕は知らないうちに笑顔になっていた。

「いや、なんでもないよ。」僕は胸に湧いた感情に喜びながら馬車
に乗り込んだ。

馬車は賑やかなイギリスを後にして、街道へと進み始めた。

第三話：道を指し示す者（後書き）

どうも、じよんです。今年ももう少しで終わりですが、いかがお過ごしでしょうか？僕ですか？ぼくはいえにひきこもってますOrz風邪がなかなか治らず、鼻水が止まりません。ごみ箱がティッシュでいっぱいになっています。正月は元気に過ごしたいものです。体調には十分気を付けてください。

第四話：傷痕

馬車は舗装されていない、がたがたする道を進んでいた。街道はイギリスから離れるにつれ荒れ始めていた。ベルデンに向かうにつれて木々が見え始め、道の両側は森に囲まれ、左手は山、右手は斜面になっていた。

僕は荷馬車の後ろに座り、足をぶらぶらさせて後にした道をぼんやりと眺めていた。

「考え事？」クリスが背後から声をかけた。振り返ると、クリスは僕の後ろに立っていた。クリスは隣に腰をおろした。そして右手に持っていた林檎を僕に差し出した。僕はありがたうと言って林檎を受け取り、一口かじった。

「おじさんがくれたんだ。」クリスは自分の分のリンゴをかじりながら言った。

「へえ、後で請求されないといいけど。」僕はぼんやりと答えた。クリスはクスリと笑い、また一口かじった。僕もさらに一口かじった。

「ねえ、何を考えてたの？」リンゴを食べ終わると、クリスは同じ質問を繰り返した。

「占いのこと。あのおばあさんは僕の過去は暗いといった。僕は山賊を惨殺したうえ、黒魔法まで使った。どう考えても自分がいい人だったとは考えられない。このまま過去を求めたら、そのうち自分が起こした罪に直面するんじゃないかと思うと、怖くて仕方ないんだ。」森から視線を下げて、自分の両手を見つめた。束の間、血まみれの両手が見えた気がした。クリスは片手を僕の肩に置いた。

「きつと大丈夫よ。過去のあなたも今のあなたも、同じ人なのだから。イエリシエンが悪人なんてこと、ありえないわ。」そういつてクリスは僕に笑顔を見せたが、それはどこかしら不安げな笑みだった。

「ゴブリンだ！！」突然、前を進む馬車から叫び声が上がった。その叫び声に続いて、弦が震える音と矢が空を切る音が聞こえた。僕とクリスは顔を見合わせてうなずくと、馬車から飛び出した。僕は剣を抜き放ち、クリスは弓を手に取った。

「伏せて！」突然クリスが叫び、僕の頭をつかんで下げさせた。次の瞬間、髪の毛を矢がかすめた。クリスは片膝について矢を番え、矢が飛んできた方向に素早くはなった。弓が唸り、次いで小さな叫び声が上がった。

「流石」僕が小さく称賛すると、クリスは片頬を吊り上げた。

僕らが馬車の前に回ると、幾人かは手に武器を持ってゴブリンの襲撃に備えていた。馬車は進んでいるが、積み荷があるためにその歩みは歩くより少し早いくらいに過ぎず、馬の体力的にせかすこともできなかった。

「何事ですか？」僕は商人の頭、バルドさんに尋ねた。

「ゴブリンだ。あいつら、積み荷を狙ってやがる。」

「誰かけが人は？」クリスが聞いた。その間にも、森のどこからか矢が飛んでくる。

「最初の攻撃でボツがやられた。生きちゃいるが、早く手当てをしないと危ないかもしれん。」また矢が飛んできて、味方の一人が悲鳴を上げた。幸い、かすめただけらしく、罵り声をあげてでたらめに矢を放った。他の物たちも続けて矢を放った。

「ばか野郎、矢を無駄にすんな！あつちは盲滅法うつてるだけだ。」

矢が届く範囲まで打つんじやねえ」バルドさんが叫ぶと、男たちは矢を射るのをやめた。クリスは地面に刺さった流れ矢を引き抜くと、先ほど罵り声をあげた男に聞いた。

「ねえ、敵がどこからうつて来たかわかる？」男は森の奥のほうを指差した。

「あの木のあたりの茂みからだ。でも、ここからじゃ届かない」男が不満そうに鼻を鳴らすと、指差したあたりからゴブリンが立ちあがった。クリスは素早く狙いを定め、ゴブリンが射るより早く矢を

放った。矢は寸分たがわずゴブリンにあたり、ゴブリンが放った矢はあさつての方向に飛んで行った。男たちから称賛の聲が上がった。「嬢ちゃん、やるじゃねえか」バルドさんがクリスに言った。クリスは小さく頷き、他の敵がどこにいるか尋ねた。男たちは敵の大体の位置を把握していたらしく、クリスはその後二体のゴブリンを仕留めた。

ゴブリン達はすぐれた射手がこちらにいることに気づいたようで、攻撃の手を止めた。

「しばらくこうしてくれるといいんだがな。」男たちの一人がぼやいた。が、その願いはかなえられなかった。突然ゴブリン達が叫び声を上げながら森の斜面を下ってきたからだ。その数は17ほど。ゴブリンの中にはちぐはぐな鎧を着ている者もいた。クリスは矢継ぎ早に矢を放ち、こちらに降りてくるまでその数を三つほど減らしたが、ゴブリン達はひるむことなく斜面を下り切り、僕らに襲い掛かった。

僕はクリスに向かってきたゴブリンに体当たりをかました。だが、倒れた相手にとどめをさす間もなく次の敵が襲いかかって来た。僕は明らかに大きな兜をかぶったゴブリンの棍棒を剣で受けると、それを横に払ってつきを繰り出した。剣はゴブリンの皮膚を貫き、背中から突き出した。踏み込んだ勢いで体当たりをして剣を引き抜き、クリスを守ろうと彼女の前に陣取った。

クリスはまだ斜面を下りきっていないゴブリンを狙っていたが、そのためにクリスを一番早くに倒すべきと判断されたく、僕が相手をする敵はどんどん増えていった。一体のゴブリンが正面から切りかかって来た。それを剣で何とか防いだが、そのせいでわきからの攻撃の反応が遅れた。

「危ない！！」クリスが叫んで相手の存在に気付いたが、相手はすでに短剣を突き出してきていた。僕はとっさに左腕をあげて防ごうとした。

「が……！！」短剣は腕を刺し貫き、激痛が左腕から全身

にしびれとなつて走った。

「イエリシェン！」クリスは短剣をさらにねじ込もうとしているゴブリンを射た。僕は痛みに歯を食いしばりながら、左腕で正面の敵の腕を掴んでねじり、相手の脳天に剣を何度もたたきこんだ。手を離すと、ゴブリンは脳漿を飛び散らし倒れこんだ。

苦痛と殺しの興奮に息を切らしながら、戦況を確認した。商人の二人ほどが地面に倒れこんでいた。バルドは短剣を両手に持って二体のゴブリンを一度に相手にしているが、動きから察してどこか痛めているようだった。馬車はいつの間にか道を進んでいて、もう見えなくなっていた。

そうしている間にも、新たな敵が襲ってくる。何とか防ごうとするも、疲労と痛みで腕に力が入らず、剣をはじかれてしまった。

「しまっ……！！」とつさに頭を腕でかばうと、こん棒のどげが両腕に突き刺さった。短剣が棍棒にたたかれて、さらに腕に深く食い込む。

あまりの激痛に声が出なかった。頭がくらくらしで、地面に座り込んで縮こまりなくなった。歯をくいしばって何とかこらえたが、ゴブリンが棍棒をもう一度振り上げようとしても、もう抵抗する気力もなかった。

そのゴブリンの頭を矢が射抜いた。ゴブリン達の悲鳴が聞こえ、いくつもの矢が飛来した。矢が飛んできたほうを見ると、馬に乗った一団が弓を構えながらこちらに向かってきていた。

「放て！」先頭の男が矢を放ちながら言う、それにならって一斉に矢が放たれ、市の雨がゴブリン達に降り注いだ。ゴブリン達は戦況が不利になったと見るや、一目散に山の中に逃げて行った。

僕はぼんやりとこちらに向かってくる一団を眺めていた。一団が近づくと、バルドが先頭の男に話しかけた。

「お前たちはベルデンからきたのか？」

「そうだ。俺は自警団の隊長をやってるパナズだ。先ほど、けが人だけに乗せた荷馬車が村に着いた。彼から仲間が襲われていると聞

いて急いできたのだが、少し遅かったようだな。」と、地面に横たわる死体を見やった。バルドさんはかぶりを振った。

「こいつらはついてなかった。おれたちも、もう少し来るのが遅かったらこいつらと同じく地面に突っ伏してたろうよ。」パナズは頷いたが、表情は硬かった。

「君たちは馬に乗ってくれ。疲れているだろうし、けがをしている者もいるようだからな。」パナズは仲間たちを馬から降りさせ、商人たちに手を貸すように言うと、自分は倒れている男を担ぎあげた。「おい、大丈夫か。ひどいけがだぞ。」男たちの一人が僕の腕を見て言った。袖が血に染まって赤黒く変色し、左腕からは短剣が突き出ていた。僕は自分の両腕の状態を見て力が抜けそうになったが、努めて気にしないようにした。

「大丈夫です。それよりクリスを、彼女を見てやってください。」

「私なら大丈夫よ」クリスはいつの間にか傍らにいた。いや、傍らにいたことにも気付けなかったのか。

「出血がひどいわ。早く止血しないと。」クリスは僕の袖を引き千切ってけがの状態を見た。

クリスが息をのんだ声が聞こえた。だが、クリスはうるたえずに決然として持ってきた水筒で傷を洗い、ちぎった袖を包帯代わりにして腕を縛って、出血を抑えようとした。

「村にお医者様はいますか？」右腕の応急処置が終わり、左腕に取り掛かりながらクリスは男に尋ねた。

「ああ、タイミングよく、村に癒し手が来ているんだ。しかもかなりの腕だ。」男はクリスに自分の水筒を渡しながら答えた。クリスは礼を言って受取り、左腕を洗い始めた。

「癒し手って誰だい？」痛みに顔をしかめながら、クリスに尋ねる。「癒し手って言うのは、魔法で人々の傷をいやして回る人たちのことよ。彼らは教会に属していて、教会の偉大さを世に広めるために活動しているの。癒しの力は教会の信仰によって行われる、ってね。癒し手がいるなら、これは村に着いてから抜いたほうがいいわね。」

クリスは左腕に突き刺さったままの短剣を指して言った。僕は苦い顔でうなずいた。正直不格好なうえ、ずきずきと腕の中が痛むので早く引き抜きたいのだが、出血がひどくなるためにそれはできなかった。

「すいませんが、僕の剣を探してくれませんか、その草むらのあたりに飛んで行ったと思うんですが……」僕はクリスに手を借りて立ち上がり、男に頼んだ。男は草むらのあたりをしばらくうろつき、草がつぶれているあたりでかがむと、剣を手を体を起こした。

「これ、ダマスカス鋼じゃねえか!?」男が驚きに声を上げると、他の自警団の人たちも、商人たちも振り向いた。

「ダマスカス鋼だって!?」全員が驚きの声を上げ、近づいて男の持っている剣をまじまじと見た。

「本物だ」「すげえ、俺初めて見たよ」「まだこんなものがあつたのかよ」剣は一人一人の手に渡り、皆目を皿のようにして見つめた。「あの、返してもらえますか?」僕はおずおずといった。

「ああ、すまんすまん、あまりに珍しかったもんで。それにしてもあんたら何もんなんだい?その剣と言い、腕と言い。」と、周りに転がっているのと、クリスが射ぬいたゴブリンの死体を示した。

「いや、ただ無我夢中だっただけです。僕は別に。それよりもクリスのほうがすごいですよ。ほとんどのをはずしてない。」

「ああ、姉ちゃんほんとにすげえ。あんたがいなかったら危なかったよ。」商人の一人が言った。

「そんなことないです。それより、イエリシエンの傷が気になります。早く村に行きましょう。」

「その通りだ。もしかしたら、ゴブリン達がまた徒党を組んでやってくるかもしれない。早く馬に乗ってくれ。村はすぐそこだ。」パナズが進言すると、一行は急いで馬に乗った。僕は先ほど剣を拾ってくれた男と一緒に馬に乗った。

「これより町に戻る。周囲への警戒を怠るな。」パナズの言葉を合

図に僕らは村に向かって馬を走らせた。

「癒し手はどこだ？ けが人がいるんだ。」パナズは村に着くと、歸りを待つていた自警団の一人に聞いた。

「今は診療所にいます。・・・彼らがあの男が言った仲間ですか？」

「そうだ。イサ、彼らを診療所に案内してやれ。」イサと呼ばれた自警団の一人が馬から降り、僕らも降りるように促した。

「こつちだ、ついてきてくれ。」僕らはイサの後を追って小さな家に入った。

中は部屋を仕切る壁がなく、いくつかのベッドが置かれた一つつながりの部屋だった。ベッドの一つには商人の仲間が一人横たわっており、傍らに女性がいた。

「商人の人たちですね。彼なら大丈夫、今は寝ています。あなたたちもけがを？」女性は立ち上がると、こちらに歩み寄った。

質素な藍染の法衣に身を包み、つやのある黒い髪を腰まで伸ばしている。色白で、柔和な顔を薄い眉が際立たせていた。

「怪我はみなしてるが、彼が一番ひどいから、先に治してやってくれ。」バルドは僕を前に引き出した。癒し手は僕の左腕に刺さっているものを見つけると、左腕を取り上げた。

「腕を貫通しているわ。少し痛いけど我慢してね。」僕はこくりとうなずいた。正直、ここに来るまでに腕の痛みはいやまして、焼きやき鉚こてを突き刺されている気分だった。

癒し手は短剣のつかに手をかけると、一気に引き抜いた。その痛みは刺された時の何倍も大きく、悲鳴を抑えることはできなかった。短剣を引き抜くと、醜くえぐられた傷があらわになり、腕から血がぼたぼたと床に垂れた。思わず自分の傷を見て吐き気を催した。

「大丈夫です、すぐに塞ぎますから。」癒し手は傷口に手をかざすと、祈りの言葉を唱えた。

「主たる神アルビオンに仕えしパナケアよ、癒しをこの者にもたら

したまえ」唱えた終えたたん、癒し手の手から淡い光が出、左腕を包み込んだ。光はまるで生きているかのように傷口の中にまで入り込んだ。僕はほのかな温かさを感じ、引き裂かれた血管や筋肉の筋がつながっていくのを感じた。

癒し手が手を離すと光も消えた。傷は完全にふさがり、傷跡もなかった。

「すごい。あの傷が一瞬で……」

「薬の神であるパナケアの癒しの力を借りたのです。右腕もひどいようですな。」彼女は先ほどと同じように僕の腕をとると、祈りの言葉を唱えた。また光が腕を包み込んだが、今度は先ほどより早く終わった。

「ありがとうございます。」

「感謝は私ではなくパナケアに、そして主神アルビオン様に。」癒し手はやんわりと諭した。だが僕は彼女にお礼を言いたかった。

「いえ、あなたに。力を貸してくれたのは神でも、それを行使したのはあなたですから。」癒し手はため息をつく、あきらめたらしく他の人たちの治癒に回った。

最後の治療が終わる頃にパナズが入って来た。

「お前たち、治療は受けたみたいだな。知っての通り、この村に宿はないんだが、もしよければここを使ってくれ。安静にしないといけない奴もいるみたいだからな。」

「それは助かる。地べたはいやだからな。」バルドさんが言った。

パナズは笑って答えると、思い出したように付け加えた。

「それと、ここには病人がいるんだ。戦に行つて帰ってきた兵士なんだが、頭がいかれちまつたらしい。変なこと言つかもしれないけど、気にしないでくれ。」

「変なこと？」

「ああ。あくまがどうのこうのとか。頭のいかれた野郎の言つことだから、本気にするなよ？」

「おれはいかれてなんかない！！」突然大声が聞こえ、階段から男が降りてきた。

男は髪がぼさぼさで、目は魚ろついで、ほぼがこけていた。まるで何日も食べてないようだった。

「起きてたのかラビ。」パナズはからかうような調子で言った。

「ああ、全部聞こえてた。おれの頭がイカレてるだど？おれはこの村から唯一戦に参加したんだ、国のために！」

「出世のためだろ。武勲をたてて城を持つんだって自分でいつてたろうが。結局、手に入れたのは一握りの金と、その癒し手さんだろ。」

「黙れ！お前はあいつを知らないからそんなこと言えるんだ。お前は目の前で仲間がまるで人形のように切り殺されたことがあるか！？自分の命を吸われる経験は！？あいつが、あいつが殺した、皆、皆。おれも殺される。いやだ、いやだ、いやだいやだいやだ……」

「男は神経質に頭をかき始め、それが顔にまで及び、顔をひっかいて血が流れ出した。

「血が……！！」僕はとつさに手をつかんで自傷行為を止めさせた。男はヒスメリックに叫んでもがいたが、僕は手を離すまいと必死になった。

「離せ、離せ！」男は腕を振り払った。そして初めて僕を正面から見据えた。

男の顔に死への恐怖を垣間見た。男は自傷行為をやめた。その代りに、急にここが寒くなつたかのようにがちがちと歯の根が合わなくなり始め、ぶるぶると震えて僕を指差した。その口は何かを言ううとしているようだが、かすれた声しか出てこない。

「あ、ああ、あ……あああああああああああああああああああああ
あああ！！」男は叫び声をあげた。

「悪魔だ！！なななんでここに！？そ、そそうだ、お、おれをこ、殺しに、に、き、来たん、だ、な！？」その顔は狂気に支配されていた。

「し、死にたくない、死ぬのはいやだ！！」男はいきなり走り出して二階にかけのぼった。

「おい、ラビ！？」パナズもさすがに心配そうに呼ばわった。

ラビはすぐに下りて来た。その手に抜き身の剣をもって。

「殺してやる、殺してやるぞ！俺がこの前みたいに縮こまっていると思うなよ！」ラビの構えは震えていたが、僕を本当に殺すつもりじゃなかった。だが僕はそのことより、彼の言葉のほうに気になった。「この前？僕を知っているんですか！？」

「知っているかだと！？一瞬たりともお前の顔を忘れるものか！殺してやる、殺してやる」ラビは剣を構えなおしたが、相変わらず震えは止まらなかった。僕は一歩前に出た。ラビはひきつった声をあげて壁まで下がった。僕はゆっくり近づきながら尋ねた。

「僕は記憶を取り戻す旅をしているんです。ほんの少しでもいい、僕のことを、以前の僕のことを教えてほしい！！」

「よるなあああああ！！」ラビは狂ったように剣を振り回した。いや、本当にくるっっていたのかもしれない。

「よせ！」パナズが飛びかかってラビを取り押さえると、商人たちも手を貸した。

「癒し手さん、に蒸らせてやってくれ、早く！」パナズはずっとぼうつとしていた癒し手に行った。

「は、はい！」癒し手は我に返り、大急ぎでけがを直したのとは違う言葉をつぶやいた。唱え終わると、手から大きな泡が出てきた。それはそのままふわふわと浮かんで、ラビに触れるとはじけた。途端、ラビはがっくりとうなだれて、眠り始めた。抑えていた一人も眠ってしまい、危うくラビを床にたたきつけるところだった。

パナズはラビを二階に連れて行った。僕はその間ずっと突っ立ってたままだった。パナズがため息をつきながら階段を下りて来た。

「はあ。見ただろ、あんな感じなんだ。済まないなあんだ。あの調子じゃ、あんたの顔を見たらまた襲いかかるだろう。悪いが、今日はずちに泊まってくれ。寢床だけはあるから。」僕は物思いに沈ん

でいて、答えなかった。クリスに肩をたたかれ、初めて気がついた。
「あんた、大丈夫か？ 顔色悪いぞ？」 パナズが心配そうに声をかけた。

「だ、大丈夫です。ただ、ちょっと驚いちゃって……」
「無理もないさ。あれじゃあな。ま、気にしないでくれ。さ、うちに案内するよ。」 パナズは僕についてくるように促した。僕は後を追って診療所を出た。

外はもう夕暮れだった。きれいな夕焼け空で、太陽がオレンジ色の光を世界全体に照らしているかのようにだった。でも僕にはその景色に感動することができなかった。ラビの言葉が頭から離れなかった。

「悪魔だ!!」

第四話：傷痕（後書き）

あけましておめでとうございます&お久しぶりです、ジョンです。
ずいぶんと最後の更新から日がたってしまい、申し訳ないことこの
上ない。これからまた、更新速度を上げるように頑張りたいと思っ
ます。次の更新は土曜日か日曜日にはしておくつもりです。ではま
た。

第五話：電む月

暗い夜だった。あれだけ晴れていたというのに、いつの間にか雲が現れていて、地上を弱々しく照らす月の光さえ遮ってしまっていた。僕は地面に腰をおろし、そんな空を見ていた。

「そんなところにいると風邪ひきますよ。」顔を上げると、癒し手が寒そうに手をもみながら立っていた。

「あなたは、えっと……。」

「マリアです。」癒し手は微笑んでいった。

「マリアさん。僕はイエリシェンです。あの、何か用でしょうか？」

「たまたま通りかかったら、何か考え込んでいるようでしたので。」マリアさんは言った。

「星を見てただけです。」

「曇っているのに？」

「あ……。」マリアさんはくすくすと笑った。僕は頭をかいた。

「先ほどのことを気にしているのですか？」質問というより、確認するような口調だった。僕は答えないでいたが、マリアさんは構わず続けた。

「あまり気になさらないほうが。ラビさんはあの通り、少し心を病んでらっしゃいますから。」

「確かに、彼は少しおかしいかもしれませんが。でも、あの人は僕を知っているようだし、彼の言った事にも心当たりはあるんです。」

「心当たり？」マリアさんは聞き返した。僕はうなずいた。

「彼は僕を悪魔と呼んだ。そして僕は、人に忌み嫌われる魔術を使って、人を殺したことがある。無抵抗の相手まで。」

「あなたが人殺しを？でも、そんな風にはとても見えません。」

「でも、事実です。僕は人を殺した。しかも笑いながら。クリスマスから聞いたんです。僕はその時笑っていたと。僕にはその時の記憶が

ありません。それどころか、クリスに助けられる前の記憶すらない。僕は怖いんです、自分が。今度意識が途切れた時、自分が何をしてしまうのか。不安で押しつぶされそうなくらいに。」「僕は空を見上げた。月は相変わらずどんよりとした雲に覆われていて、今は月の輪郭すら定かではなかった。

「すいません。こんなこと言われても、困りますよね。忘れてください。」「僕は居心地悪くなって、立ち上がろうとした。

「私も、不安なんです。」「マリアさんはぼそりと言った。

「私、自分から志願したんです。心に傷を負った人の治療。私たちが癒し手には、体の傷を癒やすことはできても、心の傷は専門ではありません。それでも、教会の教えは人の心をいやすことができる信じて、ラビさんの治療に志願しました。でも……。」「そこまでいって、マリアさんは口をつぐんだ。僕は座りなおしながらそれを引き継いだ。

「なかなかうまくはいかない……。」「マリアさんは悲しげに頷いた。

「正直、信仰を疑うこともあります。人に癒しなどもたрасることなど無理なんじゃないかと。でも、私には信じることできません。ただ神を、教えを、癒しを。人も皆同じではないのでしょうか。ただ、自分を信じるよりほかに。」「そうやってマリアさんは空を見上げた。雲に隠されている月を見るように、遠くを見つめて。

突然、叫び声が響いた。

第五話：霞む月（後書き）

どうも、ジョンです。とりあえず、謝罪をば。

土日にUPできなくてすいません。とりあえず、早くあげなきゃということで、ずいぶん短いものになってしまいました。不言実行はできなくとも、せめて有言実行はできるように、今後も頑張ろうと思います。とりあえずは、次の土日までに一話。

第六話：呼吸する影

「ゴブリンだー！」警護団の誰かが叫んだ。その叫び声に剣戟と怒号、悲鳴が混ざりあった。僕ははっとして立ち上がり、叫び声の上がつたほうへ駆け出した。

「どこに行くんですか！？」「マリアさんが呼び止めようとする。」

「加勢しに行きます！僕でも役に立つことがあるはずですから！」
僕は走りながら答えた。

向かう途中に一体のゴブリンに出くわした。

「くそ、じゃまだ……！！？」腰に手をやって、初めて剣を置いてきたことに気づく。ゴブリンは僕が丸腰なのが分かった、まっすぐに切りかかってきた。僕は下がりながら攻撃をかわし、何とか反撃するすきを探そうとした。だが、相手は長剣な上、鎧までつけていて、素手では攻撃できなかった。僕はじりじりと後退しながら、先ほどマリアさんと別れた所へ戻っていった。

「イエリシェンさん！」マリアさんは、あろうことかまだそこにいた。

「マリアさん、どうしてにげな……。」

「これを！」マリアさんの手には、僕の剣が握られていた。よく見れば、マリアさんは息を切らしていて、服も乱れている。

「武器ももたずに駆け出して行っただから、きつと必要になると思っ
て……。」

「投げてください！」僕は背を向けてマリアさんのところへ走った。ゴブリンは僕を追いかける。マリアさんは剣を僕の方へと放った。僕は落ちる寸前にそれをつかみ、止まって振り返りながら剣を抜き、難い。ゴブリンは急停止ができなくてそのまま体を真つ二つに切られてしまった。

「ありがとうございます、マリアさん。おかげで助かりました。」
僕は礼を言いながら振り返ると、マリアさんはへなへなと座り込ん

でしまっていた。

「・・・マリアさん・・・？」僕は近づいて顔を覗き込んだ。「大丈夫ですか、マリアさん？」僕がもう一度声をかけて肩に手をかけると、マリアさんはつとして我に帰った。

「す、すみません。気が動転して・・・」僕が握ったその手は震えており、汗がびっしょりだった。

「ここは危ないですから、とりあえず安全な所に避難しましょう。」僕はマリアさんを何とか立たせると、とりあえず診療所に戻らせようと思った。

と、弓の引く音が聞こえた。僕の正面、ちょうどマリアさんから死角になるところから弓を構えているゴブリンがいた。

「あぶない！」咄嗟にマリアさん突き飛ばしたのと、ゴブリンが矢を放ったのは同時だった。矢は僕の胸に向かってまっすぐ向かってくる。かわせない・・・！！

ゴブリンは信じられないものを見た。矢は男に向かってまっすぐ飛んで行った。本当なら、男は今頃胸を押さえて倒れているはずだった。今まで殺した奴と同じように。

しかし、男は飛んで来た矢をあるうことか素手でつかんだ。男は矢を放り投げると、こちらに歩み寄って来た。ゴブリンはあわてて次の矢を番えようとした。その間も男はどんどん近付いてくる。ゴブリンがもたついて、やっと弓を構えた時には、男は五メートルほどの距離まで近づいていた。その右手には黒い影が握られていた。

ゴブリンは奇声を発して矢を放った。男はそれを軽々とかわして一気に間合いを詰めると同時に、深々と黒い影を腹に突き立てた。

ゴブリンは体から力が、自分を動かしている何かを吸い取られていくのを感じたが、それは一瞬のことだった。

イエリシエンはゴブリンから剣を引き抜くと、こちらに歩いてきた。イエリシエンはマリアのところまで歩いてきて、そのまま通り

過ぎた。

マリアは声をかけることができないまま、歩き去っていくイエリシェンの後ろ姿を見つめていた。

村の山側では、戦闘が激化していた。警護団は善戦していたが、いかんせん数が違いすぎるのを、パナズは戦いながら感じ取っていた。

「皆、弱気になるな！村を守るんだ！」目の前の敵を倒しながら、パナズは仲間を励ました。幾人かがそれに答えたが、だれもがこのままでは全滅も時間の問題だとわかっていて、一体を倒しても、新たに二体になってあらわれてくるのだ。

パナズはいつの間にか数体のゴブリンに囲まれていた。ゴブリン達はじりじりと包囲を狭めてくる。

と、一体のゴブリンが倒れた。続いて二体、三体。彼らの頭部には矢が刺さっていた。ゴブリン達は慌てふためいてパナズの包囲を解いてしまった。パナズは好機と見て、一体に襲いかかった。ゴブリンは矢を放った相手に注意を向けていて、パナズが近寄って来たのに気づいた時には、槍が深々と体に突き刺さっていた。パナズが他の敵に向かおうとすると、そいつらはもう倒されていた。

「大丈夫ですか、パナズさん。」最後の敵を射ぬくと、クリスが駆け寄って来た。

「君がやったのか！？すごい腕だ。」

「弓は得意ですから。それより、イエリシェンはどこですか？あなたの家にもいないんです。」

「家にいない？いや、知らないが。彼にも手伝ってもらいたい。とにかく今は一人でも戦える者が必要だ。」

その時、悲鳴が上がり、ゴブリン達が浮足立ち始めた。

「何だ？味方か？」

「イエリシェン！」クリスが叫んだ先には、ゴブリンを一太刀で屠るイエリシェンがいた。ひどく愉しそうに笑いながら。その手には

ヤコブ爺のくれた剣ではなく、あの黒い剣が握られていた。

ゴブリン達は新たに現れた敵にただならぬものを感じたのか、手が空いている者は皆イエリシェンに突っ込んでいった。イエリシェンは相手の攻撃を完全に見切った動きでかわしながら、次々と首を刎ねていく。

「なんだあの剣。それに、まるで別人のようじゃないか。」パナズは驚いて言った。クリスは苦い思いで頷いた。

「今のイエリシェンは、普段とは全く違います。強さも、心も、人が変わったみたいに。」

「そうみたいだな。だが、今は助かる。見ろ、あの強さを！ゴブリンのやつら、逃げ出し始めたぞ。」ゴブリン達は、味方が次々と簡単に屠られていくのを見て、森に逃げて行った。

「ゴブリン達が逃げて行くぞ！俺たち、助かったんだ！」警護団の誰かがそう叫ぶと、皆喜びの声を上げた。

パナズとクリスはイエリシェンに近づいていった。

「ありがとう！君のおかげだ。イエリシェン、だったな？助かったよ、礼を言う。」パナズはイエリシェンの肩を叩こうとした。だが、それは払いのけられた。

「まだ早い。やつらは戻ってくるぞ。」

「そんなはずはないさ。やつらの数も減った。君がずいぶん殺してくれたみたいだからな。今夜はもう来ないだろ……」

「あ、悪魔！悪魔！」突然叫んだのはラビだった。

「ラビ！？」パナズはラビが剣と鎧を着こんでいるのを見てびくりました。

「おまえ、俺を殺しに来たんだろ？生き残った俺を殺しに。」ラビは剣を構えながら近づいてきた。

「おいラビ、少し落ち着け。こいつはおまえをころしに来たわけじゃない。それどころか、おかげでこの村は助かったんだぞ。」

「嘘だ！俺は信じないぞ！こいつは悪魔だ。おれは見てたぞ、こいつがあの時と同じように笑いながら殺すのを！」

「あるとき……」イエリシエンが聞き返した。

「そうだ！俺は戦場で、お前に殺されかけた！その剣が脇腹を掠めた時のことを、おれははっきり覚えている！」ラビは声を震わせて叫んだ。歯の根が合わなくて、がちがちと何度も歯を鳴らしている。「戦場で？」イエリシエンはずいといとラビに歩み寄った。ラビは剣を構えたが、その手は夕方の時よりも震えており、いまにも剣を落としそうだった。

「よ、よるな……」ラビは恐怖に目を見開きながら後ずさった。それでもイエリシエンは止まらず近寄ってくる。ラビはさらに一步後退しようとしたが、下がるときに足をもつれて転んだ。イエリシエンはかがみこんでラビの顔をじっと見つめた。ラビは失禁し始めた。

「貴様のようなカスなど覚えておらん。だが、俺から生き延びたというのなら、貴様の幸運はすべて使い果たしてしまっただろうな。」そういつて立ち上がると、ラビに背を向け、森のほうへと歩き始めた。

「覚えてない……？おれを覚えてないだ！？殺してやる、殺してやる！」ラビははね起きると、雄たけびを上げながらイエリシエンに切りかかろうとした。

その時、森から巨大な黒い影がとび出し、イエリシエンに飛びかかった。イエリシエンは突然の奇襲に反応して横に飛び退いたが、イエリシエンしか見ていなかったラビには黒い影に気づくことができずにかみつかれた。

「ぎゃあああああああ！」ラビが断末魔の悲鳴を上げながらもがいた。黒い影の正体は巨大な……。

「獅子……？」クリスが半信半疑に言った。確かに、見た目は獅子に最も近かったが、獅子というには大きく、後ろ足が鷲の足で、尻尾は蛇が鎌首をもたげていた。黒い影に見えたのは、巨大なカラスのような翼だった。

「違う、マンティコアだ。」イエリシエンが訂正した。

「や、やめろおお！ 離せええええええ！」マンティコアは叫び続けているラビを噛み砕いた。ラビは叫ぶのをやめ、体をだらりと弛緩させた。地面にはぼたぼたと血が落ちて、血だまりができていた。マンティコアは首を振ってラビの死体を放り出すと、イエリシエンに向かつて前足を繰り出した。イエリシエンはそれを地面に伏せてかわし、懷に飛び込むと剣を深々と突き刺した。

マンティコアは悶えたが、尻尾の蛇でイエリシエンにかみついた。イエリシエンは右腕にかみついた蛇をつかむと、剣を引き抜いてその体を切った。

「くそ、俺としたことが……。」イエリシエンは悪態をつきながらかみついたままの蛇の頭をはずすと、噛まれた箇所^{箇所}に刃を走らせた。腕から血がほとばしり、黒い血が地面に滴った。

マンティコアはイエリシエンに再度対峙すると、今度は噛み殺そうと飛びかかって来た。それを何とかかわすと、イエリシエンは何かを唱え始めた。

唱えながらもマンティコアの攻撃をかわすイエリシエン。だが、先ほどよりもその動きは鈍かった。

「なあ、なんかさつきより影が濃くなったきがしないか？」パナズがイエリシエンの戦いにじっと見入っているクリスに話しかけた。

「影？」クリスは目をそらさずに聞き返した。

「ああ。なんていうか、生き物がたくさんいるような圧迫感が……。」「言われてみればそうだった。先ほどより、何かが息をしているような……。」

クリスが目を周りの影に映した瞬間、イエリシエンが吹っ飛んだ。「イエリシエン！」クリスは叫んだ。マンティコアはよろよろと立ちあがるイエリシエンに近寄っていく。クリスは駆け寄ろうとして踏みとどまった。イエリシエンは笑いながら口の地をぬぐっていた。そして体をすくと起こすと、呪文を唱えた。

「影犬」^{シャドウハウンド}突然、周囲の影が一斉に騒がしくなった。人々は悲鳴を上げながら、正体不明の恐怖に身をすくませた。マンティコアも異変

を感じ取ったのか、イエリシェンを攻撃するのをやめ、毛を逆立てて辺りを警戒している。

最初に聞こえたのは呼吸音だった。それからひたひたと歩く音。そして最後に、黒い犬のような姿をした獣が陰から音もなく姿を現した。ようなとは、そいつが輪郭さえあやふやだったからだ。

犬たちはさまざまな陰から湧き出していた。建物の影、森の影、人の影（自分の陰から出てきた犬たちを見た人はぎょっとして飛び上がった）。それらはゆっくりとマンティコアを包囲した。マンティコアはあたりをきよきよとしたが、隙間さえなかった。

「食事の時間だ」イエリシェンがにやりと笑って指を鳴らすと、犬たちはいっせいにマンティコアに飛びかかった。マンティコアは前足を振り回し、後ろ足で地面を踏みならし、切られた尻尾でからみつき、口で噛み砕こうとした。だが、犬たちはまるで実体など持たぬかのように

すり抜け、マンティコアを自分たちの体で覆い隠し始めた。

やがてマンティコアの体がすべて覆い隠されると、マンティコアは動かなくなった。代わりに、肉を貪る湿った音が響き始めた。辺りにはくちやくちやという音だけが支配していた。

しばらくすると謎の咀嚼音が止み、マンティコアを覆っていた影がひき始めた。マンティコアのいたところには何もなく、ただ地面が血に染まっているだけだった。影は現れた時と同じように元の場所へと還っていた。

最後の影が元の暗闇に戻ると、影は本来のように騒ぐのをやめた。人々は小さな声で囁き始め、それはやがて大きなうねりとなった。

イエリシェンはいつの間にか剣を持っていなかった。

「イエリシェン……？」「クリスが近寄って声をかけた。

「クリス……」。僕はまたやってしまったんだね……」。

「いつものイエリシェンが、悲しい顔をして振り返った。

「ああ、イエリシェン！血が……」。

「私が治します。」「いつの間にそこにいたのか、マリアがやってき

ていた。マリアはイエリシエンの傷を見ると、呪文を唱え、傷をふさいだ。

「とりあえずは大丈夫です。でも、失血がひどいので、少し横になったほうがいいです。」マリアはそつとイエリシエンに肩を貸した。クリスは少しムツとなった。

「そうさせてもらいます。今は人から離れたい……。」イエリシエンはぼそりとつぶやいた。そうしてマリアの手を借りながら、イエリシエンはパナズの家に向かった。クリスはそんなイエリシエンの背中を見送った。その姿に、先ほどの体がこわばるような殺気はかけらもなかった。

「それで、彼は何者なのか、はなしてもらえないか。」パナズはクリスの肩に手をかけた。クリスはため息をついてパナズに向きなおった。

「私にもよくわからない。あれがイエリシエンなのかもわからない。」

「わからないだど!? それなのに、君は彼と一緒に旅をしているというのか!? 危険すぎるぞ! 俺はわかる。あれは殺しを楽しんでいる目だった。」パナズは責めるような口調で叫んだ。

「イエリシエンはそんな人じゃない! あの人はやさしい人よ! さっきのイエリシエンは、普段とは違うの。本当に別人みたいで、その時の記憶もなくなってしまふのよ。」クリスはかっとなって叫んだ。「それを本当に信じているのか?」

「どういうこと……?」

「彼が嘘を付いている可能性だってある。あれが本性なのかもしれない。普段は君をだますために猫を被っているんじゃないか?」パナズは疑いを隠そうともせず言った。

「そんなことないわ。彼は名前さえわすれているんだもの。」

「それをどう証明する? ばれたら困るから隠しているだけじゃないのか? さっきの魔法を見る限り、あれがただの記憶喪失には見えなかった。君は一度も疑わなかったのか?」

「そんなこと……」クリスは初めて言い返せなくなった。イエリシェンが本当に記憶をうしなっているのかどうかは、本人しか分からない。クリスには確かめるすべがない。

「とにかく、君が何も知らないのはわかった。今日はもう休んでくれ。君も疲れだろう。」パナズは少し口調を和らげて言った。クリスは言い返したかったが、今は何も言う言葉が見つからず、仕方なく診療所に戻ろうとした。

「そうだ。助けてくれてありがとうよ。」パナズは診療所に向かうクリスの背中に向かって言った。クリスはそれには答えなかった。

パナズは視線をクリスから離し、被害の状況と死体の処理の仕事に向かった。

第六話：呼吸する影（後書き）

どうも、ジョンです。何とか土日前にUPすることができてよかったです。次の更新は少し間が空きます。いろいろと忙しくなるので^^;ではでは、次の更新で。

第七話：疑念

じめじめとして暗く、今にも霧が出てきそうなくらいなムツとした空気にみたされている森の中を、僕は町へと続く道を延々と歩き続けていた。道はでこぼこでしょつちゅう足を取られるうえ、うねうねと曲がりくねり上ったり下ったりを繰り返しており、体力をじわじわと奪っていく。

「じめじめしていますね……」。「マリアさんが独り言のように呟いた。僕はただうなづくだけで、クリスは何も言わなかった。会話が続き、また沈黙が続く。村を出てからずっと会話が途絶えている。クリスは何か考え事があるのか、朝からずっと黙っている。マリアさんは何とか雰囲気を変えようと話を切り出すのだが、会話は続かない。

僕は顔をあげて、果ての見えない道を暗澹とした気持で見やった。

朝目が覚めると、昨夜の記憶がなかった。自分が昨夜何をしたのかを必死に思い出そうとしたが、マリアさんをかばったあとから全く記憶がなかった。自分のふがいなさに情けない思いをしながら、ベッドから起き上がり、階段を下った。下に降りていくうち、食欲をそそるいいにおいがしてきた。

「あ、おはようございます。」マリアさんはちょうど、テーブルに朝食を並べているところだった。テーブルにはいいにおいのもとであるうシチューが置いてあった。

「おいしそうですね。マリアさんが作ったんですか？」僕はテーブルにつきながら言った。

「はい。ラビさんは食事を作れなかったのわたしが……」。「マリアさんははっとして口をつぐんだ。僕はあわてて話題をそろそとして、スープに手をつけた。

「……おいしい！すごくいい香りがしますね。」スープは味もさ

ることながら、たくさんの香りを秘めていた。

「薬草を入れてあるんです。食欲増強と、あとは滋養、とくに解毒を中心とした薬草を入れてみました。」マリアさんは言った。

「解毒？」僕は首をかしげた。マリアさんは昨夜のことを話してくれた。襲撃、魔物、そして僕。

「幸い、すぐに血抜きをして毒がまわるのを防いでいましたし、私が解毒の魔法を施しておきました。けど、マンティコアの毒は命は奪わないにしても、とても強い毒です。まだ体内に残っている可能性があるので、それを少しでも緩和しようと思って。」マリアさんはため息をついた。

「本当は、失血をしているのでお肉を食べたほうがいいんですが……。」

「いえ、全然大丈夫ですよ。このスープだけで充分元気になれそうです。」と僕は請け合い、スープを飲んだ。マリアさんは良かったうなづくと、自分も席について食事をとった。

食事が終わり、席を立つと、僕は二階へ荷物を取りに向かった。

階段を上ろうとすると、マリアさんに呼び止められた。

「イエリシェンさんは、もう行かれるのですか？」僕は振り返った。

「そうですね。この村に長居するつもりはなかったですし、それに……。」

「……。」昨夜のことを振り返る。

痛む右腕と覗き込むクリス、そして村人の得体のしれない者に対する恐怖の目。

「いろいろ迷惑がかかりそうなので。」何か言いかけようとしたマリアさんを見無視して、階段を上った。

村の出口には、もうクリスが待っていた。

「おはようイエリシェン。」

「おはようクリス。待った？」クリスは首を横に振った。

「体のほうは大丈夫なの？」クリスは心配そうに右腕を見やった。

腕には傷跡すらなかった。

「大丈夫。マリアさんに教えてもらえなかったら、けがをしたことさえ知らなかったよ。魔法つてすごいね、僕も覚えられたらいいのに……」。「クリスが悲しい顔をしているのに気づき、僕はあわてて話題を変えた。

「そうだ、バルドさんたちは？もう行ってしまったのかい？」僕はクリスに尋ねた。クリスはバツの悪そうな顔をした。

「どうかしたの、クリス？」

「あの人たちは先に行ったわ。私たちを残してね。あなたをのせられないって。」クリスは語気を荒げて言った。

「何よ！イエリシェンが村の人に何かしたわけでもないのに。うちの村とおんなじ、イエリシェンのことをわかってない……」。

「

「仕方ないよクリス。僕自身ですらわからないことなんだ。彼らの対応は至極正しいと思うよ。」

「でも……！」クリスは反論しようとしたが、僕はそれを遮った。

「いいんだ。君が信じてくれているから、僕には平気だよ。」僕は荷物を持ち上げ、肩に背負った。

「さあ、そろそろ行こうか。ボルノーは遠い。早くしないと日が暮れてしまうよ。」僕は気乗りしないままのクリスをせかした。

「待て、旅人。」声をかけたのはパナズさんだった。

「世話になった。これは礼だ。」そういうと、手に持っていた袋を投げてよこした。袋は予想外に重く、取り損ねるところだった。中身を見ると、燻製の肉やソーセージ、その他保存食と数枚の銅貨が入った袋が入っていた。

「これはなんですか？」僕は尋ねた。

「言つたろう、礼だと。お前が何者かは知らんが、昨夜はお前のおかげで助かったのは事実だ。助けられたのだから、礼をするのは当然だろう？」

「でも、こんなにたくさん……。」

「何、それには依頼の報酬も入ってるからさ。」

「依頼？」

「ああ。町に着いたら、ゴブリンの被害にあっていることを伝えてほしい。もしかしたら、伝令はたどり着かなかったのかもしれないからな。先に言ったやつらに頼もうとしたんだが、奴らとつと行つちまいやがった。そういうことだ、頼んだぞ。」パナズさんはそういうと、もう用はないとばかりに背を向けて去っていった。

「なんなの、あいつ。」クリスはパナズさんが去っていく姿を見て言った。

「さあ。でも、僕を信じてくれたみたいだね。」

「そうかしら。うまいように使われたように思えるけど……。まあいいわ、行きましょう。」

「ま、待つてくださーい！」間延びした声に呼び止められ、そちらを見るとマリアさんがパタパタとこちらにかけてきた。マリアさんは僕らのところまで来ると、息を切らしながら立ち止まった。

「マリアさん！？どうしたんです？」

「わ、わたしも、いきま、す。」マリアさんは息を切らしながら言った。

「どうしてです？」

「私は、ラビさんの治療のために、ここに派遣されました。ですが、ラビさんはなくなってしまったので、その報告のために教会に戻らなければなりません。本当は今朝伝えるべきだったのですが、言いそびれてしまつて。」

「ああ……。」確かに。その機会を奪ったのは僕だった。
「……邪魔でしょうか？」おずおずと僕とクリスを交互に見るマリアさん。

「いえ、そんなことは。僕は歓迎です、マリアさんが一緒なら心強い。ねえ、クリス。」

「いいけど。それより、そんなに持っていくの？」クリスはマリア

さんのリュックをゆびさした。どれだけ詰め込んだのだろうか、マリアさんのリュックはパンパンになっているのが一見してわかるほどで、明らかに重そうだ。

「ええ。来た時もこれくらいでしたよ。」平然と返すマリアさん。

「何できたんですか？」と僕。

「馬車に乗せてもらって。」マリアさんはニコツと笑った。僕とクリスは顔を見合わせ、はあ、とため息をついた。

「どうしたの、イエリシェン？」

立ち止まる僕を見て、クリスは声をかけた。僕は答えず、自分の見たものを指差した。クリスが息をのんだのが見なくてもわかった。道の半ばに馬車が壊されていた。車輪はたたき折られ、足をもがれた馬の死体が転がっている。十数匹のゴブリンたちが、商人たちの死体を突き刺したり、切り刻んでは、笑い声と思われる、耳障りなキィキィ声で叫んでいた。

「なんてことを、ひどい……。」マリアさんは言った。クリスはまりさんの動揺を見て逆に落ち着いたのか、冷静に状況を分析した。

「数が多すぎる、私たちだけじゃ危険すぎるわ。幸いまだこちらには気づいていないみたいだし、ここは森に入ってやり過ごしましよ。」クリスは僕にそう提案した。だが、僕はその提案には従わなかった。

僕は剣を抜くと、大声で叫んだ。そしてゴブリンたちに向かって突進した。

「ちょっと、イエリシェン!？」クリスは僕を呼びとめたが、僕はそれを無視した。目の前の敵にしか頭になかった。

ゴブリン達には当然のごとく気付かれた。奇襲と呼ぶにはあまりにも遠い距離だった。しかし僕はお構いなしに突っ込んでいく。矢がほほをかすめた。一つは肩に当たった。それでも止まることなく最短距離を突っ切り、一番近くのゴブリンにきりかかった。ゴ

ブリンはその一撃を危なげなく受け止めたが、強引に鎧迫り合いに持ち込み、剣ごとゴブリンをたたき切った。ほかのゴブリン達が仲間の敵を討とうと襲ってきたが、何匹かはクリスの正確な射撃で射ぬかれた。それでも、四匹のゴブリンが一斉に襲いかかってきた。とつさに地面に転がり、その体勢のまま剣を振り回し、脛^{すね}を斬り、ひざを砕いた。

一匹がこの好機を逃すまいと飛びかかってきた。突きを繰り出してゴブリンの腹を貫く。ゴブリンはそのまま僕の体にのしかかる格好になった。何とかゴブリンを体から引き離したが、今度は剣が抜けない。さらに三体のゴブリンが襲ってきた。

僕は死んだゴブリンの手から剣をもぎ取ると、一匹に投げつけた。二匹目にはこぶし大の石を投げつけた。三匹目には雄叫びをあげながら殴りかかった。相手が武器を振り回すのもかまわず、とにかく殴った。

我に帰った時、僕は馬乗りになってゴブリンの頭を石で砕いていた。ほかのゴブリンはもういなかった。

誰かが駆け寄ってくる。

「イエリシェン！」

クリスは僕のそばまで来ると、突然立ち止まった。

「ああイエリシェン、どうしてこんな無茶を。あなた血まみれよ。」その言葉を聞いて、初めて周りが見えてきた。転がるゴブリンの死体。そのほとんどには矢が刺さっている。周りには血の海ができており、ひざを砕かれたゴブリンがまだもがいている。その中心にいる僕は、返り血なのか自分の血なのか分からないくらいまっかにそまっていた。

急に自分を強行に駆り立てた熱が冷めていった。同時に、全身にと痛みが広がってきた。

「マリアさん、早く手当てを。」クリスは遅れてやってくるマリアさんをせかした。

マリアさんは傷の状態を調べてから、いつもの呪文を唱えた。痛み

は来た時と同じように、急速に去って行った。

「これで大丈夫です。傷はたくさんありましたが、どれも軽傷です。」「マリアさんは僕に、というよりクリスに言った。クリスはほんと胸をなでおろすと、いきなり僕のほほを殴った。

「！？」「クリスのこぶしは頭の芯まで響いた。マリアさんは突然のクリスの行動に度肝を抜かれていた。そしてそれは僕も同じだった。」「な、なんでなぐるんだい？」

「もっかい殴られたいの？それとも本当にわからないわけ？なんでいきなり飛び出していったの！わたしの話も聞かずに！今回は良かったけど、一歩間違えたら命を落としてたわ。どうしてそんな無茶をするの！」「クリスはものすごい剣幕で怒鳴った。

「ご、ごめん」僕はただ謝ることしかできなかった。

「ごめんじゃないわよ、どうしてあんなことしたのか聞いて・・・」

「クリスさん。今はとにかく、この場所を離れましょう。先ほど逃げて行ったゴブリンが気がかりです、先を急ぎましょう。」「クリスはまだ溜飲が下がらない様子だったが、マリアさんの忠告を聞き入れ、置いて行った荷物を取りに行った。

「さ、イエリシェンも。」「マリアさんの言葉でぼうっとしている僕は現実へ引き戻った。僕は立ち上がり、剣の血を血でべとべととしてしまっている服で拭いた。血を拭くと、剣は元の輝きを取り戻した。

夕食は旅には珍しくちゃんとしたものだった。マリアさんの荷物の大部分は食材と調理器具だったからだ（本人は薬となる薬草が大部分だと言っではいたが）。最初はマリアさんのお荷物にまゆをひそめていたクリスも、もう荷物の量については何も言わなかった。

「それで、どうしてあんなことをしたの？」「食事の片づけが終わり、そろそろ夜の見張りをしようと思っている時、クリスが唐突に聞いた。僕は何の事を聞かれているのか最初わからなかった。

「だから、なんで急に飛び出したりしたわけ？」「クリスは僕が答え

ないでいるので、さつきより強い調子で言った。

「それは……僕にもよくわからないんだ。」それは本当だった。自分でもあれはおかしいと思う。

「わからない？自分でした事よ、ちゃんとした理由を聞かせて。あなたのおかげで危険な目にあつた、せめて理由ぐらい教えて。」有無を言わせぬ口調。その目は僕をまつすぐと見据え、批難しているようでもあつた。「わからない。ただ、ゴブリン達と殺された彼らを見た時、僕は思ってしまったんだ。かれらといっしょにいかなくてよかったって。そう思つた瞬間、自分がひどく醜く感じた。なんてひどい人間なのかつて、自分が嫌になつた。そうだ、僕は否定したかつたんだ、自分のその感情を。だから飛び出してしまったのかもしれない。」僕は考えがまとまらないまま、たどたどしく言葉をつないだ。

「だからつて飛び出す必要はないでしょ。」

「その通りだ、飛び出す必要なんてなかった。普通に考えれば、そんなことは意味がないとわかるのに。ただ、あの時は考えなんて浮かばなかつたんだ。ただ、怒りだけが僕の中にあつたんだ。僕はそれに抗えなかつた。怒りが僕を乗っ取つた……。」僕はクリスに言っているはずが、だんだん自分に言っているのに気付き、口を閉ざした。クリスはもうせめてはおらず、憐れむような眼で見つめている。

マリアさんが重苦しい沈黙を破つた。

「さ、さあ、今日はもう寝ましよう？夜も更けてきましたし。」僕は最初の見張りを申し出た。クリスは自分がやると言つたが、僕は頑として譲らなかつた。クリスが（不必要な）戦いのせいで疲れているのはわかつていたし、何より眠れるような気がしなかつたからだ。結局クリスは三時間後に起こしてと言って、硬い地面に寝転んだ。マリアさんはカバンから毛布を二枚出してそれを地面に敷き、さらに一枚をとって寝ようとしていたが、しばらく寝づらそうにしていた。だが、十分もすると、静かな寝息が聞こえてきた。

闇に包まれた森をぼんやりと見つめながら、最近の自分の変化について考えた。

戦いをするたび、急速に良くなっていく自分の動き。大した訓練もしていない自分がめきめきと腕を上げていく。今まで疑問に思わなかったのだが、その上達の速度は考えてみると不思議だった。いや、上達というより、体の鉛が取れていく感じた。そして今日の行動の原因となった怒り。あんなことは今までなかったというのに・・・・。

「僕はどうしてもしまったんだろうか・・・・いや、どうなってしまうのか？」闇に向かって問いかける。問いが返ってこないのはわかっている。それに、答えはうすうす気づいていた。

剣術の上達も、怒りの感情も、すべて自分の内から湧き出ている。僕の中に誰かが入っていて、僕らを分けている壁に、穴があいている感じた。

そこから何かが、そのほとんどは嫌な感じのするものが、かすかではあるが流れていく。それがずっと続いている。そしてそれは、僕が意識を失っている時に特に強く感じるのだ。

「もう一人の自分、か・・・・。」僕は目を凝らして辺りを包む闇を見つめたが、何も見とおすことはできなかった。

クリスは眠れなかった。毛布にくるまってはいたが、眠るには頭の中の議論が活発すぎた。

「最近のイエリシエンは様子がおかしい。前よりも感情的な気がする。そもそも、イエリシエンの言葉を真に受けていいのだろうか。もし、彼が私を偽っていたとしたら？本当は記憶がちゃんとあって私をだますためにあのようにふるまっているだけ？もう一つの彼ではなくて、あれが本来の彼だとしたら？」

「いえ、それは違う。違う気がする。イエリシエンはうそをついていない、あれは完全に別人よ。イエリシエンはあんなことはできない。」

「それは私が信じたいからじゃなくて？だまされたと思いたくないから？ここまで信じて付いてきた自分が馬鹿みたいだから、そうおもいこんでいるだけなのかもしれない。」

クリスは寝返りを打って、勝手に進む思考をやめようと努めた。だが、イエリシェンに対する疑念は深まるばかりだった。

「どうしてもイエリシェンを疑ってしまう。彼についていくとき、私だけは彼を信じ続けると心に誓ったのに。」クリスはあたりを包む闇を見つめた。自分の思考も、この闇にうもれてしまえばいいと思いつながら。

第七話：疑念（後書き）

お久しぶりです、じよんです。

まず最初に。前の更新から随分間が空いてしまつてすみませんでした。

実は、引っ越しをしまして。引越し準備のドタバタで更新ができず、引っ越した先もやっとネットがつながつた次第で。

それでも、こんな小説でも読んでくれる人に対して、非常に失礼な事をしたと反省しております。今後は、主に1週間に一回ペースで更新させていただくつもりです。大変申し訳ございませんでした。

第八話：ボルノー

太陽が真上にかかるころ、だんだんと木々が少なくなっていた林道がなくなり、急に前方の視界が開けた。

「あ、見えてきた！」クリスが唐突に揺れる荷車の上で立ち上がった。僕も反射的に立ち上がって、クリスが指し示す先を見た。

「大きい街……」クリスがぼつりと呟いた。僕はクリスのほうを見ずに、ただコクリと頷いた。

目の前に見えてきた街、ボルノーは、今まで見たことがないほど大きい街だった。イギリスも大きな町だったが、その三倍くらい広いすり鉢状の土地に、街を囲む外壁によって四角に抑えられ、家々が整然と建てられている。道はちょうどそのすり鉢に向かって緩やかに下り始めていた。

「大きいって？そりやそうさ、何せこの国じゃ一、二を争う人と広さなんだからな。」農夫のおじさんははつはつと笑った。

「あんたら、ボルノーに来るのは初めてかい？」おじさんは首をめぐらした。僕とクリスはうなづいた。

「私は五度目ですね。よく協会に依頼が来るので。」おじさんの隣に座っているマリアさんは言った。

「そうかい。でも、最近のことだから知らないかもしれないねえ。」おじさんは街に視線を移した。

「あの街にはいろんな宗教やらギルドなんかがたくさんある。ンだもんで、しょっちゅう集会をやつとる。まあ大半は話し合いやらなんやらなんだが、中にはちいっとおかしいもんもまじつとる。」おじさんはそこで言葉を切った。

「おかしいもの？」僕は先を促した。

「ああ、儀式とか称して人を生贄にささげとるらしい。」

「生贄！？それは、殺すということですか？」クリスは驚いて言った。

「詳しいことはわからん。あくまで噂だよ、譲ちゃん。ただ、夜中に変な奴がうろついてるってのは確かだ。あんたらが何しに来たのかは知らんが、日が沈んだらあまりうろつかんほうがええ。」おじさんはまるで子供に言いつけるかのような口ぶりだった。悪い気はしなかった。見ず知らずの人が好意を寄せてくれている、それだけでうれしいことだった。

「はい、おじさん。言いつけは守りますよ」僕は冗談めかして言った。街の門がだんだんと大きくなっていった。

僕の危険な行動から二日後、僕らはイギリスからの道の合流地点についた。バルドさんたちが死んだ今、街に知らせを送るのは僕らしかないため、出来得る限り道を急いだ。だが、幸いにも途中で街道の巡回をしている兵士に出会うことができた。パナズさんがくれた袋に入ってた、街に救援を要請する手紙を見せると、兵士は馬に拍車をかけてボルノーに向かっていった。その次の日、農夫のおじさんが荷物につぶされそうなくらいふらふらと歩いていたマリアさんを見かねて、街まで乗せてもらうことになった。おじさんはイギリスに自分の畑の野菜を売ってきた帰りだと言った。

「知ってるか？イギリスの井戸の中には化けもんがいたこと。」おじさんはどうもこの話がしたくてたまらなかったらしく、僕らに乗せるとすぐにその話を始めた。

「牛を丸呑みできるぐらいでつかい口しててよ、ぎらぎらした歯がバーっと並んでるわけよ。そんで腹回りがちょうど井戸にすっぽり収まるぐらいで、中から骨や溶けかけた死体が出てきたらしいぞ。」

「まあ、そんなもの、いったい何でそんなとこにいたんでしょう？」マリアさんは言った。

「さあな。どうも夜中井戸を通るやつを襲ってたらしいが、振り返ちにあつたってことさ。」

「え！？その怪物、もつたいじされたんですか？」

「俺が見た時は井戸の前にまだ置かれてたけど、誰かがどこに飾るって言ってたな。まあ、今度行ったら聞いてみな。それよりもよ、そいつを倒したのは若い男女の二人組って噂が飛び交っててな。まあ、いくらなんでもふたりじゃむりだって、なあ？」おじさんは会話に参加せずに固まっている僕らに話を振った。

「え、ええ、二人では無理ですよ、はは……。」僕は知っているんじゃないかと内心ドキドキしながら、ぎこちなくえがおをつくった。そのとき、森が急に開けた。

「あ、見えてきた！」

「それじゃあ俺は行くけども、くれぐれも気いつけてな、わけえの。」おじさんは別れ際そういうと、僕のほうを向いた。

「あんたが守ってやりやならんぞ、男は女を守るもんだかな。」おじさんはクリス達に目配せをした。

「はい。」

「しっかりやれよ、坊主。」おじさんは足取りの重い馬の手綱を引き、自分の村に向かって歩き出した。

僕らはしばらくその背中 hands を振っていた。

「さて、どこから取り掛かるうか？」クリスが降っていた手を下げると、辺りを見回していった。僕らはちょうど町の中心の広場に来ていた。

広場の中心には大きな噴水があり、多くの人が噴水の縁に腰をおろし、誰かを待っていたり、詩を吟じている人までいた。小さい子供が噴水に入ろうとして、周りの大人に怒られている。街の道がすべてここからのびているので、たくさんの人が行き交っており、イギリスのあの喧噪とはまた違った、にぎやかな場所となっていた。

「聞く人には困らなそうだね。そうだ、マリアさんは、協会に報告をしないといけないんだっけ？」

「はい、一応連絡をしないといけないんですけど……。」そう、もしかしたら教会にいらしては？食事とベッドくらいなら

「ご用意できますけど。」

「ほんと？助かるわ、資金はそんなにないし、このままだとどれくらいかかるのか分かんないから。」クリスは言った。マリアさんは僕の顔を不安そうにうかがった。僕はうなづいた。

「僕も賛成です。せつかくの申し入れ、ぜひ受けさせてください。」

「そうですか、それは良かった。では私はこれから向かいますけど、お二人も一緒に行きます？」

「いや、後で行きます。少し街を回って、聞き込みをしようと思つて。」

「そうですか。じゃあ、場所を覚えておきますね。協会の支部は、このみちをまっすぐすすんで……」マリアさんは僕らに協会の行き方を教え、僕らと別れた。マリアさんはやがて人の波に交じって見えなくなった。

「よし、じゃあ行きますか。」おろしていた荷物を肩に担ぐと、人通りの多そうな通りに向かった。

「いや、きみと会ったことはないねえ。」噴水に腰掛けた男はそう答えた。太陽はマリアさんと別れた時よりも西に傾いて、というより沈もうとしていた。噴水は夕日に照らされてきらめき、石畳が茶褐色を帯びている。噴水の近くにできた小さな水たまりが、夜に近付きつつあることをその暗さで教えていた。

「そうですか。ほかの人で知り合いがいなくなったという人はいますか？」

「そいつはたくさんいると思うぞ。何せここ最近では女がしょっちゅういなくなってるって話さ。あんたも気いつけな。」男はクリスに言った。クリスはうなづいた。僕らは礼を言くと、協会へ続く道に向かった。

「だいたい歩き回ったけど、結局収穫なし、か。」がつくりと肩を落とす。クリスは肩に手を乗せて、あきらめないで、といった。

「それより、人攫いのことが気になるわ。これだけ人の口の上るく

らいだもの、いったいどれだけの人が……。」クリスはそこで言葉を切った。

「そうだね。でも、どうして彼らは捕まらないんだろう？街ではいっぱい巡回の兵とすれ違ったし、夜はもつと増えるはずだよ。」クリスは口に手を当ててうゝむとうなった。少し首をかしげて眉をひそめる姿に、僕はほほ笑んだ。

「確かにそうね……。きつと何か、見つからない理由があるんじゃないかしら。」

「たとえば？」

「そうね……。透明になれるとかは？」今度は僕が考える番だった。

「確かにそれだったら見つからないだろうけど、そんなすごい魔法、使える人がいるのかな。それに、そんな人がこんなわけのわからないことはしない気がする。」

「そうかしら。頭がおかしいから、できることもあるんじゃない？」

「そんなものかな？」

「まあ結局、見てみないと分からないわね。あ、ここじゃない？」クリスは自分の右手に立つ建物を指した。

白色の木造づくりに、うっすらと赤い三角屋根。正面の大きな両開きの扉には、何やら袋らしいものが彫られていたが、長年人の手に触れているためか、凹凸がほとんどなくなっていてよくわからない。目線をあげると、扉の少し上に壁にも、同じような袋のレリーフがあったが、そちらのほうが形がよくわかった。袋は薬草を入れるものらしく、口から幾種類もの薬草がはみ出している。よく見ると、袋の横に空いた穴からも、いくつか薬草が飛び出している。

「あの袋はなんだろう？」見上げながら扉を押し開け、中に入る。

協会の中は、思ったよりも狭かった。数脚の長椅子があるほかは、小さな祭壇と、その先にある入り口に彫ってあった袋と同じようなものを腰に下げている男の偶像が祀られているだけだった。天井はいくつもの大きな支柱と、それを補うために天井付近でいくつもの

小さな梁がめぐらされていた。

「あれは、薬の神であり、主神アルビオンの主治医パナケアの象徴である薬袋です。」マリアさんが入口の近くに立っていた。

「お二人とも、ようこそ癒しの協会ボルノー支部へ。そろそろ日も暮れるころでしたので、探しに行こうかと思っていたところなんですよ。ここについてから、皆が行方不明者のことを話すもので。」

「僕らもその話はさんざん耳にしましたよ。どうやら、それが何か宗教のようなやつらの仕業とも聞きましたが。」マリアさんはうなづいた。

「イトペヨンのことですね。」

「イトペヨン？」

「はい。悪魔崇拝者たちのことです。彼らはいくつかの宗派に分かれていて、それぞれ名称があるようですが、すべて魔物の神イトペヨンを唯一神とあがめています。それでも、この街は他宗教を認めることになっていますし、彼らも何か悪事を働くことはなかったんですが……。」

「何かしたんですか？」

「ええ。一人の信者が、通りで女性を襲ってどこかに連れて行こうとしているのを兵士に見つけたのです。幸い、女性は軽いけがだけだったのですが、その信者が兵士に牢屋へ連れて行かれる前に、毒を飲んで自害しました。」

「毒を!？」

「彼はこと切れる間際、こう言ったそうです。『唯一神が召集なされた。魔をもつてこたえよ』と。」

「召集？魔をもつて答える？いったい何のこと？」

「分かりません。ですが、それ以後女の人、特にここの、協会のものが狙われ始め、それから街の若い女性が被害にあっています。イトペヨンの者たちも姿を見せていません。」

「ここのひともおそわれたのですか!？」マリアさんは悲しげにうなづいた。

「はい、四人が行方不明に。それも私と同じか、それより下の人たちが。協会はこれ以上被害を出さないために、夜間外出を禁じました。街の人も、ほとんど夜は歩かないそうです。」そのとき、ふいにグウーという音がした。僕は苦笑いを浮かべた。

「ごめん、思ってたよりお腹空いていたみたい。」マリアさんとクリスは笑った。

「なんだか子供みたいよ、イエリシェン。」と、また違うところから、先ほどよりは少し高めのグウーが聞こえた。クリスの顔がみるみる赤くなっていく。僕は声をあげて笑った。

「イエリシェン？」クリスが顔を赤らめたまま僕を睨む。

「ごめん、だってクリスが澄ましたような顔して言っただったから。」

「さ、お二人とも。こんな話は終わりにして、早く食事にしましょう。」マリアさんはまだくすくすと笑いながら、僕らを食堂へと案内した。

協会の食事は建物と同じく質素だった。いくつもの野菜を煮込み、そこにハーブを加えたシチューにパン、それに木製の深皿に入れられたサラダ。協会の人たちはすでに食事を始めていた。皆静かにもくもくと食事をしている。マリアさんは僕らを彼らに紹介したが、それはよくあることなのか、彼らは僕らをちらりと見て、小さく会釈をすると、また食事に戻った。

「随分無愛想ね。」席に着きながら、クリスが僕にそつと耳打ちした。僕は小さくうなづいた。

「協会では、食事は静かにするものとされています。私語は厳禁です。でも、みんな無愛想なわけではないのですよ？食事が終わればわかります。」マリアさんは声を落して言った。

「聞こえてたんですね……。」

食事が終わり、食器が片づけられると、食堂には声が満ちた。う

るさいほどではないが、先ほどの静寂と比べると、随分な変わりようだった。ふと、僕らの向かいに人が座った。

「こんばんわ、旅の方々。今日はどうしてこちらに？」話しかけてきたのは、僕よりも年の若い、そばかすの女の子だった。いかにも好奇心旺盛といった目をしている。マリアさんは言った。

「友達のネイです。それでも、私より年上なんですよ。」

「え、年上？」僕は驚いて言った。

「もう20は超えてるよ。年下に見られがちだけど。」ネイさんはニツと笑ったが、そのいたずら好きそうな笑い方は、どう見ても子供のそれだった。

ネイさんはその見た目通り、子供のような好奇心で、僕らのことを根掘り葉掘り聞いた。僕らは質問にはできるだけこたえたが、モンスターやゴブリン達の話については伏せておいた。

「ふーん、記憶を探して旅を、ねえ。でも、災難だね、この時期にこの街に来ちゃうなんて。」

「それは、行方不明のことですか？」

「そ。きつとイトペヨンのやつらの仕業よ。今頃さらわれた人たちを黒魔術の生贄にしてるんじゃないかしら。」

「ネイ、不謹慎よ。」マリアさんはぴしゃりと言った。ネイさんはハイハイ、と手のひらをひらひらさせた。

「黒魔術！？それは、黒魔法と関係があるんですか？」

「黒魔法？ああ、そういう言い方もできるけど、厳密に言うとは違うわね。一般的に、魔法とは自らの魔力が原動力だけど、魔術は何か別のものから魔力を取り出すの。まあ、そのためには複雑な魔方阵やら呪文やらが必要らしいけど。それにそれだけのことができるのには、黒魔法にも精通している人物じゃないと無理ね、詳しいことは分からないけど。私は魔法使いじゃないし。」

「協会の力は魔法ではないんですか？」クリスが聞いた。

「私たちの力は信仰なの。神に祈り、力を貸していただく。一応魔力は私たちからだけど、それを癒しという形にしているのは神の力

よ。それでも、この子みたいに信仰が強いと、その魔力も少なくて済むみたいだね。」ネイさんはマリアさんの頭を軽く小突いた。「マリアさんは特別なんですか？」

「そうよ。あなた、この子の力みたことない？普通は、この子ほど傷の治りが早くないわ。そりゃ、出血を止めたり、毒を癒すなんてことはできるけど、この子ほど完璧じゃない。傷跡が残らないなんて、そんなにいないわ。」僕は自分の手に視線を落とした。あの時の傷は影も形もない。

「さて、そろそろ祈りの時間ね。お二人とも、興味があるなら一緒にしますか？」ネイさんは席から立ち上がっていった。ほかの協会の人々が礼拝堂へと向かっている。クリスは頭を横に振った。

「遠慮しておきます。もう歩き通して足が棒になっちゃって。」

「あなたは？」

「僕も、明日の準備をしておきたいので。」ふと、マリアさんがしよんぼりとした気がした。

「そうですね。部屋はもうマリアに聞きましたよね？では、また明日。」ネイさんは立ち去ると、マリアさんもそのあとについて言った。部屋を去り際振り返ると、

「おやすみなさい」といった。

「おやすみなさい、マリアさん。」マリアさんは小さく会釈をする、と、そつと扉を閉めた。

僕らはしばらくしてから席をたち、教えられた部屋へ向かった。

僕らは別々の部屋で、少し離れたところだった。

「じゃあお休み、イエリシェン。」

「お休みクリス。」僕はクリスと部屋の前で別れると、自分の部屋へ向かった。小さくなつたろうそくが点在する廊下の途中まで歩き、教えられた部屋の前でとまる。

ベッドと小さな窓だけが置かれた小さな部屋だった。僕は荷物をベッドのわきに置くと、ベッドに腰かけた。祈りの言葉が、礼拝堂から歌うように小さく聞こえる。僕は目を閉じ、その調べに耳をす

ませた。

第九話：陰にひそんで

物陰に隠れて街中を歩く。街はしんと静まり返り、昼間のにぎやかさは鳴りをひそめ、影が濃く建物に染み付く。街は昼間とは全く違った様相を呈していて、まるで恐怖で息をひそめているようだった。月が青白い顔をして、街路を妖しく照らしている。

そんな中を、僕も息をひそめながら街の一角に隠れひそんでいた。人通りはほとんどなく、時折乞食や酔っ払い、そして巡回の兵士がいるのみ。兵士はかなり警戒しているようで、酔っ払いさえ呼び止める。そのまま牢へ連れて行きそうな勢いだった。旅人の自分がこんな時間にうろついているのを見つかったら、確実に牢屋へ連れて行かれるだろう。そう思い、兵士が通るたびに物陰に身を隠す。

酒場をすべて回って見たが、情報は皆無。街中を歩き回っても、それらしき人物は見つからず、今こうして盗人のように身をひそめている意味さえわからなくなってきていた。

いや、と自分に言い聞かせる。彼らを探すにはこうするしかない。イトペヨン。彼らがどんな魔法を行うのかはわからないが、黒魔法に精通している人物がかかわっているのならば、僕のことについても何か知っている可能性がある。もしかしたら、僕はその人たちの仲間かもしれない。黒魔法なんて、そうそう使える人物がいるとは考えにくい。そう思ったから、僕は協会を抜け出して、こんなところで陰にひそんでいる。

ふと、考えがよぎる。

もし本当に彼らの仲間だったとして、どうする？ 彼らの仲間となるのか？ 罪もない人を襲うのか？

ここまで旅をしてきて、知リたかつた真実がそんなものだったとしたら？

僕は頭を振って考えを振り払った。今はただ、自分が誰であるか知りた。そのあとどうすればいいかは、その時考えよう。

思索から現実に戻り、通りの暗がりを目を凝らす。そこに見慣れた人物が通った。

「クリス……！？」「人気のない街の中を、きよるきよるしながら歩いている。見ていると、クリスは角をまがって小さな通りに入って行った。僕は急いでそのあとを追った。クリスが入って行った通りはせまく、暗い通りで、月明かりさえかすかにしか入らないところだ。なぜそんなところに入って行ったのかは知らないが、とにかくクリスのところへ急いだ。

「クリス！」通りに入ると同時に叫んだ。クリスは道を半ばまで歩いているところで、声を聞きつけるとはっとして振り返った。

「イエリシェン？」

「クリス！どうしてこんなところに。ここは危ないよ、早く戻らないと……。」「クリスは石畳に足音を響かせて僕に詰め寄った。

「それはこっちのセリフよ！」クリスはすごい剣幕でどなった。

「勝手に夜中に抜け出して、どういっつもり！？」

「だって、夜は危険だって……。」

「危険なのはあなたのほうよ、考えもなしにすぐ飛びだして。どうしてそんなに危険に飛びこもうとするの」

「でも、彼らに会うには、この方法しか思いつかなかったんだ。」

「彼らって……。」イエリシェン、彼らと会って、どうするつもり！？」

「どうするって、僕を知っているか聞きたいんだ。黒魔法つながりで、なにかわかるかもしれないだろう？」

「だからって、あんな人たちに会うの？人を誘拐するような人たちに？危険すぎるわ！」

「それでも、僕を知っている可能性があるなら、会いたい。」僕は頑として譲らなかった。

「仮に彼らがイエリシェンを知っていたとして、どうするの？彼らが仲間だったら、一緒に行くの？」

「わからない、でも、僕は自分が誰であるか知ることを、あきらめたくないんだ！」僕は語気を強くして言葉を吐き出した。

「・・・・・・・・イエリシェン・・・・・・・・。」口論がおさまると、静けさが通りに覆いかぶさった。

僕は急にバツが悪くなった。

「と、とにかく、ここは危険だ。僕もそろそろ戻ろうと思ってたんだ、一緒にもどろ・・・・・・・・！」突然、後頭部を殴られて石畳にたたきつけられた。倒れる寸前、腕で頭を守ったが、それでも鈍い衝撃が頭に響く。石畳に腕がこすれ、焼けつく痛みが走る。

「イエリシ・・・・・・・・！」「クリスの声が途中で途切れる。次いで、バタバタと何か布状のものをたたくような音がした。

視界がぐるぐると回り、頭がくらくらくして何が起きているのか点で分からなかったが、体が危機を告げていた。

「クリス・・・・・・・・！クリス！」クリスの名前を必死に叫ぶが、舌がもつれてまともな声にならない。それでも、視界の隅に、黒装束の者たちに取り押さえられながらも、もがいているクリスの姿をとらえた。

「くそ、クリス・・・・・・・・！」僕はそいつらに掴みかかるうとしたが、突然暗がりから新手が飛び出してきた。相手は手にこん棒をもって襲いかかって来た。僕はとっさに腰に下げた剣に手を伸ばし・・・・・・・・。

「！？」剣は腰になかった。協会においてきてしまったのだ。

「しまっ・・・・・・・・。」振り下ろされる棍棒。

一瞬意識が途切れ、また地面に突っ伏していた。クリスはぐったりとして動かない。クリスが暗がりにつられていかれてゆく。

「ま・・・・・・・・て・・・・・・・・。」ぼやける視界の中、必死に誰かの手をつかむ。つかまれた相手は僕の手を振り払おうとした。僕は死に物狂いでその手を放さんと握る手に力を込めた。

男の痛みに苦悶する声が聞こえた。次の瞬間、三度目の衝撃が走る。つかむ手が緩む。必死につかみなおす。

「クリス．．．．．」
衝撃が走る「ク．．．リ．．」
衝撃「ク．．．．．」
しょう．．．．．

第十話：闇に沈んで

意識の彼方から声が聞こえる。

「．．．エリシェ．．．．．」

誰かが誰かを呼んでいる。

「．．．．．リシェン．．．．．！」

聞き覚えのある声が、知っている誰かを呼んでいる。

あの声は．．．．．マリアさん．．．．．？

呼ばれているのは．．．．．

「．．．リシェン、イエリシェン！」自分の名前を呼ばれ、目を開ける。

「．．．．．？」だが、片目しか開かず、開いた目さえ少しばかりの光が入るだけだった。さらに目を見開こうとしたが、激痛が走った上に、それ以上は全く動かなかった。しゃべろうとしたが、口が動かない。ほろがはれ上がって、口が閉まらない。ひどい頭痛がする。瞬きができない。顔中が熱い。

何とか声を絞り出そうとしていると、薄く開いた目にだれかの影がかぶさった。

「イエリシェンさん！今治しますから．．．．．」マリアさんが視界から消え、いつもの祈りの言葉が聞こえ始めた。だが、いつもより早く、雑な詠唱だった。

それでも、祈りを唱え終わると、癒しの力が体中にしみわたって行くのを感じた。頬の腫れが引き、痛みが鎮まった。

「マリアさん．．．．．？」開くようになった目で最初に写ったのは、不安げな表情で僕を見つめているマリアさんの姿だった。

「イエリシェンさん！よかった、意識が戻ったんですね。」マリアさんは意識が戻ったのに気がつくと、僕の首にしがみついた。

「え、ちよっ、マリアさん！？」僕が困惑して思わず声をあげると、マリアさんは飛び退るように僕から離れた。

「す、すいません！あの、もしかしたら死んでしまってるんじゃないかって心配で……。」「マリアさんは苦笑いを浮かべながら目をこすった。よく見ると、ほほに涙の筋がひとつ走っている。マリアさんはつづけた。

「本当に心配してたんですよ、二人とも朝になつても姿が見えないので部屋に行ったら、二人ともいないんですもの……。」

僕はベッドからとび起きた。すぐさまベッドのわきに置いた荷物から、剣をつかみとり、部屋を飛び出す。

「え、イエリシェンさん!?」マリアさんがあわてて僕の後を追ってくる。が、僕は待たずに駆け出した。

途端、頭に鈍痛が走り、立ちくらむ。そのすきにマリアさんが追いつき、僕の手をつかんだ。

「どうしたんです、いきなり走りだすなんて!?いくら治癒を施したからと言って、まだダメージは残っているはずですよ！あなたはそれだけ重症だったんですよ！」

「クリスが、クリスがさらわれたんだ！」

「クリスさんが!?どうして!？」

「僕のせいだ！僕のせいでクリスが……。」「僕はマリアさんの手を振り払い、駆け出そうとした。マリアさんは両手でしつかりと手をつかみ、何とか僕を引きとめた。

「と、とにかく落ち着いて。何があつたんですか？」

マリアさんがどうしても放してくれなさそうなので、仕方なく昨日の夜のことを簡潔に話した。

「クリスさんはイトペヨンにさらわれたんですね。」

「きっとそうです、早くしないとクリスが……。」

「分かりました、私は街の衛兵にこのことを伝えて協力を仰いでみます。イエリシェンさんは部屋に戻って安静に……。」僕は最後まで聞かずに、廊下を駆け出した。

廊下の窓からは朝日が差し込み、ドアを開ける音や、店の支度をする音などが聞こえてくる。すれ違う人たちを吹き飛ばすほどの勢

いで走りぬけ、階段を飛び降りる。礼拝堂では朝の祈りをしている最中だったが、僕は構わず走り続けた。扉を突進して押し開け、通りに入る。僕は息を切らしながら、目を左右に走らせた。

朝日が街を照らし、人々が日々の営みを始めている。道行く人は、何事かと僕を見つめている。人々の注目の中、僕は昨夜の場所へと全速力で走った。広場につくと、そこから一つの道に入る。しばらく走り、目的の場所へとたどり着く。

「クリス！」僕は通りに入るなり叫んだ。道行く人がびくつとして僕のほうを振り向く。が、自分ではないとわかったからか、それとも僕にかかわるのを避けたのか（何せ息を切らしながら、剣帯がついたままの剣を手に握りしめていたのだから）、それぞれの営みに向かつて行った。

「だれか探してるのかい？」声をかけてきたのは、建物の影のなかに座っていた初老の老人だった。見るからに乞食といった格好で、ぼさぼさの髪にふけが浴びたようになっていた。

「昨日ここで突然誰かに襲われて、さらわれたんです。何か見ませんでしたか？」

「襲われた……？あれ、もしかしてあんた、ここで倒れてたやつかい？」老人は驚いて僕の顔を覗き込んだ。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「おうよ、ここは俺の場所なもんでな。いつものようにここに来たら、人が倒れてるもんでよ。よく見たら、体中傷だらけなうえに、顔なんて誰だかわかりやしない有様で、しんでるかとおもったんだがのう。兵隊さん呼んでどかしてもらおうと思ったら、息があるってんで、協会に運ばれたみたいじゃったが。協会ってのは、すごいもんだのう。」老人は僕の顔を見ながら、しきりに感心したようにうなづいている。

「それで、僕以外にはだれもいませんでしたか？なにかおちていたりとか……。」

「いや、そんなものはなかったねえ。あんたの知り合い、女なんだ

る？諦めな、きつと今頃………っておい！」僕は既に駆け出していた。

「ったく、助けた例に少しくらい恵んでくれたっていいじゃねえか。」

「クリス！クリスー！」大声で叫びながら街を駆け回る。

「クリスーー！」僕のせいだ。僕のせいでクリスが………

！

街中の人にクリスを見なかったかと尋ねる。が、首を縦に振ってくれる人はいない。

「クリスーー！クリスーーー！」クリス。僕を信じてこんなとこまで付いてきてくれた。

また立ちくらみがして、勢い余って全身を滑らせるように転んだ。

「クリス………。」なのに僕はクリスに何も言わずに夜抜け出して、このざまだ。

昨夜転んだ時と同じところから血が流れる。

「……クリス………。」僕は……僕は……僕は……

……！

膝について、空に向かって叫んだ。

「クリスーーーーーーーーーーーーーーーー！」

夕刻を告げる鐘が鳴り響いている。僕は街の中心から少し離れた通りで、疲れ切った体を壁にもたせかけていた。多くの人々が日が暮れる前に、と、家路を急いでいる。

「クリス………。」「転びすぎであざだらけになった腕を見つめて、つぶやく。幾度その名前を呼んだらうか。声はしゃがれ、自分の声ではないかのようだ。のどがひりつき、水を飲んでも痛みばかりがのどを通る。」

だが、それだけ叫んでも答える声はなかった。クリスはどこにと

らわれてしまったのだろうか。それとも、もう……。

「だめだ、あきらめるな。クリスがさらわれたのは誰のせいだ。おまえに諦める資格なんてない！もうすぐ日が暮れる。そうなれば、彼らが出てくる可能性も高くなる。絶対に助け出すんだ。」くじけかけた心にそう言い利かし、ほほをたたいて気合を入れる。

「や、やっとみつきましたあ。」ふと、顔をあげると、ふらふらしながらこちらにやってくるマリアさんを見つけた。マリアさんはそばまで来ると、膝に手をつけて、ふうとため息をついた。みれば、顔にかなりの汗をかいていて、髪が額に張り付いている。

「どれだけ走りまわってたんですか？街中の人があなたがどつちに行ったか教えてくれるのに、ちつとも追いつけないんですもの。」

「すみません、でも、じつとしてられなくて。」

「お気持ちはお察しします。私だって、クリスさんを助けたいです。でも、何も置いていくことはないんじゃないんですか？」

「すみません。」

「それで、何か情報は得られましたか？」僕は首を横に振ってこたえた。

「そうですね……でも、そろそろ日が暮れます、今日のところは協会に戻って……イエリシェンさん？」マリアさんは急におびえた声を出した。

「はい？」返事はしたが、視線は戻さない。

「どうしたんですか？その……そんなに怖い顔をして。」

「怖い？、今僕は、笑っているはずですが」壁から背を離し、ゆっくりと歩き出す。

「どこにいくんですか？」マリアさんの声は恐怖に震えている。だが、僕は何におびえているか分からなかった。

「クリスを助けに」

夕暮れの街を人の波とともに足早に歩く。手には頼まれた食糧と薬の原料になるもの。角を曲がるたび、人通りの少なくなる通り。

最近の街の人間は、帰りが早い。それが自分たちのせいだと思つと、ぞくぞくとした感覚が走る。

「おびえる、おびえるがいい、無知で傲慢な人間どもよ。だが、やがて貴様らには、さらなる恐怖が待ち受けているのだからな。」心の中でげらげらと笑いながら歩いていると、やがて目的地へとたどり着いた。

それは小さな家くらいの建物で、四角い単純な石造りだった。懐からいくつものかぎの付いた束を取り出し、その中から一つを選びだし、カギ穴に差し込む。かちりと音がし、カギが開いたことを知らせた。扉を開け、中にはいる。

「動くな。」突然、背後からのどに剣を当てられた。

「な、なんだおま」首に痛みが走る。のどのあたりから一筋の血が流れ、胸元へと伝い降りてゆく。

「しゃべるな、中に入れ。」男はさらに剣を強くのどにあててきた。よほど切れ味がいいのか、刃を滑らしたわけでもないのに傷が深くなる。

「わ、わかった。言う通りにする。」あわてて建物の中に入る。男が後に続いた後、誰かが扉を閉めた。

「明かりはどこだ。」

「と、扉のわきだ……。」男が誰かに火をつけるように言うつと、たいまつに火がついた。

突き飛ばされ、壁に激突する。

「なにすん……。」振り返った瞬間、目の先に剣先を突き付けられた。

「クリスはどこにいる。」男は背筋も凍るほど冷たい、かすれた声で言った。顔は後ろの女が持っているたいまつでよく見えない。

「クリス？ 誰だそれは？ そんな奴は知らな」

「昨夜、貴様らがさらった人だ。クリスを返してもらう。」

「昨夜だと……！ お前、死んでいなかったのか！？」目を凝らして男の顔を見る。男は唇をゆがめて笑った。

「死んでいたかもしれなかったがな。だが、そのおかげで、お前をみつけることができた。」

「な、なぜ……。」

「お前には小指がない。あれだけ死にも狂いで握っていたんだ、絶対に忘れなかったぞ。それに、背中に背囊をしょって尚手に持つほどたくさんの荷物ははた目から見てもおかしかったからな。」男はたいまつを女から受け取ると、顔に近づけてきた。相手の顔がはつきり見えた。

ためらいなく人を殺す目をした、笑う死神だった。瞳には、恐怖に顔を引きつらせる自分の姿が写っている。

「さあ、クリスのところへ案内してもらおうか」

第十一話：救出

目の前は真つ暗闇だった。手に持ったたいまつをかざして道を照らすも、光は数歩先までしか届かず、よどんだ闇がその先を覆っている。空気は湿っぽく、とても……

「臭いですね……」。「マリアさんが鼻声でぼそりと呟いた。マリアさんはここに来るなり、ずっと鼻をつまんでいる。

ここは街の地下を走っている下水道。だが、今はイトペヨン達の隠れ家となっていた。彼らが見つからなかったのは、あの建物のようにいくつかある出入り口を使って、女性を襲っては地下に連れて行っていたのだ。

僕は男から下水道への入口の場所を聞き出し、床下に隠されていた入口を見つけると、地下へと続く階段を下った。階段は壁に沿ってらせん状に下っていて、目が回るようだった。いったいどこまで続くのかと焦り始めたころ、階段は唐突に終わり、今いる下水道に入った。地下特有の湿った空気に交じった悪臭に鼻を曲がらせながら、闇の中にたいまつをつきだすと、道が左右に分かれているのが分かった。

「どうします？あの人を左と言っていましたけど……」。「マリアさんは左右を交互に見渡しながら言った。闇は霧のようにたちこみ、どちらの道もその先がどうなっているのか全く分からなかった。だが、僕はためらわずに左を選んだ。

「あの人の言うことを信じるのですか？嘘をつくことだって……」。「マリアさんがあわててついてくる。

「いや、あいつはうそをつけない。」

「どうしてです？」

「あいつは僕におびえていた。恐怖にとらわれたものに、うそはつけない。」

たいまつをかざしながら、うねうねと曲がりくねった道をしばらく歩くと、闇の中に光が見えてきた。近付いて行くうち、それがたいまつの光だとわかった。そのたいまつに照らされて、扉がぼんやりと浮かび上がっている。僕は歩みを速めた。

扉はちょうど二股に分かれた道にあった。下水道の壁などと比べて、扉は新しく作られたもので、苦悶の表情を浮かべる人の顔が彫りこまれていた。眼球は恐怖に見開き、大きく開かれた口からは叫び声が聞こえそうだった。僕は観音開きのその扉に両手をあて、ゆっくりと押し開けた。扉は音も立てずにすんなり開いた。

扉の先は、長い通路になっていた。通路の両側には明かりがともされている。耳を澄ますと、かすかだが人の声が、歌うような響きとなって聞こえてきた。

僕はその声の意味を瞬時に察し、全力で走りだした。マリアさんがあわてて追いかけるが、今は彼女に合わせている場合ではない。聞こえてきた声の歌う調子は、マリアさんの癒しのそれと似ていた。つまり、何か呪文を唱えている可能性がある。ということは……

「頼む、間に合ってくれ……！」声はだんだん大きくなり、今やはつきりと呪文の言葉が聞こえてくる。

それは僕らが使っているのとは全く違う言語で、強く、怒りのこもった呪詛のように汚らしく、つばを吐くような奇妙な発音だった。時折囁くように小さくなり、突然叫び声をあげる。それはもはや、言葉と呼べるものではなかった。

通路の先に、広場のような開けた空間で、歌の主が両腕を広げて天井を仰ぎ見ているのが見えた。広場の入口に立つローブ姿の者の一人が、走ってくる僕に気付き、あわてて懐から何かを取り出そうとしている。

「邪魔だ！」僕は剣を抜きざま男に切りつけた。男が倒れるのも待たずにわきをぬけ、広場へと飛び込む。

「クリス……！」僕は叫んだ。その声と、男の悲鳴によって、その

場にいたすべての者がこちらを振り向いた。

その広場は街の噴水広場と同じくらいの広さで、丸天井を四つの柱で支えていた。二十人ぐらいがその柱をかこむように立っている。柱の内側には巨大な魔方陣が描かれ、その中心に縛られている人たちが円になって座っていた。

「イエリシェンー！」円のところから僕を呼ぶ声が聞こえた。それはまぎれもなく彼女の声だった。ずっと聞き焦がれていた声だった。「クリス！今助ける！」僕はまっすぐ魔方陣へと駆け寄ろうとしたが、行く手をロープをまとった者たちが立ちふさがった。

「どけ！邪魔するやつは、その男のようになるぞ！」僕はさつき切り伏して倒れたままになっているものを指差し、剣を突き付けた。信者たちはたじろいだが、その場を離れようとはしない。そのとき、魔方陣の縁に立っていた、先ほど呪文を唱えていた司祭らしき男が叫んだ。

「儀式の邪魔をさせてはならん。殺せ！」司祭の言葉を聞いて、信者たちが襲いかかってきた。

ふり降ろされるナイフを手首をつかんで止め、棍棒を剣で受け止める。ほかの一人が短剣をつきだしてくると、手首をつかんだ相手を盾にして受け止める。棍棒をはねのけ、喉を狙って剣をなく。信者の喉から血がほとばしり、あおむけに倒れる。味方を殺してしまつてうるたえる信者にすかさず剣を突き出して腹部をえぐる。信者の腹部から血がぼとぼと滴り落ち、口からも血が流れ落ちた。剣を引き抜くと、男は腹を抱えるようにして前のめりに倒れた。床にすぐさま血だまりができ、男は痙攣し、息絶えた。

「邪魔するやつは容赦なく切り捨てるぞ！そこをどけ！」僕は血でべつとりとした剣を振りながら前に歩み出た。信者たちがうるたえながら後退する。

「ならん！儀式を絶対に邪魔させるな！敵は一人だ、恐れることはない！」司祭が一喝して、浮足立っていた信者たちを冷静にさせた。僕は心の中で毒づいた。

幸い、彼らは今まで闘ってきた相手と比べると大したことはないが、この数で襲われたらひとたまりもない。だが、数人仲間が殺されたのを見て怖気づいてくれれば何とかなれると思っただけ、敵に動揺を与える殺し方をしたのだが、それも今ので失敗だ。

司祭は詠唱を再開し始めた。信者は冷静に包囲の輪をじりじりと狭めてくる。今度は僕が動揺し始めた。

「考えろ、考えるんだ。どこかに突破口は……！」その時、やっと追い付いてきたマリアさんを眼の端でとらえた。

信者はマリアさんに気付いていないようだった。彼女はまず僕を見つめ、そのあと魔方阵にいるクリスを見た。そしてもう一度僕のほうを見た。僕が眼で合図すると、マリアさんはうなづいて、そつと信者の後ろに回った。

僕はゆっくりとマリアさんとは反対の方向にじりじりと動き出した。信者たちもつられて動きだす。信者たちは先ほどのようにむやみやたらに襲いかかるうとはせず、じつと機会をうかがっている。ちらりと目を走らせると、マリアさんは司祭に気付かれないように壁伝いにゆっくりと司祭のほうに向かっている。

僕がよそ見をしていると思った信者がおそいかかってきた。それも四人同時にだった。僕は剣を両手に持つと、体を一回転する勢いで大きく横にないだ。信者たちはよけようとしたが、信者たちの短剣や棍棒はおれ、二人の腕を切った。

はやる気持ちを抑えながら何とか時間稼ぎをしていると、詠唱の声がだんだんと大きくなってきた。

「まずい、儀式が終わってしまう……！」僕が駆け出そうとすると、信者たちが攻撃に出て、二の腕を浅く切られた。僕はお返しにそいつの脳天をたたき割った。

「どけ、どくんだ！」剣をめくらめつぼう振りまわしながら進もうとするも、信者たちはじりじりと後退しただけだった。

突然詠唱がぶつつりやんだ。続いて、ドサツという倒れる音が聞こえた。信者たちが一斉に振り向く。マリアさんが碎けたつぼを

もって、倒れた司祭のそばに立っていた。

「あ……」突然信者たちの視線にさらされたマリアさんは、その場で立ち尽くした。

「司祭様！」信者たちが一斉にマリアさんのほうに走ってゆく。マリアさんはあわてて逃げ出した。だが、信者たちはマリアさんには構わず、司祭のもとに向かった。

「司祭様！大丈夫ですか？」信者たちが助け起こすと、司祭はゆっくりと頭に手をやった。その手にぬめった血が付く。

「くそ、協会がなぜこんなところに。それより、生贄はどうした？」それなら、とつくに助け出したよ。」全員が一斉に振り向いた。

僕はクリスを助け起こした。そしてゆっくりと立ち上がり、司祭たちをありったけの憎しみをこめてにらんだ。

「覚悟しろ。クリスをさらったこと、そう簡単に許さないからな！」

第十一話：救出（後書き）

読者のみなさん、いつも読んでくださりありがとうございます。

更新が遅くなってしまう申し訳ありません。それもこれも、僕の怠け癖が悪いんです。しかも、ネタに詰まるという、最悪の事態になってしまい、中途半端になってしまいました。

来週までにはきっちりとしたネタを考えて、ちゃんと締切を守ります。

第十二話：闇より出でしもの

「許さないだと？貴様、状況が分かってないようだな。こっちは四十人いるんだぞ。それに比べて貴様らは十人足らず、しかも戦えるのは実際お前ひとりだろう。貴様こそ、儀式を邪魔したこと、その身に思い知らせてやる。」司祭はそういうと、こちらに信者を従えてゆつくりと歩み寄ってきた。僕はクリスたちの前にでて、剣を正眼に構える。

「やれ！」信者が一斉に襲いかかってくる。迎え撃とうと身構える。突然魔方阵がまばゆいばかりの光を放った。信者たちは足元からの青みを帯びた光に目がくらみ、歩みを止めて目を腕でかばった。「な！？これは・・・なんということだ、召喚が成功したぞ！」司祭が叫ぶと、信者たちは一斉に歓喜の声を上げた。僕は目を細め、手でかばいながら、光が徐々に弱まり始めたのに気づいた。それと同時に、室内になまぬるく、まるで密閉してもなお洩れてきてしまったような、腐敗のにおいをかぎ取った。

「魔方阵から離れるんだ！」僕は急に危機感を覚え、弱り切って立てない人を抱え上げた。クリスやマリアさんも助けが必要な人には手を貸して、できるだけ急いで魔方阵から離れた。信者たちは僕らに構わず、皆一心に魔方阵に現れる魔物の出現を待ちわびている。中には、魔方阵に近付いて行く者さえいた。

今や光は誰の目にも分かるように弱くなってきた。やがて、まぶたを閉じるように光が消えた。ここにいる全員が次に何が起きるのかと固唾をのんで見守っている。僕は先ほども腐臭が強くなっているのに気づいた。

腐臭が唐突に強くなった。生き物が腐った、それも異常な数が、何百年も放置された時のような匂いが部屋中に蔓延した。あまりのにおいに、思わず鼻をふさぐ。だが、においは口から入ってきて空気を腐らせた。咳をしても、入ってくるのは異常な臭いのする空気

のみ。信者たちでさえ、このにおいに耐えかねているようだった。つかまっていた人たちの中には、こらえきれずに吐く人もいた。

そしてそれはやってきた。魔方陣が描かれた床から、まるで水面から顔を出すかのようにそれはゆっくりと自らの世界から僕らの世界に入り込んできた。

それは塊だった。それはおおむね丸い形をしていて、巨大だった。水面に上がるのをやめたその塊は、今や魔方陣と同じくらいの大きさの半球体になっていた。たいまつが揺れ、塊が照らされた。とらわれていた中の一人が悲鳴を上げた。信者たちの中にもどよめきが起こった。僕は喉を鳴らしてせりあがる吐き気をつばとともに飲み込見、必死にこみあげてくるものをこらえた。

それは死体の塊だった。体中にウジのわいた死体が塊の全身をびっしりと覆っていた。その死体の隙間からは、さらに死体がのぞいていた。よく見ると、人間の死体だけではなく、獣のようなものや、明らかにこちらの世界ではない死体も混ざっている。腐臭は今や耐えがたいほどで、僕は一刻も早くこの場から逃れたい衝動に駆られた。だが司祭はその悪臭にも屈することなく、信者たちの前に出ると、大声で呼ばわった。

「見よ、皆の者！魔王イトペヨン様は、私たちの献身に報い、生贄を必要とせずに魔のものをわれらに使わせなされた！皆、感謝の祈りをささげるのだ！」信者たちは歓喜の声をあげると、両膝をついて、両手を投げ出すように祈りをささげ始めた。

「さあ、魔王の使い、マンイーターよ。われらにあだなす奴らを喰い殺すのだ！」司祭は僕らを指差し、塊に命令した。僕は剣を握りしめた。手から汗が吹き出し、今にも剣が滑り落ちそうだった。

「ぎゃああああああ！！」悲鳴が上がった。それは魔物の近くにいた信者の声だった。周りから恐怖の悲鳴が上がる。死体の隙間から伸びてきた細長い触手が腹をつらぬき、信者の背中から飛び出していた。

触手は飛び出した時と同じようにものすごい勢いで信者を引き寄

せた。触手の先は開いた花のようなかえしが付いていて、死体にぴたりとくつついた信者を逃がさない。信者はバタバタともがき苦しんでいたが、また突然悲鳴を上げ始めた。

「あああああ！や、やめろ、やめてくれええ！！」

「見る、血を吸われてる！」信者の一人が叫んだ。確かに、触手がまるでポンプのように脈打ちながら、ドキュ、ドキュ、と音を立てて何かを吸い取っていく。

男の悲鳴はだんだんと小さくなり、顔も急速に白くなってゆく。やがて男の声はやみ、触手をつかんでいた手がだらりと下がった。触手はなお血を吸い取っていたが、やがて音はやみ、触手が男の体から引き抜かれた。男は不思議とそのまま塊にくつついたままだった。

触手はその数をまして信者に襲いかかり始めた。信者たちは泣き叫びながら部屋を走りまわった。僕らは信者たちが逃げ回り始めて、やっと我に返った。

「今のうちよ！はやくここからにげましょう！」最初に我に返ったのはクリスだった。僕らはマンイーターの触手から逃れようと狂ったようにあちらこちらへと走りまわる信者たちを尻目に、出入り口へと向かった。

だが、そこは信者たちが押し合いへしあいしていて、とてもじゃないが僕らが通る隙間はなかった。後ろでは、つかまってしまった信者たちの悲鳴が聞こえる。

「ああああああ！す、すわれる！血が、血がああああ！」

「ひ、やめ、やめて、あぎゃああああ！！」

「ど、どうして、なんでこんな目にいいいい！！」耳を覆いたくなくなるほどの断末魔が部屋中に響き渡る。

「やばい！こっちに来るぞ！」入り口に固まっていた信者の一人が叫んだ。つられて振り返ると、なんと塊がナメクジのようにゆっくりと、音も立てずに向かってきていた。

「ど、どけ！早く通せ！」

「やめろ、押すな！つつかえるだろうが！」

「はやくしてええええ！」信者たちは自分だけでも助かろうと必死になって入口に群がっている。前の何人かが後ろから押されて倒れた。その上を走る者たち。僕は焦っていたが、この騒ぎで助けた人たちを傷つけるわけにはいかず、そわそわとしながら彼らが行ってしまうのを待たねばならなかった。

「伏せろ！」僕はとつさに叫び、近くの捕らわれていた人の身を伏せさせた。信者の大半は僕の言葉が聞こえていなかったが、クリスたちは素直に身を伏せ、信者たちの幾人かが振り返った。

次の瞬間、十数本もの触手がこちらに伸びてきて、群集を串刺しにした。僕らの頭の上の触手から、ぼたぼたと血が滴り落ちて、髪やら腕やらにかかった。

触手が引つ張られると、団子のようになった信者たちが塊に引き寄せられていく。

「た、たすけてくれええ！」信者たちが必死になって手を伸ばし、他の信者たちをしつつかと捕まえる。

「や、やめろ、離せ！」つかまれたものはもがいたが、他の何人もの信者がけて必死になって一人につかまってくる。つかまれたものは踏ん張ったが、やがて一緒になって引きずられていく。

「た、たすけて！」信者たちが僕らにも手を伸ばしてきて、座り込んでいた一人の体をつかんだ。

「やめろ！連れて行かせやしないぞ！」僕は信者たちに飛びかかって彼らから引き離そうとした。信者たちから彼女を引き離したが、今度は僕がつかまってしまった。

「イエリシェン！」

「イエリシェンさん！」クリスとマリアさんがほぼ同時に叫び、引つ張られていく僕の腕にしがみついた。

「こつの、離しなさい！」クリスとマリアさんが僕の両腕をつかみ、懸命に引きはがそうとする。だが、信者たちの手は僕をしつつかとつかんで離さず、指が僕の体に食い込むほどだった。マリアさんとク

リスも引つ張られ始めた。

「離すんだ二人とも！道連れにされてしまうぞ！」

「いやよ、離さない！あなたを見捨てたりしない！」

「みんな生きて戻りましょう！」二人は頑として離そうとしなかった。そうしているうちにどんどん魔物に近づいていく。

「くっそ、は、な、せ、ええええ！」僕は渾身の力を込めてつかんでいる手を振りほどき、もんどりうつて倒れた。二人もその拍子に転げた。信者たちが手を伸ばすが、その手はもう届かない。

僕らはもう魔物のすぐそばに来ていた。信者たちが魔物に血を吸われ始める。

「早く逃げて！」僕は二人のほうを振り向き、叫んだ。

「！イエリシエン、後ろ！」クリスが鋭く叫んだ。

僕が振り返ると、触手はすでに目の前に伸びてきていた。とつさにけんの平で腹をかばう。触手が剣にぶつかり、そのまま僕を押さえつけたまま壁まで突き飛ばした。壁に当たる瞬間、頭を下げて頭をぶつけるのは避けられたが、まるで牛が突っ込んだきたかのような衝撃が背中に走った。衝撃は体の中に伝わり、骨がきしむ音が耳に響き、内臓がせり出すような吐き気がこみ上げ、空気と一緒に声が吐き出される。

何とか触手をどかそうともがくも、まったくびくともしない。と、視界にさらにこちらに伸びてくる触手が映った。

「イエリシエン！」クリスの悲痛な叫びがこだまする。触手が目の前に迫る。

その瞬間、僕が感じたのは、死んでしまう恐怖より、僕でなくなる恐怖だった。

「イエリシエン！」私は叫ぶことしかできなかった。今まで何度、こうして彼の名を叫んだのだろうか。そして私は知っている。次に彼に訪れるものを。

どうやったのかはわからなかった。だが、イエリシエンは触手の呪縛から逃れ、明らかに面倒そうな声を出した。

「まったく。どうしてこう厄介事にばかり巻き込まれるのか。どうやら神はよほどおれのことを嫌いに見える。」イエリシエン、いや、男はゆつくりと魔物に歩み寄る。その手にはダマスカスの剣と、もう一方の手に黒い、禍々しい闇を纏ったものが握られていた。

「まあいい。もともと神に好かれようなどと毛ほども思っちゃいない。おれは眠いんだ、とつとと終わらせるぞ。」瞬間、男ははじけるように魔物に突進していった。魔物は触手を出して応戦する。男はそれを二本の剣でいなしながら、さらに加速していく。

魔物まであと一步のところ、一本の触手が男の正面から繰り出された。男はダマスカスの剣を突き出し、触手を縦に裂きながら、そのまま魔物の体に突き刺した。

「はあああ！」裂帛の気合とともに切りあげると、一気に魔物の体を駆け上がった。伸びてくる触手ごと、ふた振りの剣を眼にもとまらぬ速さで振りつけ、死体の塊を切り裂いてゆく。頂上近くまで上がると、トン、と飛び上がって地面に軽やかに着地した。魔物の体には今やくつきりと男が切り裂いた跡が残っていた。

「やはりこれくらいでは本体には至らないか……。」男はふうむとうなづて、自分が作った切り口を眺めていた。

切り口の下には、肉の体ではなく、さらに死体が覆われていた。

深くえぐられたところでも、まだ死体が内側にあつた。

「まったく、面倒な奴を呼び寄せたものだ。まあいい」男は触手を交わしながら魔物の横を通り過ぎると、魔方阵の前に立ち、

「これだけ大掛かりな魔方阵だ。使わせてもらうぞ。」黒い何かを魔方阵につきたてた。

すると、先ほど同じようにまばゆい、青みがかつた光が魔方阵から放たれ始めた。魔物は光が苦手なのか、魔方阵からもぞもぞと離れてゆく。男が呪文を唱え始めた。それは司祭が唱えていた言葉に似ていたが、その声は朗々と響き、力強く高貴な歌だった。

「呼びかけにこたえよ、死者の城の主よ！」男はそう言って、歌うのをやめた。そして答えはすぐに現れた。

魔方阵から冷たい風が吹き始めた。その風に触れると、なぜか体の芯から熱が奪われるようだった。風にたいまつ炎が揺らめき、急に小さくなった。

魔方阵の上に黒い霧が現れ、そこからそれはやってきた。

それは、全身黒い装いをし、金の刺繍の施されたマントに身を包んでいた。姿かたちは人間で、手にはおごそかな装飾を施されながら、確実に死を見舞う力を持った大剣が握られていた。顔はフードが深くかぶされていてよく見えない。

そいつはまるで羽のようにふわりと地面に足をつけると、男に向き直り、貴族が王にするように、深々と礼儀にかなったお辞儀をした。男もおごそかに礼をしてこれを受けると、魔物のほうを指差した。

そいつは魔物のほうを向くと、大剣を両手で持ち直し、後ろに携えるようにして構えた。塊は危機を察したのか、触手をそいつに伸ばす。そいつは大きく、だがすばやく剣を下段から上段へ斬りあげた。

それは嵐だった。振りあげられた大剣は、耳をつんざくような爆音を伴い、突風を巻き起こした。風はのばされた触手を吹き飛ばし、塊に張り付いた死体を天井へ巻きあげた。突風の射線上にいた人たちが、哀れにも天井や壁にたたきつけられるのが見えた。あたりに骨や肉片が拡散し、私は身を伏せてそれを避けた。背中にいくつもの生暖かいものがぶつあった。

ふと眼をあげると、塊の本体が姿を現していた。それは巨大な種だった。巨大な深紅の種から、いくつもの芽が出ていて、そこから枝を伸ばすように触手が生えている。

種は無防備な姿を必死に取り繕おうと、飛び散った肉片に触手を伸ばした。黒装束が振りあげたままの姿勢から、今度は大きくその大剣を振りおろした。

大剣が地面にたたきつけられると、地面を大きくえぐり巻き上げながら、視覚化された風の刃が深紅の種に炸裂した。

種は人間のような悲鳴を上げ、その体から鮮血をほとばしらせた。触手がうねうねとうねり、そして力尽きたように地面に落ちた。種はやがてしぼんでいき、人の大ききくらいまで干からびると、そのまま地面に溶け込んでいった。残ったのは、血の海と化した床だけだった。

黒装束は、大剣を片手に持ち替え、イエリシエンに向き直ってまた先ほどと同じように礼をした。イエリシエンも同じように返礼すると、またいまつの光が弱まり、黒装束の周りの闇が濃くなったかと思うと、いつの間にかその姿を消していた。

あたりはしんと静まり返っていた。皆、今自分が見たものが信じられず、理解できない様子だった。と、そのとき、部屋の隅から何かが崩れる音がした。

積み上げられたつばや祭事用の道具の中から現れたのは、司祭だった。魔物が出てきてからずっと、その場所に隠れていたらしい。

司祭は乱れた髪もそのままに、驚愕を顔に浮かべて男によるよると近づいて行った。

「ま、まさか生きているとは……。」

「ちよつと、あなたイエリシエンのこと知っているの!?」私は思わず叫んだ。

「お前は知らなかったのか? 闇のように黒い髪、卓越した剣技に黒の刃を携え、いくつもの黒魔術を使いこなす……。おお神よ、あなたはなんとという人物を遣わされたのか!」司祭は男の手を取ると、その場のすべての人に聞こえるように朗々と叫んだ。

「魔王を崇拝する同胞たちよ! 私は召喚に成功した! この方こそ、どのような魔ものぐもの、その名も」司祭の言葉が途切れた。周りの時がとまったように思えるほど、司祭はゆっくりと、自分の腹を貫いている刃を見下ろした。

「気安く俺の名を呼ぶな、下郎。」男は歯をむき出しにして怒りを

あらわにし、司祭の体にさらに深く闇に覆われたものを突き刺した。
「あ、ああ、すわれる、私の、魂、が………、こ、これが
魔剣………」司祭は言葉を吐ききらぬうちにこと切れた。

信者たちはパニックに見舞われ、逃げ出したり、その場に頭を抱えてうずくまったりした。男は司祭の体から黒の刃を抜き取ると、剣をどこかに消し、ダマスカスの剣を鞘におさめ、こちらに向き直った。そしてゆっくりとこちらに歩みよつてくると、私の目の前でとまった。

「こうして話すのは二度目だな、娘。」

「あなたとなんて二度と会いたくなかったわ。」私は相変わらず傲岸な態度で見下してくる相手を睨み返した。

「それは俺も同じだ。貴様などと話す無駄は避けたい。だが、今回は貴様のせいで巻き込まれた。前にこいつとかかわるな、と言ったが、どうもこいつが貴様とかかわりあいいたいらしいな。困ったものだ。」

「何が言いたいなの？」私は食って掛かった。

「こいつの前から姿を消せ。貴様がいるとこいつが危険だ。貴様がイエリシエンと呼んでいるこいつは、貴様がいなくても問題ない。俺がいるからな。」

「いやよ、あなたの言うことなんか聞かない。」

「そうか。だが、貴様といると危険だということは真実だ。貴様もおれも、こいつも。よく考えるんだな。」

「ちよつと………」私は反論しようとしたが、突然倒れかかってきたので、あわててイエリシエンの体を支えた。イエリシエンは例の如く意識がなかった。

「クリスさん、だいじょうぶですか………？」マリアさんがおずおずと尋ねてきた。

「私は平気よ。イエリシエンもけがはないみたい。」私はなんでもない風を装って答えた。

「今のは誰だったんですか？イエリシエンさん？それとも別の人？」

「私にもわからない。でも、イエリシェンが何者かを知っているのは確かだと思う。考えても仕方ないわ。早く戻りましょう、地上へ。」
「私は助け出した人たちを見やった。皆傷つき、疲れきっている。」
「そうですね。戻りましょう、光のある場所へ。」

第十二話：闇より出でしもの（後書き）

どうもこんばんわ、じよんです。実は（おれにとつての）うれしいお知らせが。なんと、ユニークが1500人を超えました！

別にすぐくもないことなんでしょうが、僕にとつてはすごくうれしいことです。こうなったのも、僕の拙い小説を読んでくださる読者の方々のおかげです。

これから日々精進し、皆さんに愛されるような物語を作っていくたいと思っています。これからはがんばります！

第十三話：わかれえぬ仲間

音が聞こえる。規則正しい電子音。それが何の音なのか、思い出せない。そもそも、電子音とは何だったか。

記憶が頭の中でぐるぐると回る。答えが現れかけては、また消えてゆく。そういえば、僕はなんで寝ているんだっけ。その答えはすぐに出てきた。そうだ、僕はまた気絶をして……………。

「……………」重いまぶたをうつすらとこじ開けると、そこには見慣れない光景が写った。

白い部屋。壁も、天井も、布団もシーツも、全部白。白以外の色がないその部屋は、窓に掛けられた、これまた白いカーテンからすかされている月の光が、唯一の明かりだった。薄暗い部屋の中、僕のベッドの傍らに、誰かが立っている。

背の高い、白い服を着た人。その人は、カーテンをすかして月が見えるかのように、じつと薄布の先に焦点を合わしているように見えた。ふと、その人が僕に気付き、僕の顔を覗き込む。何か言っているように思えたが、僕には聞き取れなかった。

「……………」は効いてるはず……………」「意識のかけらが……………」。「……………」などと言っていた気がしたが、僕は眠気に耐えられなくなり、重いまぶたを閉じて、まどろみの中へと沈んでいった。

ぱつちりと目を開け、天井を見据える。木の梁がめぐらさされていて、隅のほうにクモの巣がはられている。太陽の光が窓から柔らかに差し込み、床に四角いタイルを張っていた。

布団を引きはがし、起き上がる。ベッドのわきには剣と着替えが置かれていたが、それは記憶にある置き方とは違っていた。

僕は昨日、意識を失った。それは、最後の記憶が迫りくる触手であること、そして僕はこうして生きているということから容易に思いついた。ということは、また一僕の知らない僕……………)

になったということだ。

自分の手を見つめる。その手は一見すると何も汚れは付いておらず、きれいに見えた。だが、僕は知らない間に、この手を黒い血に染めている……、そう考えると、背中に冷たいものが走った。

「マリアも大変なものを連れてきてくれたものね。」不意に、廊下から声がきこえた。

「本当よね、何だって黒魔法使いなんて……。」

「そんなものを協会の中に連れ込むなんて、神への冒瀆にはならないのかしら。」最初に言った一人が不安そうにつぶやいた。僕は知らず、息をひそめて聞き耳を立てていた。

「でも、アンネ達を助けたのも彼なのよね。」別の一人が言う。

「いやよ、私は認めないわ。そんなの、たまたま彼がそこにいたっただけでしょ。そもそも、彼が探してたのは、一緒にいた女じゃない。」

「クリスって言ったっけ、あのこ。もしかして、彼女も黒魔法使いなんじゃない……。」

その言葉が言いきらぬうちに、僕は扉を勢いよく開け放った。協会の人たちは突然のことに驚き、小さく悲鳴をあげる者もいた。

「クリスはそんな人じゃない。彼女を悪く言うのはやめてくれませんか。」僕は努めて冷静に言おうとした。だが実際は語気を荒げ、剣帯を手に握りしめたまま、彼らを睨みつけていた。

彼らは壁に張り付いてできるだけ僕から離れるようにしていた。僕は彼らをしばらくじっと見つめていたが、やがて視線を離し、クリスのいる部屋へ向かった。後ろで、彼らが声をひそめて会話を再開した。

クリスの部屋を軽くノックする。だが、返事はない。もう起きているのだろうか。

「お連れの方なら、食堂にいらしていますよ。」振り向くと、そこ

には白い服をまとった、男の人が立っていた。

ほっそりと女性のような体つきに、袖口に向かって袖が広がっている服を着ている。僕と同じくらいの年齢に見えるが、目じりや頬のしわからして、見た目よりも年をとっているらしい。

「あなたは？」

「ああ、お会いするのは初めてでしたね、失礼しました。私は、この司祭を務めています、ヴァルターと申します。以後、お見知り置きを。」深々と頭を下げる司祭に、僕もあわてて頭を下げる。

「こちらこそ、二日も泊めていただいて、ありがとうございます。」

「いえ、助けを求めるものに手を差し伸べるのが、私たちの使命ですから。それに、あなたはそのお返しに信徒たちを救ってくださいました。協会を代表して、お礼を申し上げます。」司祭はまた深々と頭を下げた。

「そんな。僕はただ、クリスを助けたかっただけです。」

「でも、結果信徒も救ってくださいました。たとえそれがあなたの意志でなくても、私はあなたに感謝します。」司祭は柔らかな笑みをたたえ、僕を見つめた。僕は居心地の悪さを感じ始めていた。幸い、それは長く続かず、司祭は僕がここに来た目的を思いださせた。

「そうだ、連れの方を探しているのだね。どうぞ、私には構わず。」

「それでは、お言葉に甘えて。教えてくれてありがとうございます。」「僕は足早に食堂へと向かった。僕は背中をじっと見つめている、司祭の視線を感じていた。

クリスはすでに食事を終えていた。食堂では、まばらに散らばって談笑する人たちの姿があった。

僕が入ってきた瞬間、その声が一瞬途切れた。だが、また何事もなかったかのように会話を始める。しかし、明らかに僕が気になるようで、チラチラと見ては、僕がそちらを向くと、何も見てないか

のように視線を泳がせる。

「おはようイエリシエン。」クリスは席についてマリアさんと何か話していたようだった。

「おはよう、クリス。もう食べ終わったのかい？」

「何言っているの、もう朝食の時間はとくに過ぎてるわよ。」クリスはあきれ顔で言った。

「そうだったのか、全然気付かなかったよ。」

「そうだと思いついて、ちゃんと残しておきましたよ。」マリアさんは自分の席に置いてあったパンを僕に差し出した。

「私の分はもう食べたので、遠慮しないでくださいね。」マリアさんは付け足すように言った。僕はパンを受け取ると、遠慮なく食べた。パンをみて、急に空腹をおぼえたからだ。

パンをほおばっていると、ネイさんがほかの信徒と部屋に入ってきた。

「おはよう、ネイさん。」ネイさんと目が合い、僕は声をかけた。だが、ネイさんは僕から露骨に視線をそらした。意識を失った次の日、人が僕に見せる表情を浮かべて。

僕がどういう顔をしていたのかはわからないが、クリスは言った。「イエリシエン、気にすることないわ。」僕の答えはこうだった。

「クリス、僕が昨日何をしたのか、何をしてしまったのか教えてくれないか。」途端、食堂の声が絶えた。今度は静寂が長く続いた。

「イエリシエン、それは……………」

「聞かせてくれ。」クリスはまだ何か言いたげだったが、あきらめたように首を振った。

「イエリシエン、あなたは昨日、魔物に殺されそうになって、それで……………」

クリスが話し始めると、その場の話し声がやんだ。僕が魔物を召喚する場面や、司祭を殺した下りでは、小さく悲鳴を上げたり、僕に魔よけの印を結ぶ者もいた。マリアさんはうつむいたまま、顔を上げない。クリスは淡々と、事実を語った。僕はじっと、うなづく

でもなく、クリスの話を聞いていた。

クリスが話し終わると、席をたち、戸口へと向かった。

「イエリシェン、どこに……」

「散歩に行ってくる。大丈夫、すぐに帰るよ。」僕は振り返らず、その部屋を後にした。

うつむいて、代わり映えのしない石畳の道を、ぼんやりと歩く。

協会を逃げるように抜け出し、あてもなく。街は昨日地下で起きたことがなかったことのように、明るく、平和だ。人々は日々の仕事に精を出す。自分の役割をこなしてゆく。

僕はまた、人を殺した。それが僕の役割であるがごとく、当然のように。意識を失うたび、誰かを傷つけている気がする。そのうちまったく関係のない人まで手に掛けてしまうかもしれない。そのとき手にかけてしまうのは、きっと……

出店の店員が僕に声をかけようと近づいてきた。だが、彼は何も話しかけずにそそくさと逃げるように去って行った。ふと、噴水に近付いて、自分の顔を見る。写ったのは、恐怖と怒りの交じった、狂人のそれだった。僕はため息をついて噴水の縁に腰かけた。

どうすればいいのだろうか。僕が僕であり続けるために、自分でなくなりたいために。僕は意識を失った時の場面を思い起こしてみた。それはどれも、僕の命の危機に関係している。それはどういうことか。

もしかして僕は、潜在的に死の危険に直面した時、それに頼っているのではないのだろうか。死にかけても、彼に、もう一人の自分に任せれば大丈夫だと、心の奥では思っているのだとしたら？ 知らず、歯をかみしめた。

とんだ甘えだ。その甘えで、僕は人を殺している。そう、僕を知っていた人さえも。このままではだめだ。このままでは、前に進めない。

面をあげて、太陽を見上げる。真上に上がった太陽はしっかりと、

まばゆい光を地上に放っていた。

僕は立ち上がり、来た道を戻り始めた。一つの決意を胸に秘めて途中、先ほどの店員が話しかけてきた。

「兄さん、あんた、昨日街中駆け回ってた人だろ。その顔だと、あんたの恋人は見つかったみたいだね。」

「恋人だなんて。ただの仲間です。」

「まあまあ。で、再開した記念に、この指輪をプレゼントしたらどうかね？二つあるから、その人と一緒につけなよ。」僕は苦笑いを浮かべた。

「すいません、お金がないもんで。」

クリスは協会の礼拝堂にいた。僕は信徒たちの祈りを見ているクリスの隣に座った。

「ただいま、クリス。」僕は声をひそめて言った。

「イエリシェン！？どこに行ってたの？あれから二時間以上たつたよ？」クリスも声をひそめた。

「心配掛けたみたいだね。大丈夫、本当にその辺を散歩してきただけだから。……そろそろ街を出ようと思う。」

「もう？だってこの街にはまだ少ししか……。」

「司祭が僕のことを知っていたということは、僕がそういう人物だつて言うことだ。彼のような人間が、この街にこれ以上いるとも思わない。」

「イエリシェン、そんなことは……。」僕はクリスの言葉を遮った。

「それに、これ以上マリアさんに迷惑はかけられない。出来れば今すぐにでも出たいんだ。」

「今から！？だって、食糧とか荷物が……。」僕は自分のわきに置いておいた袋を持ち上げた。

「食糧なら買っておいた。僕の荷物は五分もあればまとめられる。」僕はクリスの目をじっと見つめた。しばらくして、クリスは観念し

たわと苦笑いを浮かべた。

「十分。私だって女よ、それくらいは頂戴。」

「並んでからどれくらいたつかしら。」クリスは目の前の行列をうんざりした目で見つめている。僕が協会に戻ってからすぐに発ったというのに、関門の荷物の点検で、えらく時間を取られていた。

「太陽の位置からして、一時間くらいかな。」僕は空を見上げた。太陽が、のろのろとして全く進まない僕らをくすくす笑っているように思えた。

「まったく。これじゃあ、日が沈む前に街を出れないわ。入るときはあんなに早かったのに。」

「それはマリアさんがいたからじゃないかな。それだけ協会の信頼は高いんだよ。」ふと、本当にこれでよかったのかという思いがよぎった。せめてマリアさんに、一緒に旅をした仲間に別れぐらい言えよかったのかもしれない。紙切れ一つを部屋に置いてくるのではなく。

「いい人だったね、マリアさん。マイペースで、ちよつととろい感じがしたけど。」クリスは言った。

「そうだね、でも、けがを治してもらったり、それに料理もおいしかった。」旅の間に作ってもらった食事を思い浮かべる。思わず、顔がほころぶ。

「料理のつくりかた、教えてもらえばよかったかも。」クリスは思案顔でうなづいた。

「そうになると、毎晩の食事が随分と楽しみになるね。」

「何、私のは楽しみじゃないってこと？」クリスがきつと僕を睨んだ。

「そんなことないよ、クリスの料理はいつも楽しみにしてるよ。」僕はあわてて言った。

「ほんとうに？」

「ほんとうに。」クリスがじつと見つめる。ぼくは視線をおよがせ

た。しばらくそうしていたが、やがてクリスは視線を離し、はあ、とため息をついた。

「まあいいわ。それより、これからどこにむかうつもり？」

「たしか、このまま東にむかうと、ダブルに着くと思ったけど。」

「王都か。ずいぶん遠くまで来たものね。……そうだ、王都に行く途中に、グロツクっていう彫刻で有名な村があるの。寄ってみない？」

「彫刻の村か……。いいけど、どうしてそこに？」

「旅人がよく立ち寄る村なの。もしかしたら、イエリシエンのことを知ってるかも……。」「クリスは最後まで言い切らなかった。遠くで、呼んでいる声が聞こえたからだ。

「ま、待つてください。」

「マリアさん!？」僕はあわてて後ろを振り返ると、重そうな荷物をガチャガチャと音を立てながら、急いで走ってくるマリアさんの姿があった。

マリアさんは僕らに追いつくと、疲れ果てて荷物をドサツと地面に下ろした。

「マリアさん? どうしたんです? この荷物は?」マリアさんは答えようとしたが、息が切れてまともな会話ができなかった。しばらく息を整えたのち、マリアさんは何とか聞こえるほど小さな声で言った。

「実は、ラビさんのことを、第二皇子のヘイル様にお伝えしたところ、彼の最後と、私に直接礼がしたいと、王都まで来るようにとの連絡がきまして。」「クリスが驚いて叫んだ。

「第二皇子ですって!？」クリスが突然叫んだ。その言葉に、周りの人が驚き、注目を集めた。クリスは顔を赤らめ、下を向いた。

「あの、第二皇子ってだれですか?」僕はためらいがちに尋ねた。

「ヘイル様を知らないんですか!？」マリアさんはすごい勢いで僕のほうに向きなあった。

「え、ええ。」「マリアさんは心底驚いた顔をしていたので、何かお

かしなことでも聞いたかと思った。

「ヘイル様は、この国の第二皇子にして、アングマルとの戦において、常に先陣に立って武功を立てていらっしゃいます。加えて、容姿端麗にして、常に民を気に掛ける姿は、国中に届いております。」

「本当に私たちを気にかけているか、わからないけどね。」クリスは幾分ひねくれたように言った。

「お会いになればわかりますよ。非常にやさしいお方です。」マリアさんはクリスに受け合った。

「で、その方とラビさんにどんな関係が？」

「それが、ラビさんの治療を頼んだのは、ほかならぬヘイル様なのです。ヘイル様は、ラビさんが傷ついた現場に居合わせて、それを哀れに思い、私にラビさんを癒すように頼まれたのです。」

「なるほど。じゃあ、これからダブールにいくんですね。」

「ええ。それで、以前東に向かつて旅をしているとお聞きしたので、もしかしたらご一緒できるかと思ひまして。」

「確かにダブールにはいきますが、先にグロックに立ち寄りますよ。それでよければ……。」

「構いません。実は、一人で旅するのが不安で……。でも、お二人と一緒に旅をしたら、全然怖くなかったです。だから、お願いです。一緒に旅をさせてください。」マリアさんは深々と頭を下げた。僕はあわてて言った。

「そんな。こちらこそ、よろしく願ひします。マリアさんがいると、心強いですから。」

「料理が楽しみただけなんじゃないの？」クリスが意地悪く笑って言った。

「ちょ、クリス。そんなことは、まあ、あるけど……。」僕はつぶやくように言葉尻を濁した。マリアさんは僕らのやり取りを見て、くすくすと笑い始めた。

第十三話：わかれえぬ仲間（後書き）

更新が二日も遅れてしかかなり適当でしません。それで、大変恐縮ですが、一週間か二週間ほど、更新を休ませてもらうかもしれません。実は私、学生の身で、課題やテストなどが山積み状態なんです。出来るだけ早く更新するようにはしますが、少なくとも来週は更新できないと思います。読者の皆様、本当に申し訳ございません。

第十四話：足跡

彫刻の村、グロツク。そこは人口が百にも満たぬ小さな村だが、王都から約一日ほどの距離であるのと、何より腕のいい彫刻職人が多数いることから、数多の商人や旅人が足を運ぶ、国でも有名な村だ。

「彫刻職人の半分はグロツク出身」と謳われるほど腕のいい職人を輩出するグロツク村は、今まで村で一番と認められた職人たちが作った銅像が村のいたるところに置かれており、それを見に来る観光客もいるくらいである。

が、しかし。

「こ、これは一体……」僕はその村の有様を見て、言葉を失った。それほどまで、クリスに聞かされた村の様子とは異なっていた。

建物はあちこちがひび割れ、壊れており、通りのいたるところで銅像のがれきが転がっている。人々はみな陰気な顔をしてがれきを片づけており、中には包帯を巻いた人も見られる。僕らが村に入ってきてても、疲れた瞳が一瞥するだけで、すぐに中空に視線を漂わせてしまう。

僕らがぼうぜんとあたりを見回しながら村の中に入っていくと、一人の老人が声をかけてきた。

「あんたら、旅の人かい？」頭に包帯を巻いた老人は、曲がった体を杖に預けながら、ゆっくりと近づいてきた。

「はい。王都に向かう途中でこの村に寄ったのですが……」僕はあたりを見回して言った。

「一体何があつたんですか？これじゃあまるで、襲撃にでもあつたみたいだ。」

「この村はオーガの襲撃を受けたんじゃ。」

「オーガ!?」クリスとマリアさんは同時に叫んだ。通りにいた村

人が、その言葉に体をこわばらせた。老人は悲しげにうなづいた。

「左様。つい昨日のことじゃ。突然、オーガがやってきて、この村に自分の銅像を建てると言いだした。無論、わしらは反抗し、追い払おうとした。じゃが、オーガには歯が立たず、逆に反撃されて家を壊され、銅像を打ち砕かれた。そして奴はあるうことか、村のシンボルである英雄アーサーの像を溶かし、今日までに自分の像を建てると言いおった。」

「そんな……。無理に決まっているじゃない！」クリスは怒りのこもった声で言い放った。

「王都には救援をおくったのですか？」マリアさんが尋ねる。

「若い者はみなけがを負ってしまったから、年寄りが行くことになった。一人向かわせたが、この村は馬を飼っているものが少なく、その馬でさえやつに食料として持って行かれてしまった。援軍が来るのはしばらくかかるじやろう。どちらにせよ、今日までに間に合うはずもない。」老人は村を見回し、ため息交じりにつぶやいた。

「こんな時、エナデイルがきてくれたらう……。」

「エナデイル!?」クリスが突然大声を出した。

「ねえ、それってもしかして、『疾風のエナデイル』?」クリスは自分でも信じられないという風に老人に訊ねた。

「なんじゃ、お主。エナデイルと知り合いか?」老人は目を丸くして言った。

「知り合いも何も、エナデイルは私の父です!」

「なんじゃと!? もしやそなたの名は、クリスカ!?」

「ええ、そうですけど……。」

「なんと!? よもやエナデイルの娘がこの村に来ようとは!?」老人は驚きもあらわに言った。その声を聞きつけて、建物や通りから人が集まってきた。

「エナデイルの娘だつて?」「どこだ、どこだ。」「おい、エナデイルの娘が来たらしいぞ。」村人は続々と押し寄せ、僕らは瞬く間に囲まれてしまった。

「これじゃあまともに話も出来ん。ひとまず、うちに来なさい。」
老人はあわてていい、僕らについてくるようにしぐさで伝えると、
人の波を押し分けながら村で一番大きな建物に向かっていった。

「どうする、イエリシェン。」クリスが僕に言った。

「どうするも何も、これじゃあどうしようもない。とにかくあの人の話を聞こう。村を襲ったっていう、オーガの話も聞きたいし。」
僕はそう答え、先頭に立って人ごみの中をかき分けて行った。

家の中は見た目通り広く、柱や梁、壁、暖炉など、いたるところに彫刻が施されており、建物全体が彫刻であるかのような印象を与えている。

村人たちはさすがに建物の中までには入ってこないが、出てくるのを待っているらしく、騒がしい声が入り口あたりから聞こえてくる。
「村の者が迷惑をかけたの。」老人がコップを盆に載せて部屋奥から現れた。コップからは湯気が出ており、どこか安らぎを感じさせるにおいが漂ってきた。

「皆、エナデイルに会いたがっておるんじゃ。かくいうわしも、彼に会いたい。」老人は大きくはないが、淵や側面にさまざまな獣や木々が森の中でいこう様子が彫りこまれたテーブルに盆を置き、僕らに一つずつ渡すと、大きな座りごちのよさそうな椅子に深々と腰かけた。肘掛には鷹をあしらった装飾がされている。コップを握ると、凹凸が感じられ、見てみると妖精が楽しげに跳ね回る姿が彫られている。

「一体、父はこの街で何をしたんですか。」クリスは受け取ったコップに口もつけず、たまりかねたように言った。

「エナデイルはこの村を救ってくれたんじゃよ。」老人はポケットからパイプを取り出し、火をつけはじめた。

「村を救った？」クリスは聞き返した。老人はパイプに火がつくと、煙を吹かした。

「実は。十年以上前にもオーガがこの村にやってきたことがあつ

たんじゃ。それも一匹や二匹ではない、やつらは大挙してこの村に襲いかかったんじゃ。」老人は一息つき、煙を深々と吸った。そしてゆっくりと紫煙を鼻から吹き出した。

「そのときやつらを追い払ったのがエナデルじゃ。彼はたまたま村に土産を買いにやってきていた。じゃが、オーガが村に大挙として襲ってくるのを見ると、臆することなく単身でやつらに切り込んでいったよ。その姿は、今でもありありと思い出せる。巨木のごときオーガのむれの中、小さな人間が一人立ち向かっていく様を。」老人は目を輝かせて言った。そのさまは、まるで子供が昔話を聞いている時のそれだった。

「彼はその二つ名の通り、オーガが密集する中を、一つの攻撃も掠めることなく、同志討ちをさそった。さらにやつらの膝を砕き、脛を割り、腱をたたき切った。オーガはたまらず逃げだしたよ。後には十数匹のオーガの死体が転がっておった。もしやつらが逃げ出さなければ、全滅させていたろうよ。」

「信じられません。たった一人で、オーガを、しかも十数匹も倒すなんて。」マリアさんはおもわずつぶやいた。老人ははつはと笑った。

「わしもその場に居合わせなかったらほら話だと笑って、信じなかったろうよ。だが、わしはしかとこの両目で見たし、この手でオーガの死体を埋めたよ。埋めたところは、今も村のはずれに丘として残っておる。」老人は言葉を切り、クリスをじつと見つめた。

「あの、私の顔に何か？」

「いや、彼はよく自分の妻と娘のことを話していたな。この村にきたのも、家で自分の帰りを待っていてくれる家族に土産を買いに来たんだ、と言っておったのを思い出したわい。いやあ、しつこいほど妻は美人だ、娘は妻に似て可愛いと、聞いてもいないのに村中の人間に言いふらしておった。」老人は懐かしげにクリスを見つめた。昔あった孫娘を見つめるように。

「じゃが、確かなかなかの娘じゃないか。彼が言うのもうなづけ

る。」クリスは顔を赤らめた。

「彼は元気かの？」老人が当然の質問をした。僕はクリスがびくつとからだを固くしたのに気づいた。ややあつて、クリスがくるしそ
うに口を開く。

その時、誰かが扉をたたいた。老人が入るよう言うと、一人の男
が入ってきた。

「村長、エナデイルの娘さんに渡したいものが……。」男
は布にくるまれたものを大事そうに抱えていた。

「次に来たときに渡すはずだったんですが、彼はあれから一度も来
なかったもので……。」男はクリスにそれを手渡した。ク
リスは予期せぬ重さに、思わず落としそうになった。

「是非、ご覧になってください。」クリスは言われるまま、布を取
り払った。

「……！」クリスの息をのむ音が聞こえた。

布の中から現れたのは、一人の女性の像だった。草花が咲き誇る
野原に立つその女性は、両腕に幼子を抱えている。銅像は手の大き
さほどしかないのにもかかわらず、表情までわかるほど精巧に作ら
れていて、幼子をやさしく見つめている女性は、クリスにとてもよ
く似ていた。

「いやあ、出来上がるのに五年もかかりましたよ。何せ村を救って
くれた英雄ですから、手を抜くわけにはいきませんからね。あ、別
に他の人は手を抜いているわけじゃないですから。あれ、どうした
んです？」

クリスは銅像を胸に抱き、顔をうつむかせていた。男は自分が何
か失礼なことをしたのかと、おどおどしている。マリアさんも老人
も、クリスがどうして泣いているのか分からず、声をかけるべきか
もわからず、僕の顔を見る。この場でクリスの涙の意味を知る者は、
僕ただ一人だった。だが、僕は首を振ることしかできなかった。

ふがいなかった。クリスのために、僕ができることは何もなく、
ただ手が白くなるほどこぶしを握りしめていただけだった。

突然、扉が勢いよく開け放たれた。
「村長！オーガが！」

第十四話：足跡（後書き）

どうもみなさんお久しぶりです。自分の都合で二週間も休んでしまい、申し訳ありませんでした。久々に書いたので前より下手になった気がしてしょうがないですが、すぐに前くらいになり、それを追い越して行きたいと思います。いつもと比べて短いですが、その分次の更新に反映できるよう頑張るつもりですので、ご容赦を。

第十五話：抗い

若者が知らせを伝えたまさにそのとき、腹の底を震わすような重低音とともに、地面に震えが走った。家にいくつもおかれている彫刻が揺れ、小さいのはいくつか倒れた。

「今のはいったい何ですか？」マリアさんが声を震わせて言った。

「オーガです。村長、早く何とかしないと。村が、銅像がつぶされてしまいます！」頭に包帯を巻いた若者は、いすに座ったまま動かない村長をせかした。

「何とかといったって、どうしろというんじや。相手はオーガ、わしらじゃ齒が立たん。皆に逃げるよう伝えよ。王都に向かうのじや。」老人はため息交じりに漏らした。その顔には、あきらめがにじみ出ている。

「村が、銅像が壊されるのを黙ってみていろ、と言うんですか！？」若者はいまにも老人につかみかかる勢いだった。実際、クリスに銅像を渡した男が止めに入らなかつたら、そうしていただろう。

今や足音はすぐそばまできていた。外で村人が悲鳴を上げるのが聞こえる。

「デック、村を作ったのは誰じや。銅像を作ったのは誰じや。物はいつか壊れる。そしてわしら、また物を作る。銅像はまた作ればいい、村はまた直せばいい。わしらは職人、作る者じやろう。戦う者ではない。」老人は若者にそう諭した。

突然、足音が家の前にとまった。次いで、かつて聞いたことがないほどの雄たけびが上がった。びりびりと響くその声は、家を揺らし、鼓膜を破らんばかりで、思わず皆が耳をふさいだ。

「オデノ像ハ、ドコダー！」まるで岩が山を転がるような声が叫んだ。思わず体がすくんでしまうようなその声に、デックと呼ばれた若者はたじろぎつつも、腰に下げたポーチから彫刻用のハンマーを取り出し、扉に向かった。

「やめろ、デック！村長の言うことが分からないのか！？」「銅像の男が若者の腕をつかんで引きとめた。デックは振り返り、男と向き合ってた。

「確かに村長の言う通りだ。でも、同じものは作れない。たとえそれが、おれたち職人でも。俺は今の村が、英雄アーサーの像がある彫刻の村、グロックが好きなんだ！」デックは男の腕を振り払い、外に飛び出して行った。

「デック！」男は呼びとめたが、若者の耳には届かない。

「あの馬鹿！あいつ一人でどうにかなるわけがないだろう。」「男はもどかしげに家の中をうろついているが、外へ飛び出そうとはしない。いや、一度扉に手をかけたが、すぐに離してしまった。その手と膝は小刻みに震えていた。

「客人、どちらへ！？」「村長が突然席を立てて扉に向かう僕を引きとめた。僕は剣がすぐに抜けるかどうか確かめながら答える。

「彼を助けに。僕がどれだけ役に立つかはわかりませんが。」「

家を出た僕は、一瞬自分が馬鹿なことに首を突っ込んでしまったのではないかと思った。

「なんて大きさだ、家と同じくらいあるじゃないか。」「

オーガは僕が想像していたよりもはるかに大きく、そして今まであった中で最も魔物と呼ぶにふさわしかった。

長く、大きな手足に、丘のように出っ張った腹。体色は灰をかぶったようで、腰布のみを見につけた体は、長年ためた垢のにおいが離れている僕にも流れてきた。肩幅は通りの幅ぐらいあり、家ほどもある体のでっぺんには、赤ん坊のように産毛の生えた頭が、とつてつけたようにちょこんとすえられている。それは、まぎれもなく、生物の範疇を超えた大きさだった。

「オマエ、オデノ像ハ、ドウジタ？」オーガは足もとで小さく震えているデックを見下ろして言った。その声はガラガラとくぐもって響き、聞き取りづらい。

「う、うるさい！お、おまえなんか怖くねえ、ただでかいだけだ。おまえなんかに、この村を、像を壊させるものか！」デックは自分を鼓舞するように雄たけびを上げ、オーガのむき出しの足に向かっていった。

「あぶない！」僕は叫び、走りだした。オーガがその長い腕をゆつくりと振り上げたからその手には、手で枝を折ったように無骨な、だが恐ろしい力を持つ巨木が握られている。

オーガが腕を完全に振りかぶり、力を込めた一撃を小さな人間に振りおろそうとしたその時、弦が震える聞きなれた音が聞こえ、オーガの顔に矢が突き刺さった。オーガは予想だになかった痛みに襲われて、思わず顔を手で覆った。音のしたほうに振り向くと、クリスが次の矢をつがえている。

そのすきに、デックが足もとにたどりつき、ハンマーを足の甲にたたきつけた。オーガはさらなる痛みにうめき、デックはその声を聞いて調子づいた。

「やれる、おれはやれるぞ！」デックはさらにもう一振りたたきつけた。オーガは叫びながら足をけり上げた。デックは巨大な足にけり上げられ、ボールのように宙に浮いた。彼の体が放物線を描きながら僕のほうに飛んでくる。

僕は落下点を予測してデックの体の下に入った。受け止めた勢いで地面に倒れたが、彼を落とすことは免れた。

「だいじょうぶですか？」

「畜生！腕が折れた！」デックは自分の右腕を見て、先ほどの勇敢さとは打って変わった、子供のような悲鳴をあげた。彼の右腕は、前腕の途中から肉を突き破って骨が飛び出している。血がとめどなく流れ、彼の服が血でみるみる赤黒く染まっていく。

「マリアさん、手当てを！」僕は痛みに呻く彼を支えながら、村長の家に向かって叫んだ。マリアさんはすでに家から飛び出してきたくれていた。

「巻き込んですみません。」僕は駆け寄ってきたマリアさんに謝っ

た。マリアさんは大丈夫ですよ、とデックに声をかけながら、首を横に振った。

「いえ。私はお二人が飛び出すのを黙ってみていることしかできませんでした。こんなことでも役に立てるのなら。」

「そんなことは。あなたがいるだけで、随分心強いです。……・後は頼みます。」僕はけが人をマリアさんに任せると、オーガのほうへ向きなおった。オーガは先ほどからクリスの矢に悩まされていたが、致命傷には至らないと気がつき、腕で顔を守って近付き始めた。

僕は剣を抜いて駆け出した。オーガは顔を隠していたので僕に気付かない。足に達すると、毛むくじらの巨木のような脛に切りつけた。だが、剣は澄んだ金属音を響かせただけだった。オーガが声を上げ、足をけり上げる。が、先ほどの戦いを見てそれを予測していたので、僕はすでに駆け抜けてかかとの後ろあたりにいた。

「なんて硬さだ。まるで岩みたいだ。」切りつけた感触は今まで闘ってきたどんな相手とも違っていた。骨ごと断つつもりで裂帛の気合を込めて切りつけたのに、骨をたつどころか肉を切り裂くことさえ満足にできず、脛にかすり傷ほどしかつけることができなかった。これでは痛めつけることはできても、致命傷にはならない。これを一人で、しかも群れを相手に戦ったなんて、クリスのお父さんはどれほどの手練だったのだろう。

オーガは自分の足に切りつけた新たな敵がどこにいるか足元を探し、僕と目があった。巨大な黒目が喜色をたたえて僕を見つめ、その巨大な足を持ち上げた。

巨大な影が僕を覆い日差しを隠した。そのあまりの大きさに、思わず息をのむ。

「イエリシェン！」クリスが叫び、はっと我に返る。灰色の足裏が既に頭上に迫っていた。

とっさに横っ跳びをするのと、足が地面に踏み降ろされるのはほぼ同時だった。巨大なその足が地面に踏み降ろされると、建物が揺

れるほどの地鳴りが響いた。立っていることができず、思わず尻もちをついた。

体勢を立て直し、攻撃に備える。真下から見上げると、その体は山のようで、果たして倒せるのだろうかという疑問が沸き起こり、臆病風に吹かれて逃げ出したくなる。実際、自分ひとりなら、とつくに逃げ出していただろう。だが、逃げればこの村は壊されてしまうし、何よりクリスが戦っているのだ、自分が戦わないわけにはいかない。

クリスがまた一射放ち、オーガがひるむ。そのすきに、今度はかかとを切りつける。オーガが怒り、また足を踏み降ろす。今度は余裕を持ってかわす。

クリスが矢を放つ、ひるむ、切りつける、よける。オーガが単純なせいか、そんな流れができ、戦いに余裕ができてきた。これが続く限り、負ける気がしなかった。そのうち、オーガも痛みに屈して倒れるだろう。そんな希望さえ抱き始めた。

しかし、それは愚かな希望だった。オーガが突然、足踏みを始めた。僕はあわてて足元から離れ、オーガに向きなおった。すると、オーガはすでに巨木を振りかぶっていた。

「よけて、イエリシェン！」クリスが叫び、いつの間にか集まっていた村人からも悲鳴が上がる。

振り下ろされる巨木。それは死、そのものだった。よけられない、という思いが頭をよぎった。その瞬間、急に視界が真っ暗になり……

「あああああああ！」僕は必死になって前に頭から飛び込んだ。髪の毛を巨木がかすめる。巨木が地面にめり込み、大地を揺るがす。間一髪、巨木をよけることに成功したが、うつぶせに着地したため、したたかに腹を打ってしまった。歯を食いしばって痛みをこらえていると、急に巨大な影が覆いかぶさった。見上げることなく、横に転がって踏みつけをよける。服の裾が足を掠め、やぶけた。回

転の勢いを利用して素早く立ち上がり、次の踏みつけをよける。その後もオーガは躍起になって僕を踏みつけぶそうとしたが、僕はすんでのところまでよけ続けた。途中何度も目の前が真っ暗になり、そのたびに自分を奮い立たせ、諦めることに抗った。

「お前には頼らない。僕は僕自身のものだ、お前になんか渡さない！」そう自分に言い聞かせながら。

しばらくして、オーガが攻撃をやめた。僕は息を切らしてオーガを見上げる。オーガはクリスのほうを向いていた。そして歩き始めた。

「クリス、逃げろ！」僕は叫んだ。だが、クリスとはどまって矢を放ち続けている。僕がもう一度叫ぼうとすると、クリスの後ろで村人があわてて逃げようとしているのに気づいた。

僕は毒づき、オーガの足に飛びかかると、ふくらはぎのあたりに柄まで通れと剣をつきたてた。

「……………！！」オーガの凄まじい咆哮に、体の内側がビリビリと震えた。オーガが悲鳴を上げながらがっくりと膝をついた。村人が歓声を上げる。

僕は剣を引きぬき、さらに深く突き刺した。オーガがまた悲鳴を上げる。

「イエリシェン！にげて！」クリスがふいに叫んだ。だが、僕はなぜ呼ばれたかわからず、左右を見渡してしまった。その結果、巨大な手が視界に入った瞬間、僕の体はオーガの足から弾き飛ばされた。時間がゆっくりと流れているように感じた。太陽の光が眼に入ったが、目は眩しさに細くならなかった。

壁にぶつかった瞬間、時は速さを取り戻し、感覚も戻った。衝撃が内臓を急激に押しつぶす。息がつまり、動けない。

「イエリシェン！」顔を上げる。巨木が足元から迫ってくる。目の前が真っ暗に……………。

地面すれすれから振りあげられた巨木は、民家の壁をまるで紙で

できたようにたやすく粉々に砕いた。破片がバラバラと空に巻き上げられ、音を立てて落下した。破片の雨が風に乗って離れている私たちに降り注ぐ。

「そんな、イエリシェンさんが……。」「マリアさんが絶望したようにつぶやくのが聞こえた。オーガがさも嬉しそうに岩が割れるような笑い声をあげた。

怒りが私の心に満ちる。残りなくなった矢をつがえ、力いっぱい引き絞ると、相手の一点に集中し、離す。矢はオーガの目に見事に命中した。オーガの笑い声が悲鳴に変わった。

「きなさい化け物！まだ敵は残ってるわよ！」私は叫び、さらに矢をつがえた。オーガは目に刺さった矢を引き抜き、涙の止まらぬその目で私をとらえた。オーガには目に矢が刺さっても、小さなとげが刺さったのと同じようだった。それでも、私は二射目を放った。オーガが手のひらで平然と受ける。

「だめだ、矢ではあいつは倒せない！」「もうおしまいなのか！？」「早く逃げるんだ！」村人が慌てふためいて騒ぎたてる。オーガは立ち上がり、こちらに歩き出そうとしている。

私にだって弓ではオーガを倒せないのは頭ではわかっていた。だけど、逃げることは思いつきさえしなかった。

「イエリシェンを……！よくもイエリシェンを！」知らず、私は泣きながら叫んでいた。その私に誰かがしがみつく。

「クリスさん！だめです、早く逃げないと！」「マリアさんは必死になつて私を引っ張る。私はそれに抗う。オーガが一步步き出した。そのときだった。

「こつちだ、木偶の坊！」突然聞きなれた声が聞こえ、オーガが声のほうを振り向く。私たちもそちらに視線を移した。

「……がぁ！」気合を振りしぼってがれきをどける。あたりは粉塵に満ち、よく見えない。どうやらオーガは僕を殺したと思っっているらしい。だが、実際は、巨木は僕を掠める程度で上にそ

れ、壁を粉々に砕いただけだった。僕はその下敷きになったのである。それ以上の追撃はなく、煙の先にいる灰色の体がたちがるのが見えた。

何とかがれきから抜け出そうと左腕を動かそうとしたとき、激痛が走った。見ると、自分では絶対に動かない方向に腕が曲がっている。

だめなのか。僕ではだれも守れないのか。彼に、もう一人の僕のがなければ、僕はこんなにも無力なのか。絶望に力が抜け、首を後ろに垂らす。と、二階に上る階段が眼に入った。そのとき、ふいに考えが浮かんだ。荒唐無稽だが、こうしてがれきに埋もれているよりはましな作戦が。

何とか右手と体をくねらせてがれきから抜け出すと、ふらふらしながら階段にたどりつき、手すりにもたれながら一步一步のろのろと上がる。人々の悲鳴が聞こえ、クリスの声が聞こえた。体の底から力が湧きあがり、階段を駆け上がる。

二階に上がり、さらに屋根裏部屋のはしごを登る。片手では登るのが大変だが、顎を使って何とか上がりきった。

クリスの声が聞こえた気がし、窓に駆け寄って外に出た。

予想した通り、オーガの頭が目と鼻の先にあり、ほとんど同じ高さだった。しかし家からは約二メートルほど離れている。その間には当然空があるのみだ。よせばいいのに下を見てしまい、足がすくんでしまう。やはりぼくには……。

「……逃げないと！」逃げ惑う村人の阿鼻叫喚の中、マリアさんの声がかすかに聞こえた。そちらに目をやると、マリアさんがまだ弓を構えて戦う意思を捨てないクリスを無理やり引っ張ってこうとしている。足の震えが止まり、ためらいが消えた。

「こつちだ、木偶の坊！」僕は叫び、そしてとんだ。もう前しか見なかった。

オーガがこちらを振り向く。僕は雄たけびを上げながら、渾身の力を込めてオーガの額に剣を柄まで突き立てた。骨が砕け、柔らか

い脳みそに達したのがつかに伝わる。オーガの動きが止まり、僕は剣にぶら下がった。

オーガは糸が切れたように突然力が抜けて膝をつき、そのままゆっくりと横に倒れ始めた。迫りくる民家。僕は剣を握る手に力を込め、ギョツと目をつぶった。

ズシーンと音を立て、オーガが家に倒れた。バリバリと雷のような音を立てて家がつぶされ、粉塵が舞う。シーンと静まり返る群衆。「やったのか……？」「今、一体何が……？」「さっきの男が飛んで……。」

私は走り出していた。私は、自分の見たものが信じられなかった。突然屋根の上に現れ、そしてオーガに向かって飛んだイエリシエンの姿を。涙がほほを流れ、風に吹かれて飛んでいく。真実を一刻も確かめたくて、足を速める。

オーガは民家に頭から倒れていた。あたりには破片が舞い、どうなっているのか分からない。マリアさんが追い付き、ぞくぞくと村人が押し寄せてきた。

「イエリシエン！」私は叫んだ。お願い、返事をして。

「……。」沈黙が答える。村人たちがため息を漏らす。わたしはあきらめきれず、粉塵に包まれたがれきの中に踏み入ろうとした。

そのとき、煙の中に人影を見出した。イエリシエンが体中に着いた粉を払いながら粉じんの中から現れた。彼は私を見つけると、いつもの照れているような苦笑いを浮かべて言った。

「ただいま、クリス。」

「イエリシエン！」感極まって、私は彼の体に飛びついた。

「いで！」突然イエリシエンが叫んだ。私はあわてて彼から離れた。

「ごめんなさいイエリシエン、痛かった？」

「ごめん、ちょっと左腕が折れてるみたいでさ。」イエリシエンは本当に申し訳なさそうに言った。その言葉を聞き、すぐにマリアさ

んが人々の間を縫ってあらわれた。彼女はすぐイエリシエンの左腕を診た。

「少し時間がかかりますが、すぐに治せます。とにかく、どこか安静にできるところに移動しましょう。」マリアさんがイエリシエンの手を引いて、村人たちの中を進んでいく。村人たちは二人を通すようにさつと道を開けた。

「なあ、あんた、名前はなんていうんだ？」村人の一人が尋ねた。

「イエリシエンと言います。」

「この村に新しい英雄が生まれたぞ！その名もイエリシエン、オーガ殺しのイエリシエンだ！」訊ねた村人が声高に叫ぶと、村人たちは歓声を上げた。

「イエリシエン！イエリシエン！イエリシエン！イエリシエン！」村人たちは足をふみならし、彼の名を叫ぶ。イエリシエンはまた恥ずかしそうに苦笑いを浮かべている。その姿を、私は笑顔で見送っていた。

その歓声の中、一つだけ異なる声を上げたものがいた。

「おい、あれを見る！」最初は数人が見るだけだった。だが、男の言葉に振り向いた隣が固まっているのに気付き、やがて皆がそちらを向いた。そしてその光景に言葉を失った。

「……………うそだろ……………？」誰か一人がつぶやいた。

森が村に向かってきていた。いや、オーガの群れが、村に向かってまっすぐ進んできていた。

第十六話：屈服、そして……。

それは一見すると岩の林に見えた。灰色の体に不釣り合いな頭。

満身創痍になりながら何とか倒した相手が、群れをなして近付いてきている。それはさながら死が形になって押し寄せてきたかのように思え、先ほどまで祝勝ムードに満たされていた空気は、一瞬にして絶望へと変わっていた。

「そんな、やっと倒したのに。」「あいつらあんなにいたのかよ！」
「今度こそ終わりだ……。」「そんな声が口ぐちに上る。皆一様にうろたえ、途方に暮れている。」

「マリアさん、腕は治りそうですか。」切迫した空気の中、周りと同様慌てふためいているマリアさんは、僕の言葉を聞いてもきょんとしていた。僕はもう一度言った。

「この腕を、あいつらが来るまでに治せますか？」

「え、あ、それは無理です。骨折を治すには十分ほかか……。」
「って、イエリシェンさん!?」マリアさんはガバツと顔を上げ、心底驚いた表情を浮かべて僕を見つめた。

「そんな、このけがでは……。」「マリアさんは抗議の声を上げたが、僕はそれを途中で遮り、クリスに言った。」

「クリス。マリアさんと一緒に皆を避難させてくれ。僕が時間を稼ぐ。」僕がそう言ってオーガの群れに向かおうとすると、クリスが二の腕をつかんで引きとめた。

「何言ってるの、あなたも逃げるのよ。」クリスはいつもの有無を言わせない目で僕を見つめたが、僕は首を横に振った。今だけはクリスの言うことは聞けない。

「ただ逃げても、オーガの足じゃすぐに追いつかれる。ましてや村人全員だ、その足はさらに遅い。誰かが時間を稼ぐ必要があるんだ。」

「だったら私も残るわ。」クリスは頑として譲らなかった。彼女な

らそういうとわかっていた。そう聞いてうれしさも感じていた。だが僕は厳しい口調で指摘した。

「君の矢はもう尽きてる。それでどうやって戦うつもりだ。」彼女の矢筒を指す。そこには、もう一本だって矢は残ってはいなかった。僕はさらに容赦なく言った。

「第一、弓じややつらを倒せない。かすり傷程度だって無理だったじゃないか。」

「でも……。」

「足手まといだ！君まで守る余裕はない。早く行くんだ。」僕はどなった。初めて彼女に対して怒りの表情を見せたかもしれない。

「イエリシェン……。」「クリスは予期せぬ態度に面食らっていた。僕は声を和らげた。

「早く行ってくれ。頼む。」僕はそれっきり、返事も聞かずに走りだした。彼女が最良の選択をしてくれるだろうと信じて。

僕はちょうど村のはずれでオーガ達を出迎えた。家ほどもあるオーガ達が三十匹ほど、半円状になって並んでいた。その中の一体、ひとときわ大きく体中に傷跡のある風格たつぷりのオーガが地鳴りのような声を出した。

「オイ、ニンゲン。オデノ仲間ノ像ハドコダ？」そいつはまるでアリを見るかのようにかがみこみ、僕に体に不釣り合いな大きさの、だが僕の体より大きい顔を近づけた。いろんな動物と魚を混ぜて腐らせたようなひどい息が顔にかかった。

「銅像？オーガの銅像なんて誰も作らない。」僕は声を張り上げてどなった。オーガ達に少しでもおびえてるとは思われなくなかったからだ。

オーガ達はしばらく沈黙した。だが、やがてとどろくような笑い声を上げ始めた。

「ヤッパリウソダ、アイツガ銅像ナンテモツテルハズガナイ。」先ほどのオーガが言った。

「ソレデ、アイツハドコダ？カクレタノカ？」なおもガラガラと笑いながら仲間と言う。仲間たちもガラガラと笑った。

「お前たちの仲間なら、おれが殺した。」瞬間、オーガ達の笑いがやんだ。

「ナニ？」ずいと、巨大な顔が、怒りをみなぎらせた顔を僕にまた近づけた。僕は街のほうを指差した。建物に突っ伏しているオーガを。

オーガの中から咆哮が上がった。いや、それは彼らの慟哭だったのかも知れない。彼らが巨大な涙を流し始めたからだ。

[illegible]

巨大な足が持ち上がる。考えることはなかった。そんな余裕はなかった。影から逃れるように走り出す。だが、逃げた先にいくつも影が先回りをする。真上の空気が押しつぶされてくるのを感じた瞬間、僕は唯一日差しの際こむ場所に向かって飛び込んだ。

一斉にオーガの足が地面にたたきつけられた。土ぼこりが立ちこめ、視界を奪い鼻や口に入り込んでくる。オーガ達も煙で分からな
いらしく、あしをふみしめたままうごかそうとしない。僕はあと一
メートルもないくらい近くに降りてきた足の小指を突き刺した。が、
切っ先がほんの少し刺さっただけで、たいした効果を上げられない。
むしろ、自分の生存を悟らせてしまった。刺されたオーガが足を
上げ、もう一度踏み降ろす。それは何とかかわしたが、仲間のオー
ガも僕が生きていることに気付いてしまった。

オーガ達はどずどずと踏みつけ始めた。それは彼ら位の視点から見たらありを踏みつぶすようなものだったろうが、ありである僕にとつてそれは、巨木が降り注いでいるかのように思えた。しかも土煙が視界を悪くし、次はどこによければいいかという一瞬の判断が鈍る。

よけ損ね矢は寝た砂利が僕の体を削ってゆく。体はもう限界だと悲鳴を上げ、疲れが四肢を鈍らせる。その度にまぶたが重くなり、頭に声が響く。

俺に代われと。僕では無理だと。それはいら立ちを含んだ声で、事実を告げていた。

彼の言うとおりだろう、僕にはこいつらを倒すことはできない。やられるのも時間の問題だ。

「分かっているならなぜそう意固地になる必要がある。俺なら造作もなく殺せる。お前に死なれるとおれも困る。」

つぶろうとするまぶたを無理やりこじ開け、オーガの攻撃を紙一重で交わす。はねた石ころが額を切り、血が眉間を伝う。

「僕は僕のものだ。ほかの誰でもない、たとえ君が誰であろうと、僕は僕でありたいんだ！」雄たけびを上げながらオーガに突っ込む。巨大な大木が振り下ろされる。もうよける力はない。それでも、僕が僕のままで死ぬのなら……。

「うぬばれるな、お前はたかが……。」

街道にさしかかろうとしたその時、それまでひっきりなしに続いていた地鳴りが突然やんだ。皆の足が止まり、後にした村のほうを見やる。かすかだが、群れをなすオーガ達の姿が見えた。

誰も何も言おうとはしない。音がやんだということが、何を意味するのか。その答えは明確すぎるほどだったから。

「ねえ、どうしてあの人だけ村に残ったの？」子供のこの言葉が沈黙を破った。それは子供にとってただの質問だったが、村人たちの心に深く突き刺さった。あわてて母親が小さい声で諭す。しんと静まり返った中で、親子の会話は筒抜けだったからだ。

「あの人は自分の身を呈して私たちを逃がしてくれたのよ。」

「どうしてあの人がそんなことをする必要があるの。村にはこんなに人がいるのに、戦えるのはあの人だけなの？」子供はさらに母親に尋ねた。そこには遠慮などなく、罪悪もない。ただの疑問がある

だけだった。だが……。

「それは……。」答えに詰まる母親。二人の会話を聞いていた村人たちは、皆一様にうつむいてしまった。

「……。クリスさん！？どこにいくつもりなんですか？」マリアさんが驚きもあらわに言った。私はたまたま弓を持ってきていた人に、矢だけもらって矢筒におさめているところだった。

「私は戻る。その子の言うとおりだわ。イエリシェンだけ戦う必要なんてない。」私は矢筒のひもが緩んでないか確認し、走っても揺れないように体に密着させた。

「そんな。イエリシェンさんも言ってたじゃないですか！弓じゃやつらを倒すことはできないって。」

「そうね。でも、注意を引くことぐらいはできる。それだけでも時間稼ぎはできるわ。」私はそっけなく答え、村に戻るうとした。

「クリスさん！」その手をマリアさんがつかんだ。

「イエリシェンさんを残してきたのがつらいのはわかります。でも、今あなたが行ったからって、何も……。」

「そんなのわかってる！」私は思わず叫んだ。マリアさんが驚いて手を離す。

「そんなの分かっている。これは私の自己満足にしかない。時間稼ぎすらできないかもしれない。でも……。」

「それでも、何もしなかったことを……、イエリシェンのそばにいなかったことを後悔したくない！」私は走り出し、村へと向かった。イエリシェンを置いてきてしまったその場所へと。

クリスが走り去るのを見つめていた村人の一人が言った。

「彼女の言う通りだ。私は村に戻って戦う。」

「私も」「おれも」「俺も」「俺もだ」次々と名乗り出る村人たち。「どうして彼らばかり戦う？俺たちの村だ、俺たちが戦うべきだ！」最初に言った男が村長に申し出た。村長はしばらく思案顔で考え込んでいたが、やがて深々とため息をつき、そして言った。

「わしたちは、もしかしたら英雄に甘えるようになってしまったのかもしれない。困った時は英雄が助けてくれると、わしらがたたく必要はないと、どこかで思いこんでいたのかもしれない。」村長はくの字に曲がった体を起こし、朗々とした響きを込めて言った。

「わしらの村はわしらが守る。旅人ばかりにいいところを持つていかれるな！皆、いくぞ！」

「オオオオオー！」村人全員が、鬨の声を上げた。

「死ンダカ……？」群れの中でひととき大きなリーダーが棍棒代わりの木を振り下ろしたオーガに尋ねる。訊ねられたオーガは、振り下ろした巨木を持ち上げると、手首をひねってたたいた面を見ようとした。そこにはつぶれた肉がくっついて……。

「！？」オーガは驚きのあまり固まった。つぶれた肉がくっついているはずのところには、小さな人間が、まったくの無傷でぶら下がっていたからだ。よく見ると、そいつは巨木に剣を突き刺してぶら下がっている。

そいつは剣を引き抜き、まっすぐオーガの手首に飛び降り、落下の勢いを利用して剣を深々と突き立てた。

「！！！！！」オーガが断末魔の悲鳴を上げた。その声はあたりを満たし、仲間たちの鼓膜にびりびりと響いた。イエリシエンはそのまま傷口を広げるように剣を何度も突き立てた。動脈が切られ、噴水のように、いや間欠泉のように血が噴き出す。

「コ、コノ野郎！」仲間がいきり立って棍棒をイエリシエンめがけて振り下ろす。イエリシエンはにやりと笑うと、手首から飛び降りた。オーガの棍棒が仲間の手首に向かってたたきつけられ、オーガの硬い骨が折れる、岩が落ちたような音がした。折れた所から骨がむき出しになり、滝のような血が流れ出す。オーガは手首を抑えて必死に血を止めようとするが、血はとめどなく流れ、ついにふらついたと思うと膝をつき、そのまま地面に倒れた。

オーガ達は先ほどの余裕もつけ、仲間の死体をぼうぜんと見てい

る。

「くつくつくく……」不意に、不敵な笑い声を耳にし、足元を見る。イエリシエンは、苦悶の表情を浮かべて死んでいるオーガをさもおかしそうに笑ってみつめている。それを見てオーガは怒り、一体がイエリシエンを踏みつぶす。もう一度、怒りのままに原形をとめないほどしゃんこにしてやろうと勢いよく足を振り上げる。土煙の中から自分の足の甲があらわれる。

「！」そこには、つぶしたはずの相手がいた。足が腰辺りまで上がり切った瞬間、イエリシエンは飛びあがった。振りあげられた足の勢いは異常なほどのジャンプ力を彼に与え、イエリシエンは一気にオーガの肩へと飛び移った。オーガが思わず肩に乗った相手を見ようと首をめぐらすと、イエリシエンはオーガの太い、しかし柔らかい喉を、黒い何かで切り裂いた。オーガは叫ぼうとしたが、それは声にはならず、ぱつくりと開いた喉笛から大量の血とともに空気となって漏れただけだった。オーガは両手で喉を押さえたが、がっくりと膝をついた。今度こそ殺してやろうと仲間が巨木を振り上げると、既にイエリシエンの姿はなかった。

「ドコダ、ドコイツ……ギャア！」近くにいた一体が悲鳴を上げた。ほかの仲間がそのほうを向いた瞬間、近くにいた一体も悲鳴を上げ、足を抑えた。足の甲には無数の切り傷がいつの間にかつけられていた。さらに連鎖するようにやられたオーガの近くの仲間から悲鳴や呻きが漏れ、一体がたまらず手で足の甲を抑えた。「アアア！」足もとで待ち構えていたイエリシエンが、下ろされた手首を突き刺した。

「ギャアアアアア！」突き刺されたオーガは、剣がつきたてられているだけにもかかわらず、先ほどやられたオーガよりも凄まじい悲鳴を上げた。そいつはもう片方の手で手首を抑えようと動かすも、その手は鈍く、震えていた。何とかもう片方の手首を抑えたオーガは、さらに悲鳴を上げた。イエリシエンがもう一方の手首も切り裂いたのだ。オーガはどうすればいいか分からず、交互に片方の

手首を抑えていたが、やがてまっすぐ倒れ伏した。もうもうと土煙が舞い、またしてもイエリシェンの姿を見失うオーガ達。

「オマエ、何者ダ？」族長が土煙に消えたイエリシェンを探しながら叫んだ。返事はなく、しばらく沈黙があたりを満たした。オーガは気持ちの悪い汗をかいていることに気付いた。そしてすごく気分が悪い、怒りとも、悲しみとも違う感情が、オーガ達の心を満たしていた。

「オマエ、オーガニ何ヂタ？キブンヨクナイ、スゴクヨクナイ！」オーガ達は初めて自分たちが経験する感情が分からずいら立ち始めた。

土煙の中から冷たい声が響いた。

「それは恐怖だ。お前たちは俺に対して死への恐怖を感じてるんだよ。」

「キョウフ？ソレハナンダ？オーガ、ソンナコトバナイ。」オーガはめくらめつぽう土煙が立ち込めているあたりを踏み荒らした。さらに土煙が舞う。だが声は続いた。

「俺にはいろんな二つ名があつてな。魔剣士、暗国將軍、黒の鎧、闇衣やみころも……。ほかにもたくさんあるが、おれが最も気に入ってる二つ名がある。」土煙がはれ、踏みつけられてぼぼこの、ひびだらけの地面があらわになる。が、そこにイエリシェンの姿はない。

「冥土の土産だ、今からお前たちを殺す男の名前を教えてやる。」また声が聞こえ、オーガ達が驚いてあたりを見渡す。自分たちと同じ高さから声が聞こえたからだ。

最初に声の主を見つけたのは族長だった。そいつは、族長の耳元で言ったのだ。族長が首をめぐらすと、目の前には小さな人間が、族長のほうを見ようとせす、ぽかんとしたのオーガ達に向かつてまるで臆することなく悠然と立つている。

「俺の名はグラム。死神グラムだ」男の腕が動き、黒いものが見えたかと思うと、族長の目に鋭い痛みが走り、それはさらに深く、脳

まで達して、族長の思考は痛みに塗りつぶされた。

「うそ……。」むらのはずれについた私は目を疑った。

巨大なオーガの軀がいくつも地面に転がっている。遠くに逃げ去ってゆくオーガ達の姿が見える。そしてその光景の中、夕日を受けて屍の上に立っている一人の男の姿。

イエリシエンでないのはすぐに分かった。顔を見ればすぐにわかる、優しさのかけらもない、無慈悲で、氷の刃のように冷たく相手を傷つけるような瞳。見た目で分かる自信と尊厳、そして人を見下すような態度。そして何より、右手に携えているあの、黒い何か。それが剣であるのは明らかだが、形状さえ定かではない。

彼は私に気付くと、骸から降りてゆっくりとこちらに向かってきた。

「あなた、イエリシエンじゃないんですよ。」彼は返事をせず、まっすぐに向かってくる。

「イエリシエンを返して。その体は、あなたのものじゃない、イエリシエンの……。」突然彼は私の首をつかみ、締め始めた。「な、なにを……。」私は首をつかんでいる手首を両手で引きはがそうとしたが、彼はさらに万力のように首を締める力を強くした。

「貴様、前にもいったらう、あいつから離れろと。おまえのせいで危険に巻き込まれると。それを聞かなかった結果がこれだ。見る、あいつは意地を張ってお前を守るうとし、俺に変わることをさえ抗って左腕をやられた。オーガの群れと闘ってるときでさえ、お前に危害を加えるよりはと死を選びやがった。貴様は危険だ、あいつにとって、おれにとって危険な存在だ。」彼は手に持った黒い剣を私のお腹につき当てた。切っ先らしきものが触れたと思った瞬間、急に寒気がし始め、体の力が抜けていくのを感じた。

「どうだ、つらからう。俺も無駄に殺して騒ぎを起こしたくはない。だが、拒むと言うなら……。」さらに剣を押しつける。服

を貫き、直接皮膚に剣が触れる。

「ああああ！」それは異常な感覚だった。先ほどよりもすごい勢いで力が抜けていく。まるで真冬のような寒さだ。血の気が一気に引き、手足が震える。急に意識が遠のき始める。でも、

「・・・・・・・・いやよ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・なんだと？」

「嫌と言ったのよ！あなたみたいなやつがいるなら、なおさら離れるわけにはいかないわよ！」私はあらんかぎりの力をふりしぼったが、か細いささやき声を漏らしただけだった。

「仕方ない。」男はギュツと剣を握り、今度は剣を突き刺そうとした。

と、急に彼は首をつかんでいた手を離した。そして、まるでなにかと争うかのようにもだえ始めた。私が咳こみながら彼の様子を見ていると、後ろから足音が聞こえた。

振り返ると、村人全員が何かしら武器になるものを携えてやってきていた。彼らは驚いてオーガ達の骸を見ていたが、すぐにもがく彼に気付いた。

男は今、何かと力比べをしているようにぶるぶると震えていた。

「貴様、おれに抗う気が・・・・・・・・？お前はたかが一部分にすぎないんだぞ・・・・・・・・！あの女はお前にとってもきけ・・・・・・・・。」

「お前にクリスは殺させない！」突然、均衡が崩れたように体をのけぞらせ、イエリシエンが叫んだ。と、体がぐらつとふらつき、イエリシエンはそのまま後ろに倒れかかった。私はあわてて腕を伸ばし、彼の体を抱えようとしたが、支えきれずに一緒に倒れた。

「・・・・・・・・クリス？」ぼんやりとして、イエリシエンがつぶやく。

「イエリシエン、大丈夫？」

「ああ。それよりも、君を傷つけてしまった。すまない、絶対にこ

うならないようにと誓ったのに。」

「そんなことはどうでもいいわ、あなたが生きてくれてたんですもの。それより傷の手当てを……。」

「はい、すぐに。」と、いつの間にかマリアさんがすぐそばにいた。かなり暗い顔をしている。

「腕以外にも細かなけががたくさんあります。とにかく治療しないと。」マリアさんが祈りの言葉を唱え始めた。やがて小さな傷がゆつくりとふさがっていき、イエリシエンの苦しそうな顔もだんだんと穏やかになっていく。しばらくして、マリアさんが詠唱をやめた。「細かな傷は全部治しました。ですが、骨折は時間がかかります。どこか別な場所で……。」

「だったら私の家を使ってくれ。」と、村長が申し出てきた。

「英雄のためにぜひとも使ってくれ。いいだろ、皆の衆。」村長はいい、村人は歓声でこたえた。

第十六話：屈服、そして……。（後書き）

二日も遅れて申し訳ありません。終わりも力尽きてしまい、かなり適当になってしまいました。とにかく早く仕上げようと思い、こんな形になりました。

最近反省点ばかりです。しかも改善できてないorz
読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしております。締め切り守るひとつですごいなあ。

第十七話：宴の中で

ばちばちと乾いた木が爆ぜ、火の粉が夜空へと舞い上がる。下火になった焚火から上がるそれは、まるでほたるのようにはかなく、ずっと星空に溶けて行った。

火の粉を夜空を見上げた目線を下げ、辺りを見渡す。宴は消えなかったその焚火と同じように静まり帰り、皆酔いつぶれて寝てしまっている。時折小枝が折れるような乾いた音が焚火から聞こえる。

村長の家でマリアさんの治療を受け、外に出てきた僕らを待っていたのは、歓声だった。村人たちが半円になって入口を取り囲んでおり、僕らは突然囲まれてしまっていた。

「な、何!?」びつくりしておもわずクリスは言った。歓声を上げる村人達の間を縫って、小さな老人がひょっこりと現れた。

「いやはや、驚かせてすまない、旅人がた。いや、村を救ってくれた、英雄のかたがた。今日わしらは、不幸にもまたオーガの襲撃を受けた。だが、たまたまこの村に来た旅人に村を救ってもらった。わしらはそなたらを英雄と呼び、夜毎に子供に話して聞かせ、語り継ぐことでしょう。」

「英雄だなんて……。僕にそんな資格は……。」
言いかけた僕の言葉を、村長は遮った。

「謙遜なさらずともよろしい。そなたは村を救ってくれた。そのことに、わしらは感謝しておるのじゃ。のう、皆の衆。」村長は僕らを囲んでいる村人たちに振りかえった。村人たちはうんうんとうなづいた。

「わしらはそなたらにお礼をしたい。そこで皆で考えた。何かわしらでできることを。そこで、これを作ることにした。」そう言つて老人は後ろの村人に視線を送った。すると、村人たちがさつと道を作り、布にくるまれたものを重そうに持っている数人が前に出てき

た。彼らが僕らの前までそれを持ってくると、村長は布を取り去った。

それはこの村を見事に再現した銅の置物だった。ただ違うのは、中央に大きなオーガの像が立ち、その足元には弓を構えて戦うクリス、後方で傷をいやしているマリアさん、そして……。

「分かりますか？ここにるのがあなたです、イエリシエン殿。」
村長が指差した場所、オーガが驚きの表情を浮かべているその視線の先。民家の屋根に、オーガに飛びかかろうとしている僕の姿があった。

「時間がなかったもので、かなり大まかに造ってしまったのじゃが、今度はこれのもっと大きいのを作って、街に飾ろうと思っておる。

クリス殿、そなたの父の像の隣にな。」

「父の像があるんですか！？」クリスはまたも驚いて言った。

「あたりまえじゃ。そなたの父はこの村の最初の英雄じゃぞ。村人全員で三年がかりで作った。まだ見ておらんようじゃから、後ほどゆっくり見てもらおう。その前に……。」村長は群衆に道を開けるように指示し、僕らに通りが見えるようにさせた。通りには、うずたかく積み上げられた薪が中心に据えられ、それを囲むようにして丸太を横にした椅子が設置されている。薪のすぐ近くにはテーブルがあり、その上に、豆のスープや、鳥を丸ごと焼いたのやキノコと野菜をとるところに煮込んだシチューなどを入れた大皿やなべが、所狭しと置かれていた。

「今夜は宴じゃ！存分に飲み、食べ、騒いでください！」村長が高らかに言い放つと、村人たちはおおっと声を上げてこたえ、僕らの手を取って丸太に座らせると、皆食べ物や飲み物を僕らに突きだした。

「さあ、食べてください！」村人の勢いにたじろぎつつも、促されるまま料理に手をつける。

「どうです？」

「とても美味しいです。」わあと歓喜の声を上げる村人たち。

「旅の方、今宵はたくさん楽しんでください。」「あなたは俺たちの英雄だ!」「屋根から飛び降りるなんて、さすが英雄は違うなあ」次々と村人が押し寄せては僕に賞賛を浴びせ、食べ物を手渡す。薪にはいつの間にか火がつけられ、大きな炎が空に向かって立ち上っていた。しばらくして数人が焚火を中心に踊り始めると、次々と人が加わっていき、そのうち僕らも連れて行かれ、見よう見まねで踊りをした。皆一様に満面の笑みを浮かべて僕に笑いかける。

その笑顔が、痛かった。

焚火は当初の勢いを失い、小さな篝火となっていた。暗がりにはぼんやりと見える黒い塊は、酔いつぶれて寝てしまった人たちだ。

足音がして、うつむいていた顔を上げると、篝火を背に歩いてくる人影が眼に入った。

「クリス……」。「僕はクリスに呼びかけた。クリスは千鳥足で僕のところに来ると、隣にどつかと腰をおろした。

「のんでるうゝ? いえりしえゝん?」それつが回っていなかった。

「酔ってるね、クリス。」

「酔ってるにきまつてるでしょう? どれだけのまされたとおもって……」。「不意にクリスは言葉を詰まらせ、手で口を押さえた。

「だ、大丈夫?」僕は彼女の背中をさすった。彼女は背中を丸めて耐えている。しばらくして、彼女は体を起こした。

「だ、大丈夫。ありがとうね。」

「いや、これくらいのこと……」。

「違うわ、さっきのことよ。私が逃げなかったから、屋根から飛び降りたりしたんですよ。」クリスは急にまじめになって切りだした。

「それは、ただあれくらいいいじゃないとあいつは倒せないと思ったからだよ。」僕は本心で言った。だがクリスは、本心の裏を見抜いていた。

「そんな無理して倒す必要はなかったでしょ。村の人は逃げてたし、あなただってあいつは死んだものと思ってたから、逃げることだっ

てできたじゃない。」鋭い。ここまで鋭いと、本当に酔っているのか疑問に思えてくる。

「イエリシェン。私は心配なの。あなたはやさしい人。それはすごくいいことだけど、いつかあなたは、その優しさで死んでしまう気がして、すごく怖いのだ。」

「今日だってそう。たった一人でオーガ達と闘って。私だって戦えたのに……。」

「あれは君が危ないとおもったから……。」

「私は役に立たないってこと？」クリスはむくれて顔を近づけた。白い柔らかなそのほほが、ほんのりとあかくなっている。

「ク、クリス、近いって。」あわてて距離を置く。これ以上そのほてった顔で近くにいられたら、どうにかなりそうだ。

「近いと何か問題でもお？」そんな気持ちを知ってか知らずか、クリスにはじり寄ってせつかく開けた間を詰め、息がかかるくらい近くに顔を近づける。ほほにかかるクリスの息は暖かく、アルコール特有の鼻を突くにおいがした。

「な、ないです……。」僕はいつになく押しの強いクリスにたじろいでいた。

「ならばよろしい！」クリスは満足し、体を起こした。僕はほっと胸をなでおろしたが、どこかでそのことを残念がっている自分もいた。

「もつと……ても……。」クリスはぼそりと何かをつぶやいたが、僕は聞きとれなかった。

「え？なんだい？」僕はクリスに聞いたが、クリスは答えない。

「クリス……？」返事がない。どうしたのかと思っていると……。

「……すー……すー……。」小さく寝息を立てていた。どうやら寝てしまったらしい。

「随分と寝付くのが早いな……。ここで寝たら風邪ひくよ、クリス。」軽く肩をゆする。が、全く起きない。仕方なく、彼女の

背中と足の下に手を回し、抱き上げた。

「とと・・・・・・・・。思ったより重いかも・・・・・・・・。って、聞かれてたら起こるだろうな・・・・・・・・。」そうひとりごち、今日泊めてもらうことになった村長さんの家に向かう。

扉は幸いにも開いていて、苦勞することなく家に入ることができた。部屋の中は暗くてわかりにくい、外で闇に目が慣れていたので、案外すんなりと客間へ行けた。

村長さんの客間は一つしかなく、二つしかないベッドには、すでに先客がいた。マリアさんだ。何とかベッドまでたどり着いて力尽きたのだろう、行き倒れのように顔が枕に埋もれている。扉をあけっぱなしにしていたのも多分彼女だろう。ということは、それだけ彼女も飲まされたのだろうか？

ともかく入り口にずっと立っているわけにもいかず、空いているベッドにクリスをそっとおろした。そのままだと窒息しそうなので、体を何とかあおむけにし、毛布をかける。クリスにも毛布をかけようと振り返る。

「ん・・・・・・・・。」背後でクリスが小さく身じろぎする。寝ている彼女はあまりにも無防備で、可憐だった。いつものしつかりとした彼女とは思えないほどはかなく、かよわげで触れたら壊れそうなもろさを感じさせる彼女の寝姿をみて、自分がしたことに改めておぞ気が走った。

僕はクリスを殺そうとした。僕じゃない僕がそれをしようとしたことは、覚えていなくても感覚が告げている。彼女を抱き抱えたこの手に、首の感触がまだ残っている。

「皮肉だな・・・・・・・・。僕ほど英雄に遠い存在はないだろうに・・・・・・・・。」

人を救うどころか、守るべき人に手をかける。そのどこが英雄だろうか。あと少しで僕は、取り返しのつかないことをするところだった。あれだけ心に固く誓ったのにもかかわらず、僕はまたあの男に頼ってしまった。その結果、危うくクリスの命を奪うところだ

った。

クリスが寝返りを打つと、髪が顔にかかった。僕は彼女の顔に手を伸ばし、髪をさっと払った。

少し赤みがかっているのに、澄んだ色をしている茶色の髪。だが、今は長旅に痛み、本来の輝きを失っている。それだけ厳しい旅を、彼女は僕とともにしてくれている。

次にあいつに変わったとき、僕は抑えられる自信がない。そのとき僕は、クリスを……………」

「……………君をどう説得しようか……………」僕は小さくつぶやいた。

「ん……………」クリスが寒そうに体を丸めた。僕はほほ笑えみ、そっと毛布をかけたると、足音を忍ばせて部屋を後にした。

第十七話：宴の中で（後書き）

どうも、締め切りを守らないジョンです。もはや謝罪や反省が何の意味もなしていません。会社だったら首ですね。

作者の力量次第ですが、既に二章は佳境に入っており、余すところ数話ほどだと思います。あともう少し、気合を入れなおして挑みたいと思います。

第十八話：王都グリーン

村人に別れを惜しまれつつ、グロックを後にしてから一日がたった。王都に近付くにつれて、人の往来は激しくなり、たくさんの馬車が行き交い、地面には轍の跡を無数に残していく。道行く人たちの中には再会を喜び合って手を握り合う者や、道中の話を語り合う者、地方の情勢や作物の出来など情報を交換し合う商人などがいて、街道なのにもかかわらず、まるでイギリスの露店に迷い込んだように人がごった返していた。

「随分と人が多いわね。」クリスが肩にずれ始めた荷物をを担ぎなおしながらつぶやいた。

「こんなに街道がにぎやかなのは初めてだね。さすがは王都と言ったところか。」僕はうなづきながらクリスのつぶやきに応じた。

「それにしたって多くない？まるで王都に向かう人みんなこの通りに集めたみたいじゃない。」

「実際に、そうなんです、よ。王都グリーンに、入るには、この道からしか、だめなんです。」食器や鍋など料理道具をガチャガチャと鳴らしながら僕らの一番後ろを歩くマリアさんが言う。

「どうして？そんなの不便じゃない？」とクリス。

「王都グリーンは、防衛のために巨大な堀に囲まれていて、西に位置する正門しか出入り口がないんです。だから、東西南北王都に向かう道は、自然と、この道、に、合流、している、です。」マリアさんは重い荷物に息を切らしながら答えた。

「マリア、やっぱり荷物減らしてきたほうがよかったんじゃない？」その様子を見て、クリスが言った。

「いえ、もしものための備えは、必要、ですから。」マリアさんは首を横に振ったが、今にも荷物につぶされそうだった。

「そういえば、二人はいつの間に仲良くなったんだい？」僕はマリアさんが断るのも構わず、カバンからはみ出している鍋やお玉を抜

き取り、自分のカバンに移し替えた。彼女の歩みは僕らと同じほどになった。

「それは……ねえ？」クリスが後ろを歩くマリアさんににやりと笑って目配せした。

「はい。」マリアさんにもこつと笑う。

「？」

王都グリーンアン。それはサン国最大の街で、国王が直接統べる城下町である。街のぐるりを囲んでいるのは、丘より高い古木ナレスよりも高い城壁。さらにそれを深く、水を満たした堀が囲んでいる。堀の水は川から引いているので、水は清く、飲むことができるうえ、魚もいる。グリーンアンはその進んだ科学技術と優れた魔法の業とを掛け合わせ、堀の水を城下まで汲み上げている。これにより城内での作物の栽培が可能となった。巨大な城壁が城下町まで囲っているのは、そういう理由からである。

「で、こういうことになるわけ？」クリスはいら立ちを隠しめせずに言った。

「まあ、仕方ないよ。一ヶ所しかはいるところがないわけなんだし。」

「それにしたって、どれだけ待たされればいいのよ」クリスは忌まわしげに僕らを見下ろす城壁を睨んだ。

「でも、確かに遅いですよね。商人さんたちの様子からしても、いつもと違うようですし。」マリアさんが言う通り、商人たちはこの行列に関して何か話し合っているようだった。僕は耳をそばだてて商人たちの話を聞いてみることにした。

「オイ、この行列なんだがな、前にいたやつから聞いたんだが、どうも検問を行っているらしい。」列の前から戻ってきた商人が言った。

「何、誰か危ないブツでも持ち込もうとしたのか？」荷の番をしていたその商人の仲間が尋ねる。

「いや。どうも調べているのは荷じゃなくて、人らしい。」商人が答える。

「ユピテルあたりの悪党か罪人が逃げ出したりしたのか？それにしたって王都になんて……。」

「これは兵士たちが話してるのを聞いたんだが……。ちょっと耳貸せ。」商人は仲間に何か耳打ちをした。それを聞いた仲間が驚いて叫ぶ。

「なんだって！？あのくろ……ムガ。」

「馬鹿！声がでかい！」あわてて仲間の口をふさぐ商人。抑えられた仲間は手を振り払った。

「嘘だろ。あいつはあの戦いで死んだって噂だぜ。崖から落ちたって……。」仲間が興奮冷めやらぬ調子で言う。

「ああ、がけから落ちたのは本当らしい。俺の仲間に兵士の知り合いがいるんだが、仲間が落ちるのを見たと言っていたそうさ。だが、まだ死体は上がってない。おそらく下流に流されたみたいなんだが。」

「下流って、あの川は流れも激しいし、いくつも滝があるじゃないか！落ちた時に死んでいなくても、今頃魚の餌だろ。」

「まったく。まあ、お偉いさんは、やつが死んだ証拠がなけりやおちおち寝ていられないのだろ。俺から言わしてもらえば、存在しないものにおびえてるとしか思えないがね。」商人は鼻で笑った。

「亡霊におびえる子供ってか。だが、そんなに振り回される俺らの身にもなってもらいたいものだねえ。おりやのどがカラカラだよ。」

「まったく。宿に入ったら、冷たいビールでも飲むことにしようや。」列が動き始め、商人たちも馬車を進めた。僕らも列に沿って進んだが、途中で馬車と徒歩は二手に分けられて、彼らの会話をそれ以上聞くことはできなかった。

川のせせらぎが心にやさしく響く。道のわきには木々が植えられ、

建物と調和している。

「ここ、本当に街……?」クリスがあたりを見渡しながらつぶやく。ぼくも王都と聞いて、イギリスを整備、拡大したようなものだと思っていた。だが実際は、あたりに緑がそこかしこにあふれ、まるで森にいるような安らぎを覚える。耳を澄ませば、森の生き物たちの鳴き声さえ聞こえてきそうだった。

だが、さすがに王都と言っただけあって、イギリスほどではないにしろ、通りには人がたくさんいた。いや、通りが広いだけでイギリスぐらいの人はいるのかもしれない。道行く人たちの話し声がひとつの音楽のように通りを満たしている。

「まるで森の街だな。静かでありながら、騒然としている。まるで通りだけが街のような……。」僕は人の波に流されながら、街を歩いた。人であふれかえるというほどでないにしろ、流れが途切れることはなく、あたりの風景に見惚れて突っ立ってられるような状態ではなかったからだ。

街を歩いていると、ふと通りの反対側で、一斉に声が聞こえた。

そちらに目をやると、袖の長いローブに幅広の帽子、それに杖を携えた者たちが一斉に遠くの的に向かって呪文を唱えていた。

彼らが呪文を唱えた瞬間、的に向かってかざしていた彼らの右手が光ったかと思うと、こぶしぐらいの火の玉が現れた。

「凄い、魔法使いだ。」僕は立ち止まって二人に反対側を見るよう促した。僕が通りの反対側を指差すと、ちょうど火の玉が手から放たれて、的に向かって飛んでいくところだった。

「おお!」「わあ!」「すごい!」僕らの驚きの声のほかの人の声も混じる。よく見れば幾人かが立ち止まって魔法使いが使う魔法を眺めている。どうやらこれは市民にとって一種の見世物にもなっているらしかった。

飛んで行った炎はすべてがまっすぐ的に向かっていったわけではなかった。たいていは的の半分の距離までしか飛ばず、失速して地面に落ちたり、途中で形が崩れて消えてしまったり、まっすぐに飛

ばないでカーブを描いて、的には当たらないものもあった。

ただ一つだけ、消えたり形が崩れることなくまっすぐ飛んでゆく火球があった。それは的の中心にきれいにあたると、藁で作られた的に火がついて燃え上がった。観客と化している僕ら道行く人たちからおおと言う声上がり、的に当たらなかった魔法使いたちもあてた者をほめたえた。

「うむ、さすがは首席のソルシスだ。皆、彼女を見習ってもっと魔法を磨くように。」魔法使いたちの後ろに立っていた、ローブの上から赤い腰帯を身に付けた教師らしき人物が、魔法をうまく使った生徒をさした。観客から拍手が起こる。するとその魔法使いは優雅にこちらのほうを向くと、ローブの裾を持ち上げて宮廷風のお辞儀をした。

誇るようにお辞儀から体を起こした時、顎がツンと上がって帽子で隠れていた顔が見えた。金色に輝く髪に白い肌、つりあがり気味の眉は細く長いが濃く、僕らに小さくほほ笑んでいた。

「凄い、女の人なのにあんなに魔法を使いこなすなんて。僕らと同じくらいの年じゃないかな。」

「なんか高慢な感じ。」クリスが口を尖らせて言う。

「そうかな。礼儀正しいいい人だと思うけど。」

「あれは絶対そういうタイプよ。私だって、五十メートル先の的なら外さないんだから。」

「魔法と弓は違う気が……。」僕がそう言うと、マリアさんが僕の肩をそつと叩き、耳にそつとささやいた。

「クリスはイエリシェンさんが彼女をほめるから気に食わないんですよ。」

「へ？どうして？」

「それは……。」マリアさんが再びささやこうとする。

「ちよつと二人とも、何こそそしてるの？」クリスが咎めるように僕らを睨む。

「いや別に何も……。」と答えようとしたその時。

「オイお前！」突然声をかけられ、そちらのほうを向くと、街の衛兵がいつの間にか周りを取り囲んでいた。

「動くな。抵抗すれば殺すぞ。」彼らは槍の穂先を僕に向けて構えている。僕は何が何だか分からなかった。衛兵は明らかに僕を敵視しており、よく見ればやりを構える手が震えている。声をかけてきた男を見ると、表情に恐怖の色があった。

「あの、僕が何かしたんでしょうか？」僕は尋ねずには居られなかった。衛兵たちは異様に緊張しており、僕がまるで今でも飛びかかってきそうな猛獣であるかのごとく、槍を出来得る限り伸ばして穂先を突き付けている。

「き、貴様がまさか堂々とやってくるとは思っていなかったが、そうやって他人のふりをするつもりか。そんな手が通用すると思ったのか。」衛兵はわめいた。

「ちょ、ちよつと待って。一体何のことなのかさっぱり……。」

「うるさい！とにかく、本物かどうかわかるまで牢獄にぶち込んでやる。」衛兵たちは全く耳を貸さなかった。それどころか、僕を槍で囲んでいた衛兵の後ろで控えていた一人が、突然叫びながら槍を突き出してきた。

僕はとつさに身をかわしたが、あまりに突然だったために穂先はほほを掠め、鋭い痛みが走った。反射的に腰に手を伸ばす。今まで何度も何の前触れもなく戦いになっていたので、その行動はもはや当たり前になつてしまっていた。しかし、今回はそれが災いした。

「剣を抜くぞ！」「取り押さえる！」衛兵が一斉に槍を突き出してきたのだ。幸い、既に迎え撃つ状態になつていたので身を伏せてかわしたものの、そのまま槍が振り下ろされた。槍が突き出された時点で抜いていた剣でそれを防ぐも、数人がかりでは耐えられるはずもなく、次の瞬間には地面に叩き伏せられていた。さらにほかの衛兵が槍を突き出そうと身構える。僕はもはや袋の鼠だった。

「やめて！」クリスが衛兵たちの間を縫って僕の前に飛びこんでき

た。

「イエリシェンが何をしたっていうのよ！？いきなり襲いかかってきたのはそっちじゃない！」

「なんだ女、こいつの仲間か？」衛兵はクリスにも穂先を突き付けた。

「仲間と言っのなら、貴様も……。」衛兵たちはずいと槍を突き出す。

「やめてくれ！！」僕は必死になって叫んだ。途端、衛兵たちがびくつとして槍をひっこめた。

「わかった、言う通りにする。だが、その人は関係ない。連れていくのは僕だけにしてくれ。」僕は衛兵たちを刺激しないようゆくりと、息を吐くようにいった。手に握りしめていた剣を地面に置き、戦う意思がないことを示す。衛兵たちはじりじりと僕に近付き、僕の両手を縄できつく縛った。僕の両腕の自由を奪うと、まだ槍を油断なく構えてはいるものの、先ほどの緊張感が少し緩和された。

「イエリシェン、やっぱり私も……。」僕は振り返り、首を横に振った。

「大丈夫だよ。すぐに戻ってくるから。」

「行くぞ。」衛兵の一人が手首に縛った縄の先を持ち、僕を引っ張る。僕はつんのめって転びそうになったが、何とか踏ん張ってこらえ、歩き始める。逃げられないように衛兵が僕を囲んでいる。衛兵に連れられて歩く僕を通りの人々は誰がつかまっているのかと首を伸ばして僕を見る。

こうして僕は、捕らわれの人となった。

第十八話：王都グリーンアン（後書き）

お久しぶりです。

あまりにも遅れてしまったのでとりあえず上げたって感じです。

第十九話：尋問

兵士たちに連れられてグリーンアン城の巨大な城門を通り、城内へと連れてゆかれた僕は、荘厳な装飾が施された天窓や柱、思わず見とれてしまうようなタペストリなどに足を止める暇も与えられず、延々と地下に降りてゆく狭い螺旋階段を下って行った。両脇に兵士が一人づつ、前に数人、後ろに残りがついていた。下ってゆくにつれ、空気はひんやりとして冷たくなっていった。

手枷をはめられたまま、だんだんと湿っぽくなって滑りやすくなる階段をしばらく下って行くと、足もとがたいまつ特有の揺らめく明かりに照らされ始め、階段は終わりを告げて代わりに長い廊下があらわれた。片側に等間隔に並んだ扉には、鉄格子がはめられている。前にいた兵士のひとりが、長い通路に出た。通路の片側に、鉄格子をはめた木製の扉が、等間隔で通路のつきあたりまで並んでいた。鉄格子の部分から、その扉が普通より何倍も分厚いことに気付いた。唯一、反対側に設けられた扉はただの木製の扉で、作りも向かいの扉と比べるとひどく貧弱に見える。

前を歩いていた兵士の一人がその扉に入ってゆく。中で何か会話が聞こえたが、何を言っているかはわからない。だが、相手はかなり驚いているようで、時折大きな声が聞こえてくる。声が聞こえなくなつて間もなくして、入って行った兵士がもう一人の兵士を連れ出てきた。少しほがこけていて、ひよろりとした体格。手には鍵束が握られている。

彼は兵士に囲まれている僕をちらりと見やった。目が僕と会う。その目は何か、目踏みでもするような目だった。

「オイ、本当にこいつなのか。俺にはどうにもそう見えんのだが。」
鍵束を持った兵士は自分を呼んだ兵士に訊ねる。

「あなたも人相描きを見たでしょう。これ以上似ている奴なんていないはずです。」兵士は答えたが、それはやや上官に接するように

丁寧だった。

「確かに人相はそっくりだ。だがな、俺は生まれてこの方人殺しをあきるほど見てきた。そういうやつはな、雰囲気がほかの人間と違うんだ。とくに目がな。まるで獣のような目をしやる。」

「ところがどうだ、こいつは。俺たちの仲間をいくら殺したかもわからなくらいいかれた野郎だというのに、濁るところか澄んだ眼をしてやがる。俺にはどうにも、ただそっくりな奴を連れてきたようにしか思えてなんのだがな。」彼はそういうとまた僕を見つめた。僕は視線をそらすことはしなかったが、睨み返すこともしなかった。

「とにかく、早く扉を開けてください。こいつが本物かどうかは、これから判断するんですから。」

「ハイハイ、分かりましたよ。」兵士はけだるそうに鍵束にたくさんついた鍵を右手の指で一つづつ触っていくと、一つの力ギをつかみ、それを一番手前の扉に差し込んだ。かちりと音が響き、扉が開いた。

「入れ」後ろの兵士が僕の背中を小突く。僕は言われるまま、部屋の中へと入った。

中は小さな部屋で、木のテーブルとイスがふた組、部屋の中央に置かれているだけだった。部屋の奥に入っていくと、数名の兵士を残して、扉が閉められた。

「すわれ」先に部屋に入っていた一人が椅子を引き、座るよう促す。僕が座ると、対面に兵士が座った。よく見ると僕を連れてきた兵士ではなかった。

「これから尋問を始める。お前の名前は？」男は唐突に切り出した。「イエリシエンです。」

「違う、本当の名前を聞いているんだ。」

「本当の名前？あなたは僕が誰か知っているんですか？」

「お前は自分が誰か知らないと言うのか？」男は鼻で笑った。

「そうです。僕は、自分が誰か知らない。」

「ふざけるな！」男は突然、テーブルをこぶしで殴った。

「ふざけてなんかいない。僕は……記憶がないんだ。」男は威圧するように睨んできたが、やがて、男は自分から視線をそらした。

「そんなもの嘘に決まっている。どこから来た？どうしてここに来た？どうやって？何のために！」男は矢継ぎ早に質問を繰り返す。ぼくはそれに答えたが、全てうそだと決めつけられ、男は同じ質問を繰り返す。

「どこから、どうやって、どうして……」

どれだけの時間、日が過ぎたろうか。部屋は扉以外に出口はなく、光と言えば机と壁に一つだけともされたるうそくのみで、向かいの相手の顔すらぼんやりとしている。時間が分かるものは何もない。時折僕を尋問する男が代わる時だけが、時間の経過を感じる唯一のものだった。最初の男から何人目かわからない尋問官、はいまだに同じ質問を繰り返してくる。どこから、どうやって、どうして……。延々と続く問いに、僕の体力は限界に来ていた。まるで催眠術にでもかけられているみたいに、頭がふわふわして考えることが難しくなっていく。

「さあ答える、お前の名前は？」

「イエリシェン……」

「ちがう！お前の名前はそうではないだろ！」男がまたテーブルをたたく。

「なら僕の名前はなんだっていうんだ？あなたたちは僕に何と云わせたんだ？」僕は同じ質問にうんざりして、投げやりにかえした。部屋がしんと静まり返った。予期せぬ沈黙にとまどい、うつむいた顔をあげる。その場にいた全員がはつと身を固くし、衛兵たちは腰に下げた剣に手を伸ばしていた。僕は彼らとそうしてしばらく睨みあう状態になっていたが、やがて一人の兵士が沈黙に耐えきれず口を開いた。

「それはお前が一番よく知っているだろう、黒の鎧。」

「よせ！」仲間の一人がそいつの肩をつかむ。だが兵士は仲間の制止を聞かなかった。

「記憶がないだと？ふざけるな！お前がどれだけ俺の仲間を殺したか、忘れたとは言わせないぞ！ペギー、リン、ブラス、エルベス、カルラ……。みんなお前が殺したんだ、みんなお前が！」兵士は突然剣を抜いて飛びかかってきた。あわてて周りの兵士たちが取り押さえ、暴れる仲間をそのまま部屋の外へと連れて行った。

「あいつは仲間のかたきなんだぞ！」暴れていた兵士が外で仲間を叫んでいる。そのあと何か言っていたが、だんだんと声が遠くなつていき、よくは聞き取れなかった。

気まずい沈黙。だが、すぐにノックの音がその沈黙を破った。

「何だ。」尋問官が尋ねる。

「失礼します。その者の仲間だという者たちが、身柄を渡すようにと言ってきているのですが。」仲間という単語が僕の耳につきささる。クリス！マリアさん！

「仲間だと？そいつらも牢にぶち込んでしまえ。」尋問官が荒々しく告げる。

「それが……。追いつ返そうにも、その一人がどうも協会の人間らしく、しかもヘイル皇子からの正式な公文書を携えているんです。」

「何だと、皇子の公文書！？」尋問官が勢いよく立ちあがったために、さすが大きな音を立ててひっくり返った。「はい。何でも、皇子から命じられた任の報告に来たとのこと。……いかがいたしましたしょう？」

「どうするも何も、従うしかあるまい……。」「尋問官は眉間にしわを寄せている。その顔は、明らかに不満そうだ。

「ですが、こいつを野放しにするわけには……。」「

「分かっている！だが、相手は協会の人間、しかも皇子の公文書まで持っているのだ。下手な動きをすれば、協会ともめることになる。

この戦で、どれだけ我々が協会に借りを作っているか、知らないわけではあるまい。しかしこいつをそのまま返すわけには……。
「尋問官は何やらぶつぶつと独り言を始めた。兵士たちはこれからどうなるのだろうかと仲間内でひそひそと話している。その中で一人僕は、疲れ切った頭の隅でやっとここから解放されるのだろうかという淡い期待を抱いていた。だがその期待は早くも崩れ去った。突然扉が開き、兵士が入ってきた。

「で、伝令！ヘイル皇子が帰還されました！」

「なんだって！？」部屋にいた全員が異口同音に叫んだ。

「本当かそれは！？」

「はい。つい先ほど、二千五百の兵を率いて、遠征から戻られました。」

「二千五百！？残り二千の兵はどうした？」

「まだ詳しいことはわかっていませんが、今回の遠征で千三百の兵が失われたそうです。残りは国境警備の補強に回されました。」

「千三百だと！？それだけの兵が……。」「衛兵の中から自分の友人は大丈夫だろうかという声上がる。

「今回の遠征はかなりの痛手を被りました。ですが、それ以上の損害をアングマルに与えました。推定千五百の兵のほか、ベアハンドの異名を持つグルンベルド、投げ槍のデリシュを打ち破り、アングマル軍は国境付近から自国へと撤退してゆきました！」男が誇るように言い切った途端、部屋の中が歓声でびりびりと震えた。

「追撃は！？今こそ反撃のチャンスじゃないか！」衛兵の一人が言うと、他の者もそうだとはいやし立てた。

「それが……。ヘイル皇子は追討しようとしたのですが、ガナ皇子が深追いは危険だと判断し、ヘイル皇子を呼び戻したんです。」部屋の中でため息が漏れる。

「今こそアングマルを倒すチャンスだというのに……。ガナ皇子は慎重すぎるぞ。」兵士の一人がつぶやく。周りの兵士たちが注意するが、彼らもそう思っているらしく、強くは言わない。

「それで、皇子は今何処に？」

「今はガナ皇子の私室にて、遠征の報告をされております。」

「ヘイル皇子にお伝えしてください。件の人物とおぼしき者を捕えたので、急ぎ確認してほしいと。」

「仲間と言ってきたているもの達はどうします？」

「彼らも立ち合わせろ。皇子自らが認めたら、やつらは何も言えない。」尋問官は僕に目を向けると、にやりと笑った。

「喜べ、お前の尋問は終わりだ。皇子はお前の顔を見ている。どんな言い訳も通用しないぞ。」

第十九話：尋問（後書き）

読者のみなさん、お久しぶりです。随分と長い間更新せず、申し訳ありませんでした。ですが、夏がやつと終わり、普通の生活ができるはずですので、今週からどんどん更新していきたいと思います。よろしく願います。

第二十話：対面

「いつまで待たせるつもりなのよ！」私は城門を守る守衛に文句を垂れた。

「もうしばらくお待ちください、すぐに使いの者が来るはずですから。」兵士は決まり文句のようにすらすらと返す。その様子が気に食わず、さらにいら立ちを募らせる。

「すぐにすぐにつて、さつきからそればかり。でも、全然帰ってこないじゃないの。」

「クリス、落ち着いて。」

「落ち着いてなんかいられないわよ。イエリシェンが連れていかれてからもう三日たつわ。あなたはイエリシェンが心配じゃないの？」私はマリアに言った。言つて、すぐに後悔した。マリアが持つヘイル皇子の正式な文書と立場を利用してイエリシェンを助け出そうと言いだしたのは、他でもないマリアだったのだ。彼女だって、私と同じくらい心配しているはずなのだ。私はマリアのほうを振り返った。

「ごめんなさい。あなたに当たる気はなかった。」

「いいの。私だって、あなたと同じことをしたいもの。でも、今は待たなきゃ。」マリアはやさしくほほ笑んで、私を諭した。私はうなづき、私たちの来訪を告げに走って行った兵士が戻ってはこないかと、城の入口に目を凝らした。

すると、扉が開いて、中から兵士が一人、こちらに向かって走ってきた。先ほど城に向かった人物とは違うが、明らかに私たちに向かってくる。その兵士は、私たちの前まで来ると、こう告げた。

「案内します、ついてきてください。」

信じられないほど柔らかな、真紅のじゅたん。縁にはさまざまな紋様が金系によって編みこまれており、頭上で私の家よりも広い

この部屋を照らしているシャンデリアと、部屋のあちこちで燃えているたいまつを浴びて輝いている。

私は今、そのじゅうたんに膝をついて、二人の皇子にこうべを垂れていた。

兵士に案内されるまま、城の一室へと導かれた私たちは、なぜか謁見の間に通され、二人の皇子に会うこととなった。謁見の間は私たちが通ってきた廊下のように長方形の部屋で、白塗りの円柱が等間隔で立っており、それぞれの円柱にはたいまつがともされていた。たくさん的大臣や何やらがたくさんいると思っていたが、今はこの部屋には私たちと扉を守る兵士たち、そして玉座にいる二人の皇子だけだった。

「面を上げよ。」女性のように柔らかく、だが人を従わせる威厳をもった声。私はゆっくりと顔を上げ、声の主を見上げた。

数段しかない階段の上に空席の玉座がひとつ、その両脇に二人の皇子が並んでいる。

玉座の左手に立っているのは肩幅の広い、がっちりとした体つきをした青年だった。私たちが待つている間通って行った兵士たちの行列の先頭に立っていたの見ていたが、彼がヘイル皇子だということとはそれでもすぐに分かった。金色の髪はたいまつを浴びて、じゅうたんの紋様のようにきらめいていた。目は大きく、眉は太めでつりあがり気味。顎はがっしりとしていて首も太く、服の上からでもたくましい体つきをしているのがわかる。

玉座の右手に立っている男性は、対照的にほっそりとした体つきをしていた。あまり華美な装飾が施されていない、だが上質な布で作られた衣服をまとっている。髪はヘイル皇子と違い少し茶色がかった黒髪で、細く長い眉に少し小さめの瞳にメガネをかけている。唇は薄く肌も白く、おそらくヘイル皇子とそれほど歳も離れていないだろうに、眉間には皺ができて始めており、髪にも多少白いものが混じっている。ガナ皇子は、病でふせっている現国王である父に代わって、国政のすべてを行っていると聞いたことがあるのを思い出

した。

「ヘイル。この者たちはお前に命じられてここまで来たと言っているそうだが、間違いないか。」ガナ皇子がヘイル皇子に尋ねる。その口調は、兄弟にしてはやや冷たい印象だった。

「はい。確かに、私はそこにいる協会の女性に兵士の一人を癒してくれるよう頼みました。．．．．．やつに襲われて生き残った一人です。ですが、残念ながら兵士はなくなったと聞いています。その詳細を聞くため、ここに呼びました。．．．．．そちらの女性が誰かは存じ上げませんが。」と、私のほうをじっと見つめた。まっすぐに力強い目は、国の女性がこの人にあこがれるのも無理はないと思っただが、私は不思議とその瞳に心動かされることはなかった。

「彼女は、私の旅に同行していただいているのです。」マリアは皇子の疑問に答えた。

「マリアとは、ベルデンから一緒に旅をしています。」私は付け加えるように言った。

「女性二人だけで旅を？」ヘイル皇子が尋ねる。

「いえ。もう一人仲間がいます。」私はそこで深呼吸すると、二人の皇子をまっすぐ見据えた。場の雰囲気は飲まれて縮こまっているわけにはいかない。

「私がここに来たのはそのことをお願いがあるからなのです。私の仲間は、ここにきてほどなくして、突然兵士たちに連れていかれました。それからもう三日が経ちますがいまだに戻ってこず、連絡すらきません。彼は何もしていません。どうか、彼を開放してください。」私は一息に頭の中で暗唱していた言葉を言い切った。マリアが間髪いれずに歩み出て言う。

「私からもお願いします。私は彼と短い間ですが一緒に旅をしてきました。彼が罪人とは思えません。彼の身の潔白は、私が保証します。」マリアは胸に手を当てた。それは協会の人間が誓いを立てる仕草だった。

ガナ皇子がおもむろに口を開いた。

「君たちの仲間、名前は何という。」

「イエリシエンです。」私とマリアは口をそろえて言った。ガナ皇子はまたしばらく間を置くと、私たちに告げた。

「今、この国ではある人物を探している。生死次第で、この国の運命を左右するほどの人物をな。君たちのその仲間が、そうかもしれないのだ。」

「そんな、イエリシエンは普通の……。」私は反論しようとしたが、ガナ皇子がそれを遮るように付け加えた。

「勿論、人違いなのかもしれない。私たちが探している者の顔を知っている者は一人しかない。だから、確かめる必要がある。」

「でも、どうやって確かめるのです？イエリシエンさんがその人かどうかわかるのは、一人しかないのでは？」マリアが尋ねる。

「私がその一人だ。やつの顔を知っているのは私しかおらぬ。」ヘイル皇子は言った。

「今君たちの仲間をここに連れてくる。君たちには、それに立ち会ってもらいたい。人違いなら、彼を返そう。だが、彼が私たちの探している人物であつた場合は……。」ヘイル皇子は腰に下げた剣を静かに引き抜いた。

「即刻首を落とさせてもらう。」ぞつとするほど、冷たい声。相手を威圧させるその声音は、やはり彼も王家の血筋なのだと実感させられた。私はその気迫に気圧され、何も言えなかった。何より、皇子の有無を言わせぬ瞳が、反論を許そうとはしていなかった。

「ヘイル、ここは剣を抜く場ではない、対話の場なのだ。剣を収めよ。」ガナ皇子が横目でにらむ。

「申し訳ない、兄上。」ヘイル皇子は素直に従い、剣を鞘におさめた。私は部屋の張りつめた空気が解け、妙に安堵した。隣を見ると、マリアも同じように深く息をついている。

「話はすんだ。君たちの仲間を連れてくるとしよう。」ガナ皇子が玉座の向かいにある扉に立つ兵士達に合図を送ると、兵士たちはう

なづき、ゆつくりと扉を開いた。

少しづつ開いてゆく扉。私たちは首をめぐらして扉の向こうに立つ人物を見やった。扉が内側に開くと、そこには両脇に二人づつ、後ろに十数名の兵士に囲まれた、イエリシエンの姿があった。先頭に立って、彼の手枷のひもを握る兵士がひもを引っ張ると、彼はうつむいたままよろよろと歩み出た。今にも倒れそうにふらふらしながら、兵士たちに促されて一歩一歩柔らかな絨毯を進んでくる。

「イエリシエン！」私は彼に呼ばわった。彼が衰弱しているのはすぐに分かった。見たところけがはないようだが、優遇されていたようにも見えない。いつも少し跳ね上がっている黒髪は、今はしなだれていて前髪が顔にかかっている。

「クリス……」彼は立ち止まってうつむいていた顔を少し上げ、私のほうを見た。目には隈ができ、顔が土気色になっている。瞼は今にも閉じそうだ。

「もつと近くに連れてこい。」ヘイル皇子が命じると、兵士たちは立ち止まっているイエリシエンのわきをつかんで、半ば引きずるように玉座の前に連れていった。階段の前まで連れてくると、兵士たちはイエリシエンを離れた。イエリシエンはそのまま床に膝をついた。

「顔を上げる。」ヘイル皇子が今度はイエリシエンに命令した。その声は冷たく、緊迫していた。イエリシエンはうなだれたままそれには答えなかった。皇子は兵士に合図すると、一人がイエリシエンの髪をつかみ、顔を無理やり上げさせた。

イエリシエンはうめき声をあげ、玉座の脇に立つ二人を見上げた。その視線が、ヘイル皇子と重なる。部屋は静けさに包まれたが、それは殺気に満ちた沈黙だった。

ヘイル皇子が、口を開いた。

「やはり生きていたか、グラム。」

第二十話：対面（後書き）

どうも、ジョンです。夏が終わって二回目の更新となりました。知らないうちにセミの鳴き声が鈴虫に変わっています。本当はもう少し長くする予定だったのですが、どうも日曜日は時間がなさそうなので、少し短いですが早めに上げることになりました。

次回も少し短くなると思いますが、自分の中では二章の一番の山場だと思っているので、楽しみにしてください。

・・・・・・あまり過度な期待はしないでくださいね？

第二十一話：分離

「グラム………。それが僕の本当の名前………。」僕は噛みしめるようにその言葉をつぶやいた。

グラム。それが本当の僕。記憶とともに失ってしまった名前。ずっと探してきた、そのために旅をしてきた。そしてついに知ることができた。なのに、何の感動も、涙も出てこない。

今や部屋の空気は目に見えるほど張りつめていて、一触即発の気配が漂っていた。僕を取り囲む兵士たちの顔は先ほどにもまして陰しくなり、槍や剣を固く握りしめている。

横目でクリスたちを見ると、二人とも青ざめ、マリアさんにいたっては今まで見たこともないほどおびえた表情をしている。僕はグラムと言う人物を知らなかったが、二人も知っているほど有名で、かつ好ましからざる人物であるということは、聞かなくてもわかってしまった。

「貴様があれくらいで死ぬとは思っていなかったが、一体どうやって生き延びた。そしてなぜのこのことこの王都までやってきた。」ヘイル皇子が矢継ぎ早に質問を繰り返した。

「どうやってと言われても、僕にも分かりません。僕は記憶を失っていて、記憶を探すために旅をして、ここに来たのです。」僕は簡潔に答えた。この答えに納得するはずもないとわかっていたが、他にこたえようがなかった。

「どうあってもしらばっくれるつもりか。まあいい、連れて行け。すぐにその首をはねてやる。」ヘイル皇子は兵士たちに僕を無理やり立たせようとした。

「待つて！」クリスがそれ呼びとめた。

「ヘイル皇子、人違いです。彼が……。イエリシェンが、あの死神グラムのはずがありません。もしそうなら、どうしておとなしく捕まる必要があったのですか？わざわざ自分から死に行くよ

うなものです。たまたま似ているだけかもしれない……。」
「私が間違っている？」ヘイル皇子が冷たくクリスを睨みつけた。
「私はこの目で見たのだ、こいつの顔を、はつきりと！こいつが谷から落ちてゆくとき、兜が取れ、こいつと目があつたのだ。私はあの戦いから、こいつの顔を忘れたことなど一度もない！」ヘイル皇子は先ほどの殺気を、今度はクリスに向けていた。まるで燃え立つ炎のような殺気を、並の人間ならそれだけで身をこわばらせるような殺気を。

「私だつて見てきたわよ！イエリシェンがどんな人か、この目で、しつかりと！お人好しで、普段は頼りないけど、いつも誰かのために戦ってくれた。そんな優しい人を人殺しと一緒にしないで！」クリスは興奮のあまり立ち上がり、言い切るとはあはあと息を切らしていた。

その場にいる全員があんぐりと口を開けていた。先ほどから（僕がグラムだと言われた時も）何の反応も見せなかったガナ皇子でさえ、目を丸くしてクリスを見つめている。

それはヘイル皇子も例外ではなく、怒るところか、クリスの思わぬ反撃に明らかに面食らっていた。

それもそうだ、まさかこの場では何の権利も持たないただの旅人ただの女であるクリスに、王の次に偉い自分がまさか怒鳴り返されるとは、夢にも思っていなかったろう。これだけの暴言は、打ち首にされても文句は言えない。だがクリスは、何のためらいもなく言い返したのだ。それも僕のために。

うれしくなかったと言えはうそになる。だが、それよりも自分のせいでクリスが危険を冒してしまうことが、何よりも苦しかった。

だから、僕は言おうとした。彼女が僕のために何かして、これ以上立場を危うくしないためにも。「もういいんだ」と。だが、自分の口から出たのは全く違う、乾いた声だった。

「茶番は終わりだ」

「茶番は終わりだ」押し殺したように低く、冷たい声。それが兵士たちに囲まれたあの男から発せられたことで、少女の啖呵の驚きから、私は我を取り戻した。

この声だ。この声こそ、戦場で響き渡っていたあの男の声。勇敢な我が国の兵士たちを震え上がらせる声。確かに目の前の男は奴だった。だが、しぐさ、表情、声音、全てをとつても、あの死神と恐れられた將軍、グラムその人とは到底思えるものではなかった。自分でやつたと断定したが、戦場でのやつとの記憶とあまりにも違いすぎて、本当に別人なのかと迷っていた。もしくは、弁解の通り記憶を失っているのかも、と。

だが、ここにきて私は間違っていないとはつきり分かった。もはや目の前の男は先ほどの男とは違う。無論、顔が変わったわけではない。それどころか、腕を縛られ、兵士に囲まれて膝をつかされ、私に許しを請うようにこうべを垂れている。それでも、その全身からあふれ出るような殺気が、戦場で何度も感じたやつとの殺気が、眼前の男から発せられているのを感じる。それは私だけでなく、兵士たちも同じだった。兄上の近衛兵はともかくとして（彼らは既に剣を抜いて兄上をかばうように前に出てきている）、グラムを囲んでいた兵士たちが後ずさり、おびえている。今にもこの部屋から逃げ出そうとしている者さえいる。

「ついに本性を現したな、グラム。」私は剣を抜き、階段を一段一段下って行った。その間もやつから視線は外さない。

やつはうつむいていた顔を上げ、目にかかっている前髪の間から私を見つめた。黒い瞳。漆黒の闇のように塗りつぶしたような黒。先ほども確かに黒い瞳だったが、墨よりも黒いと感じさせるほどではなかった。唇が広がり、ぞつとするような薄笑いを浮かべる。

「あの丘以来だな、ヘイル。俺がいなくなつて、少しはやりやすかつたろう？」笑っているというのに、全くぬくもりを感じさせない声。まさしく死神と呼ぶにふさわしい男の声。

「減らず口は結構。貴様、どうやって生き延びた？」階段を降りた

ところで立ち止まる。両手を封じられているとはいえ、やつの間合いにうかつに近づくわけにはいかない。やつには黒魔法がある。

「さあな、おれは悪運が強いからな。だからこうして、お前の前に来れたわけだ。」

「貴様の演技には恐れ入った。それほど芝居がうまいとは思わなかったぞ。」一歩、ジワリとやつに近付く。

「何のことはないさ、あれはおれではないからな。俺自身であつて、おれではない。」

「オマエではない？　どういうことだ？」思わず、足を止める。やつの言っていることが全く分からない。

「後でじっくりと考えることだ。もつとも、そこにいる女は何となくでもわかつているかもしれないがな。」私からは目をそらさず、先ほど啖呵を切った少女を顎で指す。少女は男の変貌ぶりに驚いて、
.....

「また出たわね。あんたはいったい誰なの？　どうしてイエリシエンの体にいるの？　今日こそ教えてもらうわよ！」.....いなかった。どうしてか、彼女は男の変貌にも全く動じてはいなかった。

「お前は話を聞いていなかったのか？　俺がグラムだ。死神の異名を持つアングマル將軍、それが俺の正体だ。」

「そんなことはどうでもいいわよ！　いい加減イエリシエンから出て行って！」

「ど、どうでもいい.....。」私は思わずそう漏らした。

グラムをどうでもいい呼ばわりするこの少女は、いったいぜんだい何者なのだろうか？　もしかすると、ただの旅人ではないのかもしれない。

「.....全く、おれをどうでもいい呼ばわりするのは、恐らくお前ただ一人だろうな。いいだろう、この体から出て行ってやろう。ただし、」

「持つて数分しか生きられぬだろうがな。」突然、やつの体から黒い霧が漏れ始め、やつはもだえ始めた。まるで何かを体から出そう

としているように。

「ひいひい！黒魔法だ、魂を吸われるぞ！」やつの後ろに控えていた兵士の誰かが叫び、部屋を飛び出した。他の兵士たちもあわてて後を追っかけてゆく。私は霧に体が触れぬように注意しながらも、霧に隠れてゆくやつの姿を見失わぬよう、眼を離さなかった。

やがて霧は現れた時と同じように奴の体に収束していった。いや、正確には奴の傍らの人物へと戻っていった。

今自分の目で見ているのにもかかわらず、何が起こったのか、何が起こっているのか全く分からない。

突然イエリシエンの体から黒い霧が湧きあがった。それは見慣れた、イエリシエンがイエリシエンでなくなったときに出す剣のようなものを覆っている黒い靄とまったく同じものだった。ただ、それが剣ではなくイエリシエンの全身を隠してしまっただけの違い。これだけだったら、私は動揺すらしなかったかもしれない（以前の私なら動揺してしまったろうが、旅の間にいろんなことがありすぎて予想外のことに對しての耐性がついていた）。

だが、そんな私でも、目の前で起こったことが信じられなかった。「イエリシエンが……二人……？」私はつぶやいた。イエリシエンの体からわきあがった靄は、イエリシエンの傍らに集まりだし形をとったかと思うと、イエリシエンそっくりの、いやイエリシエンその人となった。ただ、靄の名残のように体が幾分はつきりしない感じがした。そして何より、既にふさがってはいるが、何かに深くえぐられたような傷跡がお腹の右側に生々しく残っていた。

「……ふう。何とも言えない感覚だな、やはり完全になるには足りないのか……」黒い靄のイエリシエンは手足を動かしたり、こぶしを握ってみたりしたあと、自分の体を（まるでどこか欠けているところがないか確かめるように）眺めると、不満そうにつぶやいた。

「グラム、覚悟！」突然イエリシェンの後ろから若い兵士が数名飛びだした。一番最初に躍り出た兵士がたいまつにきらめく長剣を大きく振りかぶる。

「待て！早まるな……！」ヘイル皇子がとつさに叫んだが、それが間に合うことはなかった。

ヘイル皇子が皆まで言い切る前に兵士は剣を振り下ろした。……はずだった。少なくとも私にはそう見えた。だが実際は、彼は剣を振り下ろしきらないままに地面に倒れ伏していた。

私には何が起こったのか分からなかった。ただ霧のイエリシェンの右手には、柄から刀身まで全て真っ黒の、見たことのない片刃の剣がいつの間にか握られていた。

仲間が刹那にも満たない間に殺されて、足が止まりそうになる兵士たち。しかし、そこはすでに相手の間合い一歩手前で、彼らには立ち向かうしか選択肢は残されていなかった。

私に見えたのは、彼の表情だけ。口の端を釣り上げているその表情は、間違いなく笑みだった。人の心を凍らせる、残忍な笑みだった。

一瞬のうちに、五人の兵士が悲鳴を上げる間もなく深紅のじゅうたんに倒れ伏した。皮膚がピリピリとして、全身の毛が逆立つ。恐怖が人々に伝染し、部屋を満たしてゆくを感じる。

これだ、これこそが、やつが数々の異名を持つにいたったゆえん。携えた黒き刃をふるうたび、やつの足元に屍が転がる。その姿は、まさに……。

不意に、聞き取れないほどかすかな声が聞こえるのに気づいた。意識せずにいたなら、気付くことさえもないように小さな声が。それに気づいたのは、まったくの偶然だった。

私は警告の声を発しようとした。だが遅すぎた。奴は私に振り向きざま、あの人を見下すような笑いにゆがめられた口の端から、呪文を吐きだした。

ナイトフォッグ
「夜の霧」

突然、あたりは真つ暗闇となった。まだ日は落ちてないというのに、窓からの光さえ失われた。私はとっさに目をつぶり、五感を研ぎ澄ました。

足音が向かってくる。それはほとんどじゅうたんにかけ消されるほどの小さな音だったが、私は聞き逃さなかった。

「グラム！」私は裂帛の気合を込めて渾身の一撃をふるった。そのひと振りが何かを掠めると同時に、小さな舌打ちが聞こえた。

私はし止めそこなっただけだと思ひ、反撃に備えた。だが、足音はだんだん遠ざかってゆく。しかしそれは出口とは逆の方向だった。

「しまった！兄上！」

最後の文句をつぶやきながら、おれは走り出した。唱え終える直前、ヘイルは気づいたようだが、それくらいは予想の範疇だ。

呪文を唱え終えた途端、部屋から明かり一切が失われた。たいまつ
の光も、沈みかけた太陽の日の光も。当然俺も全く見えないが、
ひかりがなくなる直前に相手の位置は把握している。

この呪文は長く持たない。時間が惜しく、あらんかぎりの力で走る。

殺気を感じ、走ったままの無理な体勢で体をよじる。瞬間、わき
腹を刃がかすめ、思わず舌打ちをする。ヘイルめ、この闇の中でも
俺を感じ取ったか。つくづくこの平和ボケした国には不釣り合いな
将だ。

確かにお前は将としては優秀だ。武芸に関しては天賦の才がある
だろう。だが、それだけだ。貴様は優秀な将でこそあれ、優秀な王
ではない。この国を実際におさめている者、それこそ俺がここに来
た理由。

霧がはれ始め、うつすらと人影が見える。俺に気づき、皇子をか
ばうように前に出る護衛兵。さすがだ、この暗さで俺に気付くとは。
俺は顎が地面に掠めそうなほど体を傾けて間合いに入り、そこか

ら体を起こしざま剣を切り上げた。

超低空からの俺の奇襲は、相手に敬意を表してのものだったが、皇子の護衛兵はかるうじてそれを受け止めた。これを止めるとは、ますます持つて惜しい。結局、三人の護衛兵を屠るのに八度剣をふるうことになった。だが、もう皇子を守る者はいない。

無防備になり、一人追いつめられた皇子に剣を振り上げ、そして振り下ろす。その刹那、横から何かが飛び出し、皇子の前に立ちふさがったのは……。

「……………ぐああああ！」

突然叫び声が聞こえ、次いで霧が晴れて行った。声のする方、先ほどまで兄上がいたところだ。

自分の予想が違ってくれと願いながら、どこかで違うはずがないと思いながら、そちらに目をやる。

兄上の護衛兵が倒れている、その先には……………。

その先には、兄上の無事な姿と、立ち尽くすグラム姿。そして、ずっと倒れたままだったグラムの分身が、兄上とグラムの間に片膝をついていた。

「グラム！」私は叫び、やつに向かって走った。周りの兵たちもあわてて続く。

グラムは私のほうをさつと振り返り、自分の状況を見て取ると、玉座の後ろにある窓を突き破って外に飛び出した。

私はあわてて窓に駆け寄り、下を見た。ここは三階、下は堀だ。助かるはずが……………。

「……………くそ！」私は思わず毒づいた。奴はいつの間にか力ーテンを切り取って、それを広げて落下の速度を遅くしていた。それはわずかな減速で、奴は堀に落ちたが、じっと見ても上がってくる気配はなかった。

「兵に伝える！奴は堀のどこかにいるはずだ。城壁の兵は堀を警戒。お前たちは船を出して直接探せ！絶対に逃がすな！」私は素早く集

まっている兵士たちに命令を下した。

「は、はい！」兵士たちはあわてて外へとかけてゆく。廊下に命令を伝えてゆく声が響く。

「イエリシェン！」声に反応して振り返ると、先ほどの少女が分身に駆け寄っていた。分身はふらついていて、少女が来ると彼女に倒れかかった。

「待て、お前。お前には聞きたいことが……。」と、そこで誰かに手首をつかまれた。見ると、兄上だった。

「彼は私の命を守った。敵ではない。誰か、彼を手当てしてやれ。」兄はそういうと、小声で私に耳打ちした。

「話がある。ついてこい。」私は兄の後について部屋を出た。最後に部屋を見たとき、協会の女性が分身の治療をしていた。

第二十一話：分離（後書き）

こんにちは、じよんです。あげるのが遅くなり、申し訳ありません。ですが、自分の中ではこの回は山場だと思っていたので、どうしても中途半端にしたくなかったため、少し日にちを多くとらせてもらいました（まあ、後半少しだけ適当になってるかも知れませんが）。読者の方々があつと言ってもらえたら、とてもうれしいです（え？のほうが多いかもしれません）。

次回ですが、今週末に私用で家を留守にするので、来週はお休みさせていただきます。次はさ来週。この章も、本当にあとわずかなりました。まだまだ物語は終わりませんが、節目となるのは間違いないので、次回もしっかりと書いていきたいと思います。応援、よろしく願います。

第二十二話：深い眠りから覚めて

声が聞こえる。誰かの話し声が。知っている人、生まれてからずっと聞いている、身近な人の声。記憶にあるその声はいつも元気だったのに、今は悲しみに沈んでいるように小さく、暗い。

その人が誰かと話している。

相手の人の声は低く、通る声でとても耳触りがいい。不安げな相手を安心させようとしているその声は優しい響きで、顔が見えないのに、その人の顔が浮かんできそうなほど。

なのに。なのに、どうしてだろうか。その声を聞くと、全身に悪寒が走る。冷たい電流が体に流れる。

そう、僕は恐怖している。だがなぜ？こんなにやさしげな声に、顔も知らない、あったこともない相手に、なぜ戦慄を覚えるのだろうか？

会話が終わり、親しき人の声が去って行く。僕は「彼」と二人きりになるのが怖くて、思わずその人の名前を呼んだ。だが言葉を発する自らの口は開くことはなく、ただ頭の中でだけ声が響いていた。

『母さん……！』

何の前触れもなく目が覚めると同時に、僕はかけてあった毛布を吹き飛ばして跳ね起きた。

「……ここは？」目覚めたばかりでまだはつきりしない頭のまま、あたりを見渡す。

僕は一人で眠るにはぜいたくなベッドの上にいた。毛布は柔らかく心地よい肌触りで、間違いなく高級なものだった。左手にある窓辺には空を思わせる青色のカーテンが、そよ風にゆらいでいる。と、傍らに、目を丸くしているクリスの姿があった。

クリスと目が合う。その瞳から、涙がこぼれた。

「……クリ」

「起きた——！！！」

「グエ！」

まるでカエルのような声を漏らしてベッドにもんどりを打つ。胸の上にクリスがかぶさって、というより首にしがみつかれて苦しい。なぜかは知らないが、ベッドの傍らに座っていたクリスが、突然僕の首に飛びついてきた。

クリスの栗色の髪が顔にかかる。草原を思い起こさせるような、さわやかないいにおい……。

「……じゃなくて。クリス、苦しい……。」

「そうか。もうあれから二日もたつのか。」

「はい。心配したんですよ、あれからすぐに傷を塞いだのに、傷跡は残るし、まったく起きる気配すらなくて。もしかして、もう……。」

「……。」そこまで言って、マリアさんは鼻をすすり上げた。

意識を失ってから、二人はずっと僕の看病をしてくれていたらしい。マリアさんはたまたま部屋を留守にしていたのだが、廊下まで響いたクリスの声を聞きつけ、飛びこむ勢いで部屋に戻ってきた。

「……。」ご心配おかけしました。でも、この通り、もう大丈夫です。「目を潤ませているマリアさんを安心させようとする。と。

「グキユ〜。」……。

「……。」ぷ、ははははは！「クリスとマリアさんが思わず噴き出した。

「あ、はは、今頃お腹空いたみたいですな。」照れ隠しに笑ってごまかす。まあ、マリアさんも笑ってくれたし、いいかな……。

「そうね、二日も食べてないものね。今から何か持ってきてあげるわ。」クリスがこちらをむいて笑いながら扉に向かおうとした。その時、突然ノックの音が響いた。

「失礼する。」低く通る声とともに入ってきたのは、

「ヘイル皇子！？」クリスが驚きとともにその名を呼ぶ。

華美ではないが、上質な絹の服を身にまとったヘイル皇子は僕をじっと見つめて言った。

「そんなに身構えなくていい。君が目覚めたときいたので会いに来ただけだ。」

「どうしてイエリシエンが眼を覚めたことを知っているの、私たちは部屋から出ていないし、誰にも話してないのに。」

「ちょっと、クリス。」マリアさんがげんか腰に突っかかるクリスをいさめる。相手は皇子なのだから、と。だがヘイル皇子は氣にとめた様子もなく言った。

「廊下まで聞こえる声で君たちが『起きた』と言っているのを聞いたものが何人もいてな。私に教えてくれたのだ。それより……」

「と、視線をクリスから僕に移す。」
「君に会わせたい人がいる。入ってくれ。」ヘイル皇子が扉に声をかける。それにこたえるように、扉が音もなくゆっくりと開き、腰の曲がった老人が中に入ってきた。

老人は無骨な、一切加工を施していないようなこぶだらけの杖をつき、その長く、髪と同じように真っ白な髭は老人の膝ほどまでに達していた。顔は皺だらけで眉毛まで白かったが、そこからのぞく金色の小さな瞳は若々しく、精気にあふれている。

「紹介しよう。ここグリーアンの魔法学校で校長をしている、ファリス導師だ。」

『ファリス導師！？』クリスとマリアさんが同時に叫んだ。

「ほ、本当にファリス導師ですか！？最高の魔法使いと言われる……」

「ふおおふおお、最高かは知らんが、少なくともこの国の中では一番じゃとおもっとるよ。」老人は髭で隠れている口をもごもごと動かしながらうれしそうに言った。声はしわがれていて、いかにも老人の声と言った感じで、とても大魔法使いとは思えなかった。

「でも、どうしてそのような人を僕に会わせるのですか？」僕は純粹な疑問を皇子に尋ねた。

「君のためだ。君は私の兄を身を呈して守ってくれた。だが、その代わりに君はあの黒の刃に切りつけられてしまった。その影響がなければ見てもらうためだ。」

「そういうことじゃ。確かめるためには君に触れる必要があるが、いいかの？」魔法使いは、杖をつきながらゆっくりとベッドに歩み寄った。だが、腰が曲がっているせいで、手がベッドの僕にまで届かない。

「やれやれ、歳をとると腰を伸ばすのさえつらいから嫌なんじゃが。」「老人はため息をつく、ゆっくりと（この間に腰骨がボキボキと音を立て続けた）腰を伸ばした。

「いたたた。全く年は取るもんじゃないのう。」「老人は痛む腰をさすりさすり言った。

僕らはいいた口がふさがらなかった。

腰を曲げた魔法使いは、体を起こしていくにつれ、みるみる大きくなり、いつの間にかヘイル皇子よりも頭一つ以上背が高くなっていた。どう考えても、腰を伸ばしてもマリアさんより小さかったはずなのに、だ。しかも声はしわがれた声から若者のように少し高めのよく通る声で、木々のささやきのように心地よい響きだった。髪や髭も先ほどのしなだれたような白ではなく、まるで銀のような輝きをもっている。目は先ほどの細目がうそのようにぱっちり開いている。瞳だけが先ほどと同じで、力強いまなざしだった。

「さて、はじめるとするか。」「魔法使いは細く白いが、大きな手を僕の頭にぬつと近づけた。危害が加えられるとは思わないが、何をされるのかよくわからない恐怖で、知らず体をこわばらせた。

魔法使いの手は、ゆっくりと降ろされ、僕の胸に触れた。指の先からゆっくりと、手のひら全体を僕の胸に当てる。気付くと、部屋の誰も口を開くことなく、じっと僕と魔法使いのやっている所作をみつめている。

「……うむ、何も問題はないの。いたって健康じゃ。」「魔法使いは胸に当てていた手を下げると、僕にうなづいて見せた。

「これだけ……ですか？」僕は言った。

「なんじゃ？手から光がとか、外の天気が変わるとか、体に何か入ってくる感じとか、そういうのを期待してたのかの？」老人はいたずらっぽく笑った。

「いや、そういうわけでは……あるかもしれないです。」

「ふおお、そうかそうか、それはすまんな。しかし、わしはただ体に触れるだけで、相手の状態が手に取るようにわかるでな。いや、魔法ではない。確かに魔法を深く知る儂だからできる業じゃがな。」魔法使いは言いながら踵を返し、静かに部屋を立ち去って行った。扉を通る時、頭をすくめながら。

「それでは私も失礼する。君は兄の命の恩人だ、好きなだけいてくれたまえ。」ヘイル皇子も後を追うように部屋を出て行った。

「……なんか変なの。この前と随分態度が違って、すごく変な感じ。」クリスはヘイル皇子が去って行った扉を見つめて言った。

「仕方ないですよ、あのときはまだイエリシェンさんが……」

「そこまでいって、マリアさんははっとしたように口を閉ざし、ちらりと僕を見た。」

「気にしないでください。僕は確かにグラムなのだから。いや、『グラムだった』、と言うべきなのかな。よくわからない。彼も僕なのだろうし、僕自身も彼なのだろう。でも、僕にはクリスの家で目覚めたときの記憶しかない。結局、僕は誰なんだろうな。」

『僕は誰なのか』を探すために出た旅。だが、答えはつかみかけたところで手元からかき消えてしまった。今は、自分がまっとうな人間であるのかさえ自信が持てない。

そんな不安の重さにうつむいていた僕は、突然肩を掴まれた。見上げた先には、僕をまっすぐに見つめるクリスの顔があった。

「イエリシェンはイエリシェン！」

「……え？」

「だから、イエリシエンはあなた、あなたはイエリシエンなの。グラムでも、他の誰でもない。あなたはあなた自身！」クリスは迷いのない、瞳の奥のさらに奥、僕の心まで届くほどまっすぐな瞳で僕を見つめて言った。

「クリス……。」「ぼくがつぶやくと、クリスははつとして僕の肩から手を離れた。

「ごめん、何言ってるのか分からないよね。私も何が言いたいのかわからないや。」

「いや……少しびくりしただけだ。……。」
「ありがとう。僕はクリスに笑顔で返した。

クリスはちよつと顔を赤くすると、話題を変えた。

「それより、これからどうするの？」

「そうだな……。まだわからない。せつかくだし、しばらくここにどまつて、考えようかと思ってるんだけど。」僕は同意を求めるように二人の顔をみる。

「いいんじゃない。時間はあるし、皇子のおかげで滞在のお金には困らないしね。せつかく王都に来たんだし、のんびりしてもいいんじゃないかな。マリアもそうするでしょ？」マリアさんに話を振るクリス。

「はい。私も、王都は久しぶりなので。どうでしょう、イエリシエンさんも元気になりましたし、王都を見て回りませんか？」

「いいわね。イエリシエンもいいでしょ？」

「勿論。僕はこの街を全然見てないからね。」

「それで、やつはどうなっている？いや、どういう存在なのだ？」

皇子は、自分より背の高くなった魔法使いに向かいのソファを勧めながら言った。魔法使いは大きな、ふかふかの紅色のソファにどっかりと腰を下ろすと、質問に答えた。

「皇子が見たグラムの分離と、先ほど調べたことを併せて考えると、奴は白じゃな。」

「白？白とはどういうことだ？」

「人の心には、良い部分と悪い部分とがあつての。これはどんなに善人であろうが、悪人であろうが、必ずあるものなんじゃ。このバランスがつり合わなければ、生物は存在することが出来ん。数分のうちに煙のように消えてしまふじやろう。じゃが……」

そこで言葉を切つて、魔法使いは低い声でつづけた。

「グラムめ、善の部分を切り離しおつた。今のやつは、純粹なる悪じゃ。その魂は、悪魔よりも黒いかもしれん。」

「なら奴は死んだのか？あなたの話だと、奴は数分のうちに消えてなくなるようだが。」皇子が疑問を口にする。

「それはないじやろう。奴の剣は、何千何万もの魂を吸つてきている。この戦の前からな。おそらく、奴は足りない魂と肉体を、その力で補つたのだらう。剣の黒い靄が薄れたのも、大量の魂を消費した証拠じゃ。奴はきつと生きておる。おぬしには忌々しいことだらうがな。」老人は向かいに自分よりやや堅苦しく座つてゐる皇子をちらと見た。皇子は眉をひそめただけだった。

「では、あいつはなんなのだ。どうして消えない。グラムは黒の刃があるが、奴には何もないぞ。」

魔法使いはふう、とため息をついて、ソファアの背もたれに寄りかかった。

「それが分からん。確かに奴は純粹な白のはずなんじゃが……」

。奴はグラムに切りつけられたと言つたな？」

「ああ。兄上をかばつてやつの前に立ちふさがつた。なぜか、切りつけたグラムがひるんでいたように見えたが。」

「わしが思うに、奴は黒の刃に切りつけられたことによって、グラムの魂と接触したのじやろう。あの剣は、今やグラムの一部と化しておるからな。それで、一度は完全に分離した奴と触れ合うことによって……」

「もう一度、つながりをもつたと？」皇子が続ける。魔法使いはうむと頷いた。

「はつきりしたことは何とも言えんが、そのとき切られたおかげで奴が存在していることだけは確かじゃ。」皇子は、思案気に顎を手で支えていると、おもむろに口を開いた。

「……なら、奴を殺せば、グラムは死ぬのか……」
「？」

「やめておけ。いくら接触を持ったとて、グラムはもともと奴なしで生きられる。何の意味もないじやろう。そればかりか、兄上の恩人を殺すという不名誉を冒すことになる。もつとも、逆の場合は違うじやろうかの。」

「それは、グラムを殺せば、奴は消えるということか。」皇子は憐憫などみじんも感じさせない声で言った。

「そういうことになるの。まあ、いくらやつがグラムの一部だと言っても、完全なる善の存在。放っておいても、なんのがいもないじやろう。」魔法使いは、そういうと、ソファから腰を上げて立ち去ろうとした。

「待て。」それを皇子が止める。魔法使いは、立ったまま、ソファから自分を見上げる皇子を見下ろした。

「つながりがあるのなら、奴を利用できないか。」そこには、策を巡らす戦士の顔があった。

第二十二話：深い眠りから覚めて（後書き）

こんにちは！皆さんお元気ですか、じよんです。更新が遅くなってしまい申し訳ありません。本当はもう少し長くする予定でしたが、これ以上長くするとさらに遅くなると思い、中途半端ながらあげることになりました。

次回の更新はさ来週になると思います。なんだか二週間ずつのペースになってしまっていますが、もう少しすればだいぶ時間の余裕もできると思うので、どうかご容赦願います。では、次回もお楽しみに！

第二十三話：そしてまた、歩き出す

日がまだ上る前の、肌寒く薄明るい時間だと言うのに、門は行き交う人々で賑わっていた。来たときほどはたくさんの人がいるわけではなく、その顔ぶれも荷馬車を引いた商人たちがほとんどではあるが、人の流れは途切れることなく続いている。

僕は肩にかけた荷物を担ぎなおし、左側の人の波、空の荷馬車を引く商人たちに交ざって朝靄の漂う街を後にしようと歩を進めた。

その歩みは、こちらに近づいてくる足音を聞きつけて緩やかになり、そしてとまった。ゆっくりと振り返ると、息を切らし、背負った荷物を上下させている、クリスがいた。

「クリス……。」「クリスはふふんと笑うと、何でもないように言った。

「あなたが一人でいこうとしてるのなんて、すぐにわかるわよ。イェリシェン、すぐに顔に出るんだもの。」

「クリス、僕は」

「分かっている。追うんでしょ、あいつを。」クリスは僕の言葉を半ばで遮り、僕の言いたいことを言い当てて見せた。

「なら、どうして……。」

「どうして？それはこっちのセリフよ！どうして私たちを置いていこうとするの？」クリスはずいといと僕に歩み寄った。その瞳は大きく僕をじっと見つめる。僕はゆっくりと言葉を紡いだ。

「クリス。君は、僕の記憶を探すために、わざわざ一緒に来てくれた。そのせいで君を何度も危険な目にあわせてしまった。けど君は一言も文句も言わずついてきてくれた。感謝している。でも、僕がこれからする旅は、今までと比べ物にならないほど危険な旅になる。これ以上君を僕のがままのために危険な目に会わせるわけにはいかない。……。今まで付いてきてくれて、本当にありがとう。」僕は頭を下げると、くるりと向きを変え、人ごみへと歩き出し

た。

「ちよつと待った。」その僕のカバンを、クリスがつかんで引きもどした。

「それで？それくらいで、私たちを置いていけると思った？」クリスがむつとしていった。

「そんなことじゃ、私はあきらめないわよ。私たちは仲間なんだから。」

「仲間……。」

「そう。仲間はそう簡単に別れないものよ。それに、私はこの旅が楽しくて仕方ないの。だからついていく。たとえあなたが嫌と言ってもね。」

「クリス……。」僕はやつとそれだけ言った。それしか言えなかった。なんだか分からないが、胸がいつぱいだった。

耳慣れた、金属がぶつかり合う音が近づいてくるのに気づいて、僕は視線をそちらに移した。

「ほら、もう一人の仲間が来たわよ。」クリスが大きなカバンを揺らして走ってくるマリアさんを指差して言った。僕は苦笑して、荷物を手伝いにマリアさんのほうに歩き出した。

「それで、これからどこに行くの？」王都を抜けて、最初の十字路口に差し掛かった時、クリスは僕に聞いた。

僕は目をつむり、心を静かにして、精神を集中した。

「……イエリシェン？」クリスが僕に声をかける。だがそれには答えずに、僕はさらに精神を集中させ、自分の内側に意識を沈ませた。

「……こつちだ。」しばらくしてから、僕は左手の道を指した。

「どうしてそつちなんですか？」マリアさんが首をかしげて聞く。

「僕も確信があるわけじゃないんだけど。目覚めてから、何となくだけど、あいつの居場所が分かるんだ。と言っても、方向くらいし

かわからないけど。」僕は答えたが、実際はそれなりの確信があった。自分の中の一部が欠けている感覚。そしてそれは、間違いなくあいつと一緒にある。……。それが何なのかわからないが。

「それだけわかればいいじゃない。手掛かりがないよりずっとましょ。」クリスは僕の指した道を、ためらいなく歩き出した。

「クリス、信じてくれるのか？」

「当たり前でしょ、仲間なんだから。」クリスは首だけ僕のほうを向いて言いながら歩き続ける。僕はそのあとを追うように歩き出した。

「あ、待つてください。」マリアさんがあわててついてくる。僕は歩をゆるめて、彼女が来るのを待った。

ふと、クリスと目が合う。クリスがニコツと笑う。ぼくは胸の奥に小さな疼きを感じつつ、笑い返した。

第二十三話：そしてまた、歩き出す（後書き）

読者のみなさん、こんにちは。新しいシステムに戸惑っているじゃないです。

前回の描き切れなかった部分ですので、いつもより短くなってしまいました。どうかご容赦ください。

第二十四話：雨

地上を照らす光が地平線の彼方へと沈み、闇が音もなくにじみ出たところ。冷たい雨が音もなく降り出し、月明かりさえない森の木々の葉を一枚一枚たたき始めた。雨音は少しずつ音量を上げ、やがてあたりは雨の降る音しか聞こえなくなった。だが、耳を澄ませば、ぬかるんだ、泥のような地面を湿った音を立てて歩く音が、かすかに聞こえるのだった。

俺は体を滝のように流れる雨を感じながら、前方の明かり、森が途切れた先にある、一つの建物に目を凝らした。

畑に隣接するように建てられた丸太小屋。それほど大きくはないが、かといってみすばらしいと言うほどでもないその小屋の扉は、少し開いたままになっていて、家の明かりが戸口に立てかけられているピッチフォーク（長い柄と複数の歯をもつ、フォークのような形状をしている農具）を照らしている。

ゆっくりと、だが、足音を忍ばせることなく建物に歩み寄る。手には既に黒い刃を携えて。途中、戸口までブーツの跡が残っていることに気付いた。足跡はふた組あり、どちらも家の中へと入って行ったのが分かる。しかも泥をぬぐうこともせず、だ。

戸口から流れる暖かな、だがその中に嗅ぎ慣れた鉄のにおいを感じ、俺はゆっくりと扉を開けた。

泥の跡を眼でたどると、部屋の中ほど、ひっくり返った椅子や割れた食器の破片が散らばっているあたりに、うつぶせに倒れている老夫婦二人に行き当たった。赤黒い血が床を濡らし、それはいまだ広がり続けている。こちらに首をのけぞらせて倒れている老婆の表情は、苦悶の表情にゆがめられ、醜かった。泥の跡はさらに続き、暖炉のそば、膝について馬乗りになっている男と、そのわきに立っている男の足元で終わっていた。

足音に気付いたのか、それとも戸口から入る冷たい湿った空気を

感じ取ったのか、立っていた男がこちらを見た。

「なんだ、てめえは！？」男は手にナイフを持ち、こちらに向き直った。馬乗りになっていた男も、あわててこちらを向いて立ちあがった。そいつの手にも小さなナイフが握られていたが、こちらはまだ血がべつとりと付いたまま、拭われさえもされていなかった。

「なんだこいつ、頭でもおかしいのか？」血塗りのナイフを持った男がへらへらと笑いながら隣の相方に言う。

「かもな。だが、見られた以上、いかしてかえすわけにはいかねえ！」その言葉を合図に、男たちは揃って襲いかかってきた。

俺は悠然と構え、間合いに入った刹那、剣をすばやく横にないだ。並んで襲いかかってきた男たちののがばつくりとさけ、そこから血が噴き出した。

「あ………あ？」相棒が悲鳴を漏らすことなく、喉元を抑えたまま倒れこむのを横目にしながら、血塗りのナイフを持った男は何が起こったのか理解できないと言った様子でこちらを見た。

「殺しをしたときは、必ず血糊を拭うんだな。」男の心臓に深々と剣を突き刺し、引き抜く。男はもがくことなく命を吸われた。

暖炉のそば、男が馬乗りになっていたところに目を落とす。そこには娘がいた。俺はその姿を見て、思わず眉を寄せた。

暖炉の光を浴びて、銀色に光る髪。大きく見開かれた瞳は、左が緑、右が青の非対称。幼いながら、美しく整った顔をしたその少女は、その不思議な色をした瞳を体と同様に震わせながら、瞬きすることなく俺を見つめていた。

「………穢れた血か………」少女はびくりと体を反応させ、露出した肌を精いっぱい隠すように破れた衣服を掻き寄せた。

「娘、貴様の体などに興味などない。服を取ってこい。いや、先に湯を沸かせ。俺が浴びている間に服と食事の用意をしろ。それと、こいつらの処理もな。」少女は返事をせず、言われたことが分からないようにぼうつと俺を見つめた。俺は少女がびくつくのも構わず

近寄り、そのか細く、白い首に手をかけた。

「二度も言わせるな。こいつらと同じ運命をたどりたいか。」二人組の男を指差す。少女は恐怖に顔を引きつらせつつ、首を激しく横に振った。

「だったら早くしろ。俺は気の長いほうではないからな。」首から手を離す。少女はケホケホと咳をすると、足早に暖炉の右手にある暗い廊下に入って行った。

少女を見送ると、おれは冷え切った体を少しでも温めようと、転がっている椅子の一つを暖炉の前に置き、そこに座った。テーブルに残っていたパンをかじりながら、不規則に揺らめく炎を見つめる。静まり返った部屋に、薪の爆ぜる音と時折パンをむしる音だけが、物悲しく響いた。

少女は、きびきびと働いた。湯あみを終え、部屋から出ると、出口には服がきちんとたたまれて置かれており、先ほどまで割れた皿や食べ物転がっていた床はきれいに掃除され、テーブルにはちょうど食べ物置かれていたところだった。

少女は足音に気付いて、うつむきながらもテキパキと動いていた手を止め、おれをちらと見たが、すぐに顔を伏せ、あわてて準備を終えると、テーブルから後ずさった。俺は少女の手際の良さに少し感心していたが、表情に出さず、静かに椅子に腰かけた。

目の前に置かれているのは、湯気の立つ豆のスープに日がたつてかたくなったパン、木の丸皿に盛られたサラダだけだった。

「・・・・・・これだけか？」横目で少女を睨む。少女はおびえて体を縮めたが、返事をせずにただ首を小さく縦に振るだけだった。

俺はため息をつき、スープに口をつけた。味はいまいちだったが、スープの熱が冷えて疲れた体を温めて行き、食欲がわいてきた。結局、ものの数分ほどですべて平らげてしまった。

テーブルから目線を上げ、少女を見る。自然と視線があつた。気付いていたが、少女は俺が食事をしている間中じっとこちらを見つ

めていた。放っておいたのは、単に食事に没頭していただけだったのだが、今はその必要もなくなり、少女に視線を移した。

少女は目が合うと、あわてて俯き視線をそらした。

「お前、名は？」俺は無を言わせぬ声音で言った。だが、少女は俯いたまま、首を振るだけだった。

「名前がないのか？」またも首を振る。

「ならなぜ答えない。」俺は音もなく立ち上がると、素早く間合いを詰め、少女の首をつかんで壁に押しあてた。

少女が酸素を求めてあえぐ。俺は手を緩めたが、ほっそりと白い首から離すことはしなかった。

「お前の名は？」俺は静かに、感情のない声で告げた。少女は震えながら口を開いた。

だが、そこから言葉が紡がれることはなかった。

俺はすぐにその意味を理解した。なぜ老夫婦の家にいるのか、この家にベッドがふた組しかなく、いすも二脚しかないことも。

少女を改めてみると、はだけた首筋や手首、その他肌が露出している部分に、細かな傷があることに気付いた。

俺は少女から手を離れた。少女は喉を押さえてコホコホと咳み、俺を見上げた。その目は、次に来る痛身を予期していた。それが妙に癪に障った。

「俺は寝る。部屋には入ってくるなよ。」俺はそれだけ言うと、部屋を後にした。後ろで少女があっけにとられたように見つめているのに気がついてしたが、振り返りはしなかった。

心がざわついていた。先ほどまで、きまぐれで少女を殺そうかとも思っていたのに、そんな気もうせ、いら立ちだけが残っていた。

「……何にいらついているのだ、おれは。」

朝が来ても、雨はやむことなく降り続いていた。ガラスの窓から曇天の空を見つめて、おれはベッドから起き上がった。粗雑な服に着心地の悪さを感じながら、ベッドの下に置いておいたカバンをつ

かむ。それは、昨日のうちに食料その他を詰め込んでおいたものだ。カバンは一番まとなものを選んだが、それでさえ、肩ひもは擦り切れ、革は色褪せていた。

戸口に立ち、雨降る外を見つめる。雨は昨夜と変わらぬ勢いで、少しもいかないうちに昨日と同じようにずぶ濡れになってしまふのは明らかだった。玄関のわきに、外套が掛けられているのを見つけ、それを羽織る。端はところどころ切れ、そこかしこに穴や切れ目が入っていたが、ないよりましだった。

家から一步前に出ると、とたんに雨が体を打ちつけた。外套が多少防いでいたが、空いた穴から入ってきたり、そのまましみてきたりと、すぐに服はぬれてその重みを増した。俺は足を厩舎に向けた。昨夜、動物のいななきが聞こえたのを覚えていた。馬があれば旅はうんと楽になるだろう。そうでなくても、荷物を運ぶものは欲しかった。

厩舎に近付くにつれ、糞のにおいが鼻をついた。中を覗くと、そこにはやせ細った驢馬が一頭、柱に古ぼけた綱でつながれて、足元に敷かれた干し草を食んでいた。

厩舎に足を踏み入ろうとしたとき、部屋の一角に集められた干し草の山の中から音が聞こえるのに気づいた。

反射的に剣を出し、干し草に忍び足で近づく。が、すぐに剣を消した。干し草の一部から銀色の髪が見え、音が規則正しい小さな寝息の音だとわかったからだ。

「まだ分裂の影響が残っているのか。小娘の寝息に神経を逆立てるなど、らしくもない。」あきれを込めたため息をつき、驢馬に近寄る。

だが、驢馬は後ずさって俺から離れようとした。俺が手綱をつかもうと手を伸ばすと、後ろ脚で立っていないいた。

それと同時に、少女は干し草の中から飛び出すように体を起こした。干し草が羽毛のように宙に漂う中、少女は色違いの瞳を等しい大きさにして、驢馬を、そして俺を交互に見た。

俺は少女を無視して、驢馬に近寄ろうとした。が、驢馬はまたも後ずさりし、鼻息を荒くして頭を振りまわした。その目は落ち着きをなくし、怯えて満たされていた。

少女はその様子を見て、干し草の山から抜け出ると驢馬のほうへと駆け寄った。少女が近寄ると、驢馬は暴れることをやめた。少女が優しくその首筋をなでてやっている、驢馬は次第に落ち着きを取り戻していった。俺の目にも、驢馬の恐怖がなくなっていくを見て取ることができた。俺がもう一度近寄ろうとすると、驢馬はまた鼻息を荒くしていなないた。

「獣も俺を恐れるか……」。「踵を返すと、雨の中へと戻って行った。

厩舎から離れ、やがて農家からも離れて農場を横切っていると、自分の足音、粘土のような地面を湿った音を立てながら歩く音とは別の音が、後ろからついてくることに気付いた。

振り返り、顔を伝う雨に目を細めてみると、俺と同じ、いやそれよりもボロボロの外套を来た少女が、驢馬を引きながらこちらに歩いてきていた。

俺は立ち止まり、少女が来るのを待った。少女は歩を速めることもなく、かといって止まることもなく、こちらに歩いてくる。

少女は俺から数歩離れたところまで来て、足をとめた。そして、大きすぎる外套のフードの下から、見上げるように俺を見つめた。「なぜ付いてきた。」俺は言う。少女に答えるすべがないことを知りながら。俺はいら立ちを隠しもせず、少女に近付いた。少女はおびえた表情をして、一步あとじさったが、それでも、逃げ出すことはしなかった。

間合いに入った瞬間、剣を出して少女の首筋にあてた。黒の刃が雪のようなやわ肌にかすかな傷をつけ、そこから血が一筋流れた。そこで少女は、初めて気がついたかのように痛みと悪寒に顔をひきつらせた。もともと色白い顔が、みるみる青ざめてゆく。傷口から

ゆつくりと魂を吸われているのだ。しかも、この魔剣、漆黒剣<夜>は、分裂に大量の魂を使ってしまったために、飢えている。小さい小さな傷と言えども、少女の弱く脆い魂など、たちまち吸い尽してしまっただろう。少女の怯えは驢馬に伝染し、驢馬は逃げ出そうと手綱を強く引っ張った。

首筋から剣を離し、虚空に消す。少女は膝から下の力が抜けたようにすっとその場に座り込んだ。

「失せろ」少女を見下ろす。少女は小さな体を震わせながら、俺を見上げた。

予期していたものと違うものだった。少女は怯えきり、俺についできた軽率な行動を悔いているだろう。その瞳には、そういうものが浮かんでいるだろう、と。

確かに少女はおびえ、恐れていた。だが、それとはもつと別の、俺に抱くべきでない感情を、こいつは抱いている。それが何か分からないが、それはひどく俺を不快にさせた。

俺は少女を置いたまま、歩き出した。心の中のもやもやとした何かが分からないことにいら立ちながら。

しばらく歩いて、また振り返る。少女はまた、おれの跡についてきていた。

俺が立ち止まったことに気がつく、少女も止まった。

歩き出す。少女も歩き出す。

俺はもう振り返らなかった。勝手にすればいい。どういってもりかは知らないが、そのうちあきらめるだろうと高を括って。

足を止め、感覚を一つ一つ研ぎ澄ませる。

耳：木の葉をたたく音が森を満たしていて、生き物の存在を告げるものは何一つ感じることはできない。

鼻：雨のにおいに交じって、腐葉土の香りがかすかに感じる。

肌：時折枝葉の間を縫って降る雨が体に打ち付ける。服はもうずぶぬれだが、歩いているおかげで寒くはない。足からは、何の振動

も伝わってこない。

目：木の葉の色が少しずつ色づき始めている。森のさらに奥へと続いているけもの道は起伏が激しく、森になれていないものでなければ歩くのは困難だ。

俺は今、農場のはずれにある森の、奥深くへと入りこんでいた。目的地への近道と言うわけではない。だが、俺が生きていることが知られた今、街道は見張られている可能性がある。面倒を起こして時間を食っている暇はなかった。

歩き出す前に、無意識に後ろを振り返る。細いけもの道がうねり、森へと消えている。見えるのはそれだけで、他には何も、ついてくる少女の姿もなかった。

銀髪。そして、左右別々の色をした瞳。それは、この世界において、『穢れた血』と忌み嫌われる者の特徴だ。

こんな話がある。昔、遙かなる昔に、一人の男がいた。そいつは銀髪で、左右違う瞳の色をして、そして酷く醜かった。もともと、片目は事故ですぐに失ったらしいが。

そんな姿をした男は、当然人々から気味悪がられた。男は次第に家に閉じこもるようになった。

久々に人の前に姿を現した男は、おぞましい、怪物をそのわきに從えていた。

まるで皮膚をつるりと向いたような体に、獣の皮を縫い合わせた人のカタチをしたもの。巨大な目が飛び出している一本足のカラス。人の腕を持ち、義足を履いているコイ。人々は怯え、気味悪がって、以前よりも男に近寄らなくなった。

ある日、近くに住む少女が花を摘みに男の家の近くに行ったところ、少女が男のカラスに襲われた。命からがら逃げてきた少女は両親にそのことを告げた。娘を襲ったことに激怒し、以前から男を憎んでいた親は、村の者と結託して、化け物を退治することにした。

男は殺され、化け物の遺体は男と同じ墓に埋められた。そして次

の夜、男は甦って村人を襲った。以前よりも醜く、おぞましい姿となつて。

よくあるおとぎ話だ。実際に会った話などと、信じている者はいないだろう。しかし、おとぎ話のような姿をして生まれるものは、至極稀にはあるが、生まれてくる。それこそ、百年に一人、国単位の広さで。そうしたものは、その男の子孫だとして、『穢れた血』と呼ばれ、蔑まれる。地域によっては、殺されるものもいるくらいだ。

あの少女もそうした運命を辿ってきたのだろう。自分を生んだ親には売り飛ばされ、買われた者には鞭を打たれ、同じ食卓で食べることも許されず、眠る場所は臭く、冷たい風の吹きこむ厩舎。

……何を考えているのだ、俺は。なぜあんな小娘なぞ気に掛ける。たまたま入った家で、たまたま救つてしまった命。ただそれだけのこと。口封じで殺してしまつてもよかった。事実、殺そうとした。だが……。

だが、殺さなかった。そう、俺は殺さなかった。なぜ？ 分からない。殺す気が湧かなかった、いや、失せた。少女に刻まれた痛みを見て、気が削がれた。

それが不思議でならない。なぜ、そんなことで俺は殺意を失ったのか……。

不意に、尾の長い雄たけびが上がった。狼かとも思ったが、もう一度上がった声を聞くと、どうやら野犬のようだ。方角は南西、だが距離は離れている。気にするには及ばない。アングマルの狼ほど巨大なら別だが、野犬になど、後れをとるはずもない。

止めていた足を進め酔うと足を上げ、その足が宙でとまる。

南西と言うことは、これが後にしてきた道だ。ということは……。

かぶりを振り、浮いた足を地につけ、歩き出す。

だからなんだ。仮に。仮に、まだ追い続けていたとしても、それ

でどうなるうが知ったことではない。そう、少女が野犬に食われようが、どうでもいいことなのだ。

俺は歩き続けた。

エモノは袋の鼠だった。仲間の呼ぶ声に、エモノを見つけたという声に、喜び勇んでやってきてみると、そこには小さなウマと、小さなニンゲンがいた。自分の跡に次々と仲間がやってくる。二匹のエモノはあつという間に取り囲まれた。

皆興奮して息を荒くし、口からよだれを垂らしている。全く、いくら久しぶりの大きな獲物だからって、少しは落ち着きと言うものを……そう言おうとした自分の口からも、べたべたとしたよだれがだらりと垂れて、水たまりに交ざってゆく。

そう、皆、何日もまともな食い物にありついていない。この森は、自分たちの数に対して生き物が少なすぎる。もうほとんどの生き物は食べつくしてしまったように思う。いるのは、小さなネズミやリスばかり。それでは腹は満たされない。もっと大きな、ニンゲンが飼っている生き物ぐらいの……。

今、それが目の前にある。自分が知っているのとはずいぶん小さく、見た目も違うように思うが、子供なのだろう。子供は小さいが、代わりに肉は柔らかくてうまい。どんな生き物も、大抵大人より子供のほうがうまい。ウマの子供は食べたことはないが、さぞうまいのだろう。

口の中が、よだれで水浸しになっていく。

突然、群れの若いオスが飛び出した。何としても一番最初に餌にありつきたかったのだろう。オスは怯えてうろろしているウマの子供に飛びかかった。

その瞬間、ニンゲンが木の棒でその頭の頭をたたいた。オスははたき落され、キャンキャンと鳴いて群れに逃げ帰ってきた。

ニンゲンがウマをくくられた紐を引っ張って引き寄せ、木の棒を体の前に構えた。どうやら、エモノにはキバがあるらしい。

仲間たちの目つきが変わる。小さいからといって油断していたが、あいつもニンゲンだ。なめてかかると、痛い目に会うのはこっちだ。仲間たちは毛を逆立て、きばをむき出しにし、低い声で唸った。そして、じりじりと輪を狭める。ニンゲンはきよるきよるとしながらあとじさり、背中を一本の木に預けた。徹底的に抗うつもりだ。だが、勝負は目に見えている。

輪はさらに縮まり、隙間がないほどになった。皆の腰が下がる。全員が後ろを振り返った。何かが来る。とてつもない何かが来る。全身の毛が逆立つ。何だ、何だ？

それは姿を現した。ニンゲンだった。ニンゲンのオスだった。恐い。恐い、恐い！足がすくみ、尻尾がまたの下に吸いこまれていく。

なんだ？なんだ？なんだ？なんだ？なんだ？わけが分からない。あれは違う、ニンゲンなんかじゃない。カタチはニンゲンだ、でも、あんなのニンゲンじゃない。

死だ。

一匹が逃げ出した。そのあとを追って、もう一匹が逃げ出した。もう止まらない。群れが逃げて行く。

逃げ出した一匹目は、自分だった。

少女は、持っていた木の棒を落とし、驢馬によりかかった。俺は、ゆっくりと少女のところへ歩いて行った。

少女の目の前に立つ。少女が俺を見上げる。そこには、先ほどと同じ感情があった。恐怖、そして希望。

俺は肩の荷物を下ろすと、少女に差し出した。少女は荷物に視線を落とした後、俺の顔を見上げた。

「早くしろ。待ってやるつもりはないからな。」少女が、急いで荷物を括りつける。俺は踵を返して歩き出した。

少しして、少女が走ってついてきた。俺は歩をゆるめなかった。だが、歩くのはゆっくりだった。少女とがついてこれる速さだ。

荷物を運ぶやつが必要だった。ただそれだけだ。決して憐れみなんかではない。そんな感情はとうに捨てた。そう、捨ててきたのだ。あたりには、俺と少女の足音しかしなくなっていた。
雨はもう、止んでいた。

第二十四話：雨（後書き）

読者のみなさんこんにちわ。じよんです。更新が遅れてしまい申し訳ありません。ですが、その分いつもより多くかけたのではないかと思います。

この回で、第二章はおしまいです。長かった。すごく長かった。まさかこんなにかかるとは思っていませんでしたよ、ええ。改めて小説家の凄さを実感しています。ですが、何とかここまで来れました。これもみなさんのおかげです。改めて、お礼申し上げます。ありがとうございます。そして、これからもよろしく願います。

次回は、またなその回が挟まります。やっと第2話をやれる。これだけ間があると、読者が忘れてしまう氣もしますが。まあ、氣付かれるよりはましかな。

では、また次回に。

第2話：情報求む

「・・・・・・・・・・は百人を超えられている。N社は関与を否定しており、被害者の遺族は訴訟を起こしたが、裁判所は不当であるとしてこれを棄却する考えを示している・・・・・・・・・・」はるか
は前かがみになっていた体を青白い光を放つパソコンから離し、柔らかな背もたれにもたれかかると、メガネをずらして目がしらを押しした。目が思ったよりも疲れている。自分でもわかつてはいるけど、
どうも集中すると前のめりになっちゃうのよね・・・・・・・・・・。

「先輩、お疲れですか？」声を掛けられて、はるかが振りかえると後ろのデスクに座っている人物がこちらに椅子を向けている。眼鏡を下ろす。後輩で同じく政治面を担当している、竹田だ。

「ええ、ついいつもの癖でね。」はるかは苦笑する。

「先輩、記事書いているときいつも前かがみになりますもんね。それ、治したほうがいいですよ。目にもよくないし。うちの弟みたいです。」竹田が席を立つ。向かう先はデスクから少し離れたテーブルにちょこんと置かれているコーヒーマーカーだ。

「竹田君、弟がいるの？」竹田がマグカップにコーヒーを注ぐのを見つめながら尋ねる。コーヒーマーカーのわきには紙コップがあるのだが、エコを意識している彼は、「そんなものはもったいない」と、愛用のマグカップを持参している。

「ええ。と言つても、八つも離れてるからそんなに親しくはないですがね。僕が帰ると、テレビを一人占めにして、ずっとゲームしますよ。画面のすぐ前に座って、猫背でね。確かブラックでよかったですよね？」竹田は既に紙コップにコーヒーを注ぎながら尋ねた。
「ええ、ありがとう。」

「それにしても、昼休みに何をそんなに熱心に見てたんですか？」竹田は湯気のたつ紙コップの口をつまむように持って運んではるかに手渡すと、マグカップのコーヒーをお茶のようにすすりながらは

るかのパソコンを覗き込んだ。そして、でかでかと黒い太字のトピックスで書かれた文字を音読し始めた。

「『被害者100人越え、なおも増える勢い』。ええっと、『大手ゲーム会社Nが先日発売し始めた新作ゲーム「Last Game」にて、最初の被害者が出て今日で一か月。被害者は増える一方で、現在確認されている被害者は百人を超えるとされている。N社は関与を否定しており、被害者家族は訴訟を起こしたが、裁判所は不当であるとしてこれを棄却する考えを示している。被害者は皆一様にゲームを始めた途端に意識を失っており、ゲームに何らかの視覚的問題があるのではないかと指摘されているが、会社側は『このゲームには問題を起こすような映像の演出はなく、被害者が意識を失ったスタート画面は背景を黒に設定している』と答えている。N社はこのゲームの製作に五年かけており、プロジェクトの総制作費は80億を超えるとされ……。珍しいですね、先輩がこういう記事読むなんて。」

竹田は画面から目を離し、部署内でも「真面目で堅物」と言われている先輩に視線を移した。

「これだけ騒がれるとね。……。それに、ちょっと知り合いがね。」

「え！？知り合いが、ですか？誰です？彼氏？」竹田は心底驚いて言った。人付き合いが悪いわけではないが、社内でこれと言って親しく話している友人を見たことがなく、飲み会でもそんなにはしゃぐことなく一人で過ごしている彼女を見ている竹田にとって、先輩にそんなに心配するほど親しい友人がいるなんて思いもよらなかった。こんなに美人なのに。

「そんなじゃないの。親戚の子が、ね。」はるかとは後ろめたさを感じながら、つい嘘を言ってしまった。卓哉と後ろめたい関係ではなかったが、年の離れた、しかもネットゲームで知り合った人、というのは気恥ずかしいし、あまり他人に知られたくなかった。

幸い、竹田はそれ以上追及しなかった。

「それはお気の毒に。早く良くなるといいですね、何せ死者も出てみたいですから……。」

「えー？」今度ははるかが驚く番だった。死者？

「どういうこと、それ？初めて聞いたわ。」はるかは目を丸くした。「まだ記事になっていませんからね。この雑誌記事書いたの、俺の大学時代の友人でしてね。この前久々に飲み屋であつたんで、一緒に飲んでたら教えてくれたんですよ。」これ、内緒ですよ、とはるかに口止めをする竹田。だが、はるかは聞いておらず、眉をひそめて考え込んでいた。

「ねえ、その人と会わせてもらえないかしら。」

「いいですけど……。そんなに気になるんですか？」竹田は珍しがった。

「ええ。出来る限り力になりたいの。よくお世話になっている親戚だし。」はるかは、『親戚』を強調した。

先輩がこんなに興味を持つとは、その親戚はよほど親しいんだろう。もしかしたら、本当は恋人（いや、愛人か？）かもしれない。

堅物で通ってるけど、先輩は美人だし、仕事もできるからなあ。竹田は湧きあがる好奇心を抑えつつ、脇のポケットに手を入れた。

「分かりました。僕から伝えておきますよ。一応彼の名刺を渡しておきます。」竹田は名刺の束を取り出すと、その中から一枚抜き取ってはるかに手渡した。

はるかは名刺を受取ると、そこに書かれている名前をじっと見つめた。

「小田武さんね。ありがとう、今度奢るわね。」そういうと、机の上の荷物をカバンに詰め始めた。

「ちょ、先輩どこにいくつもりですか？」竹田は驚いてコーヒーをこぼしそうになった。はるかは名刺を竹田の視線に合わせた。

「もう昼休み終わりますよ！？」

「編集長には早退するって伝えて。理由は身内の不幸ってことにしておいて。心配しなくても、記事はメールで送るから。じゃあ、連

絡お願いね。」はるかには荷物をすばやくまとめると、コーヒーを一気に飲み干して、まるで取材にでも行くように部屋から出て行った。「……………」竹田は茫然と立ち尽くした。先輩がまさか無断で、しかもうそをついて早退するなどは夢にも思わなかった。「少なくとも、ただの親戚つてわけじゃないな……………」

男はキーボードを打つ手を止め、打ち込んでいたものを見返すと、一つのキーを押した。連ねられた文字は瞬時に消え、発光する画面には白紙だけが残った。

パソコンのわきに置いておいた煙草の箱を手取る。が、のぞいてみると、中身はからだった。中身はすでに灰皿を満たしていた。「あゝ！」男は椅子の上でのけぞると、頭をぐしゃぐしゃと掻いた。もともと癖っ毛の髪が、さらにこんがらがる。男はいらいらしながら自分のデスク、そしてあたりをぐるりと見回した。

縦長の十畳足らずの薄暗い部屋に机が八つ。埋まっているのは男も含めて四人のみ。皆手を休めて煙草をふかしている。煙の先を見れば、天井に黒ずんだ染み。おそらく長年住人たちの紫煙を吸ってきた所為だろう。

机と言えば、他の者たちと同じく、死霊が散乱して机が見えない。パソコンの周りに書類が散乱し、その上に灰皿が置かれている有様だ。この建物が火事になったら火の回りは速いだろう。

「どうした武、スランプか？」向かいの席の男がけらけらと笑いながら覗き込んできた。乗り出した拍子に重ねてあつた書類の山が崩れ、床にプチまかれた。

「ああ、坂下さん、それ大事な資料なのに！」小田は咄嗟につかんだ灰皿を持ちながら、椅子から立った。危うくさっきの夢想が現実になるところだった。

坂下はすまんすまんと言いながら、疲労のを手伝うために席を回ってきた。その間も、脂ぎった丸い顔に張り付いた笑みは消えない。「ん？ああこれ、今話題の意識不明事件のか？」坂下は書類の一枚

を手に取り、読み始めた。その手から小田が書類を取り上げる。

「読んでないで手伝ってくださいよ。結局全部拾ったのは俺だし。」
悪態をつきながら、広い集めた資料を整える小田。

「いや、資料が気になってな。意識不明者から死人が出ているって、本当なのか？」

「はい、まだ数える程度ですがね。でも、世間は余計注目すると思いますよ。」

「まあ、これだけ騒がればな。でもな、小田。この事件には、あんまり深入りしないほうがいいぞ。」坂下は立ち上がって自分の後輩を見下ろした。

「なんでです？」小田はずんぐりとした体格の先輩を見上げた。入社した当時より出っ張った腹が、ベルトによって抑えられている。

「記者の感ってやつだ。この事件は、なんだか得体が知れん。やばいのに巻き込まれる前に手を引いておけ。」坂下はそういうと、自分の席に戻って行った。

「記者の感……ですか。」小田は立ち上がり、資料をもとの場所に置いた。大した記事を書いたことない癖に。

「なんか言ったか？」坂下がちらと小田のほうを見る。

「いえ、何にも。」小田は平然と答えた。第六感より、五感のほうが優れているんじゃないのか？

その時、ふいにドアノブが回される、ガチャリという音がした。反射的に全員の視線がそちらに集まる。

シヨートヘアーに黒ぶちの眼鏡。すつとしまった顎は、凜とした印象を与える。ピッチリとしたスーツをまとった姿は、『できる女』そのもので、メガネがよりその印象を強めていた。

その美人は、自分を見つめる視線を（驚くこともなく）一つ一つ見つめると、口を開いた。

「ここに小田武さんはいらっしゃいますか？」全員の視線が一斉に小田に向けられる。

『誰だこの美人は。』

「小田は自分ですけど……どちらさまで？」小田は自分に移った視線を目で返事をしながら答えた。

『知りませんよ』

「申し遅れました。私はこういうものです。」女性は内ポケットから名刺を取り出し、小田のほうへ行こうとした。が、通路にゴミや資料やらが積み重なっていて、とても通れそうにない。

「あー、外でお聞きしましょう。立ち話もなんですし。」小田は提案した。

「A新聞社政治部担当井上はるか……で、大手新聞社の方がどうして自分を尋ねに来たんですか？」は渡された名刺から顔を上げ、向かいに座る人物に視線を移した。女性は店員にコーヒートを注文していた。坂田も同じものを注文した。

「竹田君からまだ連絡は来てませんか？」

「ああ、そういや新聞社で働いてるって言ってたな、どこでかは酒の席だったんで覚えていませんでしたが。で、あなたは竹田の？」

「同僚です。彼の先輩にあたります。」

「成程。それで、要件はなんですか？」小田は座りなおしてポケットに手を伸ばした。が、その手を途中で止めた。煙草を切らしているのを思い出したのだ。小田は顔をしかめた。

「竹田君から、あなたが今書いている事件の話を書きました。まだ記事にしていないことを。」はるかは淡々とした口調で言った。いや、そうしたつもりだった。小田は片方の眉を吊り上げた。

「あいつ、他言無用って言ったのに……。」

「本当なのですか、それは。」小田は迷った。情報をやすやすと教えていいものか、と。だが、結局言うことにした。既に竹田が洩らしてしまっているんだ、今更隠しても無駄だろう。

「まだ数は少ないが、確かに死者は出てる。これからはもっと増えると自分は見えますがね。で、それを聞きにわざわざ会いに来たんですか？」

「……実は、そのことでお願いがあつてきました。」

「………何でしょう？」

「はるか、一呼吸間をおいてから、言った。」

「記事の取材に、つき合わせてはいただけないでしょうか。」

「店員が、盆を持ってやってきた。」

「お待ちせいたしました、ご注文のコーヒー二つです。」
「コーヒーを二人の前に順々に置く。そして伝票を小田の前に置くと、戻って行った。」

「小田はコーヒーを一口すすった。」

「訳をきかせてもらってもいいですか。」

「私の親戚の子が意識不明になったんです。出来る限り力になりたくて。」

「………成程。」
「小田は瞬時に気がついた。相手が嘘を言っていることを。だが、それが『言いたくない』からか『言えない』からかはわからなかった。」

「コーヒーを見つめる小田。その間、じつと相手が口を開くのを待つはるか。コーヒーはゆらゆらと、絶え間なくちいさな湯気を上げている。」

「小田がおもむろに口を開いた。」

「条件が三つある。一つ、取材で得た情報はどこの出版社にも、誰にも流さないこと。わかった時点でやめてもらう。二つ、取材では俺の指示に従うこと。三つ、俺をそちらの会社に推薦すること。」

「え！？」

「驚くほどのことでもないだろう。そちらは大手新聞社、こっちはしがない三流雑誌だ。誰だっていい会社に就きたいにきまっている。それで、条件はのめるのか。」
「小田は挑むようにはるかを見つめた。」
「わかりました。」
「はるか、はるかは悩まず答えた。小田は硬い表情のままうなづくと、コーヒーを一気飲みした。」

「よし、今から取材に行く。ついてくるか？」
「言いながら、掛けてあつたスーツを着る。」

「行きます。」はるかも椅子から立ち上がる。

「じゃあこれ。」小田ははるかに一枚の紙をさし出した。

「伝票。払っといってくれ、今持ち合わせないから。」

第2話：情報求む（後書き）

更新したと思っ たらしてませんでした。 大変申し訳ありません。

第三章 第一話：追跡

グリーンアンを出てから三日が経とうとしていた。街道は相変わらず踏みならされた砂利道ではあったが、馬車2台が並んで通れるほどの道幅は、今では人が二人並んで歩くほどとなり、街道の縁には雑草がそこかしこに生えていた。平坦だった道も、いつの間にか緩やかな起伏をもち、上ったり下ったりを繰り返して、行程はなかなかはかどらなかつた。けれども、天候はずっと安定していたし、森や原っぱが点在する周りの牧歌的な風景のせいも、今までの旅の中で一番のんびりとした時間を楽しんでいた。

「のどかですねえ。」マリアさんがのんびりとした口調で言った。「そうね、ここのところずっといいお天気だし。まるでピクニックにでも来ている気分だわ。」クリスがにこやかにかえす。

小さな風が吹き、草原の海がなびく。それに合わせて、二人の髪もなびいた。

「同感だね。……これだけの荷物を僕だけで持っているのじゃなければの話だけど。」僕は額の汗を手の甲で拭いながら付け加えた。

二人は様々な食材と調理器具の入ったカバンを背負い、片手に一つづつの背嚢を抱えて後を遅れがちについてくる僕を振りかえった。「負けるほうが悪いんですよ。それに、イエリシェンも同意したじゃない。」クリスがいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「それを言われると立つ瀬がないな。」僕はがっくりとうなだれた。「やっぱ私の鞆だけでも。いつもイエリシェンさん手伝ってくれていますし。」隣れに思ったマリアさんが妥協案をだす。

「いえ、大丈夫です。泣き言をいうつもりじゃないんです。これくらい、全然平気ですよ。」余裕を見せようと笑って見せる。実際、手伝ってもらうほどには疲れていないし、まだまだ体力に余裕はある。最も、マリアさんのカバンが一番重いのは事実だが。それも、

おいしいご飯が食べられると思えば、安いものだろう。

「……………安くはないかもしれない。」

「それにしても、ほんとにのどかな。道を歩くのは僕らぐらいだし……………」

「それに、後ろの御仁ね。」と、クリスが付け足した。

「後ろ？」言われて、マリアさんが振り返る。僕も気になって振り返った。

僕らが後にした道は、小さな丘になっていて、僕らは大体丘のふもとのあたりにいた。その丘のてっぺんあたりに、馬に乗った人が、ゆっくりと丘を下り始めていた。

「変だと思わない？」クリスが言った。

「何が？」

「あの人よ。彼、王都からずっとついてきてる。」

「そんなに前からですか？」とマリアさん。

「ええ。晴れてるのにフードかぶってるから、なんか気になってたんだけど。馬に乗っているのに、随分とゆっくりと歩いてるし。」

「考えすぎじゃないかな。」僕はゆっくりとこちらに馬を進めてくる人物を眺めながら言った。確かに遠目ではわからなかったが、よく見るとフードをかぶっている。

「そうかしら。なんか引つかかるのよね。」クリスは怪訝そうにフードの人物を見つめている。

僕はしばらく考え、そして言った。

「じゃあここで待つてみよう。」

「待つて、あの人をですか？」マリアさんが言う。

「そうだよ。でも、ただ待つてると警戒されるかもしれないから、ここでお昼にしよう。時間もそろそろだし、休憩ってことで。」同意を得ようと二人の顔を順々にみる。二人とも快くうなづいてくれた。

「でも、」とクリス。

「荷物運びは、引き続きイエリシェンだからね。」

フードの人物が僕らのところまで来たとき、僕らは道から少し離れた草むらに腰をおろして、やっと昼食を食べ始めたところだった。伸びをしたり、いろいろはしゃいで（いるふりをし）たりして時間を潰していたからだった。

僕は固い干し肉を奥歯で引きちぎりながら、横目で通り過ぎる人物を見つめた。

これだけいい天気（僕は汗さえかいている）なのに、フードを頭からすっぽりとかぶったその人は、確かに怪しい雰囲気だった。

顔はフードにほとんど隠れていたが、しっかりとしたあごが会釈した時にちらりと見えた。背の高い馬に乗っていたせいかもしれないが、その人物は思ったよりも背が高く、そして肩幅も広かった。

鞍の後ろには荷物と、そして盾が括られていた。盾は白地に簡単な紋様が描かれているだけで特に際立った装飾はみえなかった。腰のあたりに視線を落とすと、やはりふくらみがあった。おそらく剣だろう。

彼（彼女かもわからない）は僕らに会釈もせずに通り過ぎ、話しかけることも、振りがえることもなくさつさと先へ行ってしまった。「行っちゃいましたね。」フードの人物がだいぶ先へ行ってしまったから、マリアさんが言った。

「私の思い違いね。ずっと追いかけてると思ってたけど、単に道が同じだけだったのかもしれない。」クリスはため息をついた。それは当てが外れた事にがっかりしたからなのか、当たらなかったことに安心したのかはわからなかった。

「まあ、よかったんじゃないかな。心配事がなくなったわけだし。」そう言って荷物をまとめ始める。フードの男は既に豆粒ほどになっ

ていた。

「ハイハイ、どうせ取り越し苦労でしたよ。」クリスはむすつとして、荷物を僕に差し出した。

僕はマリアさんの荷物を担いでからそれを受け取った。

「さ、行きましょう。十分休んだわけだし。ね、荷物運びさん。」
クリスは意地の悪い顔をしてそう言った。僕は苦笑いを浮かべるだけにしておいた。

ただの旅人にしては怪しい。乗っている馬も変だ。今まで旅をしてきていろんな馬を見てきたが、どれよりも大きく、毛並みも艶もよく、力強い歩きだった。あの馬はゆっくりと旅をするための馬じゃない。速く駆けるための馬、そう、戦馬のような印象だった。

それに、何となくだが、彼とはどこかで会っている、そんな気がした。

「イエリシェンさん、置いてかれますよ。」マリアさんに声をかけられ、現実へと引き戻された。クリスは僕らを置いてさっさと歩きだしていた。

太陽が西に傾き、空を薄い紅色に染め始めたころ、僕らはそこに着いた。

十軒ほどの家しかなく、それも小さく、円陣を組んで身を寄せ合うように建てられているために集落と思えた。境目となる塀や壁、木で組まれた簡単な柵さえもなく、ただくつつきあった一番外側の家から少し離れたところに、

「農村ラグ」と消えかかった文字で書かれていることから、初めてここが村であることが分かった。

「小さな村ね……。ベルデンよりも小さいなんて初めて。それに、随分不用心ね。」村の周りをきよきよ見回すクリス。

「そうだね。それに、なんだか集まっているみたいだ。」と、僕は前方をさした。ちょうど村の中心（広場なのだろう）に、小さな人だかりができていた。皆興奮した声で何かを話している。

近づいて行くと、会話するために顔はあがるが、皆すぐに足元に視線を落としていることに気付いた。だが、それがなんなのかは人の壁に阻まれて見えなかった。

「すいません、旅の者なのですが……。」「僕らに全く気付

かず、何か熱心に話し合っている人たちに声をかける。

と、彼らはびくりと身を固めて僕らのほうに振り向いた。彼らはおびえた目でこちらを見ると、僕の腰に視線を移した。

「あの、旅の者ですが、何かあったんですか？」こちらを見つめたまま一言も発さないのも、もう一度言う。彼らは無言のまま、彼らが囲んでいたものを僕らに見るように示した。

促されるまま、彼らの輪の中に入っていく。マリアさんが小さな悲鳴を上げ、クリスが悲鳴をのみこむ音が聞こえた。

地面には、ぼろ布が敷かれていた。その上には人だと思われるものが四体、不快な瘴気を放って並べられていた。

「これは一体……。」鼻を服の袖で覆いながら村人たちに尋ねる。先ほど妙なおいを感じていたが、まさかそれが人間の死体、それも腐りかけのものだとは予想だになかった。

しわくちやの服を着た、はげかけた中年の男が口を開いた。

「最近、この近くで農場をやっているオブロク夫婦を見なくてな。心配して、弟と一緒に家に行ってみたんだ。だけど、行ってみたら家には誰もいなかった。争った跡もなく、きれいなままだった。家はもぬけの殻で、ただ食料とじい様がよく着ていた外套がなくなっていたんだ。」

男は言葉を切った。そして続けた。

「おりゃあ、気になって家の周りを調べた。そしたら、裏の畑の一角にカラスがたかかっていて、それで……。」男はそれ以上続けられなくなった。男の隣にいた、少し若く、無精ひげを生やした男が吐き気を抑えている男の背中をさす理ながらその後を引き継いだ。

「そこからは俺が話そう。俺は馬小屋を見に行っていたんだ。夫婦は、子供を一人雇っていたのを覚えていたからな。だが、そいつはいなかったし、一頭しかいない驢馬もいなくなってた。よく調べようとして、兄貴の悲鳴が聞こえた。俺は急いで畑のほうに走った。畑に行くと、兄貴が地面に座り込んでいた。腰を抜かしていたんだ。

俺が声をかけると、兄貴は震える指で地面をさした。地面から、その左手が出てるのが見えた。「男は死体のうち、左から二番目をさした。その左手だけ、肉がところどころえぐられていて骨があらわになっていた。」

「人を呼んで、掘り返してみた。そしたら、この四人が出てきた。それでとりあえず、この村まで連れてきたんだ。あのままにしておくわけにはいかないから……。」「村人たちは小さくうなづいた。「事情はわかりました。それで、誰が彼らを殺したんです？それにこの二人は誰なんです？」僕は左の二人の死体をさした。」

右側のふた組の男女は、先ほどの話に出てきた夫婦だろう。年輩で、どちらも質素な服に白髪頭だ。対するに、左側の二人組は、旅人がよく着る丈夫な生地でできた服を着崩している。それに、ベルトや腰に下げた短剣の鞘には小さな宝石がはめ込まれていた。

だが、もつと不可解なのは、一人の首がつながっていないことだった。

「この二人は、恐らく最近このあたりで噂の盗賊だろう。人相も、噂どおりだ。だが、誰が殺したのかはわからない。」

「悪魔じゃ……。悪魔の仕業じゃあ……。」「おもむろに、杖をついたしわくちやの老婆が口を開いた。

「悪魔？」クリスが尋ねる。が、老婆はそれに答えずつぶやくばかりだった。

「だから言ったんじゃ。魔女なんか雇うなど。忠告しておいたのに。ああ、あ奴を連れてきたからこんなことに……。」「

「誰のことを言っているんです？」クリスはもう一度尋ねたが、老婆は答えなかった。代わりに無精ひげの男が答えた。

「さつき、子供を一人雇っていたといっただろう。そいつは、左右で違う色の目をして、銀色の髪をしているんだ。」

「そんな……。本当にいるなんて……。」「クリスが驚きの表情を浮かべた。僕はなぜそんなに驚くことがわからなかった。

「銀髪で、左右違う色の目をしている者は、『穢れた血』と呼ばれ

ているんです。勿論、ただのおとぎ話ですが。」「マリアさんがそと耳打ちした。

「……ばあさんの言う通りかもしれん。」「村人の一人がつぶやくように言った。

「そんな馬鹿な。あれはまだ小さな女の子じゃないか。」「無精ひげの男が言う。

「だが、奴は『穢れた血』だ。普通の人間じゃない。」「

「それはただのおとぎ話だ。本当にあつたわけがない。」「

「だが、現にあいっはいたではないか。なら、おとぎ話だつてもしかしたら……。」「

「そうよ、きつとあいっがやったのよ。」「その人の妻と思われる女性に加わった。

「こんなこと、悪魔にしかできるはずがない」

「人間のすることじゃない」

いつの間にか、村人は討論に熱中し、声高に叫び始めた。無精ひげの男は何か鎮めようとしていたが、誰も聞く耳を持たなかった。男は肩を落とすと、疲れきった顔で僕らに向きなあった。

「すまない、旅の方々。この村は古い考えをするものが多いんだ。見苦しいところを見せたな。宿がいるんなら、あそこの二階建ての家に行ってくれ。部屋は少ないが、あれがこの村唯一の宿なんでね。」

「ありがとうございます。」「僕らが礼を言うと、男は軽くうなづいた。そして、冷めやらぬ討論をしている人たちをまとめにかかった。」「わからないことを騒いでもしょうがないだろう！彼らを早く弔つてやろう！」「

僕らは喧騒から離れて、この村唯一の宿に向かった。

扉をあけると、温かな空気が流れてきた。

「あら、いらつしゃい。」「部屋の奥から声が聞こえる。部屋の奥にはカウンターにろうそくがひとつ置かれており、その横に肘をつい

ている人の姿がおぼろげに見えた。

「どうぞお入りになつて。そこで立たれていたら、温かい空気が全部出て行ってしまうわ。」僕は言われるまま、中に入った。

扉を閉めると、思ったより部屋は暗かった。暖炉の火と、カウンターに置かれたろうそくしか明かりはなかったからだ。カウンターに近付くと、おぼろにしか見えなかったカウンターの相手が見えた。年は三十くらいだろうか。褪せた金髪を後ろで止めている。皺のでき始めた顔には、柔和な表情が浮かんでいた。

「こんにちわ、いや、こんばんわかしら。今日はお泊り？」

「宿がここにしかないと聞いてきたのですが。」

「そうね。といっても、うちだって部屋があるくらいなものよ。食事つきで一人銅貨三枚だけど、いいかしら。」

「これでも払えますか？」僕はためらいがちに袋から一枚取り出して女性に手渡した。女性は目を丸くした。

「き、金貨！？ちよつと、あなたもどこの貴族かい！？」僕は説明しようとしたが、クリスが先に口を開いた。

「いえ、以前賊に襲われている人を助けたら、その人が貴族でしてそれでお礼にと、金貨を下さったのです。」クリスは僕の顔をちらりと見た。僕は一瞬ののち、あわててうなづいた。

「へえ、貴族も気前がいいんだねえ。私たちにも恵んでくれりやいのに。悪いけど、銅貨で払ってくれるかい。今は銀貨はおるか、どうかだつてないもんでね。」

「それはどうしてですか？」クリスが財布から銅貨を取り出しながら言った。

「実は、今日先に来たお客さんも金貨で払ったのよ。フードをかぶった、寡黙な人でね。でも、声からして男だろうね。私が『お客さん、できれば銅貨で払ってもらえませんか？銀貨でもいいですけど』っていったら、『銀貨も銅貨もない。釣りは足りなくていいから、あるだけ払ってくれ』って。結局、銅貨三十枚しか払ってないけど、いやな顔一つしなかったよ。やつぱり貴族なのかねえ。食事は部屋、

それともここで食べるかい？」

「あ、部屋で食べます。」僕は上の空でこたえた。

フードの男がいる。しかも金貨で宿代を払った。僕には、ただの偶然で男がついてきているとは思えなかった。

三人が宿に入るのを確認してから数分後。ゆっくりと、建物の影から抜け出した。日はすでに沈みかかっていて、端だけが名残惜しむように地上にとどまっていた。

広場はすでに人はいなかった。あれほど騒いでいた村人たちも、日が暮れ始める前に帰り始めていた。死体は、結局時間がなかったために広場に放置されていた。

死体を見に広場の中心へ向かう。近付くにつれ、臭気が鼻をついた。この分では、明日はもっとひどくなりそうだった。

死体をつぶさに観察する。

「死んでから三日ほどか。死因は……。」「日暮れ前でよく見えないために、死体にかがみこむ。と、フードが眼の上にかぶさって見えなくなった。

どうせだれもないのだからと、フードをよけた。癖で髪をかき上げる。母親譲りの絹のように滑らかな金髪が指の間を通る。

夫は前から首を裂かれて、妻は後ろから腹部を刺されて。左の二人は身なりからして盗賊なのは間違いない。おそらく、この二人が夫婦を殺害したのだろう。

問題は、誰がこの二人を殺したか、ということだった。村人は子供が殺したともめていたが、そんなことはあり得ない。人は大人だつてそう簡単に殺せはしない。技術や体力だけじゃない、人を殺すことに耐えうる正当な理由が持てなければ、人を殺すことなどできない。それを子供が、二人も殺すなど到底考えることはできない。

そんなことを考えつつ、死因を調べる。

一人は首を一刀両断。他に傷は一切ない。切り口は荒い所など一切なく、首を乗せたらくつつけられそうだ。どう見ても素人ではな

い。剣の使い手、しかも相当の数を殺している。

もう一人は心臓を一突き。こちらも、もがいた跡すらない。いくら心臓をついたとあっても、数秒はもがくはずだ。

こんなことをできるのはあいつしかいない。立ち上がり、宿に目を向ける。二階の窓に明かりがともされていた。

推測は正しかったようだ。どうしてかは知らないが、間違いなく彼は、奴の行く先を知っている。

グラムの行く先を。

第三章 第一話：追跡（後書き）

どうも、読者のみなさん、こんばんわ。一日遅れですが、その分量はありますんで、どうかご勘弁を。

ついに、第三章が始まりました。イエリシェン達についてくる男、そしてグラムと物言わぬ少女。登場人物も増えて、面白さもup! したらいいな。いや、面白くして見せます。……でも、過度の期待はしないでくださいね。

この回から、三点リーダーを二文字に変えました。読みにくかつたらお伝えください。そのほかにも、『一話一話が長い、短い』『行が詰めすぎて読みにくい』などありましたら、どんどんお申し付けください。

では、今回はこの辺で。来週の更新をお楽しみに！

第二話：坂

空は青く、突き抜けるほど深い。大雨から一転して、むかつくほどの快晴が枝葉の間から垣間見える。濡れた外套はとうに乾き、今は時折吹きぬける風に、薄っぺらな紙のように裾をひらつかせている。

それでも、吐く息は白く、吹き付ける風は肌をこわばらせる。その寒さは、一瞬故郷のことを思い出すほどだ。この冷たい風は、永久氷山から下ってきたものだろう。

永久氷山は、アングマルをぐるりと取り囲む連峰のことだ。実際に氷山なわけじゃない。山には木々が一本も生えておらず、上に行くにしたがって気温は急速に下がっていき、山頂にたどり着く前に登頂者が凍りついてしまう。山頂までいかずにもどってきた者は、凍傷で耳や指を失ったものがほとんどだ。だが、山には貴重な鉱山資源や宝石が眠っているために、上っていくものは後を絶たない。そして一握りの帰還者は、皆口をそろえて言う。

「まるで氷を上っているようだった」と。

物思いにふけりながら足を止めていると、後ろの激しい息遣いが耳にうるさく響いた。ちらと後ろを振り返る。

そこには、白い息を幾度も吐き出している少女の姿があった。

少女は額の汗を袖で拭いながら、歩こうとしない驢馬を力いっぱい引つ張っていた。俺が故郷をふと思い出すほどの寒さを感じているのに、少女は汗までかいている。

今俺がいるのは、階段が必要と思えるほど傾斜のきつい森の中だった。木々は日差しを隠すほど空を覆っており、森の中は湿っぽく、雨の中にいるようなにおいがした。地面はぬかるみこそしていなかったが、時折足の下がボロボロと崩れることがあった。それでも、俺にとってはなんでもない。故郷には、もっと険しい道がいくらかでもある。そのおかげでアングマルの兵士たちは行軍に強い。こ

の国の兵士たちよりもはるかに長い距離を一日に進むことができる。だが、少女にはこの道は険しいようだった。それに加えて、驢馬が足を止め始めた。重い荷物に、連日の行軍。年老いた驢馬には過酷すぎる旅だったのだろう。動物の感情などわからないが、俺でもはつきりとわかるほど、

「これいじょうはあるけない」といった顔を驢馬はしていた。妙に人間くさい顔で、眉を寄せている。

それでも少女は坂をのぼりはじめてからずっと、驢馬を引きずるように手綱を引っ張っている。一步踏み出し、引き寄せる。一步踏み出し、引き寄せる。それを何十回、何百回と繰り返していた。その度驢馬は、仕方なさそうに一歩ずつ前に進んでいた。

と、少女の足の下の地面が崩れた。バランスを崩し、前につんのめる。少女は足を踏ん張ることもできずに、顔から地面にぶつかった。

少女がゆっくりと立ち上がり、湿った土が付いた服をはたく。服には、黒いしみが薄く広がった。汗と土が混じり合い、顔は汚らしく、浅黒くなった。

それでも少女は、泣きだすこともせず、不満も言わず、それを顔にも出さなかった。少女は驢馬に近付くと、荷物をおろした。既に自分のカバンを背負っているのに、さらに食料やらが入ったカバンも背負った。そして驢馬を引っ張り始めた。

驢馬はさっきよりも踏ん張らずに歩くようになった。その分少女の負担はいや増した。五歩歩いて、少女はまた転んだ。しかし、少女は先ほどより素早く立ち上がると、また歩き始めた。息を切らし、驢馬の手綱を背負うように引っ張りながら。また少しも進まないうちに転んだ。起き上ってみると、服はもう真っ黒で、顔も泥を浴びたような色になっている。

少女は、黙々と歩き続けた。俺も上り始めた。転ぶこともなく、息を切らすこともなく、平坦な道を歩くように。

少女が倒れこむようにして坂の上まで登ってきたとき、日はすでに傾いていた。少女より少し遅れて、驢馬がゆっくりと登ってきた。俺は一本の木に寄りかかっていた。少女は歩き出そうとして、転んだ。ゆっくりと立ち上がったが、足は生まれたての仔馬のようにふらついていて、今にも倒れそうだった。

俺は木から背中を離すと、先へと進んだ。少女がふらつきながらついて来るのが分かった。

数歩歩いて俺は足を止めた。大した差はないが、他と比べると木がまばらで、多少開けた場所だった。その中心ともいうべきところに、俺のカバンが置いてある。カバンへと歩いていく。

「今日はここで野営する。」少女に振りかえりもせずと言つと、カバンから水筒を取り出した。まだ半分以上残っているそれを、少女に向かって放る。少女はよろめきながらあわてて受け止めた。

「水を汲んでこい。ついでにその汚らしい顔を洗ってくるんだな。」俺は右手のほうをさした。かすかに水の流れる音がする。少女は疲れきった顔でゆっくりとうなづくと、ふらつきながら音のするほうへと歩いて行った。

少女の疲れ切った後姿を見送ると、なんとなくしに上を見上げた。日は傾いていた。だが、夕ぐれにはまだ時間がある。完全に沈むまで進もうと思えば、まだそれなりの距離を稼げるはずだ。

だが、しなかった。いつもなら、俺一人なら確実にそうしただろうに、俺はここでとまることを選択した。なぜか。そんなことはわかってる。これ以上少女は歩けないと判断したからだ。あの様子では、立っていることすらやっとならう。

違う。問題はそこではない。少女が歩けないのなら、置いてゆけばいい。待つ必要などない。少女など、俺の旅には必要ないはずだ。そう、なぜ俺は、少女がついて来ることを許したのだろうか。少女がついてきたとき、俺は拒絶したはずだ。なぜ許した。あの時、野犬に囲まれたあいつを、放っておけばよかったのに。

俺は、憐れんだのか。……あり得ない、そういう感情は

すべて捨ててきた。なのに、なぜ……。

ふと、少女が手綱を木に結び付けた驢馬に目がいった。俺が近づいたとき、驢馬は怯えて逃げ出そうとしていた。今は、俺と距離があるとは言っても、のんびりと雑草を食んでいる。まるで警戒している様子がない。

俺に馴れたのだろうか。それとも、実際は警戒しているのだろうか。……確かめるか。

ゆっくりと驢馬のほうへ歩く。驢馬は気にすることなく食事を続けている。さらに近寄る。西日で伸びた影が驢馬にかかる。驢馬が顔を上げ、俺を見た。逃げ出そうとは、しなかった。

驢馬になめられているのか、と。一瞬、怒りがちらついた。ほんの少しの怒り、そう、たとえるなら、銅貨一枚をなくしたような、ちよつとしたいらつきだった。

突然、驢馬がいななき、手綱を激しく引つ張って逃げ出そうともがいた。周囲でさえずっていた鳥が一齐に飛び去り、辺りが急に騒がしくなったかと思うと、次には死んだように静まり返った。驢馬はまだ狂ったように土を掻いて手綱を引きちぎろうとしている。それだけの力があるなら、少女の力がなくても登れただろうに。

驢馬の手綱に手を伸ばし、その手が中途でとまった。振り返ると、少女がいた。息を切らし、目を見開き、顔をこわばらせて。

それは、まぎれもない「恐怖」の表情だった。

少女は水を汲んだ革袋を落とし、こちらに走ってくると、驢馬と俺の間に割って入った。そして、口バをかばうように両手を広げた。そのころには、少女の表情に恐怖の色はなかった。

俺は何も言わず、驢馬から離れ、少女の落とした革袋を拾い上げた。革袋は少し汚れてしまっていた。だが、咎めようとは思わなかった。

俺は満足していた。少しの怒り、かけらほどの殺意が、獣を、人を恐怖させる。そう、俺は望んだとおり、恐怖の存在となったのだ。「誰もが畏れる存在。俺の呼び名にふさわしいじゃないか。」

突然、笑いの発作に襲われた。声を抑えようとしたが、たまらず押し殺した笑いが口から洩れる。押し殺した笑いは、くぐもった音となり、不気味な響きとなった。

それが、俺にはぼろ布で残忍な笑い声を押し殺す、死神に思えてならなかった。

第二話：坂（後書き）

すいません、今週頭に上げたと思っていたら上がってませんでした。

第三話：邂逅

備考。それは、人の後をこっそりについていくこと。決して尾行の対象に気づかれぬよう、目立たず、静かに気配を消し、風景に溶け込む。人通りのあるとおりなら人ごみにまぎれる。尾行とはそういうものだ。

……はずなのだが。

「いるわね」

「いるね」

「いますね」

もう一度振り返る。

「やっぱりいる。」

「やっぱりいるね。」

「やっぱりいますね。」

僕らは頭をつき合わせて声を潜めた。

ラグをたつてから一週間、僕らは新たな町、ビュッフェルドにきていた。小さな町ながら、陶器の生産が盛んなのか、通りは焼き物を置いている露天が多く、活気もある。

その往来で、ひときわ目を引くものが一人。僕らの三十歩ほど後ろを、馬を引いて歩いているフードの男だ。

「ばれてないつもりなのかな。」クリスがそつと耳打ちする。僕は「さあ？」と首を傾げて答えた。

フードの男、彼が僕らの跡をつけているの明らかだった。ラグで宿が一緒であったのにもかかわらず、彼と出会うことはなかった。そのくせ、僕らが発してほどなくすると、気付けば馬の蹄の音が聞こえていた。森を切り開いて作ったためか、うねうねとまるで蛇が通ったような道筋のために、後ろを振り返っても何も見出すことはできなかったが、耳を澄ませばかすかに蹄鉄の地面をふみならす音が聞こえ、僕らが立ち止まれば少しして音は途絶えた（最も、僕

とマリアさんには全く聞こえず、最初に音に気付いたクリスが耳を澄ましてやっと聞こえる程離れていたのだが。結局、街に入っても彼の尾行は終わらず、ずっと後をついてきている。

だが、彼は非常に人目を惹いた。彼自身は灰色のフード付き外套を羽織っているのみで、目立つところはどこにもなく、振る舞いも自然なものだ。ただ、彼の引いている馬が、人ばかりで荷馬車も通らないこの街で、一種異様な存在と化していた。しかも、彼の馬は他の馬と比べても明らかに大きく、体躯に優れていた。その引き締まった体に足を止める通行人も一人二人ではなかった。当然、後ろでざわめく気配を感じ取ったクリスが、彼の存在にいち早く気づいたのは言うまでもない。

「それにしても、どうしてあの人は私たちの後をついて来るのでしょうか？」

「さあ、とりあえず、見た目通りの旅人でないってことは確かよね。」とクリス。

「確かにね。それに……。」

『それに？』言い淀む僕を、二人は声をそろえて促した。

「なんだか、どこかで合っている気がするんだ。」ちらりと後ろを振り返る。気付いていないのか、それとも無視しているだけなのか、相変わらず周囲の関心に反応を示さず、黙々と僕らと同じ道をたどる男の姿があった。

「……と金出せって言っているだろうが！」

突然、どすを利かせた声が通りに飛び込んできた。何か者が壊れる高い音が聞こえ、通りに面した一見の家から人が一人転がるように、否、転がって出てきた。

通りがざわめき立ち、人々の足が止まる。だが誰も、倒れている女性に手を差し伸べようとはしない。

転んだときにどこかを痛めたのか、女性はうずくまったまま立ち上がろうとしなかった。すると、女性が出てきた家から男が一人、肩をいからせ、足をふみならして現れ、そのまま女性に近付いてい

った。

「起きろ！」男はいささかの手加減も見えない、容赦のない蹴りをうづくまる女性の腹部に見舞った。女性の体が低く跳ね上がり、短い悲鳴が上がった。男は女性に屈みこむと、その髪をつかみ、引つ張り上げて無理やり立ち上がらせようとした。女性はたまらず膝立ちとなったが、やはりどこかをけがしたのか、それとも先ほどの男の蹴りか、どれだけ引つ張られてもそれ以上立ち上がろうとしなかった。男はいら立った様子で顔をそらせ、俯いた顔を持ち上げて自分と目が合うようにした。

「早く金を払わないから痛い目見るんだろうが。ここいらのやつで払っていないのはお前だけなんだよ。」

「そ、そんな。家にそんなお金はありません。ここに店を構えているからとって、おっしゃるような金額を取られてしまっでは、どうして生活していけましようか。」

「そんなこと俺の知ったことか。いいからさっさと金出せ。さもないと……。」男が拳を振り上げる。女性は痛みを予期して反射的に体をこわばらせる。彼女には抗うという選択肢はなかった。男の拳は振るわれることなく、振りかぶったまま止まっていた。

「そこまでだ。これ以上は我慢がならん。」

低く響く声。男の腕は、背後に現れた、フードの男に掴まれている。

「な、何だてめえ！」男はあわてて腕を振り払おうとする。だが、男の腕は、微動だにしなかった。まるで男の腕がその空間に固定されたかのように。

当然、そんなことはあり得ない。いや、僕は知らないだけで、そういう魔法は存在するかもしれないが、魔法を使った様子はなかった。

これは単純なこと。単に、フードの男の膂力が優れているだけのこと。

「は、離せ！」男はむきになり、全身で勢いをつけて腕を振りはらった。だが、男が振り払おうとした瞬間、フードの男が手を離したので、男は自らの勢いを止められず、そのまま地面に自分から投げ出されるように倒れた。

「いつてえ。……オイお前、俺が誰だかわかってんのか！？」男は立ち上がると、自分の邪魔をした相手を睨みつけた。だが、その姿はいささか迫力に欠けた。男ははたから見てもわかるほど目の前の存在に戸惑っている。フードの男は彼よりも十センチ以上も背が高いうえ、ただ立っているだけなのに相手を圧倒させる雰囲気を持っていた。

「お前のことなど知らぬ。知るつもりも、知る必要もない。そも、いかなる理由があれ女に手を上げる男なぞの言葉を聞く耳など持つておらぬ。」

「何だと！？言わせておけば調子づきやがって。」男は腰に手をやり、剣をさやから引き抜いた。周囲で事の成り行きを見ていた人たちから悲鳴や息をのむ音が聞こえた。男はそれで自信を取り戻したのか、あれほど慌てふためいていた顔が、女性をいたぶっていた時の、下卑た笑みに変わっていく。しかし、フードの男の反応は男の望むものではなかった。

彼は剣を見てもあわてる風もなく、ただ眉だけを寄せて、こう言い放った。

「今なら見逃す。剣を収めよ。でなければ、容赦はできん。」

「こ、の……！人をどこまでも馬鹿にしやがって！」男は手にした剣を大上段に振りあげ、彼に襲いかかった。周囲から悲鳴が上がる。勇敢ではあるが、後先を考えない愚かな男がはやられてしまう、と多くの者が目を覆い、顔をそむけてその決定的瞬間を見まいとした。だが、僕らは目をそらさなかった。彼がただの蛮勇とは思ってはいなかったから。それは正しかった。

男が間合いに入る直前、フードの男の体が爆ぜた。一瞬のうち、目の前の男にはかき消えたと思うほどの速さで懷に飛び込んだ。か

と思うと、いつの間にか男のわきをすり抜けていた。その手には、いつ抜いたのか血染めの剣が握られている。

男は振り上げた剣を永遠に振り下ろすことができぬまま、腹から派手に血しぶきを撒き散らして絶命していた。彼が倒れた地面はすぐに血だまりとなり、大地が吸うより早く範囲を広げて行く。

先ほどとは対照的な、水を打ったような静けさがあたりを満たしている。が、それも長くは続かなかった。

「野郎！」静寂を破ったのは、今いる通りにつながっている別の通りから現れた一団だった。顔が似ているというわけでもないのに、彼らのその振る舞いから、容易に男の仲間だと想像できた。事の顛末を見ていたのか、各々の手には、思い思いの武器が握られている。短剣やナイフが主だったが、中にはメイスを持っている者もいる。

だが、それだけの人数がい、かつ武装も済み、完全な臨戦態勢になっているというのに、フードの男に立ち向かっていくものは誰もおらず、相手の顔と、持っているその剣を交互に見比べている。

フードの男の剣。いまだ殺した男の血を滴らせているその剣は、普通のものとは少し違っていた。刀身はロングソードにしては長く柄も片手で扱うには少し長い。おそらく、バスタード・ソードとやバレル類のものなのだろうが、それにしても、刀身の幅と、分厚さは異常だった。手のひらほどの身幅を持ちながら、ここからわかるほどの厚さときている。重さなら両手剣並、もしかしたらそれ以上ある重さの剣を、彼は片手で扱っているのだ。切れ味は悪そうだが、その重量と、彼の見せた技量なら、切れ味など関係なく分厚い鎧も、たやすく両断するだろう。

だが、なぜ彼はあの剣を扱っているのだろう。彼の趣味、と云ってしまえばそれまでだが、普通旅人は可能な限り荷物を少なくする戦うことを前提としているならまだしも、護身用の剣なら、ショートソードでも事足りるし、実際そうしている旅人は少なくない。それは今まで旅してみてきたものなのだから、間違いない。むしろ、僕や彼のようにロングソードを持っている人のほうが少ないくらい

だ。かといって、伊達を気取っているわけでないことは、先の剣術からして明らかだ。ますますもって、彼が何者なのかわからなくなってきた。

思考はそこで中断された。ただの偶然か、それとも男たちが呼んでいたのか、反対側、フードの男の後ろの通りから、武器を持った男たちがさらに数人現れたからだ。

「やっちまえ！」リーダーなのか、頭を丸めたいかつい男の号令一下、やくざ者たちがフードの男に襲いかかった。

それと同時に走り出した。いくらフードの男が強くても、数が違いすぎる。囲まれたらおしまいだ。

走りながら剣を抜く。ダマスカス鋼特有の鈴によく似た音が耳に馴染む。背後から、クリスたちの制する声が聞こえた。

僕が戦いの渦中に飛び込んだ時、フードの男は四人を同時に相手にしていた。

『！！』驚きは両者から。

「加勢します。いくらなんでも一人じゃ無理だ！」切りかかった相手の剣をそらし、空いた胴を蹴り飛ばしながらフードの男に提案する。

彼は相変わらず顔の見えないまま、こちらを向いていたが、結局一言も答えず、うなづきもしないまま、隙を突こうと向かってきた相手を一刀に伏した。

それを承諾と受け取ることにし、目の敵に集中する。相手は残り十数人、既にフードの男が四人倒しているが、依然としてこちらは劣勢なまま、彼は三人、僕は二人を相手にしていた。他の者たちは同志討ちを警戒しているのか、単に怖気づいたのか、僕らを取り囲んだだけで攻めてはこない。それが救いといえば救いだった。今全員に襲いかかれたら、それこそひとたまりもない。

今は早く倒すことが先決、と自分から一人に切りかかる。相手がそれを防ぐと、横合いからもう一人がショートソードを突き出してくる。咄嗟にそらすも、のけぞったために体勢を崩しながら後退し

てしまう。それを好機と二人ががむしゃらに攻め崩そうとしてくる。違和感に気付いたのはその時だった。いや、違和感が確信に変わった。

「腕が落ちてる……!?」体がおとろくほど鈍っている。身体能力は落ちていない。思うように体は動かし、けだるさもない。だが、圧倒的に動きにキレがない。

最初の打ち込みから違和感はあった。剣筋はブレ、体重は乗り切らず、剣を振った勢いでそのまま体が流れる。受けに関して言えば、ただ攻撃に反応して剣で体をかばっているだけで精一杯で、それも記憶にある自身の動きをまねてどうにか、といった状態だ。

「……そうか、僕は本当に、抜け殻なんだな……。」

今までは、体が勝手に反応してくれた。一太刀打ち込むたびに技のキレは増し、不意打ちには体が自動的に反応して躲し、受け流し、反撃を加えていた。

それは、僕がグラムだったから。記憶が封じられ、意識して能力を押さえこまれていたとはいえ、僕の体は戦場で恐れられた『死神グラム』そのものだった。業は体に染み付いていて、グラムが望む望まないにかかわらず、僕が望むままに剣を振るえば、体はそれに応えてくれた。

だが、それももうない。いかなる術によるものかは知らないが、僕はグラムと分離し、一度は消滅しかけた。クリスたちにも話してはいないが、僕はあの時消えかけていた。死にかけていたのではない、世界から消え去ろうとしていたのだ。そして残ったのは、意識しなければ消えてしまう気がする、存在感の希薄なこの体と、『イエリシエン』というまぎれもない僕である自我だけ。それでも、こうして生きているのだから文句は言えないだろう。そもそも、僕は偽物、グラムの影。本来存在すらしないはずの、存在を許されない持たざる者。ないものがある、それだけで奇跡なのだから、剣の技術の一つや二つ。

だから、今の僕にできるのは、記憶にある以前の体の動きを真似

るだけ。だがそれは、思い出す行為ではなく、指南書を読みながら戦っているようなもので、動きはのろく、そして完璧でもなかった。「く……そ……！」思わずこぼれる悪態。まさか、ただの二人にここまで押されるとは思ってもいなかった。

自信はあった。全員相手にはできないけれども、フードの男の手助けくらいできると思っていた。今までグラムの力を借りてしまったことはあったけれども、それをあてにしたことは一度もない。盗賊やゴブリンを倒したのは僕自身だし、自分一人ではなく、偶然でもあったけれども、オーガだって倒して見せた。少しは自信を持ってもいいはずだ。

しかし、その自信は脆くも崩れ去り、そのくだらない自信のせいで絶体絶命の状況に置かれている。

「伏せろ」低いつぶやきが聞こえた。それがどういう意味かと後ろを振り返ろうとした。が、そこで躓き、転んだ。

その瞬間、先ほどまで僕の首があったところを一筋の光がはしり、僕にとどめを刺そうとした二人の振り下ろしかけた剣を、横からたたき折った。一人にいたっては、剣ごと両腕も吹っ飛んだ。

男の腕は肘から先が消え、そこから血がドボドボと流れて行く。

「ああ……あ……。」男は膝をつき、声にならない声を洩らすばかりで、ぶるぶると震えながら、肘の付け根を茫然身詰めている。

その首を、フードの男が上から剣を突き刺すような格好で落とした。その様は、さながら罪人の首を落とすギロチンだった。肘からの出血が多すぎたのか、男の首から血が吹き出るようなことはなく、ただいつまでもびくびくと震えていた。

フードの男は僕に手を差し出した。辺りには死体が転がっており、その数は八つ。すべて彼が倒したものだ。残った相手は戦意を喪失したように攻めてこない。

「どうやら、助けはいらなかったみたいだね。」僕が手をつかむと、彼はそのままグンと持ち上げた。やはり凄い力だ。

彼の力に感心しつつ、感謝を述べようと口を開いた。

「危ない！」だが、飛び出したのは警告だった。彼の肩こしに、クロスボウでこちらを狙っている者が見えたからだ。

彼は瞬時に振りかえり、剣を構えようとした。その反応は素晴らしいが、それでも遅すぎる。

弦を弾く音が空気を裂いた。だがそれは、前からではなく、後ろからだった。

「ぎゃっ！」クロスボウを構えた男が悲鳴を上げ、武器を取り落とした。男の手は長矢が貫通している。振り返ると、僕らから遠く離れた、男から約五十歩ほどの距離に、弓を構えたクリスの姿があった。

フードの男は隙を見逃さなかった。彼は飛んだ。いや、跳んだ。男から十歩以上の距離を五歩で駆け抜け、最後の一步を飛んで一気に相手に詰め寄ると、その勢いをすべて乗せた一撃を男に振り下ろした。大上段から、両手で袈裟がけに振るわれた剣は、男の肩口から心臓までを一気に切り裂いても勢いは殺されず、反対のわき腹を皮一枚残してやっとなまった。

彼のフードは脱げていた。最後の跳躍による風圧によって吹き払われていた。

僕らは彼の顔を見た。彼は剣を馴れた手つきで抜いたところで、頭に手をやり、フードが脱げていることに気付いた。あわててフードをかぶろうとし、半ばまで引き上げたところで、僕らのほうを向いた。そして啞然とした表情で、同じく啞然としている僕らと見つめ合った。

「かけてくれ。長い話になりそうだからな。」彼はため息交じりに言った。僕らに背を向け、小さな窓から外を眺めている。僕らは座らず、戸口に立ったままだ。

「ついてこい、話はそれからだ。」戦いが終わり、後の処理も済むと、彼はそれだけ告げ、同意を得ぬまま歩き出した。僕らについてはわからないわけにいかず、仕方なく後を追った。彼に聞く必要がある。

なぜ、あなたがここにいるのか、と。

案内された宿は街の中でも小さく、古めかしかった。というより古ぼけていて、今にも倒れそうだった。馬小屋はなかったので、彼は仕方なく近くの別の宿にとめた。愛想の悪い亭主から鍵を二つ受け取ると、彼は一つを僕に手渡した（彼は四部屋借りようとしたが、部屋は三つしかなく、一つは亭主の部屋だった）。

「荷物を置いたら私の部屋へ。ノックは三回だ。」そうして、今にいたっている。

彼は窓から離れると僕らに向きなおった。

「さて、何から話せばよいか。このようなことは想定していなかったからな。……何だ、座らないのか？ いや、私が立っているのでは座りにくいかな。」彼はふむ、と顎を手で支えて考え込んだ。先ほどのだんまりとは対照的で、よくしゃべる。もしかすると、本当はおしゃべりな人なんだろうか。

「そのフード。とつたらどうです、今更隠す必要ありませんし、ここなら誰かに見られる心配もないでしょう。」クリスは敵対心を隠そうともしないで言った。彼の正体を知ってから、クリスはずっと睨んでいる。その陰悪さときたら、僕とマリアさんでさえ怖くて声をかけられない。

「ああ、そうだったな。どうもくせになっていたようだ。」しかし彼は気にすることもなく、フードをおろした。

端正な顔立ちながら、たるみのない、太く引き締まった首にがっしりとした顎。太い眉に大きな目は薄く青みがかつていながら、眼光鋭く、強い意志を宿して燃えている。艶のある金髪は、長旅のためか、それとも本来そうなのかくせをそのままにしたままだ。

「まさかあなたが追って来るとは思いませんでした、ヘイル皇子。」目の前に立つ人物、この国の第二皇子にして、戦場では先陣を切つて戦い、誰よりも多く武功を勝ち取る勇猛な姿から

「戦神」の異名を持つヘイル皇子を見つめる。

第三話：邂逅（後書き）

お久しぶりです。新年最初の更新があのようなことになってしまい、申し訳ありませんでした。パソコン、戻ってきました。ですが、結局修理はせず、壊れるまで使うことにしました。さすがに9万はちょっと……ね。

今回、パソコンがなかったため、アナログで書きました。実は、アナログで小説を書くのはほとんどないのです。パソコンより書きやすいですが、やはり時間がかかってしまう。打ち込む必要もありますから、2度手間になってしまうので、やはりパソコンが楽ですね。

とにかく、パソコンが壊れない限り、今までのペースでやっていきたいと思いますので、今年もよろしくお願いします。

第四話：交渉

「『あなたが』？その言い分だと、誰かが追ってくることはわかっていたようではないか。」ヘイル皇子が僕に目を向ける。

途端、体が重くなつた。腕はけだるくなり、足は血が通わなくなつたように力が入らない。体の各所に鉛をつけられ、背中に馬でもしよっているみたいで、額には汗が流れていく。だというのに、体は寒気を覚えていた。

それは、ヘイル皇子によるものだった。彼のむき出しの殺意。表情は柔らかだが、目は凍るようにつめたい。彼の殺意はもう魔法とさえ呼べるほど僕の体を縛っている。彼は武人だ。それも僕とは次元の違う、「殺意」さえ技に昇華させている武人。

「ええ、追われているのはクリスがすぐに気づきましたし、あなたが追つ手を差し向けることもわかっていた。」それでも。それでも声を震わせることなく、言葉を吐き出す。一語一語を口から放つたびに唇が震え、齒の根が合わなくなりそうになるのをぐつとこらえて。

弱さを見せるわけにはいかない。それは敗北を意味する。何の敗北かはよく分からないが、彼の殺気に気圧されているのを認めれば、僕は彼に負ける。そしてその負けは、何かを失うことになる。そんな確信めいたものを抱いていた。

急に体が軽くなつた。いや、元に戻つたのだ。

「うん？追われていることに気付いたのはとにかくとして、なぜ追手が来るとわかっていたのだ？」皇子はさらに問いを続けた。それは、先ほどの僕を試すための質問ではなく、彼自身の純粋な問いだった。その証拠に殺意は薄れ、瞳は静かにこちらを見つめている。

「ええ、あなたが僕を疑い、すぐにでも殺したいと思っているの是一目でわかりました。」彼の殺意は呼吸さえ止めさせていたように、今すぐにでも腰を落ち着けて、大きく息を吸いたく手たまらなかつ

たが、ここでそうしてしまえば意地を張った意味がなくなる。

「そうか、どれだけ平静を装ってもばれてしまうものだな。やはり慣れない嘘などつくものではない。いや、敵意を抑えきれなかった私の未熟さが原因か。」皇子は自嘲気味につばやいた。

だが、気付いたのも当然である。なぜなら僕には、人の心が見えるようになってしまったのだから。正確には、人の感情を目で見てわかるようになったのだ。

どういう仕組みなのかはわからないが、城で目覚めて以後、人の体に以前には見えなかったものが見えるようになった。体の周りに微かだが靄のようなものがあり、それに色がついているのだ。しかもそれは人によって違う。濃さも人それぞれだ。しばらくいろんな人を見てみて、それが感情に結び付いていることが分かった。喜びは黄色、怒りは赤、哀しみは青、楽しさは緑、といった具合に。無論、それらが重なって違う色を形成している人もいる。人の感情はそう単純なものではないのだから当然なのだが、そのおかげでどの色がどういった感情なのか最近やっとわかり始めたところだ。

だが。怒りが赤だというのは一番最初にわかった。

初めて皇子が魔法使いを連れてやってきたとき、彼の体は燃えていた。紅く、紅蓮の炎のように。それは火事、クリスの村、ソースウツドの火事の何倍も紅く、紅い炎。いくら人の感情が見えるようになったと言っても、それは本当に微弱なもので、普通にしているときはほとんど見えない。かなり目を凝らして、やっと靄らしきものが見える程度だ。先ほど戦った彼らでさえ、微かに赤い色が判別できるぐらいのものだった。

その時点で直感したのだ。彼はグラムを憎んでいる。その一部である僕を保護するだけで、彼が何の行動も起こさないなんてありえないと。

だが、流石にヘイル皇子本人が追ってくるとは思わなかった。

「それにしても、なぜあなたが追ってきたのです。尾行させるなら別の人間でもいいはずだ。ましてやあなたは皇子だ、適切な人間な

らだれでも雇えるでしょうし、あなたの素性は尾行にはむかなすぎる。」

「誰でもよくなかった。グラムを倒すのなら、私ぐらいの強さが無ければ。そして私には、私ほど強いものをこの国では知らない。だから私なのだ。理由などそんなことだ。」

「へ、ヘイル皇子。あなたは、あのグラムを倒すというのですか？ マリアさんが言った。」

「当たり前だ。今が戦時中だということを忘れたのか。奴はアングマルの中でも最強の將軍だ。奴が軍すべてを総括していないのはなぜかは知らんが、軍にとって奴は大きな存在だ。奴一人で戦局は大きく左右される。こちらにとっても、あちらにとってもな。そのグラムがこの国にいる。それも一人で、満足な装備も持たず。これを機と言わずしてなんという？ 千載一遇のこの機会を逃すわけにはいかん！」 皇子は語気を荒げて答えた。

「でも、あなたがこなくても、軍を総動員すればいい話じゃない。相手はただでさえ化け物だし、たくさんで探したほうが早いでしょう？」……クリス。そういう君の物怖じしないというか、遠慮のなさというか、相手がだれであつても気後れしないところはいいことだけど、相手は皇子だよ……？

という僕の（おそらくはマリアさんも）心配に全く気付かないで悪まで警戒していることを隠そうともしない態度のクリス。対してヘイル皇子は、その態度にいらついたそぶりも見せずに返す。いや、むしろ楽しんでいるのだろうか。少なくとも、僕と話している時より彼の色は優しく見える（と言っても、紅蓮の炎を向けるのは僕だけなのだが。二人に対しては色は無色に近くなる）。

「それだけの兵を動かすには時間がかかる。まして、私の軍は遠征に戻ってばかりで疲弊している。準備ができたところには奴はもう国外に逃げているはずだ。仮に準備できたとしても、奴はそれだけの人間が動いたら隠れてしまうだろうし、見つけだせても仲間を呼ぶ前にやられてしまうだろう。兄上が国境警備に兵を割いているだろ

うが、国境を超えるすべをやつが知らないとは思えない。」

「皇子なのに、国境警備隊を信頼してないの？」

「そんなことはない。我が国の警備は他の国の水準より高い数値だと思っている。だが、国境の位置によつては緩やかにせねばならない場所もあるし、そもそも国境とされていないところから抜け出されたらどうする？たとえば、霧の山脈を越えて行く、とかな。」

「霧の山脈！？そんな、それは無理です、だってあそこは入れないようになっていますし……。」

「マリアさんが言う。その声はどこかおびえていた。」

「いや、入ることはできる。魔法で結界ははつてあるが、こちらから入ることはできるようになっているのだ。だが、あちらから出ることはできない。あそこはこの国には珍しい凶悪なモンスターの巣窟だ。ゴブリンどころか、時々目撃されるトロールより凶暴なのがうじゃうじゃとな。」

「それじゃそこに行くはずじゃない。そんなの人間が越えられるわけがない。」とクリス。

「そう、普通の人間なら、一刻として生きていられぬだろう。ましてや山を越えるなんてことは不可能だ。」

「だったら……。」

「普通なら、な。だが奴は違う。君も言っただろう、奴は化け物だと。」部屋の空気が固まる。それは、まさか……。

「……それは、あいつが人間じゃないといたいですか。」思わず口をついて出たのがそれだった。違つてほしいという願いを込めて。奴は化け物。その通りなら、この身もまた人あらざる身であるということ。既に人間として欠けている存在であるのはわかっていながらこんなことを願うのはおかしいかもしれないが、それでも、自分が人間でなく化け物であるとは思いたくなかった。

「いや、奴は人間だ。真正銘ただの人間のはずだ。第一、それはお前が一番よくわかつているだろう。自身が人であるなら、本体である奴も人間でなくてはいけない。」

「なら、どうしてそんな……。」「だが、僕の言葉は途中で遮られた。だが。化け物を人をはるかに超える強さの生き物と定義するなら、それらを日常的に、食事と同じように殺し続けている奴もまた、化け物と同義ということになる。」

「それは、どういう……。」「

「知らないのか。奴の国、アングマルはな、化け物が国中を闊歩しているんだ。それこそ、霧の山脈に出てくるようなモンスターがな。」「僕らは言葉を失った。皇子の放った言葉が信じられない。トロールよりも強いモンスターが出る霧の山脈。それがどれだけ危険なのかは、結界という存在からこの国を脅かすほどだとは想像に難くない。だが、この国を脅かすだけのモンスターが、相手の国にはたくさんいるという。野を歩く獣のように。」

ヘイル皇子は続ける。

「彼らは生きて行くだけでも命がけなのだ。日々の生活の一部として、モンスターと戦っている。あの国では、生まれた子供には武器を授け、歩く前に刃を握り、言葉を話すころには大人に交じって戦っているという。首都ではさすがにそこまでではないだろうが、奴はあの国でも辺境の村の出身だ。ギエビエリーというモンスターを知っているか？蛇の胴体に口を足した、タコのような触手をもつ化け物なのだが。」

「どこかで見たような……。？」首をかしげる。何か、すごく間近でそれを見たような……。

「あいつよ！私とイエリシエンが初めて倒した化け物。イギリスの井戸にいた！」僕の疑問をクリスが見事解決した。

「イギリスにギエビエリーだと！？それは本当か！？」

「本当よ。でも、私たちが倒したから問題ないわ。それにしても、あいつぐらいなら、村人全員でやれば倒せないことないんじゃない？」

「あいつぐらい？待て、君たちは奴らを倒したんじゃないのか？」
「奴ら？あいつは一体だけよ。そんなにたくさんいるわけないじゃ

ない、そこまで強くなかったといつても、井戸と同じくらいの胴回りだったわよ。」

「なんてことだ。イギリスは危ないかもしれない。」

「どうしてよ。私たちが倒したんだから問題は……。」

「奴らは本来群れで行動する。ゴキブリと同じだ、一匹いたら三十匹はいないとおかしいのだ……！」

「三十匹！？それじゃ、イギリスは……。」

「わからん。たまに単独で行動するギエビエリーもいると聞く。だが、奴らは単独だと臆病で、そう目立った行動はしないはずだ。井戸から出てきたといったな。もしかしたらそいつは群れからはぐれたのかもしれない。調べないと何とも言えないが。それにしても、なぜギエビエリーがこの国に……？」ヘイル皇子は部屋の中を行ったり来たりしながら、何やら考え始めた。

「あの、それで、さっきの話はどうなったんです？」ヘイル皇子が考えに没頭してしまい、何も言わなくなったのに耐えきれず、先を促した。

「ん？ああ、そうか、奴の話の途中だったな。端的に言うと、奴の村はギエビエリーの大群に襲われたんだ。百匹以上のギエビエリーにな。」

「百匹！？でも、そんなにたくさん来たなら、いくらなんでも逃げるでしょう？あいつら、動きは鈍そうだし。」とクリス。

「あいつらの動きは確かに遅い。蛇の胴体をしていながら、蛇行運動ができないからな。進み方はナメクジのそれに近い。だが、その代わりに音を立てずに進むことができる。そこからついたあだ名が『音の無い死』。他のモンスターより弱いが、あの国では最も恐れられている化け物の一つだ。気付いた時には村は囲まれていたんだ。奴の家族はそこで皆死んだそうだ。」

「一体どうやって？」先を促す。皇子は一つ間をおくと、つづけた。「……数日後、他の村の者がその村を訪ねると、村は壊滅していた。誰ひとり生きてはおらず、家屋も粉々。だが、その中で一人、生き

ている者がいた。それがグラム。奴はその男の前で最後のギエビエリーを殺したそう。辺りには人間とそれよりも圧倒的に多いギエビエリーの死体。奴が八歳の時の話だ。」

「な……！？」度肝を抜かれたとはこのことを言うのだろう。八歳？戦うどころか、普通なら武器を振りまわすことすらしない年頃で、あれの大群と……？」

「その話は本当なんですか？私にはとても信じられません。」マリアさんが当然の疑問を口にした。そう、とてもじゃないが信じられない。……なのに、あいつならできてもおかしくないと思ってもいた。

「さあな。私も人から伝え聞いた話だからな。だが、信用に足る人物だし、今の奴ならその程度苦ともしないだろうよ。」ヘイル皇子は何気ない調子を装ったが、それはどこかぶっきらぼうだった。

「奴の話はもういいだろう。そろそろ本題に入りたいのだが？」

「本題？」おうむ返しに尋ねる。ヘイル皇子はあきれた顔をした。「まさか世間話がしたいから呼んだとも思っていたのか、お前は私はこれからのことを話そうと思っていたのだが、お前は頭が切れるようで、案外抜けているようだな。」

「……それで、あなたはどうするつもりなんですか？」ヘイル皇子の物言いにむっとしたが、それをのみこんだ。

「することは決まっている。私は奴を倒したい。なぜだかは知らぬが、お前はグラムがどこにいるのかわかるようだから跡をつけた。それがばれてしまっても私がとる行動は変わらない。今更城に戻る気など毛頭ないからな。」

「……わかりました。」

「ちよつと、イエリシェン！」すかさずクリスが異を唱える。だが、それは予想していた。

「クリス。ここで僕らが嫌だと言ってもこの人はついて来るよ。追い払おうたって、あつち馬だし、戦ってどうにかなる相手じゃない。それはクリスにもわかってるだろう。」話しながらヘイル

皇子を盗み見る。彼は平然とした顔をしている。覆せない論議の結果を見ているかのように。クリスにもそれはわかつていているようだったが、やはり納得はいかないらしい。

「でも……。」

「そうだ。だが、条件がある。」と、ヘイル皇子に向き直る。

「一つ、僕らと共に行動し、勝手な行動をとらないこと。二つ、僕がよしとするまで、グラムと出会っても戦わないこと。……三つ、僕と毎日稽古をすること。」ヘイル皇子は一つ目では何の反応も示さなかったが、二つ目の条件で眉を寄せ、三つ目の質問では目を見開いた。

「待て。一つ目の条件は飲もう。だが二つ目は論外だ。私は奴を倒すためにお前を追ってきたのだ。それは、この旅の目的を否定することになる。」

「戦うなど言っているわけではありません。ただ、あいつと、グラムと話す時間がほしい。あいつには、言いたいことが山ほどあるのだから。そのあとでなら、好きなようにしてください。戦うなり、人を呼ぶなり、どうとでも。」ヘイル皇子は眉間にしわを寄せて考え込んでいたが、おもむろに口を開いた。

「……それを私が破ったら？ 君たちはどうやって私にペナルティを負わせるつもりだ。」

「あなたの正体をその場にいる人全員にばらします。真偽などわからなくても、騒ぎにはなる。それはあなたにとって都合が悪いでしょう？」

「本当によくわからんやつだ。よからう、条件をのむ。だが、三つ目は何の意味がある。」

「純粹に強くなりたいだけです。他には何も。強い人と手合わせすれば、それだけでも価値がある。その条件を、あなたは十分すぎるほど満たしていますからね。」僕はよどみなく答えた。ヘイル皇子はまだ引っかけがあるような難しい顔をしていたが、やがてうなづいた。

「わかった。ではこういうことでいいな。今後、私はお前たちと行動をともし、勝手な行動は取らない。お前の許可なしではグラムに手を出さない。時間があれば、お前と鍛錬する。」頷いて答える。ヘイル皇子も了解というように頷いて返した。

「よし。で、奴はこの街にいるのか？」

「いや、この街にはただ方向が同じだから通っただけ。グラムはもつと先を行っていますね。」

「なら決まりだ。明日にはここをたつ。今日は早めに寝ておけ。私はもう眠る。」

「ちょ、なんであんたが仕切ってんのよ！」クリスはヘイル皇子に食って掛かった。だが、皇子はいつもの平然とした表情で答えた。

「簡単だ。この中で一番旅慣れている。それに、奴を追うのが目的なら、ここに長居する必要はないだろう。……本当なら、今からでも馬を走らせたが、きみたちに馬はないし、門はしまっている。

明日を待つしかあるまい。それとも、何か異論があるのか？」

「~~~~~！」クリスは体をわなわなとふるわせていたが、踵を返すと、扉を乱暴に開け、足音高く部屋を出て行った。

「……あんまりクリスをからかわないでください。」僕はため息交じりにヘイル皇子に言った。ヘイル皇子は意外なことに、目じりを下げていた。

「いや、からかったつもりはないのだが。あのような御仁は初めてなのでね。まあいい、話は終わりだ、お前も部屋を出ろ。私も明日の準備をしなければならないからな。」僕は促されるまま、部屋を出た。クリスは廊下にはいなかった。おそらく部屋に行ったのだろう。

僕は深く息をついた。やっと緊張感から解放された。皇子はなれないことなんて言っていたが、僕のほうが慣れていない。

「それにしても、イエリシェンさん、すごかったです。」と、マリアさんがいう。

「すごいって、なにがです？」

「皇子様とのやり取りですよ。ヘイル皇子、すっごい睨んでたのに平気な顔して、それに話し方もいつもと違ってて、なんか違う人みたいでした。」

「違う人、ねえ。僕も二度とごめんですよ。戦うより疲れました。それより、早く部屋に戻りましょう。今度はクリスを説得する必要がありそうですから。」苦笑いで告げる。マリアさんも同じ表情で返した。

第四話：交渉（後書き）

みなさんこんにちは。じょんです。って、最近この挨拶も変な気がしてきましたけど。

また更新が遅くなりました。……書くのが遅くなったみたいです。いや、ちょっと遊びすぎたのも原因かな……？

第五話：夜襲

その夜、僕は窓辺に寄りかかって毛布をかぶりながら、明かりの無い部屋を見つめていた。一日中歩

いて疲れているはずなのに、眠れなかった。いや、正確には一度眠ったのだが、起きて目がさえてしま

ったのだ。それというのも、ベッドに横たわっている存在のせいだ。

「……なんで一部屋しかないんだよ。」愚痴をこぼす。勿論、眠っている二人を起こさないよう聞こえ

ないよう、小さな声で。

借りた部屋は一部屋。作りはヘイル皇子のと同じで、小さなテーブルと、ベッドが一組あるだけ。そ

のベッドに二人、クリスとマリアさんは仲良く眠っている。ただでさえ小さなベッドに、二人が寝ると

いうのは不可能に思えたのだが、どちらかが落ちることなく、また落とすこともない。だが、どこでそ

うなったのか、二人の手足は変な具合に絡み合い、掛けていた毛布がはがれている。先ほどそれに気付

いて毛布をかけに行つたのだが、服の一部がめくれあがったりして、精神衛生上非常によくなかつ

た。それでも、目をつむったりなんだりして何とかかけてやった毛布も、ものの数分もかからないうち

にはがされてしまった。

「加えて、これだものな。」と壁を見つめる。その壁を通して、重低音の長い響きが絶え間なく聞こえ

てきている。

「まるで竜のうなり声だ。……本当に皇子なのか、ちょっと疑問に思えてきたな。」そう。目が覚めた

のもこれが原因だ。

この部屋の壁は相当薄いのか、音がそのまま伝わってくる。皇子が寝る前まで何やら準備をしていた

のもわかったし、今は同じ部屋で寝ているのかと思うほど、いびきがぐぐもらずにきれいに響いてい

る。それがうるさくて、とてもじゃないが眠れない。

ため息交じりに、夜空を見上げた。眠れないならいっそ、この状況を楽しもうと思ったのだ。だが、

小窓はくすんでいて、満足に空を見ることもできない。よく見れば、縁に埃がつもっている。試しに指

でこすると、埃の塊があつという間に出来上がった。

埃の塊を指で丸めて弾くと、服の袖で窓を拭いた。袖が汚れてしまつが、もともと旅で汚れてしまつ

ているからあまり気にすることでもない。

そうして一部だけきれいにした窓から、覗き込むように見上げた夜空は、かけ始めた月に雲がかかつ

てしまつて何とも面白くない風景だった。星まで薄い雲に覆われて見えない。

僕は二度目のため息をついた。うるさくて眠れないのに、気晴らしもできないのでは、余計に耳を澄

ましてしまつて、うるさく感じてしまつてはいないか。

そう。だからすぐに気がついた。誰かが階段を上ってくる音に。

亭主かもしれない、という考えはすぐに捨てた。できるだけ音を立てないようにするとしても、足音

は神経質なほどゆっくり、静かに上ってくるし、あの愛想の悪い亭主がそこまで気の回る男には思えな

い。

何より、足音は一つだけではなかった。一つ、二つ、三つ……。わからないが、かなり多い。一番近

い足音が二階の廊下にたどりついたのに、階下からまだ足音が聞こえる。

気付けば、剣を手に持ったまま、戸口の前で息を殺している自分がいた。剣は鞘から抜いていない。

抜けば音で気づかれる。剣を抜くとき、どうしても音がしてしまうものだが、このダマスカス鋼の剣

は、特に大きな音を立てる。突然鈴の音がしたら誰だって警戒する。

だから、今は戸口の前で身構えていることしかできない。相手が何者かはわからないが、扉に鍵がか

かっている以上、壊して入るしかないはず。その不意を突けば……。

足音が扉の前でとまった。柄に手をかけながら、二人を起こしたほうがよかったかと思った。い

や、それで物音をたてて気付かれるのが関の山か。

扉の向こうから、金属の音が聞こえてきた。小さな金属がこすりあうような、チャリチャリとし

た……。

扉に鍵が指し込められる。あわてて鍵のつまみをつかんだ。同時に、つまみが回転しようとする。そ

れを力づくで抑える。

相手は鍵を持っている！？なぜ、どうして！？

「おい、どうした？」扉の向こうから、押し殺した低い声が聞こえた。

「いや、あかねえんだ。たてつけわるくなってるんじゃないか？」鍵を回しているらしき男が同じささや

きで答える。

「ん？馬鹿、そっちは違う、皇子は隣の部屋だ。気付かれたらどうする！」何かがたたかれる音がした

かと思うと、つまみは動かなくなった。静かに鍵を引き抜く音がし、足音が遠ざかる。

いや、足音は隣の部屋に向かっていく。奴らの目的は、皇子だったのだ。ということは昼間の連中の

仲間だろうか。

それよりも、なぜ皇子だと知っている？あの場で皇子の顔を知っている者がいたのだろうか。それ

に、なぜこの場所がわかったのだろうか。つけられてはいなかったはず……。

亭主か！ならば合点がいく、奴らが力ギを持っていたのも。亭主

の部屋は皇子の隣。おそらく、僕ら

の会話を盗み聞きしていたのだろう。この宿の壁なら平気で聞こえるのだろう。もしかしたら、この宿

はそう言った秘密の会話を聞くためのものかもしれない。

いや、今はそんなことを考えている場合ではない。このままでは皇子が危ない。いびきはまだ聞こえ

ている。

大声を出すか？いや、それじゃあ間に合わない。

部屋を飛び出して相手の気を引くか？相手が何人いるかもわからないのに？第一、この宿の廊下では

僕の剣は狭すぎて振り回せない。

そうこう考えているうちに、隣の扉の力ギが開く音がした。

「ミキバキバーン！」という物音、でなく破壊音で、私の睡眠は突然覚醒を余儀なくされた。

目を開ければ、部屋中に埃が舞い、木くずが顔やベッドの上に降ってきている。

「皇子！」何事か、と問うより早く、私を呼ぶ声がした。声のしたほう、扉に目を向ければ、グラムの

分身が一人で戦っている。その足元には死体がひとつ。だが、戸口から何人もの男たちが入り込もうと

しているのが見えた。

私は瞬時に状況を理解した。

「下がれ！」分身に命じる。分身は私を見ると血相を変えて、戦っている相手から下がった。敵はそれ

より遅れて私を見た。その顔に、ベッドが直撃した。

あいた口がふさがらなかった。壁を突き破って飛び出した自分が言うのもなんだが、常識はずれにも

ほどがある。

「下がれ！」突然皇子から恫喝され、そちらを見たら、なぜか皇子はベッドを掴んでいた。頭で理解す

るより早く本能が反応し、戦っている相手からとびのいた。その頭をベッドの足がかすめた。

だが僕はまだよかった。相手は突然飛びのいた僕の行動が理解できず、僕の視線の先に首を巡らした

瞬間、側頭部にベッドが横殴りに入り、骨の碎け散る音を部屋中に響かせて吹っ飛んだ。あろうこと

か、というより何を思ったのか、ヘイル皇子は先ほどまで自分が眠っていたベッドを武器にしたのだ。

一瞬にして死体と化し、また飛び道具と化したそいつは、部屋に入ろうとした仲間と一緒に廊下に出

戻った。間髪いれず皇子は扉に走り寄ると、扉を閉め、そこに本来使われない使われ方をしたベッドを

置いた。

ヘイル皇子はパンパンと手をたたくと、飛びのいた拍子に転がった僕と、壁に空いた大きな穴とを交

互に見比べた。

「成程。間に合わないと判断して壁から来たのか。なかなか常識はずれな行動をするのだな、お前は。」

「っ！常識はずれはそっちだ、ベッドを振りまわす奴なんて聞いたことない。」思わず言い返す。

「仕方ないだろう。武器は手元になかったし、扉をふさぐ必要もあったからな。とにかく、これしばらくは時間を稼げる。で、どういう状況なのだ？」

「僕もよくはわからない。多分、昼間の連中だとか……。」

「イエリシェン！一体何が起こったの！？」と、僕の言葉を遮り、壊れた壁からクリスたちが顔を出し

た。二人とも壁を壊した音で目は覚めているみたいだが、服が乱れているうえに、マリアさんの寝癖が

特にひどかった。髪の毛が触覚みたいだ。

「昼間の連中が皇子を狙ってきたみたい。多分だけど、亭主がグル。鍵を持ってたし、会話を聞かれて

たと思う。……それで、どうする？形勢は圧倒的に不利だけど。」
ちようどいいので全員に説明し、ど

うするか尋ねる。正直僕にはお手上げな状況だ。戦うなら徹底抗戦するつもりだが、結果は目に見えて

いる。

で、皇子は何も言わずに僕らの部屋に入っていく。手にはちゃんと荷物を持って。

「ちょ、ちよつと！勝手に入ってこないで……！」

「仕方ないだろう。こっちのベッドは扉をふさぐのに使っているのだから。」クリスの制止にも構わず

部屋に入っていく皇子。その意図を測りかねたまま、とりあえず後について部屋を移動する。

僕らの部屋の扉はまだ開いていない。鍵を持った奴は隣の部屋で倒れているし、廊下が狭いので巧く

タツクルすることもできないのだろう。だが、それも時間の問題だ。あと数分も持たないうちに、扉は

ぶち破られてしまうに違いない。現に、さっきから扉がみしみしと悲鳴を上げ始めている。

皇子は部屋に入ると、ベッドに向かった。そしてまたつかんで持ち上げた。行動もそうだが、ベッド

を軽々と持ち上げ、振りまわせる彼の膂力は何なのか。ベッドを頭の上に担ぎあげている姿は、どう見

ても一国の皇子には見えない。

「で、何をするつもりなんだ、あなたは。」

「なに、お前の行動をまねしようと思ってな。」にやりと口の端を釣り上げて答える皇子。どことなく

楽しげに見えるのは気のせいだろうか。

「まね？」おうむ返しに尋ねる。だが、皇子は答えずに、頭の上にベッドを抱えたまま窓に走って行

き……。

「フン！」窓にベッドを投げつけた。

窓はベッドが通れるほど横幅がなかったが、皇子が投げたベッドはそんなことをお構いなしに豪

快な音を立てて壁ごと窓を突き破った。その拍子にベッドの足が折れ飛んで僕の足元に転がった。

ベッドが通った後には、窓があった場所に窓はなく、一人一人がすんなり通れるほどの大きな穴が開い

ていた。皇子は穴の前まで歩いていき、下を見下ろすと、そこから飛び降りた。

「って、ええ!？」思わず声を上げ、窓辺、だったところに走り寄る。気付けば、二人も僕と同じよう

に下を覗き込んでいた。皇子の行動に驚いて窓辺に走って行ったのは僕だけではなかったのだ。

当の本人は、いたってぴんぴんしていた。壁や窓の残骸の上に立つベッドから降りると、こちらに振

り返り、飛び降りると手招きしている。……どうやら、ベッドを緩衝材代わりにしたようだが、無茶苦

茶にもほどがある。まあ、ここは二階なので無謀というほどでもないかもしれないが。

色々と言いたいこともあるが、今は後に続くしかない。窓を壊してから、扉をたたく音が激しさを増

しているからだ。ちようつがいがちゃらちゃらと音を立てて、生き物みたいに跳ねている。

「二人とも先に。僕は荷物を持つから。」僕は二人に言うと、荷物を取りにベッドがあつたところに戻

った。三人分の荷物を背負い、ぽっかりと空いた穴に向き直る。クリスは既にいなかったが、マリアさんはまだその場にいた。

「何してるんです。早くしないと奴らが来てしまいますよ。」窓に近寄りながらマリアさんに言う。だ

がマリアさんはうつむいている。

「……マリアさん？」近寄って顔を覗き込もうと思って、やめた。そんなことをしなくてもわかったか

らだ。

「すいません、足がすくんじやって……。」「マリアさんは涙声で俯いたまま答えた。膝は小刻みに震え

ており、今にも座り込んでしまいそうだ。

「……もしかしくなくても、高いところ苦手ですね。」「マリアさんはこくんとうなづいた。

まあ、苦手でなくても、二階から飛び降りるのは怖いだろう。僕だって怖い。何の躊躇もなく飛び降

りるヘイル皇子とかクリスのほうが珍しいだろう。だが今はそんなことを言っている場合ではない。も

う扉は限界なのだ。

「クリス！」僕は荷物を下ろすと、一つづつ下にいるクリスに放った。クリスは難なく受け止めたが、

三つ目を僕が手にしたところで、あわてて首と手を横に振った。マリアさんの荷物は異常な重さなの

だ。僕ら二人の三倍はある。クリスに受け止めるのは無理だ。荷物につぶされるのがおちだろう。

「早くしろ！気付かれるぞ！」押し殺した声でヘイル皇子がせかす。そこで思いついた。いるじゃない

か、この荷物を受け止められる人が。

「がつ！？おい、貴様！投げるなら投げると言え。」突然投げ渡したのだが、ヘイル皇子は落とすこと

なくしっかりと荷物を受け止めてくれた。ついでに文句を返してきたが、それに応じている暇はない。

「ちょっと我慢してくださいね……。」「マリアさんの体に両手を回し、掬いあげるような形で抱き上げ

る。

「と、突然何を……ひゃっ!？」マリアさんは何か言いかけたが、その声は途中でかき消えた。僕がマ

リアさんを抱えたまま飛び降りたからだ。

一瞬、内臓が持ち上がる感覚がしたかと思うと、もうベッドに着地していた。

足に浮いていた分の重さがいつぺんにかかる。緩衝材になるはずのベッドは、流石に二人では重かつ

たのか、それとも度重なるひどい扱いに腹を立てたのか、刹那ほども耐えることなしに壊れ、僕は二人

分の衝撃を自身で受け止めることになった。

「つつー!」両足のしびれに声をもらしながら、マリアさんを下ろす。衝撃は足の裏から電流のように

頭の先までいくと、今度は緩やかに足へと戻っていく。それに耐えること数秒。知らずにつむっていた

目を開ければ、三人はもういない。

「あれ、皆どこに……。」「道を見渡すと、三人はなぜか路地を走りだしている。」

「何してるの、イエリシェン！早く！」クリスが走りながら振り返って僕を呼んだ。

「？どうして、皇子がいるならあの数くらい……！？」飛び降りた宿を振り返りながら言いかけて、僕は固まった。

二階の僕らが飛び降りた穴からは何人ものガラの悪そうな者たちが覗き込んでいる。隣のヘイル皇子

の部屋からも数人。まだそれはわかる。どたどたと十人以上の足音が宿から聞こえるのも何とか理解し

た。だが、問題はそこではなく、別にある。視界の端に映った、クリスたちと反対方向の道から、どこ

から、どうして、どうやって、武器を持った異常な数の者たちがこちらに走ってくる。明らかに彼らの

標的は僕らだった。なぜって、口々に

「待てや皇子ー！」などと叫んでいるのだから。

「いったい、どうなって、るんだ！？」「何とか先に走っていたクリスに追いつくと、ぴたりと横につい

た。

「知らない！こっちが、ききたい！」後ろの暴漢たちはまだ追っ

てきている。むしろ暴徒と呼ぶべき

なのだろうか。

「お、皇子は、どうしたの!？」

「さ、先に、行ったわよ!」

「なんで!？」

「知らないわよ!本人に、聞いてみれば!？」クリスはどなり返した。まいつているのはクリスも同じ

らしい。マリアさんも必死についてきているが、僕らから遅れ始めている。

「くそ、このままじゃ……。」追いつかれる。僕だけなら逃げられるかもしれないが、二人を置いてい

くわけにはいかない。これじゃあ、さっきと何も状況が変わってないじゃないか。

「早く来い!」そこに、ヘイル皇子の声が飛び込んだ。前方にヘイル皇子が待っている。あの大きな馬

を引いて。彼が先に行ったのは、どうもあの馬を取りに行っていたかららしい。

「乗れ!なぜかはわからんが、この様子じゃこの町のどこにいても捕まる。町を出るぞ。」僕らがヘイ

ル皇子のところまで付くと、皇子は馬をさして僕らをせかした。

「乗れって、この馬そんなに乗れるのか？」僕は驚いて尋ねた。いくらなんでも四人とその荷物に乗せ

て走れるようには思えない。

「流石に全員は無理だ。だが二人なら大丈夫だ。君たち二人は先に門を開けておいてくれ。私たちは葉

知ってあとを追う。」そう言ってクリスに手綱を渡す。

「ちょ、私馬に乗ったことなんて……。」

「何とかなる。こいつは賢いから行きたい方向に手綱を引っ張れば大丈夫だ。」言いながら、遅れて追

い付いたマリアさんを軽々と馬に乗せる。マリアさんは抵抗する気力もなく、馬の上に乗るとぐったり

してしまった。

クリスはため息をつくど、馬に軽々と飛び乗った。

「必ずついてきてね！」僕らに振り返り、それだけ言うと、クリスは馬の腹をかかとで軽くたたいた。

途端、馬は二人分の重さなどを全く感じさせずに、風のように走り出した。

「さあ、私たちも行かねば。遅れるなよ。お前がつかまっでは元もこうもないからな。」

「って、もとはといえばあなたが……！」僕の返事を待たず、ヘイル皇子は走り出した。広場で見せた

あの脚力を存分に発揮して、凄まじい速度で走っていく。

「くそ。置いてかれてたまるか……！」そのあとに続いて駆け出す。後ろに迫る暴徒はもうすぐそばま

できていた。

「……ぜえ、ぜえ……。つく……。はあ……。」「疲れきって動こうとしない肺を、空気をのみこむようにして

何とか息を吸う。寝転がったくさっぱらの地面は夜露にぬれて、服にしみ込んで背中を冷やす。それ

が、爆発しそうな心臓を抱えた灼熱の体にはたまらなく気持ちよかった。

「何とか、巻いたようだ……。」「流石のヘイル皇子も疲れたようで、どっかりと地面に腰をおろして

いる。

僕らが門にたどりついたとき、門は開いていた。クリスが門番を

（力づくで）説得して開けさせたら

しい。町を出てからもしばらく追いかけてきたので、クリスたちと二手に分かれた。クリスたちは街

道、僕らは森に。結果、一時間ぐらいして合流できたのだが、その間もほとんど走りっぱなしで、数マ

イル近く走った気がしてならない。

「お疲れ様。よく走ったわね。もう普段の半分ぐらい進んだ気がするけど。」と、クリスが水筒を僕に

差し出した。お礼をいう気力もなく、口に水を流し込む。飲み終えたのを、座り込んでいる皇子に放る。

「なんだ、これは？」ヘイル皇子は奇妙な顔つきで僕を見る。

「なんだ、って、水筒だよ。」首だけ起こして返事をする。正直、もう体を起こす気力も残ってない。

「それくらいはわかる。そうではなく、なぜ私に渡すのだ？」

「？変なことを、きくね、あなたは。喉が、乾いて、ないのか？」

「いや、喉は乾いているが。私はお前を敵視しているのだぞ。」

「そんな事、どうだって、いいじゃ、ないか。飲みたい、なら飲む、

飲まない、なら返して、くれ。僕

は、もう一口、飲みたい。」持ち上げていた首を地面に落とす。しばらく皇子は何も言わなかったが、

ややあつてこう言った。

「そういえばお前、いつの間にか口調が変わっているが。」

言われて気がついた。自分でも気付かなかったが、確かに先ほどからなれなかったかもしれない。

い。

「嫌なら、直すけど、皇子。」僕は皮肉をこめて言った。疲れていると、わざわざ敬語を使うのが馬鹿

らしく思えてくる。

「いや、そのままでもいい。むしろ、今更変えられたほうが気持ち悪い。あと、皇子はやめろ。今後は、

ヘイルとだけ呼べ。」

「それは、ばれないよう、に？でも、ヘイルって、本名、だろ？」

「その点に関しては問題ない。この国ではヘイルは珍しくないのだ。父がそれをわかった上で名付けた

のだからな。」

「それは、どうして？一国の、皇子なら、立派な、名前をつけるべきじゃ、ないのか？」

「だからこそだ。私は皇子であるが、一人の人間、民と変わらぬ人であると。そういう戒めを含めての

名前なのだ。」

「へえ、王様つて、そういう人なのか。」心から感心を口にする。それはヘイル皇子、いやヘイルにも

伝わったようで、彼は誇らしげに語った。それゆえに、最後は消え入りそうに悲しげだった。

「そうとも。わが父、王は聡明で公平であり、民を愛し民のために尽くす素晴らしい人だ。……最も、

今はふせってしまわれているのだが。」ぼつりと最後の言葉をつぶやくと、ヘイルは水筒をあおった。

そしてそれを僕に投げ返した。

「そら、いつまで寝ている。奴はまだ先にいるのなら、寝る間を惜しんで歩かねば。」

第五話：夜襲（後書き）

こんばんわ、このところ昼夜逆転した生活を送っているじよんです。四時寝、一時起き、ってどうなのか。

若干ギャグテイストになってしまいました。こういうノリは好きなんです、雰囲気壊れたりしてないですよ？できれば、今後笑いの要素は入れたいなーなんて。なに、全然笑えない？知ってる知ってるーorz

携帯で読みにくい、との声があつたので、できるだけ区切ったのですが、どうも変に反映されるようで。他の作者様方はどうやっているんですかね。いろいろやってみたいと思います。

次回はグラムが出る予定でしたが、ちよつと視点を変えてみようかなと考えてます。では、次回もお楽しみに！

第六話：苦悩と忠誠

分厚い深紅のじゅうたんが、ブーツを履いた足を柔らかく受け止め、足音は鈍い響きと共に虚空へと消えてゆく。壁にかかるタペストリーをたいまつ之光が照らし、長く重い影をかたどっている。タペストリーは勇敢な戦士の物語をつづっていたが、闇に照らされるそれは重く沈んだ空気をまとい、華やかさとは無縁に感じられる。タペストリーの隙間からのぞかせるむき出しの石壁が、廊下の寒々しさ、重々しさを増させていた。

廊下をさらに先に進むと、左手に黒い人型が二つ浮かび上がった。全身を鋼の鎧で覆った衛兵が二人、観音開きの扉の両脇に並んで立っている。私では動くことさえかなわぬ鎧を着こんだ衛兵は、私に気付くと直ちに敬礼の姿勢を取った。私はうなづくと、彼らに扉をあけるよう促した。右側に立つ衛兵が扉をあける。

籠手をはめ込んだままだというのに器用なものだ、と感心しながら中へと入る。そして部屋の中ほどまで歩くと、片足をひき、膝をついて俯いた。背後で扉がゆっくりと閉まる音が聞こえた。

「おおよびでしょうか、陛下。」俯いたまま定められた言葉を尋ねる。「面を上げよ、愛する息子よ。」細く、かすれるようなその言葉を耳でかみしめるように聞き取ると、動きの細部にこだわりながらゆっくりと立ち上がり、私を息子と呼ぶ相手を見つめた。

十人は横になれるほどの大きく丸い天蓋ベッドに、一人のやせ細った老人が身を横たえている。最高級の枕をいくつも重ねて背もたれにしているその老人こそ、サン国の現国王であり、わが父エルドゥア王である。

「もつと…近くに來てはくれぬか…声を張るのがつらくてな…。」私は王のベッドに歩み寄ると、枕元に置かれた小さな丸椅子に腰かけた。そこがいつからか忘れてしまった、私が父と話すときの定位置だった。

父は私が椅子に座ると、深く息を吐きながら体を枕に預けた。身にまとった白衣のように軽くなってしまった体が沈んでいく。

「お体の具合はどうですか、父上。」定められたわけでもないのに、いつもと同じ言葉を繰り返す。答えも決まって同じだった。

「相変わらずだ……。体は鉛のように重く……肺は……縄で縛られているかのごとく……呼吸を拒む。灼熱の血は凍りつき……立ち上がるどころか、起き上がることさえも苦痛だ。指先は震えをやめず、各地を治める諸侯に……労いの手紙さえ送れぬ。だが、何よりつらいのは……」

きしむ音さえ聞こえそうな首を上げて、視線を私にあわせる。

「愛する息子に……早すぎる荷を負わせていることだ……」

「……父上、私は大丈夫です。確かに私はまだ若いですが、陛下を支えた元老院が同じく私を支えてくれています。」

「……そうか。……ところで、ヘイルはどうした……？この前戻ったばかりのはずだが……？」視線を辺りに走らせる父。だが、彼の求める姿はどこにもない。

「……ヘイルは、次の遠征の準備にいそしんでいます。すぐに出発するので、お会いできずに申し訳ないと伝えてほしいと言っておりました。」

「……そうか。あの子は、立派に戦っているのだな。戦の武勇は、また今度聞くとしよう……。」父は深くため息をつく、沈んだ面持ちでつぶやいた。その額にうつすらと汗がにじんでいる。呼吸は深く浅い。皺の寄った眉が弛緩し、まぶたが重そうにおり始める。

「父上、お疲れでしょう。そろそろお休みになられては。」

「何を言う……お前はまだ来たばかりでないか……。これくらいでは疲れはしないぞ……。」そう言いながらも、父のまぶたは降りては上がるを繰り返している。

「父上、私が来てそろそろ一刻以上が立ちます。私もいささか疲れてしまいました。これから遠征の調整をしなければならぬので、おいとまさせてはいただけないでしょうか。」

「むう……そうか……ならば仕方がない……。話はまたにしよう。」そう

言い終える前に、老人のまぶたは閉じていた。私は立ち上がると、父の体に羽毛の布団をかけ、ほほにそつと口付けした。

「おやすみなさい、父上。」踵を返し、扉に向かう。背後から静かな寝息が聞こえていた。

部屋に戻り、後ろ手で扉を閉める。疲れてもいないのに重くなった足を動かして部屋の中を歩き、書き物机の椅子に倒れるように座り込んだ。背もたれに深くもたれて体を伸ばし、凝り固まった体を伸ばす。

父はもう長くない。その逃れようのない事実が容赦なく心にのしかかる。

わが父、エルドゥア王は随分と長い間病にふせっている。記憶にある力強く、快活に笑い、精悍な顔つきをした父を見たのはいつだったのか忘れるほどに。父は賢く公平だったが、そのために変化を嫌う元老院との衝突は絶えなかった。そしてある日、父を誰よりも愛し、支えていた妻、私にとっては母であるエレナ王女がはやり病に倒れ、間もなく亡くなった。そのすぐ後に戦争が始まった。父は傷ついた心をいやす暇もないまま懸命に働き、そして病に倒れた。過労で疲れ切っていた体に、病魔が取りついたのだ。

それからは、私がこの国を治めている。まだ成人にも満たなかった私に付け込もうとする者は数多いた。それに加え、戦争という国家の命運を託された。だが、いつか父が回復すると信じて今日までやってきた。

だが、それも絶望的だ。医師の説明など知らない。あれは片足が死につかり始めた者の目だ。既に時間の感覚さえなかった。きつと尋ねる者がいない間ずっと眠り続けているのだろう。その眠りから覚めなくなるのもそう遠い日ではない。

「……加えて、これか。」ため息をつきながら、引き出しをあける。中には一通の手紙が入っている。内容は空で読み上げられるほど読み直した。

「なにも言わず旅立つことをお許しください。ですが、これはまたとない機会なのです。奴はまだ生きています。なら、この国にいる内に倒すべきです。私は奴を追います。そして必ず見つけだし、打ち取ってみせます。サン国の勝利のために。敬愛する兄上へ。ヘイル」

この手紙は、弟の部屋の机に置かれていたものだ。あいつがいなくなっただのに気がついたのは旅立ってから一日が過ぎてからだった。私は頭を抱えた。髪をかきむしり、机の上のあらゆる道具を弾き落とし、机を窓に放り投げたい衝動に駆られる。

弟は何もわかっていない。あれは自分が騎士であるかのように振舞うが、皇子であることを忘れている。自分の存在、行動が、この国にどれだけ影響を与えているかわかっていない。それにどれだけ私が苦しんでいることも。

本当なら軍を総動員して探しだしたいところだ。だが、それはできない。ヘイルが行方不明と知れたらこの国は大騒ぎとなる。それは士気にも影響し、戦況に響いてくる。それだけは避けねばならない。幸い、このことを知っているのは一握りの人間だけだ。だが、それもいつまでもつかどうか。

頭を抱えてそんなことを取りとめもなく考えていると、部屋にノックの音が転がった。

「誰だ。」すばやく姿勢をただし、扉を見つめる。

「近衛隊隊長、ヴァケイラスであります。」張りつめた声が答える。「入れ。」

「失礼します。」扉が開き、衛兵隊長が入ってきた。全身に鎧をまとっているが、兜だけは外し、右脇に抱えている。

くすんだ赤い髪に、額に小さな傷。つりあがり気味の眉に引き締まった精悍な顔つきは、女性を引き付けるに足るものだが、本人は女性に全く興味がなくらしく、また常に兜をかぶっているためにそれを披露することもない。

「どうした、ヴァケイラス。私に何か用か。」机に肘をつき、先ほどより親しみをこめて尋ねる。ヴァケイラスは私が信頼を置くこと

ができる数少ない人物の一人だ。私には信頼できる者が少ない分、彼らに対しては心を完全に許すことにしている。それは弱さゆえの行動なのかもしれないが、それが信頼する者に対しての礼儀であると私は考えている。

ヴァケイラスはためらいがちではあるが、おもむろに口を開いた。「あ、あの、私には、出過ぎた真似かもしれないのですが……。」ヴァケイラスはたどたどしく答える。いつもの彼は常にはきはきと部下に的確な指示を送るのだが、今は妙に自信がなさそうである。

「構わん。お前はいつも私のために行動してくれている。出過ぎた真似などあるものか。」その言葉を許しとしたのか、彼はいつもの口調に戻った。

「ガナ皇子、私に何かできることはないでしょうか。」

「……なに？」私はぽかんとしてしまった。あまりに予想しなかった問いなので、思わず聞き返した。

「ですから、私にできることはないでしょうかとお尋ねしたのです。知恵を貸すほど私は頭はよくありませんが、お話を聞くことはできます。」彼は繰り返した。

「……そんな心配をさせるほど、私の様子はおかしかったか？」

「いえ。ですが、最近の皇子はずっと考えこんでいるご様子で、顔色もよくありませんでしたので。」「……そうか。気持ちはありがたいが、そんな心配はしなくてもよいぞ。」

「ですが！私は、皇子のお役に立ちたいのです。この命を皇子に救われてから、皇子に生涯仕え、守ると誓ったのですから。」そう言つて、額の傷に手を触れた。

「そんなことをまだ気にしていたのか。あれは私が勝手に取った行動だ。それをお前が気にすることはない。」

「ですが、皇子はそのせいで剣を握ることができなくなってしまうました。」机に隠れている私の右腕を見つめるヴァケイラス。

まだ父が健全であつたころの話だ。私は戦場で兵を率いて戦っていた。その頃の私は若者らしい無意味な勇敢さで前線に立っていた。

気付いたところには敵に囲まれていた。

私があわてて引こうとした時、ヴァケイラスを狙う弓兵がいるのが眼の端に映った。警告の言葉を発したが、ヴァケイラスは気付かない。私は彼に走り寄り、腕を伸ばした。

矢は籠手をつけた私の腕を貫き、彼の額を掠めた。

それ以来、私の右腕の筋力は落ち、剣を握ることはかなわなくなつた。

「私を守ったばかりに、あなたは戦場に出ることもかなわりました。……人民の中には、ヘル皇子と比較する者もいます。」

「その者たちはこういふのだろうな。『ガナ皇子は弟のヘイル皇子と比べて臆病者だ』と。それは事実だ、ヴァケイラス。私はヘイルのように戦場で戦う勇氣はない。こうして書類と闘うのが私には性に合っている。」

「しかし……。」まだ何か言おうとするヴァケイラスを、片手で遮る。

「それにな、ヴァケイラス。私は剣を握れなくなったことを嘆いてなどおらぬ。元々私に剣の才などない。十人分の強さと忠義を持つお前と引き換えなら、安いものだ。……頼りにしているぞ、ヴァケイラス。」心からの言葉に、微笑を添える。

そう、後悔などしていない。私が戦えない分、彼が戦ってくれる。実際、ヴァケイラスはこの国で一、二を争う戦士だ。私が戦場に出ないためにその腕前を披露する機会はないが、ヘイルと互角に戦えるだろうと私は思っている。無論、それを人に言ったところで贖罪しているとかとられないだろうし、人に言うつもりもないが。

「あ、ありがとうございます、皇子！」ヴァケイラスは感激のあまり、私が父に取ったのと同じ礼を取った。片膝をつき、こうべを垂れたのだ。それは最上級の礼であり、つまり国王または王妃にしか使つてはいけなないものだ。私はあわてて席をたち、彼をたたせようと歩み寄つた。

「ヴァケイラス。頭を上げてくれ。私はそれを受けるに足る人物で

はない。」

「いいえ。私にとって、皇子こそ王であります。そしてそれは近衛隊全員の一致する考えであります。」と、ヴァケイラスはうつむいたまま答えた。

「……ありがとう、ヴァケイラス。だがな、それを快く思わない者もいる。できれば、そういった考えを吹聴して回るような言動は控えてくれ。」その言葉に、ヴァケイラスは弾かれたように立ち上がった。

「す、すみません、皇子。浅慮でした。」

「いや、君たちがそう思っていると聞いてとてもうれしい。せいぜい君たちの信頼と尊敬に足る行動をとるとしよう。さあ、もう行きたまえ。心配しなくても、お前は十分私の役に立ってくれているよ。」私は彼に退出するよう促した。彼はうなづくと、扉へと歩いて行った。私も席に戻ろうとすると、彼が私を呼びとめた。

「ガナ皇子」振り返ると、ヴァケイラスは敬礼をしていた。

「なにがあるうと、私の剣はあなたと共に。」彼は返事を待たず、部屋を出て行った。

私はあきれながらも、彼の忠誠心の厚さに感謝しつつ席についた。「では、私にできることをするか。彼らの忠誠に報いるためにも。」そうつぶやく口の端は自然と笑顔になっており、先ほどまでまわりついていた肩の重さは消えていた。

第六話：苦悩と忠誠（後書き）

お久しぶりです、じょんです。現在帰省中で、更新が遅くなつてしまい、申し訳ありません。

今度は文章を元に戻してみました。やっぱりこっちのほうがしくりくるので戻したのですが、どうしても嫌という方がいましたらご連絡ください。

モブキャラのはずのヴァケイラスが、気付いたらトンデモポテンシャルの人になってしまいました。まあ、いつか日の目を見ることもあるかもしれませんね。

第七話：足止め

雨を嫌う人がいるが、その感情はよくないと僕は思う。なぜなら、雨は恵みだからだ。大地を潤し、海を満たし、作物を育てる。そして僕らはその恩恵にあずかって生きている。僕らは雨なしで生きていくことはできないのだから、むしろ雨を歓迎すべきなのだ。

そう、頭では思っているけど、旅人である僕らにとってはやはり障害となるもので。

「……。」さつきから黙ったままその場をつろつろする人もいるのである。

「……もう、うるちよろしなくてくれない!? 焦ったって雨は止まないのよ!」クリスは座っている僕らの中で一人、洞窟の入り口で歩きまわっているヘイルにどなった。どうやら、ずっと言おうとしていたのを我慢していたらしく、いらついた口調だった。

「焦らずにはいられるか! グラムは先を行っているというのに、我々はこんなところで足止めを食らっているのだぞ。」対するヘイルも、同じ口調で食って掛かる。

「仕方ないじゃない。雨、降ってきちゃったんだから。こんな中歩いてたら風邪ひいちゃうわよ。」

「そんなことはない。これくらいで風邪をひくような鍛え方はしておらん。」

「私たちが風邪ひいちゃうの! こんな雨だもの、あっちだつてどこかで足止めを食らっているはずよ。」クリスは毛布の中から片腕だけ出して外を指差した。

ヘイル皇子の馬が何とか通れた、裂け目のような入り口から見える景色は、滝となって流れる雨によってぼやけて数メートル先も見通せない。風がないのが幸いだ、洞窟を見つかるまでのほんの少しの間にびしょ濡れになってしまい、さらに北の冷たい空気が冷えた体にまとわりつき、体温を奪っていく。カバンから取り出した毛

布も少し湿ってしまっていて、体を温めるには至らない。マリアさんなどは頭から毛布をかぶって縮こまっており、先ほどから何もしやべらない。しかも、洞窟が少し傾いているせいで、洞窟の淵に流れ込んだ雨が小さな川となっていて、そこから洞窟の空気が湿って行くのが肌で感じられる。その中でヘイル皇子だけが、毛布をかぶらずに行ったり来たりしていたのだ。

「それこそあり得ん。グラムが雨程度でその足を止めるはずがない。前にも話した通り、奴はアングマルの過酷な環境で育ったのだぞ。」壁によりかって話すヘイルの口からは、言葉が白くなって出てきている。

「それで、その過酷な環境で育った相手と、こんな雨の中出くわしたら場合、あなたはどうするんだ？」隙間から入る冷気を防ごうと毛布を抱きよせながら、何気なく聞いてみた。

「当然闘う。貴様との約束を守ってからだがな。」ヘイルは胸を張って答えた。

ずっと腕を組んだままでいるのも相まって、余計に自信過剰に見える。が、どうやら約束は覚えていてくれたらしい。

「目の前がかすむほどの雨の中で、ね。ついでに言えば、地面も相当ぬかるんでいる。重い装備のあなたには余計不利だと思うけど。」

「ぐ……。」痛いところをつかれたのか、反論しないヘイル。彼もわかつてはいるのだろうが、焦る気持ちはそうそう抑えられるものではない。それが仇敵とあれば、なおさらだ。

「グラムは僕らとそう離れてはいないと思う。あ、いや、近づいてるかどうかが分かるわけじゃないんだ、僕にわかるのはグラムのいるだいたいの方角だから。」目の色を変えたヘイルに一応断りを入れておく。

「でも、あいつは街道を通らないはずだ。極力人に会うのは避けるはず。そうすると、街にも当然入らないし、近づくこともないからかなり迂回する必要がある。先を歩いてはいても、あいつは僕らの倍以上の距離を歩くことになるだろうから、十分追いつけると思う

んだけど、どうかな。」

「確かに貴様の言うことも一理はあるが……。」「同意はするものの、納得はできないらしい。」

「……ねえ。そういえばあいつ、服着てるのかしら？」

「へ？」突拍子もない質問に、すつとんきよんな声を上げる。

「ほ、ほら、あいつつて、逃げ出した時裸だったじゃない。人に会わないで、街にも入らないんだったら、どうやって服とか手に入れるのかな、つて。」

「ああ、成程。確かにそれは考えなかったな。裸でいるってことはないと思うけど……。」「

「奴は服を手に入れているはずだ。食料その他とな。」

「どうしてそんなことが分かるのよ？」とクリス。僕自身、ここ数日でヘイルに対して遠慮のない態度を取るようになったが、彼女ほどではないと思う。というより、クリスは会ったときからこんな態度で接している。僕が知らないだけで、二人の間に何かあったのだろうか。

「それはだな……。」「ヘイルは簡単に自分の考察を述べた。

農村ラグに運ばれた死体の傷から、相手はグラムだということ。

食料と服がなくなっていて、驢馬もいなくなっていたこと。

「日にち的にも、グラムがやった可能性は高い。あれほどの芸当ができる奴など、そうはいない。いたとしたら、すぐにでも噂になるはずだからな。」

「じゃあ、グラムはその盗賊が盗みに入っているところに偶然居合わせたってことか？」

「偶然かどうかはわからんがな。奴のことだから、何か異常があることぐらいは入る前に気付いていただろう。」

「どっちにしても、その盗賊たちはついてなかったってわけか。」老夫婦二人を殺す相手に同情するつもりはないが、何と間の悪いやつらだろうか。

「行方不明の女の子は？確か、二人は小さな女の子を雇っているっ

て聞いたけど。」とクリス。

「おそらく生きてはいまい。盗賊に殺されなくても、グラムが見逃すはずはないだろうからな。」淡々と語るものの、眉間には皺が寄っている。

「でも、どうして見つからないんだろう？その子だけ別のところに埋める必要はないだろう？」

「そんなことは私にはわからん。私は探偵ではないからな。」

「案外、一緒にいるのかもしれないね。」マリアさんが毛布から頭だけをひょっこり出して言った。肩をすばめて極力隙間を作らないようにしている。

「どうしてそう思うんです？」ぼくは単純な好奇心から尋ねた。そんな結論に至る考えなど、思いもつかない。

「えっと、盗賊が来たのに、家の中はきれいなんですよね？だったら、きつと誰かがお掃除したんですよ。それを見た彼が、『この子は使えるな』って、お供にしたんじゃないですか？」閃いた、という表情を浮かべ、親指と人差し指を顎にかけるマリアさん。その時のグラムを表現しているつもりなのだろうが

……。

「一緒に？奴が少女を生かすメリットはない。何より、少女の手を引いて歩く姿など、想像すらできん。」ヘイルのその一言で、この話題は終わった。これ以上続けても、答えなど出るはずはない。

何より、ヘイルの言う通り、僕らが追いかけている相手が、少女の手を引いて歩く姿を、誰も想像すらできなかったのである。

昼前に降り出した雨は、今や視界を遮るほどの大雨となって、針と化して体に突き刺さる。外套はもはやその意味をなさず、衣服はただの重りとなって体にまとわりつき、泥に沈む足にもっと深くというかのよう。吐く息は白く、寒さを通り越して、鼻や耳が痛みという器官に変わっている。

この国に来てからというものの、どうも水に運がない。あの皇子には崖から川に突き落とされ、城から脱出するために堀に飛び込み、川から這い上がれば迎えたのは雨。そして今、こうして大雨が俺を苦しめている。俺は水難の相でも出ているのだろうか。

それでも足取りは変わらず、ただ黙々と歩き続ける。楽とは到底呼べないが、慣れている。アングマルで育つということは、劣悪な環境で生き延びることが絶対条件である。大地が流れでもしない限り、足を止めはしないだろう。

「ん……？」その足を、とめた。視界をかすませる雨の先に、何かが見える。

目を凝らすと、下方に城壁が見えた。ここは小高い丘になっているらしく、ちょうど街を見下ろす格好になっている。この雨のせいで目指す方向より西寄りに進んだらしく、近付き過ぎてしまったようだ。

軽く舌打ちをして、進路を変える。無駄に距離を増やしてしまったことになる。それはつまり、この雨の中でさらに歩かねばならないことになる。

激しい雨音が鼓膜を満たす中、微かだが、音が聞こえた。ものがつぶれるような、ベシヤリという音。たとえるなら、トマトを地面にたたきつけた時のような。湿って、水気のあるものが跳ねた音。後ろを振り返る。

地面に、いや泥に突っ伏している。驢馬の手綱も放したまま、少女はピクリとも動かず、顔を泥に沈める格好で、地面に倒れ伏している。

少女のもとへと歩く。靴が泥と絡み合い、音を立てる。その音が聞こえるほどの距離にいるのに、少女は動かない。俺が近づいてきても、顔を上げない。

足で小突く。少女は動かない。さらに力を加えて小突くも、起き上がろうとしない。

襟をつかみ、無理やり立ち上がらせる。起き上らせた少女の前面

は泥につかってしまつて、もはや泥を着ているかのようなうだ。

だが、そうしても少女の足に力は入らず、膝が折れたままぶらりとしている。

呼吸は荒かつた。全力で走っているかのように速く、幼児のように微かだ。雨は冷たく、俺でさえ指先はかじかんでしまっているというのに、襟を掴んだ手に触れた首筋は熱く、焼き鏝のようで、思わず手を離しそうになった。

顔を覆っていた泥が雨で洗い落とされると、いつもは雪のように白い顔が、紅に染まっていた。眉は苦痛に耐えるように下がり、微かに開かれたまぶたから、虚ろな目で俺を見つめている。色違いの瞳もくすんで灰色にみえる。

「立つて、歩け。でなければ置いていく。」少女は微かに頷いた。

俺は手を離れた。少女は倒れるように驢馬の体にもたれかかった。そのまま、カタツムリのようにゆっくりと驢馬の首筋に手を這わせ、手綱をつかんだ。

俺は踵を返すと、歩き出した。後ろで、少女が一步目を踏み出す音が聞こえた。

だが、それだけだった。二歩目は聞こえなかった。代わりにトマトをたたきつけた音がした。

驢馬へと歩みより、荷物を取ろうと腕を伸ばす。驢馬は低くいなないて首をそらし、後ずさる。もう一度手を伸ばす。また後ずさる。手を伸ばす。後ずさる。

それを何度繰り返したか、結局俺は手綱をつかんだ。驢馬は首をふるって振り払おうとしたが、逆にこちらが驢馬の動きを封じる。「動くな。荷物を取ったらお前はもういらん、どこへなりといけ。」通じないと知りながら、驢馬に語る。当然、そんな言葉が通用するはずもなく、驢馬は何とか手を振りほどこうとやっきになっている。不意に、それが不自然に感じた。なぜ、逃げ出さないのか。こい

つは俺を拒絶しながら、この場を去ろうとしない。決して触れさせないくせに、離れてはいかない。こうして振り払おうとしている今も、動いているのは首だけで、足を踏ん張って逃げ出そうとはしない。

足元を見下ろす。地面には、俺の歩いた跡が泥にくつきりと残っている。それは円を描いて、一周して元の位置に戻っていた。

倒れた少女を中心にして。

予想できたことだ。こいつが俺についてきたときから、予想していたこと。俺の旅にはついてこれない。ただの少女が、行軍とも呼べる俺の旅についてこれるはずはない、と。確かに、思ったよりは長かった。もっと早くに音を上げるかと思っていたが、少女は存外にしぶとく付きまとった。それだけの精神力が、こいつには備わっていた。

なければ生きていけなかったのだろう。体に刻まれた傷の数がそれを物語っている。

だが、結局、こいつはこうして倒れ伏している。旅は少女を弱らせ、そこに病魔が付け込んだ。何の病気なのかはわからない。熱病か、ただの風邪か。どちらにしても、少女は動くことができない。放っておけば死ぬだろう。俺には関係のないことだが。

むしろ、好都合だ。こいつは枷でしかない。荷物持ちにとつてこさせたが、進む速度は遅くなった。国境を超えるにも、こいつは邪魔になるはずだ。

ちょうどいいのだ。そう、ちょうどいい。ここで置いて行くのが賢明だ。雨の中、見殺しにして置いて行くのが、正しい選択なのだ。それが、死神グラムの取る行動だ。

扉をたたく鈍い音に、書物から顔を上げた。

「はて、誰かなこんな時間に。」今日は閉めたというのに、一体だ

れだろうか。私の背丈より少し上に設けられた窓から外を眺める。真っ暗でなにも見え、窓をたたく雨粒だけがろうそくの光を反射している。雨のために時間はよくわからないが、日はとくに沈んでいるのだろう。

そんな時間に尋ねてきた誰かが、さらに扉を叩いている。先ほどより激しく、強く。

「今日はもうおしまいだよ。看板が見えなかったのかい。」部屋から首だけ出して、廊下から扉に叫ぶ。しかし、扉をたたく音は変わらない。

「分かった、今あけるよ」

仕方なく部屋を出て、扉へと向かう。かんぬきを抜き、扉を開けようと取っ手に手をかける。

が、その手が取っ手に触れる前に、扉は弾かれたように開いた。扉の前に立っていたのは男だった。擦り切れた外套は水をかぶったようで、ぱたぱたとしずくが垂れている。フードを深くかぶっている上、外が真っ暗で顔がよく見えない。

男は扉を開いたのと同じ速さで家の中へと入りこみ、素早く後ろ手に扉を閉めた。

「な、なんだいあんた。勝手に入らないでくれ。」抗議をしながら、私は後ずさった。

いつかどこかで読んだことがある。達人は、見ただけで相手の強さが分かると。それは、人にはオーラのようなものがあり、強い者ほど、そのオーラが濃いのである。そのオーラは普通の人には見えないが、達人ともなると見えるのであると。

私は生まれてこの方武術には全く関わったこともないからそんなものは見えないし、信じてもしなかった。

だが、今は信じる。今、目の前にいる男は、一目で危険だとわかる。

オーラなんてものは見えない。だが、体が、心がこの男は危険だと訴えかける。抗議の声はしぼんでいき、最後には自分の耳にも聞

き取れないほどだった。下がろうとする足は固まって動かない。

蛇に睨まれた蛙とは、今の私のことだろうか。逃げ出したいのに、体は全く動かなかった。

「おい。」今まで黙っていた男が、おもむろに口を開いた。

「お前は医者だな。」

「……は、はい、その、確かに私は、医者ですが……この街には他にも……。」からからになった口からようやく絞り出した声は、かすれ、震えていて、とても自分の声には思えなかった。

男は突然家上がりこむと、泥にまみれた靴で容赦なく廊下を歩き回りながら部屋を一つづつ覗き、診察室へと入って行った。

「だ、だめですよ！靴の泥は落として！」あわてて男の後を追いつ診察室に入る。男はベッドに屈みこみ、腕に抱えたものを横たわらせようとしていた。

その時になつて、やっと気付いた。男は、両腕に女の子を抱えている。男と同じような、それよりもはるかにボロボロの外套を着ている、小さな女の子。

男は女の子をベッドに横たわらせた。それはとてもぎこちなく、慣れない手つきだったが、この上なくいたわりがあった。今まで飛び込みで病気の子供を抱えた親が来たことがあるが、その親よりもずつといたわりのある仕草だった。

その姿を見て、男への恐怖が薄れた。彼は、娘を案じる父親で、その鬼気迫る姿に圧倒されていたのでは、と。そんな幻想まで抱いた。

だが、それは脆くも崩れ去った。振り返った男は、先ほどと同じ恐怖で私を縛った。

「こつちに来い。」私は呼ばれるまま男のところへといった。近付くのが嫌なのに、従わなかったなどなるか怖かった。

男はベッドの少女をさした。横たわる少女は泥まみれで、男よりも濡れそぼっている。呼吸は浅く早く、せわしい。頬は赤いのに、顔全体は青ざめている。額に手を当てると、熱さに思わず手をひっ

こめた。間違いない。

「こりや炎の病だ。森の深いところに出る蚊に刺されるとこうなる。普通は平気だが、極端に体が弱っているとかがちまう。」

「そんなことはどうでもいい。治せるのか、治せないのか。」

「さあ、どうだろうね。薬は高価だし、この子が病気に耐えられるかどうか……。」それ以上はしゃべれなかった。

血が、凍った。見えなかった。男が動くところも、それが出されるところも。

いつの間にか、男は黒い剣を抜いていて、それが私の首筋にぴたりと当てられていた。

「治すか、死ぬか。どっちだ、選べ。」男は感情の無い声で告げる。触れているだけなのに、剣は私の肌を裂いた。そこから血が流れる。それと同時に、もつとほかの、はるかに大事な何かが流れ出す、いや、すいだされていく。その未知な感覚は、私の手足の力を奪って行く。

私は恐怖した。得体のしれない感覚に恐怖した。

それをもたらす黒い剣に恐怖した。

だが、何よりも恐ろしいのは、男だった。眼力とか、声とか、容姿、振る舞いなどではない。ただ男が怖かった。男という存在が怖かった。

「わ、わかった、治す、治すよ。」しばしの沈黙の上、なんとかそう答えた。

「そいつが死んだら、お前を殺す。」有無を言わさぬ声で付け加えると、男はゆつくりと剣を下げた。その間も、私から目を離そうとはしなかった。

男は腕をおろしきると、部屋を後にしようと歩き出した。剣はいつの間にか消えていた。

「ど、どこへ行くのかね。」

「服とタオルを。」誰の、とは言わなかった。おそらく、私のを勝手に使うのだろう。男には小さくてとても着れないが、女の子には

ちょうどいいかもしれない。なにしろ私は、街の人に「小人」と呼ばれるほど小さいのだから。

男が廊下に消えて行くのを見送ると、急に部屋が明るくなった気がした。私は知らず握りしめていたこぶしをゆつくりと開いた。そして、疲れた足取りで薬が陳列されている棚に行き、炎の病に効く薬を探した。

薬は棚の奥で埃をかぶっていた。この薬は、今はもう出回っていない。この病にかかるものは、もういないからだ。だから高価。特別な材料で作られてはいないが、希少という点で高いのだ。

「それにしても、なぜそんな森の深くまで……。」「考えようとして、やめた。好奇心は身を滅ぼす。世の中には、知らないほうがいいこともある。」

それでも、考えてしまう。あの、尋常でない男にここまでさせるこの少女は、一体何者なのか。

第七話：足止め（後書き）

どうも、じよんです。すいません、だいぶ更新が遅れました。

実は一週間ほど実家に帰ってました。残りの一週間は……すいません、さぼりです。

先日、友人から「小説書き終わった！」というメールが届きました。出版社に送る小説を一月末からかき始めていたそうで、文字総数約7万字だそうです。自分は「ひと月でできたらなんか祝つてやる」と言っていたのですが、まさか本当に終わらせるとは……。彼のペースでいけば、この小説はとくに終わっているでしょうね。少しは見習わねば……。

次回はどうかちょっと考え中です。というより、どっちにしようか、というところなんです。とりあえず、頑張ってみます。では、次回もお楽しみに！

第八話：ぬくもり（前書き）

今回の話には、下品で卑猥な言葉や人によつて生理的嫌悪感を覚える表現が含まれています。このような表現が苦手な方、抵抗の無い方は読まずに飛ばすことをお勧めします。

第八話：ぬくもり

私は夢を見ない。最初から夢を見なかったわけじゃない。いつか
もわからないようなころに、何かしらの夢を見たことはある。それ
がどんな夢だったかは覚えてない。ただ、私も夢を見ることがあつ
たということは覚えている。

それでも、眠れば夢を見る。それは避けられないこと。でも、そ
れは私にとって夢じゃない。夢は、楽しくて、心があつたかくなる
ものだから。

だから、これは回想。その日に起きたことの繰り返し。

見るものはいつも同じ。その日に起きたことを見るのに、見るの
は毎日同じ。私はその日起きたことを眠りながら繰り返しされる。

怒鳴られて。蹴られて。叩かれて。無視されて。季節が違っても、
場所が違っても、やり方が違っても、されていることが同じ。だか
ら、同じ回想。苦しいのも、怖いのも、寂しいのも、全部繰り返し。
ただ、痛みがないだけ。

でも、今は違った。久しぶり、久しぶりに、その日のことではな
かった。それでもやっぱり、私が見るのは夢じゃなくて、回想だつ
た。

すごく寒い夜だった。雨がたくさん降って、水たまりに足が沈ん
じゃうくらいだった。濡れた体が冷たくて、干し草の中で小さくな
っていた。

不意に大きな物音がした気がして、目を覚ました。干し草から顔
だけ出してみても、外は真っ暗で何にも見えなくて、相変わらず雨
が地面をたたく音がやかましかった。それでも、妙に気になって、
馬小屋から外をのぞいてみた。

とても寒いのに、家の扉が開いていた。お家の光が漏れ出て、入

口あたりを照らしていた。

今思えば、どうしてそんなことをしたのか分からない。照らされた地面に足跡があることも、それが家の中に入って行っているのにも気づいていた。考えれば、なにが起きているのか、すぐにわかることだった。

私は、戸口の前に立った。

食べ物のおいしそうなにおいがする。辺りは真っ暗だし、早くに眠ってしまっただけでわからなかったが、ちょうど夕食の時間だった。ご飯のことを考えると、お腹が鳴りそうになった。今日は一日食べてない。一日一回だけ与えられるはずのパンはもらえず、大雨のせいで、森に行つて木の実すら探すことができなかった。お腹を押さえながら、扉に触れずに家の中に入った。

靴の形が分かるほどたっぷり泥がついた足跡は中に続いていた。家の中は静かだった。

一步一步、物音を立てないように。気付けば、息も止めていた。どうしてこんなことをしているのだろうか。なんで私は家の中に勝手に入っているのだろうか。家に入れば、絶対に怒られる。怒鳴られて、ぶたれて、痛めつけられて、外に放り出される。そうなることは、わかっているのに。

そんなことを考えながら、廊下を進んでいった。答えなんてとくに知っているのに、それに気付いてないふりを自分でしながら。答えはすぐに目の前に現れた。わかっていたことだ。なにが起きているのか。どうして扉があいていて、泥の足跡が続いていて、私が息を殺していて……。

どうして、二人が死んでいるのか。

息が詰まった。頭がくらくらして、倒れそうだった。手足の感覚がなくて、吐き気がして、目をそらして地面にうずくまりたくなかった。

なのに、私の目は床で倒れている二人に注がれたままだった。

手前にいるオブロクおばあさんは、あおむけに倒れていた。いつも薄眼でじつとわたしを睨んでいた。今は眼球が飛び出るほど目を見開き、茫然とこちらを見ている。口はおおきく開かれたままで、ぱっくりと裂けた喉から悲鳴が漏れ出てきそうだった。

オブロクさんはおばあさんの下敷きになるようにうつ伏せに倒れていた。いつも私をぶっていた手は、何かをつかもうと伸ばされたまま、むなしく宙を掻いている。

あつけない。ただ、それだけ思った。

あつけないと。私が怖がっていて、それでも逃げられなくて、縛られている気がしていたのに、あっさりと終わってしまった。まるで何でもなかったことのように。

暖炉の前に二人の男が立っている。手には血塗りのナイフ。切っ先から垂れた血が、血だまりになった床に水音を立てて落ちていく。おもむろに、男の一人がこちらを振り向いた。私はその男と目があつた。男の顔が、驚いた表情から、次第に残忍な笑い顔になって行くのを、ただ見ていた。

男はゆっくりと私に歩み寄った。ナイフを隠しもせず、右手にしっかりと握りしめたまま。私は逃げなかった。逃げられなかった。足が地面に張り付いたように動けず、目は男から離れなかった。

男が腕をつかんだ。その時になって初めて、私の体は言うことを聞いてくれた。でももう遅かった。男は腕をしっかりとつかんで離さないし、逃げようとあかく私をみて心底楽しそうな笑みを浮かべている。

「おい、よくみる。そいつ穢れた血じゃねえか。さっさと殺しちまおうぜ。」もう一人の男が言った。

「まあ待てよ。殺すのは、楽しんでからでも遅くねえだろ。」

「お前まさか……。死体の次はバケモノかよ。しかも子供ときたもんだ。お前の変態ぶりには、流石の俺もほとほと呆れちまうよ。」

「妹に手を出した奴が何言ってやがる。それにな、これは純粋な探究心だよ。普通はもう飽きた。人がやったことは全部やった。なら、

誰もやってないことに挑戦したくなるのは、道理だろう？」男は仲間に振り返っていた顔を、私に近づけると、耳元で囁いた。

「譲ちゃんもそう思うだろう、なあ？」頬を舐められた。獣が舐めるように、べろりと。

はじめて「気持ち悪い」を知った気がした。体中に鳥肌が立って、首の後ろあたりがかきむしりたくなるほどむず痒くなって、体が寒くなった。

怖かった。

腕を振りまわした。

暴れた。

男は喜んだ。

「おいおい、すごい嫌がられてるぜ。嫌われちゃったんじゃねえの？」男の仲間がからかうように笑う。

「生きがいいってことだろ。それに、嫌がるのを無理やり犯すのが俺はたまらなく好きなんだよ。」男も同じように笑った。笑いながら、私を抱きしめて離さない。

男は私を抱えたまま暖炉の前まで来ると、私を突き倒した。その上に男が馬乗りになった。右腕をもう一人に踏みつけられ、左腕を男に抑えつけられた。

「ひひひ、動くなよ、動くと手元が狂って、ぶっさしちまうかもしれないからね。」目の前にナイフをちらつかせながら、男は笑う。これ以上ないくらい気持ち悪く。

「あれ、叫ばねえのか？なんだい、おもしろくねえ。悲鳴あげてくんないや、盛り上がらねえじゃねえか。」男は心底がっかりした顔をした。

「なあ、お前みたいなの、なんていうか知ってるか？」

「なんだ、紳士か？」

「んなわけあるか。絶対人がやらないようなことをお前みたいに好んでする奴をな、巷じゃ、異常性欲者、っていうんだぜ。」

「へえ、いじょうせいよくしゃ、ね。いいじゃねえか、異常同士、

仲良くやろうぜ譲ちゃん。」男は舌なめずりをすると、ナイフの刃を返してそつとシャツの胸元に差し込むと、下へとナイフを引いて行った。

シャツが小さな音を立てながらゆっくりと裂けて行く。男はそれを嬉々とした目で見つめ、半開きになった口からよだれがお腹に垂れた。仲間がつばを飲み込む音が聞こえた。私はただ、もがくこともできずに見ていることしかできなかった。

「なんだいこりゃあ。あけてびっくり玉手箱じゃねえか。」

「言っていることの意味が、全く分からないんだが。」

「おれもわかんねえ。それだけ驚いてるってことだ。見ろ、この肌。こんなに白くて艶のあるのは初めて見るぜ。ひひひひひ。」

男は私の体に舌を這わせた。ねちっこくて、よだれだらけの舌を、ナイフとは反対に、下から上へと、体の真ん中をなぞるように首筋まで。

叫んだ。いつかと思い出せないくらい久しぶりに、私は声を絞り出そうとした。

でも出なかった。どれだけ叫ぼうとしても、助けてと言おうとしても、息のほかに口から出てくるものはなかった。

だって、私は声を無くしてしまったから。他の大事なものと一緒に、どっかに置いてきてしまったから。

「ありゃ、なんだい、叫ばないんじゃないやなくて、叫べなかったのか。成程、だったら殺す必要もなかったかな。」

「冗談言つなよ。こんなきれいなおもちゃなんだぜ。遊んだら、ちゃんと壊さなきゃ。」男は狂気じみた笑みを浮かべた。

「……ホント、お前にやったりだな。」

「よせやい、そんなに褒められちゃ照れちゃうぜ。……さてと、じゃあ今度はこつちを裂いてやりますか。ひひひ、上がこれなら、下はどんなだろうなあ。ひひ、ひひひ……。」

男のナイフが私の下腹部から、さらにその下へと向かう。どんなにもがいても、逃げられない。どんなに叫んでも、声は出ない。助

けを呼べない。でも、呼べたって同じ事。私を助けてくれる人なんて、いやしないのだから。

助けはこない。そう、いつだって、助けはこない。

どんなに痛くて、どんなに苦しくても。

どんなに寒くて、どんなにひもじくても。

どんなに寂しくて、どんなにつらくても。どんなに助けてと叫んでも、誰も助けてくれない。

私の願いを聞いてくれる人はいない。

私の声を聞いてくれる人はいない。

伸ばした手を握ってくれる人はいない。

私に救いは無い。

男の手が止まった。

「なんだ、てめえは!？」仲間が鋭く叫ぶ。男も後ろを振り返る。

男の人が、立っていた。一糸まとわぬ姿で、堂々とこちらを見ている。靴もはいておらず、川から上がったみたいにびしょ濡れで、夜みたいに黒い髪からぼたぼた水が垂れていた。

男の人は、あつという間に二人を殺した。髪の色、瞳の色と同じ黒い剣で。

男の人と目があつた。真っ黒な瞳が私を見つめた。私は目が離せなくなった。

オブロクさんたちを殺した人たちの何倍も、いや、比べることができないくらいに怖い人だった。私にはすぐにわかった。この人は今までたくさん人を殺して、これからもたくさん殺すんだと。今みたいに、眉一つ動かさずに。

凄く怖い人だった。これ以上怖い人はいないと思った。

なのに、私は怖いと思わなかった。怖いと思えなかった。

全身から殺意がにじみ出していた。右手に持つ剣は恐怖の象徴だった。顔に優しさはなかった。

なのに、なんでだろうか。私を見つめる瞳は、夜空みたいに澄ん

でいて。

一番奥に、「悲しい」があった。

ゆらゆら、ゆらゆら、揺れている。時折吹く冷たいそよ風が、頬に当たって心地よい。

うつすらと目を開けると、道が見えた。ちゃんとした道。森の中の、でこぼこして、下生えが足に絡みつく歩きにくい道じゃなくて、ちゃんと人が通れるようになっていて道。

私はそこを進んでいる。歩いているのではなく、進んでいる。だって、私は歩いてないから。

でも、どうして？歩いてないのに、進んでいる。そんなのおかしい。だって、歩かないと、前には進めない。

私は誰におんぶしてもらっているのだろうか？

「目が覚めたか。」声を掛けられて、誰がおぶってくれているのか気付いた。それで思わず飛び上がろうとして、急に頭がくらくらして、のけぞって後ろに倒れそうになった。それを黒い瞳の人は体を持ち上げて支えてくれた。

「暴れるな。落ちるだろうが。」黒い瞳の人は肩越しに私の顔を覗き込んだ。この人はいつもと同じ、怖い顔をしている。なのになんでだろう、今日はなんだか穏やかに見える。

聞き慣れた鳴き声が聞こえて、そちらを見る。傍らにおじいちゃん驢馬がいた。この子に名前はない。私と同じだ。あるのかもしれないけど、私は知らないし、呼ぶこともできない。でも、私の一番の友達。

おじいちゃん驢馬は、鼻面を私の足にこすりつけた。

「おい、俺の手にまで触るな。臭くなるだろ。」黒い瞳の人は半歩驢馬から離れた。でも、右手にちゃんと手綱を握っている。あれだけ嫌がっていたのに、驢馬はこの人が近くにいても平気になっていた。どうして？そういえば、なんだか頭がぼわわして熱いのに、すごく寒い。

それで、思い出した。雨が凄く降ってた。私は倒れて、それで…。

ベッドで寝てた。誰かが話しているのを聞いた気がする。起きたり眠ったりを繰り返してた。いつも枕元に誰かが座っていた。ときどきお水と一緒に苦いものを飲まされた。その度、誰かが頭を優しく撫でてくれた……。

そう、私は病気になったんだ。それで、誰かがお医者さんに連れて行ってくれて。

なんで、この人がおんぶしてくれているんだろう。

どうして？どうして、私を置いていかなかったの？どうして、お医者さんに連れて行ってくれたの？どうして、私をおんぶしてくれているの？

どうしてあなたは私を助けてくれるの？他の誰も、カミサマだって助けてくれなかったのに。

聞きたいことがいっぱいある。なのに、私に言葉はない。それにきつと、聞いたところで答えてくれない。このひとは、きつとそういう人だから。

「エレンだ。」突然、黒い瞳の人は呟いた。ひとり言のように、誰かの名前を。

「お前の名前はエレンだ。わかったな、エレン。」黒い瞳の人は構わず続けた。私のほうを見ようとせす、いつもの冷たい口調で。

きつと、この人にとってはなんでもないこと。『あれ』とか『これ』とか呼ぶのが面倒だからっていう、どうでもいい理由。

でも、私の耳には、その言葉は優しく響いた。初めて聞いた、優しい言葉だった。

名前がもらえた。

名前と呼ばれた。

『あれ』でも『これ』でも『それ』でもない。

『あいつ』でも『こいつ』でも『お前』でも、『穢れた血』でもない。

エレン。

私はエレン。

私の名前はエレン。

うれしかった。すごく、すごくうれしかった。

『ありがとう』を言いたかった。

『うれしい』を伝えなかった。

でも、私に言葉はなかった。私のほうを見てはくれなかった。

だからぎゅっとした。私に言葉はないから。伝えたいことを伝えることができないから。

だから、せめてうなづく代わりに、私は、エレンは、ぎゅっと抱きしめた。

それは、少しだけ抱きつくのを強くしただけ。それだけしか、エレンは気持ちを伝えられない。

黒い瞳の人は何も言わない。頷きもしない。拒絶もしない。ただ、黙ってエレンをおぶったまま歩いている。

黒い瞳の人の背中には、あったかかった。

第八話：ぬくもり（後書き）

読者のみなさん、こんばんわ。じよんです。

随分遅くなってしまうって大変申し訳ありません。だらだらしていたのもありますが、今回どうしようかすごく悩んでしまい、時間がかかってしまいました。それだけ考えた割に、いつもと量変わらない（むしろ少ない？）し、よくなってるわけでもないんですが。

それより前書きはなんだよ、という方もいらっしゃるかも知れませんが。

前書きにも書きましたが、今回結構卑猥な表現（作者にとっては）を使っています。盗賊二人が。

読者の中には受け入れられないという方もいるかもしれませんが（特に女性是不愉快に感じるかもしれません）。ですが、これは人物の背景を作るのに大事な表現だと思っています。

なんだか謝罪文みたいになってしまいました。要はこう言ったのも含めて「Last Game」だと理解してほしいな、ということです。

では、また次回もお楽しみに。

第九話：国境

カランカラン。扉に取り付けた鐘が客の入店を知らせる。私は読んでいたチラシから顔をあげて、入ってきた人物をみた。

「いらつしやいませ。」入ってきたのは男だった。それも子連れの、小さな子をおんぶしている。

ボロボロの外套を羽織って、フードを目深までかぶっている。背は平均より少し高いぐらいで、体格も普通だ。なのに、彼の影は不思議と長く、濃く感じられ、店の中が暗くなった気がした。

男は黙ったままカウンターへと歩いて来る。店内に置かれている商品には一瞥もせず。そしてカウンターまで来ると、口を開いた。「闇の中で剣を執る。影を従え、突き進む。」突然の、意味不明な言葉。人が聞けば、こいつは頭がいかにれていると思うかもしれない。だが、言葉の意味を知る者にとっては違う。そして私は、その意味を知っていた。

「向かう先は？」と返す。相手は正しい合言葉を口にした。

「太陽の国。」男はフードを下ろした。私はすぐに誰であるかわかった。彼が有名であるからでも、私の記憶力がよいわけでもない。彼はそこまで特徴的な顔立ちをしていない。ただ、遠目に何度か見たことがあり、一度はあったことがある。

墨のように黒い髪。そして何より、影よりも、夜よりも、闇よりも暗い瞳。

「あなたは、グ……！」思わず名前を口にする。が、その言葉は彼の手、アングマル將軍グラムの手によって遮られた。

將軍は私の口をふさいだまま、小さく首を横に振った。私が小さくうなづくと、將軍はゆっくりと手を離れた。

「あなたが生きているという話は本当だったのですね。一体どうやって？」

「話せば長くなる。今は一刻も早くアングマルに戻らねば。国境を

越えたい。」

「そのための私です。しばしお待ちを。」私はその場に屈みこむと、敷いていた布をずらした。その下には何もない。ただ木の板の床があるだけ。

私はそこに指を走らせる。目に見えないとつかかりを見つけ、それを引っ張る。

板の一部が回転し、その下にある木箱から、一枚の紙を取り出す。

「どうぞ、通行証です。」

「……偽造でもなさそうだ。どうやってこれを？」將軍は渡された紙を注意深く読んでいる。そこにはこの街の領主公認である印が押されている。

「領主には愛人がいるんですよ。お隣からわざわざ呼ぶ愛人が、何人も。」私はみなまで言うことはしなかった。言う必要もなかった。將軍は鼻で笑うと、通行証を懐にしまった。

「……それはそうと、その少女はなんですか？病を患っているように見えますが。」私はさりげない風を装って尋ねた。だが、実は彼が將軍だと知ってずっと気になっていたのだ。

死の恐怖と恐れられ、命を吸い取り力とする魔剣を振るう。ついた名が死神グラム。情けも慈悲もない、優しさなど露ほども見せぬ、味方にさえ畏怖の対象である將軍。

將軍は枷を嫌う。行軍の際、遅れるものは待たず、場合によっては切り捨てる。私はそれを見たことがある。

その將軍が、女の子を連れている。それも病気の、足手まといではない少女をおぶって。明らかに異常な行動だ。

「何の因果かついてきた。それだけだ。」將軍は何でもないと、平然と答えた。だが、それは本当に何でもないのか。彼は装っただけではないだろうか。そもそも答えになっていない。私の知っている將軍は、絶対にこんなことはない。

「……最近、国境を通る人の流れが遅いです。聞けば、通るもの一人一人の顔を、確認しているとか。その子供は、邪魔になるのでは

ないですか。」だが、そんなことは言えない。らしくない、あなたらしくないと。それが死神と恐れられるものと。

ただ問うた。連れて行くのかと。邪魔だというのが分かっていながら、あなたはその少女を見捨てないのかと。

將軍は答えた。先ほどと同じ調子で。

「それならこいつを使って一芝居うつ。必要なら捨ててでも。」踵を返して扉へと向かう。

カランカラン。鐘が客が帰ったことを告げる。將軍がいなくなると、店は明るさを取り戻した。昼の日差しが心地よい。アングマルでは知らなかったことだ。

だが、なぜか。この日差しの暖かさを、少女を必要なら捨てると言った將軍の目に、垣間見た気がした。

北の風が全身を吹き抜け、服をはためかせ、髪をぼさぼさにさせ、耳を覆う。

「これ以上走らせたら、馬が持たないぞ！」風に負けぬよう声を大にする。だが、それも大地を駆る音と、僕ら四人を乗せて半刻以上も走り続けている馬の激しい息遣いにかき消される。

「あともう少しだ、頑張れ！」ヘイルは尚も馬に拍車をかけ続けながら、愛馬を励ましている。そこには愛馬を案じている優しさがあったが、それ以上に、間に合わないことに対する焦りがあった。

馬はいらないで、遅くなりかけていた足を速めた。馬の筋肉が躍動しているのが腰から伝わってくる。風景が矢のように飛んでいく。僕ら四人を乗せながら、普通の馬の倍以上の速さで駆けている。だが、その分負担も倍以上だ。今や馬の呼吸音は耳を覆う風の音すら凌駕している。

無謀すぎる速さ。だが、それをやめさせることはできない。ヘイルはやめないだろうし、僕自身、やめてもらうと困る。

そうでないと追いつけない。急がなければグラムが国境を越えてしまう。

正午前に街についた僕らは、街を歩いて店を回りながら補給をし、宿に泊まるか、先に進むかヘイルと（主にクリスが）議論していた。「まだ日は高い。明るいうちに少しでも進むべきだ。グラムは先を進んでいるんだぞ。」

「数日ぶりに街についたのよ！少しは休んでもいいじゃない。」

「そんなことを言っているうちに、グラムが国境を越えてしまつては元もこうもないではないか。急ぐべきだ。」

「急ぎすぎてへとへとになったら戦えないじゃない！ここは休むべきよ。そうよね、イエリシェン？」と、突然僕に回答を求めるクリス。ヘイルも僕のほうを見る。

「急ぐべきだ！」

「休むべきよ！」

対極の意見を、全く同時に述べる二人。そして睨みあう。

「仲がいいですね、二人とも。」一人のほほんと呟くマリアさん。

「よくない！」いや、いいと思う。なんて言えなかった。矛先が僕に向く未来を予測できるのに、あえてその道を行こうとは思わなかった。

「で、どうなの！？」それでも、矛先は向いたりする。

「えーっと……。」二人に睨まれ、言葉尻を濁しながら目を泳がせる。その目が、奇妙な人物と合う。

立派な口髭を生やした、三十代くらいの顔。別段奇妙なところはない。顔だけは。背丈は妙に低く、手足も相応に短い。まるで、大人を子供の大きさにまで無理やり縮めたような、そんな容姿。

そんな奇妙な男は、街の衛兵らしき男たち二人と何やら家の前で興奮した様子で話している。というより、憤りをぶつけているようで、話を聞いている衛兵も、「そんなことを我々に言われても」といった顔をしている。

その男と、目が合う。無論、覚えはない。だが、あっちは僕の顔を見るなり、激しくまくしたてていた口をあんどりと開けたまま、

僕を指差し、衛兵のズボンの裾を引っ張った。

「あいつだ！あいつです、私を監禁したのは！」

「え……？」通りを歩く人皆に聞こえるような大声で犯人にされてしまった僕は、ぼかんと口を開けて立ち止まってしまった。それは他の三人も同じだった。

周りの人の視線が僕らに集まる。衛兵たちが駆け足でこちらにやってきた。

「すいません、少し話を聞かせてもらってもよろしいですか？あの方は先日賊に押し入られたらしく、犯人があなたといっているのですが……。」「僕らの様子を見て犯人なのか半信半疑なのか、下手に出てくる衛兵。

「私たちはさつきこの街に来たんですけど……。」「マリアさんが一歩進み出る。その胸には、癒しの協会のしるしである薬草袋のブローチがきらめいている。

「とにかくお話だけでも。変な事件です。盗まれたと言っているものも、ただ食料の一部と、服が一着だけで。監禁されたと言っても、彼の自宅ですし、本人はいたって無傷です……。」「ブローチに気付いたもう一人の衛兵が、説明をする。だがそれを遮って、小さな大人が割って入ってきた。

「何をしていますか。早くつかめるなり縛り首にするなりしてください。確かに、この男が、私を脅したんですよ！」僕の顔を指差し、衛兵二人の足元から現れる男。だが、僕ら一行を見て、首をかしげ始めた。

「おい、女の子はどうした？」

「女の子なら目の前にいるじゃない。」「クリスが鼻を鳴らして言った。

「違う、もっと幼い女の子だ。左右色違いの目に銀髪の女の子。その子を助けるために貴重な薬を使ったというのに。まだあの子は治っていないぞ。それより治療費を払いたまえよ。」「まくしたてる小人。だが、僕は聞いていなかった。

「色の違う瞳に、銀髪の女の子……!?」それは確か、いなくなつた女の子。グラムが殺した場面に、居合わせたはずの女の子。その子連れれた、僕の顔をした男……。

「そいつは！そいつはどこへ行つたんだ！」僕は思わず小人の肩をゆすつた。

「わわ、わかるか！お前のこととだろろ！」小人は僕の腕を払うと、首を軽く振つた。

「自分のことじゃないか！朝起きたらいなくなりやがって。まだ治療費払ってもらってないんだぞ！」

「これで充分だろ。」ヘイルが男に金貨十枚を投げ渡した。

「こ、こんなに!？」

「情報量だ、とっておけ。」それだけ言うと、ヘイルは馬に飛び乗った。素晴らしい体躯の馬へと。

「早く乗れ！追いかけるぞ！」

「え、何、どうしたの？」ヘイルの突然の行動が理解でき無いクリス。

「ここから国境まで一日もかからない！国境を超えられたらもうどうしようもない！」ヘイルはそれだけ答えた。そしてそれで十分だった。クリスはヘイルの後に乗り、その後ろにマリアさん。最後に僕が後ろに乗る。正直ぎゅうぎゅうだが、追いかけるなら、この馬に頼るしかない。

「飛ばすぞ、振り落とされるな！」ヘイルは馬に拍車をかけ、手綱をぴしゃりと打った。

馬がいなくなき、走り出す。一瞬のうちに風となる。残されたのは、呆けたように立つ衛兵と、小さな大人だけだった。

並び始めてから十数分。国を渡ろうとする者たちの列はいまだ絶えず、俺はその中間辺りにいた。後ろに並んだ商人風の男が不満を漏らす。

「おいおい、なんだって今日に限ってこんなに遅いんだよ。こつち

は急いでるつてのに。」

「いやいや、どうも今日だけじゃないらしいぞ。このところずっとこうらしい。」俺の前に並んだ、これまた商人風の、どこか異国の服装をした男が言った。どうやら南から来たようで、薄い生地 of 服を重ね着しているが、それでも寒そうに身を縮こませている。

「へえ、それはいつからの話だい？」

「昨日宿で聞いた話じゃ、ひと月くらい前かららしいが。罪人を探しているつて、もっぱらの噂よ。」

「罪人？」

「ほら、見てみるよ。」異国の商人が、国境の証である分厚い門の前に立つ衛兵を指差す。

「一人一人の顔をわざわざ確かめてるだろ？」

「ああ、確かに。だが、一人の罪人に随分だな。今までこんなことあ、俺の知る限りではなかったがなあ。」

「それは俺も同じよ。……あまり大きな声では言えんが、戦時下だというのにのんびりしてるこの国が、血眼になって探してるつてんだがら、相当な相手だと俺は思うわけよ。」

「国を揺るがすような、か？」

「おうよ。兵士たちも妙に殺気立つてる気がするしな。」

列が動き出す。列を詰めた後も男たちは話し続けていたが、俺は聞くのをやめた。

前方を見る。商人の言う通り、衛兵が紙を手に、一人一人の顔を確認している。

彼が言っていたのはこのことだったのだろう。確かにすんなり通してくれる雰囲気ではなさそうだ。これなら商人の荷物に紛れ込んだほうがましだったかもしれない。

気付かれたらどうするか。駆け抜けるか？ 実際、一瞬でも騙すことができれば、そこではれようが切りぬける自信はある。国境さえ抜けてしまえばあとはどうにでもなる。

一人なら。そう、俺一人ならわけの無いこと。一人なら、国境な

ど簡単に越えられる。

一人なら。だが、一人じゃない。

肩こしに振り返る。頬を赤く染めている銀髪の少女。顔には玉の汗が浮かび、額に、頬に髪が張り付いている。首筋に当たる顔が熱くて、既に火傷を起こしている。肩を動かすたびに火傷特有の肌が突っ張るような痛みがする。それでも、前より熱は下がったらしい。呼吸も小さいが穏やかだ。

こいつがいるから、強行突破は無理だ。逆に言えば、こいつがいなければいいだけの話。邪魔なのだから捨ててしまえばいい。荷物は置いていくべきだ。

本能が声高に叫ぶ。

そうだ、捨ててしまえ。置いて行ってしまう。必要のない、枷になるもの全てを。今までそうしてきたはず。それこそが俺。それがグラム。

捨てる。置いていけ。こいつごと、つまらないしがらみを捨ててしまえ。

少女が小さく身じろぎする。ずり落ちかけた体を、背負いなおす。小さな揺れに目を覚ましたのか、まぶたを重たそうにゆっくりと持ち上げる。メノウとエメラルドの瞳が俺をとらえる。

「しっかりつかまってろ、エレン。」エレンはこくんとうなづくと、首にかける腕に力を込めた。小さな体が背中にしっかりと触れる。首筋に当たる顔は焼き鏝のように熱い。触れる体は氷のように冷たい。両腕はエレンの足を抱えてふさがれている。

重い。こんなにも小さく、軽いのに、重い。腕は痺れない、足腰にも応えない。鎧に比べれば、衣服のようなもの。

なのに、重い。心が重いと叫んでいる。本能が重いと叫んでいる。重いから、捨ててしまえ。

邪魔だから、捨ててしまえ。

枷は、捨ててしまえ。

「ああ、重いな。」知らず、呟いていた。誰にでもなく、自分にで

もなく。ただ、呆れたように。嘆息するように。

「見えたぞ！」ヘイルが叫び、前方を指差す。街の入口である門が見えた。

一瞬でたどりつく距離。だが、体力を使い果たしたこの馬には、はるかかなたに見える。

最早風を感じることはなく、全身から湯気が出るほど汗をかいている。馬首は垂れて、今にでも倒れこみそうだ。

何とか走り切り、門の中へと入る。とても走るとは言えない速度。それでも、ついてみれば一時間もかかっていなかった。

そして限界だった。

足がもつれ、ふらつく。僕らを乗せたまま、倒れかかる。しかし、最後の力を振り絞って踏ん張る。

「早く降りろ！」ヘイルの言葉に、半ば飛び降りるようにして馬から降りる。瞬間、黒い巨躯が大地に倒れこむ。

「おい、どうした。なにがあった？」衛兵が尋常でない様子を見てやってきた。だがヘイルは一言だけ残して走り出した。

「馬を頼む！」

「あ、こら！」僕らも後を追いかける。馬は気になるが、今はグラムのほうが先決だ。これだけ急いで間に合わなければ、何のために頑張らせたのか分からなくなってしまふ。

「間に合ってくれ……！」

「次。」通行証と顔の確認をして、商人を送り出すと、後ろに並んでいた人物に目を向ける。

「？」無言のまま、差し出される左手。それはじっくり見なくても、ちゃんとした通行証だ。だが、通行証をさし出す人物は、フードをかぶって俯いたまま顔をあげない。見えるのは、背負った女の子の顔だけだ。

「すまないが、顔を見せてくれないか。」男は首を振る。

「申し訳ないが、お見せできません。」男は低い声で告げる。仲間たちに緊張が走る。

「……なぜだ。ただ顔を見せればいいだけだ。それとも、やましいことでもあるのか？」手にもつ槍に自然と力がこもる。声は緊張で上ずってしまふ。まさかこいつが……！？

「違います。お見せできるような顔ではないのです。」男は首を振ってこたえた。

「つべこべ言わず顔を見せ……。」同僚が我慢できずに男のフードに手を伸ばす。

「触るな！」突然、男が一喝する。同僚の手が止まり、思わずあとじさる。

「怒鳴ってしまい申し訳ない。ですが、触れてほしくないのです。いや、できれば近寄ってほしくない。」

「どういうことだ。」

「この子を見てください。」と、男は自分の背中におぶる女の子をさした。よく見れば顔色が悪い。

「この子は病に犯されています。原因不明の。しかもこの病はうつります。症状はまちまちですが、家族は皆発症しました。一人は血を吐き、一人は下痢を起こし、一人は全身に奇妙なあざを残して……死にました。」男は、低く小さな声で語った。感情の無い、まるで他人事のように。だが、それが余計に真実らしく、ぞっとしてしまふ。同僚が後ずさり、男の後ろに並んでいたものたちも下がった。「そして私も……。」男がフードを少しだけ傾げる。男の左目だけが見える。

「ひっ……。」息をのんだ。男の顔は、まるで、まるで……。

ここが賭けだ。片目で衛兵を睨みつけながら、術を紡ぐ。恐怖という、ひどく曖昧なものを媒介にして。

今、この男は恐怖している。語りによって、もしかしたら俺の顔が病でおぞましいことになっているかもしれないと思っている。

かける魔法は、『悪夢の具現』。相手の心に映る恐怖をさも目の前にあるかのように見せる、幻惑の呪文。といっても、無詠唱な上に魔剣の補助がほとんどない今では、暗示くらいしか効果がない。生粋の魔法使いでもない俺には至難の業だ。だが、他に方法がない。これで通れなければ、後は特攻するしかない。頬を冷たい汗が伝う。

「どいてくれ！」先に行くヘイルが叫びながら人ごみをかき分け、疾走する。こちらも全力だというのに、一向に追いつけない。

「イエリシェン！マリアが……！」後ろを遅れてついて来るクリスが呼びとめる。足を止めずに振り返ると、マリアさんがふらふら走っている。無理もない。門から既に結構な距離を走っている。

「二人は並んでいる中にいないか探してくれ！僕らは一番前を！」

「わかった！」クリスは足をとめ、マリアさんと合流する。僕はわき目も振らず走る。

「間に合え……間に合え……！」

「どいてくれ！」列の中を走りながら左右に眼を走らせる。道を譲る中に奴の姿はない。見落としさえないのなら、奴は前にいるはず。」「どこだ……どこにいる……！」

国境に辿りついた。そこには一足先にヘイルが待っていた。ヘイルは僕がつくなり、衛兵に僕を指差して言った。

「この男と同じ顔をした奴が来なかったか！？」息を切らしながら、凄まじい殺気に満ちた顔だった。衛兵は少し怯えている。

「い、いえ。みてはおりません。」

「見落としたのか……？それとも追い抜いたか……？ここじゃないのか……？」ヘイルはぶつぶつと呟く。そこに、クリスたちが追いついた。

「列の中にはいなかったわ！」尋ねるより先に、クリスが報告する。

「おい、本当に見なかったのか!？」ヘイルは衛兵に食って掛かった。ヘイルの剣幕に圧された衛兵は憐れなほどおびえている。

「は、はい!確かにみていないです!」

「じゃあ、まだなのか、それともここじゃないのか……?」そこで、あることに気がつく。

「女の子!そうだ衛兵さん、女の子を見ませんでしたか?銀髪で、両目が色違いの瞳の。」

「女の子、ですか?銀髪の……?」衛兵が首をひねる。

と、衛兵の口がぽっかりと開く。

「いました。目はどうかわかりませんが、銀髪の、肌の白い女の子を背負った男が。」

「いつだ!いつの話だ!？」ヘイルが衛兵の肩を揺さぶる。

「ほ、ほんの少し前です。二時間も経ってないかと……。」「ヘイルは手を離れた。

「そうか……。」「がつくりとうなだれる。

間に合わなかった。ほんの少し、遅かった。そしてそれは、決定的な遅れだった。

沈黙が広がる。誰ひとりとして、何も言わない。旅が、無駄になっってしまった。

「あ、あの……。」「衛兵が困ったように声をかける。だが、誰も、ヘイルもクリスもマリアさんでさえ応えない。

その時、列が急に騒がしくなった。カツカツと、聞き慣れた音がする。

顔をあげる。ヘイルの馬が、そこにいた。

「お前……。」「ヘイルがつぶやく。まだ息も絶え絶えで、蒸気の息を絶え間なく吹き出している。膝が震えており、本来の力強さはどこにも見当たらない。

それでも、こうしてここに来了。主人のために全力を尽くして、なおもついてきた。

そうだ。この馬でさえ諦めてないのに、人があきらめてどうする

のだ。

「お、おい、何を……。」「ヘイルは荷物を下ろし始める僕に呼びかける。

「追いかける。」それだけこたえる。

「追いかける、だと……。？国境を超えるつもりか？無駄だ、この先は治安の悪いことで知られているユピテル国だ。この国の犯罪者が普通に街を歩くような国だ。そしてアングマルの友好国だ。敵の中に飛び込むようなものだぞ！」

「それでも行く。僕の選ぶ道は一つだけだ。あいつを追いかけて、会って、話をして。後は、それから考える。」荷物を背負う。ヘイルに振り返る。

「僕は行く。君はどうする？」

「どうする……だと……。？私を誰だと思っている。私はこの国の皇子だ。これ以上のことはできません。」

「そうか。じゃあ、さようならだ。……短い間だったけど、一緒に旅ができてよかったよ。」踵を返し、国境へと歩き出す。

国境を、超える。

振り返らない。ただ、前だけを向いて、これまでと同じように、歩き続けるのみ。

背中を見つめる。あるいて行く男の姿を、イエリシェンの姿を見送る。

ためらいはなかった。国境を超える足に、戸惑いはなかった。どうすると尋ねる瞳に、迷いはなかった。

簡単に言ってくれる。俺は皇子だ。サン国第二皇子、ヘイルだ。この命は、国のために。この旅でさえ無茶なことだ。これ以上は、我儘だ。ただの意地を張るだけになる。

自分の足を見下ろす。さっきまで、全力で走った足。軽かった足。今は、こんなにも重い。

がさごそと音がする。二人が、荷物を背負っている。

「行くのか。」自分でも、驚くほど落ち着いた声。心を燃やす熱はどこへ行ってしまったのか。

「行くわ。私はイエリシェンについていくって決めたの。今更引き返せないし、そのつもりもない。……あんたは行かないのね。」

「ああ。俺は、ここまでだ。」

「……そう。じゃ、さよなら。もう会うことはないでしょ。」さっぱりとしたものの言い方で、歩き出すクリス。彼女はいつもそうだ。俺に対して、遠慮がない。それを咎める気もないが。

「じゃあ、私もこれで。さようなら、ヘイルさん。」お辞儀をして、後に続くマリア。彼らは二人揃って、何でもないように国境を超えた。

「……本当に、簡単に超えて行くんだな。」さて、俺も戻らねば。愛馬の手綱を取り、歩き出す。

国境とは反対側に。一步、二歩、三歩……。

五分くらいして、何となしに後ろを振り返る。別に未練があったわけじゃない。見納めになるかもしれないから、もう一度よく見ておこうと思ったんだ。

「あ……。」思わず言葉が口を衝いて出た。やっぱりついてきている。僕の少し後ろを、クリスとマリアさんが並んでついてきている。「まったく二人は……。」ため息に微笑が混じる。なんだかんだいって、二人がいると心強い。

「まあ、これであいつがいたらもつと心強いんだけど……。」言って、笑った。微笑でもない、普通に笑ってしまった。嘲笑いでも、苦笑でもない。それは、嬉しさからこぼれた笑みだった。

今まさに、門から爆走してくるヘイルが見えた。

心地よい眠り。今までで、一番の、心地よい眠り。顔は熱くて、でも体は寒くて、息が苦しいのに、なんだかとても嬉しい。眠っているからわからないけど、私は、エレンは多分、笑ってる。だっ

て、こんなに嬉しいんだもの。

ずっと、繰り返していた。名前をもらった、エレンと呼んでもらえた、あの日のことを。浅い眠りの中で、何度も、何度も。

とってもいい夢。こんな夢なら、いくらでもみたっていい。でも、今はもつといい夢を見る。

浅い眠りが覚めた。エレンは眠たくて、目を開けるのが大変だった。あの人の背中が暖かくて、うずくまっていたかった。でも、あの人がエレンを見ているのに気がついて、一生懸命眼を開けた。

「しっかりつかまってる、エレン。」あの人は言った。

そして笑った。笑ってくれた。

エレンに笑ってくれた。

エレンが笑わせた。

嬉しくて。嬉しくて。涙が出そうで。

叫びたかった。

世界中の人に、あの人に、伝えたかった。

あの人がエレンに笑ってくれた！エレンがあの人を笑顔にした！嬉しくて、誇らしくて、伝えたくてたまらない。

でも、エレンに声はない。エレンに言葉はない。エレンは伝えられない。「私」を「エレン」にしてくれた人に、伝えられない。

だから、ぎゅっとする。言われた通り、しっかりつかまる。

熱いはずなのに。冷たいはずなのに。重たいはずなのに。

邪魔なはずなのに。あの人は笑ってくれた。

嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。

何度も何度も繰り返す。優しい笑顔を繰り返す。

ああ、これがきつと。初めてで、よくわからないけど。ずっと、ずっと前に、教えてもらったこと。

これがきつと、しあわせなんだ。

第九話：国境（後書き）

どうも、こんばんわ（いや、おはようございますか）、じよんです。遅くなつてしまい申し訳ないです。思ったより長くなつてしまいました。

先週、短編をあげました。読んでいただいた方もいるかもしれませんが、長いです。無駄に。

枚数オーバーでダメになったのでぶち込んだのですが、そのために全く読者に配慮してないです。そのうち、少し分けようかなと。そのうち。

それはそうと、いつの間にかアクセス数が五万超えてました。自分でもびっくり。何かの夢じゃないかと。こんな小説を読んでくれる優しい方が、こんなにいるのかと。

本当に、読者の方々には感謝しっぱなしです。一人一人がとうを言いたいです。

気付けば、イエリシェン達の旅も、国境を越えてついに新しい国へ。彼らの旅のように、振り返れば随分と長い時間が過ぎていきます。でも、ここまで来れました。それはやっぱり、私一人じゃできなかったことだと思います。こうして読んでくれる人がいるから、コメントをくれる人がいるから、楽しみにしてくれている人がいるから、ここまでこれたと思っています。

本当に、ありがとうございます。最終回みたいなノリになっていますが、物語は全然終わりません。まだまだ続きます。これからも、よろしく願います。

では、また次回に。次回は、新キャラが出るかも！？

第十話：見捨てられた街

吹きすさぶ風が、唸りをあげている。耳はゴウという音に満たされ、辺りの音は何にも聞こえやしない。俺は足を踏ん張り、強風吹き荒れる山頂で腕をめいっぱい広げた。風が全身に纏わり、氷のような冷たさが、シャツ一枚の体を貫く。

だが、耳をふさぐ爆音は、頭ん中すっからかんにしてくれて、風は火照った体に心地よかった。

「きつもちいー！」思わず声に出さずにはいられない。仰げば、雲ひとつない青空。透き通るといふより、どこまでも突きぬけていきそうदैいて、世界中飲み込んでしまいそうな、深い青。まるで海のようなだ。……まあ、生まれてこの方、海など見たことはないのだが、視線を下げれば、眼下に望むは、まさに世界。北を向けば、愛すべきわが町。西に視線をずらしていけば、お隣さん。今日も絶好調で暗い土地だ。晴天だったのに、あの国だけ日差しが差してないみたいだ。

んで、グーツと南を見てみれば。緑豊かな輝く国。流石に太陽の名を冠するだけあって、こっちよりずいぶん明るく見えらあ。

「いやー登ってきてよかった。」まったくもって。これだけ晴れたのはいつぶりだろうか。あんまりにもいい天気なもんだから、衝動で一か月ぶりに登ってきてしまったが、その甲斐はあったようだ。空気も澄んでいて、こっからなにもかもが見える気がする。日陰に生きるわが身でも、ずっと陰に引きこもってちゃ、心にまで黴が生えちまう。

「そう、これは、心の洗濯なのだ……！」誰も、自分以外生き物すらないのに、というよりいいから、独り言が加速する。

「ん……？」視界の隅、真下を通るがれきだらけの谷に、何かがいるのに気づく。

腰に下げたガラスをはめ込んだ筒を取り、両端を持って、引く。

カシヤカシヤと筒が伸び、手のひらぐらいだった筒が、腕の長さまで伸びる。細くなった方の端から、ガラス越しに反対側を覗き込む。こいつはボウエンキョウ。昔南から来た胡散臭い商人から安値で買い取った品だ。ものが大きく見えるって物珍しさから買ったらしいが、すぐに飽きた拳句、誰も買わないもんだからただ同然で売ってもらった。商人にしてみれば、ただのおもちやくらいにしか思ってなかったろう。だが、山登りが趣味の俺には、すぐに使い道が分かった。こいつは『遠すぎて見えないものをはつきり見る』ためのものだ。おそらく、すごい平原で狩りをする奴らや、見張りをするときに使うもんだだろう。

使い道がわかって、結局この辺じゃ遊び道具にしかならんが、俺は結構気に入っていて、山を登っては街の一人一人を見たり、国境であくびしている兵士を眺めたりしているんだが……。

拡大された景色に、探していたものが映る。

「旅人か……？」映ったのは、四人の旅人。男二人に、女二人。

「女！」一人で盛り上がり、もっと良く見ようとボウエンキョウにべったりと顔をつける。

どっちも美人だ。が、どっちかというと、茶色の短髪より、黒髪ロングの方がいいかな。

なんて思っていたら、風が吹いて手がぶれた。映るものが女性から男に切り替わる。

「ゲ……。」いつかつい顔。みた感じでわかる。こいつとはウマが合わねえだろうな。もうひとり是对照的に優男だ。

「……の割に、結構やるじゃない。」一応ほめてみる。と、いかつい顔の、あるところに目がいく。

「へえ、こりゃあ……。」ボウエンキョウを眺めるまま、にやりと笑う。久しぶりに、良いエモノがきたみたいだ。

三十分前。

「近道か、迂回路か……。」

「近道に決まっているだろう。」

「あなた、人の話聞いてなかったの？凶暴な獣が出て危険だって言
つてたじゃない。」

「獣ごとき大したことはない。それに昔はつかわれていたのだろう、
なら我々が通れない道理はない。」

「その昔の人が、随分死んでるんじゃない！」

二人の言い合いが始まって五分。国境を越えた翌日。僕らは分か
れ道に来ていた。

一つは岩がごろごろ転がる谷に下りていく道。ユピテルまで半日
かからずつくが、危険な獣が徘徊するという。ユピテルが罪人の逃
亡先として有名になったのも、昔はこの道しかなく、通るだけで命
がけだったかららしい。

もうひとつは、多少整備された迂回路。谷を挟む山のふもとを通
る。うつそうとした森が広がっているが、危険はない。ただ、山の
周りを半周する形になるので、街に着くまで三日かかる。

安全にゆっくりいか。危険を承知で近道をするか。

「埒が明かん。私はこっちの道を行くぞ。」ヘイルは唐突に議論を
やめ、一人で歩きだしてしまった。谷に下りる道に。

「ちょ、ちょっとあんた！それはいくらなんでも勝手すぎるわよ！」

「我々は追跡をしているのだ。たとえ獣がどうが魔物が出ようが、
こっちの道が絶対早い。」ヘイルは振り返らずにすたすた歩いてい
く。

仕方なく、後続く。

「ちょっと、イエリシェン！？」

「一人にするわけにもいかないだろ？それに、急がなきゃいけない
のも確かだ。」

むくれるクリス。しぶしぶ荷物を担ぎますが、顔にありありと不
満の色が浮かんでいる。僕は苦笑いして、一人先を歩くヘイルの後
を追った。少し遅れて、むくれたクリスと、不安げなマリアさんが
付いてくる。

そして、現在。

「『大したことない』じゃなかったのか!？」

「……すまない。」

「『絶対早い』って言ったの誰よ!？」

「……すまない。」

「何なんですかこれ!？」

「だからすまないと言っている!!」謝ってるのだから怒っているのだからわからない声をあげて、ヘイルは剣を大上段から振り下ろした。相手の頭が、ぱっくりと割れる。

一体がかすれた奇声を上げながら、口を人の頭がすっぱり入るくらい開けて、突進してくる。こちら相手に向かって駆け出す。間合いに入る直前、地面を蹴り上げる。

逆手に持ち替えた剣を、両手で力いっぱい突き立てる。剣は鱗に覆われた頭を貫き、そのまま下顎に突き出た。ちょうど杭を打たれたような姿になった敵は、しかし尚も腕を振りまわす。鋭い爪が、頭にしがみついた格好になっていた僕の腿を裂く。

「クッ!」腿を引きつけ、顎にひざ蹴りを食らわせる。同時に反動を利用して剣を引き抜く。

獣は、ひざ蹴りを食らってよろめき、足をもつれさせて倒れた。骨ばった腕を空しく掻いていたが、やがてそれも止まった。

「イエリシエンさん、傷が!」マリアさんが叫ぶ。ズボンが裂け、むき出しになった腿から血が流れている。

「大丈夫、かすり傷です!でも……。」周りを取り囲む奇妙な敵に対峙する。

「数が多すぎる。それにこいつらは一体何なんだ。」

「私も詳しいことは知らん。だが、ユピテルには、太古の獣が今も生きていると聞く!」ヘイルが答える。それに続いて、奇妙な獣の断末魔が聞こえた。

「こいつらが!？」クリスが矢を放つ。正確無比な矢が一体の目を

貫く。

人と同じくらいの背丈。だが、尻尾も入れれば倍ぐらいになる。全身は鱗におおわれ、黄色い目がきよるきよるせわしく動く。トカゲを彷彿させるが、それとも違う。二本足で立っているし、僕の腿を裂いた爪は猛禽のそれだ。何より、頭がでかい。長い、といったほうが適切か。口も大きく、鋸のような歯がむき出しになっており、魔物でも最上級と呼ばれる、ドラゴンの眷属かとも思ってしまう。獣なのか、魔物なのかもわからない。

「何とか突破できないか。この数を全部相手にするのはきつすぎる。」

「でも、こう囲まれちゃ……。」「クリスが言いかける。

地面が、揺れた気がする。

「何ですか、これ？地面が……。揺れてる？」マリアさんが呟く。その言葉を証明するように、足元の大地が揺らぐ。崖から小石が転がり落ちる。

突然、ドラゴンもどきたちが、今までのシューといった歯に息を吹きかけた時のような聲でなく、鳥のような甲高い耳障りな鳴き声を発しだした。

「今度はなんだ！？」ヘイルの声が、苛立ちと不安を含む。ドラゴンもどきたちの声はさらに高く、大きく、重なり始める。それに伴って地面の揺れが大きくなる。

「いや、違う！これは……。」「揺れと同時に聞こえる音。規則正しく、大きくなつていく地鳴り。この感じは、トロールの時と同じ。しかもあの時よりも揺れがでかい。

「ということは……。」「地鳴りのする方向を見る。それは僕らが進む方向、前から。

果たして僕の予想は当たっていた。当たってほしくなかった予想が、当たってしまった。今や全員がその存在に気付いていた。

「山が……。動いている……。」「クリスが啞然としている。無理もない。僕もあいた口がふさがってない。

ヘイルが訂正した。

「山じゃない。山みたいな亀がこっちに向かっているんだ！」

ヘイルの声は地鳴りにかき消された。僕らは、こちらに向かってくる存在に、啞然とした。

こんな生き物が存在するのか。みた目は亀そのものだ。だが、その大きさは、亀という枠から逸脱している。クリスの言ったことは間違いではない。甲羅にあたる部分は木々が生い茂り、完全に森と化している。鳥が飛び立つ姿も見えた。頂上、甲羅の中心部分では、谷を挟む山の頂上と高さがぴたり同じだ。動きは緩慢で、一步步に恐ろしい時間がかかっている。だが、その一步が巨大すぎて、一足で一里以上進んでいる。今や、巨大な亀は僕らまで数歩のところにまできていた。

ドラゴンもどきが、包囲を解いて逃げ出し始めた。全力で駆け出した彼らは馬並みに速かったが、蚊目を引き離すには及ばない。

「なあ、僕らもやばいんじゃないか！？」巨大な亀は僕らなど眼中に入って無いようだが、このままじゃ踏みつぶされてしまう。

「あそこに！」マリアさんが崖を指す。崖は断崖絶壁で登れそうにもないが、風雨で削られて、人一人なら入れそうな窪みがいくつもある。

「急ごう！」地鳴りに負けじと声を張り上げ、走り出す。僕に続いて、みんなも走り出す。その間にも、亀は迫ってくる。

窪みに無理やり体をねじ入れた時、亀は後一步のところで迫っていた。

「みんないるか！？」

「ここに！」ヘイルの声が前からする。

「いるわよ！」後ろの裂け目からクリスが応える。

応えは続かなかった。

「マリアさん！？返事をしてください！」

「こ、ここですー！」マリアさんの声が聞こえた。だが、それは壁側でなく、谷の方から聞こえてきた。目を谷に向ける。

「マリア！」クリスが叫ぶ。

マリアさんは地面に屈みこんでいる。

「あ、足が、挟まっちゃいました。」必死に両手で足を引っ張っている。だが、窪みにすっぽりとはまってしまった足は一向に抜けない。

「今行きま……！？」よじって抜け出そうとすると、何かに突っ掛かった。剣の柄頭と鞘の先が岩に引っ掛かり、抜けない。

「くそ、こんな時に……！」剣を何とかずらそうとするが、動かない。早く、早くしないと……！

目線を腰の剣からマリアさんへ。足はまだ抜けてない。

地鳴りが、止んだ。その意味を、僕はいち早く理解した。

どれだけ動かそうと頑張ってみても、剣はつかえ棒になったままで、僕を行かせてくれない。

「マリアさん！」剣を帯びから外す。その下をくぐろうとして屈んで、彼女の真上に振りあげられた巨大な足が見えた。

太く、丸く、巨大。トロールなど比べ物にならない。あんなものにつぶされたら、マリアさんは……！

巨大な足が、視界を埋め尽くした。轟音が、体中に響いた。マリアさんは、消えていた。

「あー本当、俺がいなかったらどうなってただろうねー？」前を歩く青年が、頭の後ろで手を組んだままこちらを向き、意地の悪い笑みを浮かべてヘイルを見る。

「感謝している。剣は弁償しようと言っているではないか。」何度繰り返したのか、ヘイルはうんざりしている。横を歩く僕には、彼のこめかみに欠陥が浮かびあがり始めているのがすぐにわかった。

「弁償だけ？そりゃないんじゃないのー？仮にも命を救ったわけなんだし、ねえ？」青年は口をとがらせたかと思うと、ころりと表情を変えて、マリアさんに笑みを向ける。

「えっと、その、あの、本当に、ありがとうございます。」マリアさんも、何度目かわからない感謝を口にする。さつきからずっとこの調子で、何度も頭を下げている。それに対して青年は、仰々しくお辞儀をして見せる。

「どういたしまして。でも、俺としては感謝は形にしてくれると嬉しいんだけど？」

「……ハア。厄介な奴に借りを作ったものね。」クリスがぼそりと耳元に囁く。僕は苦笑いして、小さくうなづいた。

巨大な足がマリアさんを踏みつぶさんとした、あの時。一瞬人の影が見えた気がしたのは、気のせいではなかった。

マリアさんは間一髪助かった。丈の合っていない、つぎはぎだらけの服を着た青年に助けられて。

青年の話を信じるなら、崖の上から僕らを見ていた（そもそもなんでそんなところにいたのか）が、マリアさんが動けないのを見て、崖を駆け降り、素早く走り寄って彼女を助けたのだとか。とても信じがたい話ではあるが。しかも、彼女を助けるときに邪魔な大剣を外したのだが、それがつぶされてしまったというのだ。だが、マリアさんのカバンのほかにつぶされたものはどこにも見当たらなかった。

そもそも、彼が大剣を使う人には見えなかった。年は僕らと同じに見えるが、横を歩くヘイルと頭一つ分くらい小さかった。体格もどちらかというと細身だ。少し長い後ろ髪をひもで止めている。

「家の家宝なんだぜ？家がつぶれてもずっと代々受け継いできたものだったのに。」彼は最初、弁償を要求してきた。なぜかヘイルにヘイルも最初は納得していたが、やれこぶし大のルビーがはめられてたただの、昔それでドラゴンを倒したことがあるなどと言い始め、弁償以上のものを要求し出した。

十中八九嘘だろうが、マリアさんの命の恩人であることに変わりはないために邪険にするわけにもいかず、ユピテルについた後もこうして僕らについてきている。寧ろ先導している。

ユピテルの構造は、イギリスと似ていた。整然とした道が存在せず、勝手気ままに造られた家々の隙間が道となっているため、人がやっと通られるようなところもあれば、広場みたいに急に開けたところもある。そう言ったところにはたいがい店が設けてあり、何の肉かもわからないものが入った料理や、何に使うかわからない品を売っていたりする。だが、その割に活気はあり、よく見ると普通の商人や旅人なども見受けられる。

彼らはすぐに見分けがつく。なぜなら、行き交う人は皆青年のような格好で、服の所々に穴が開いたままの者も多い。暗がりにつきまると骨と皮だけの者もいる。

そんな町中を、彼は迷うことなく歩いていく。彼がいなくなったら、僕らはこの街から出られるのだろうか。不安がふと頭をよぎった。

「なあ、なんでこの街が国の名前と同じなのか、わかるかい？」突然、青年は話題を変えて僕に話を振った。

「さ、さあ？どうしてだろう？」

「それはな。町が国と同じ名前なんじゃなくて、国が町と同じ名前なんだよ。元々この街はサン国の領土だったらしいんだが、はじっこすぎて国の目が届かないまま治安が悪くなつてよ。アングマルとも仲良くなっちゃって、気付いたらならず者達であふれ返ったわけ。その頃には既に領主は名ばかりになっていて、実際は裏で操っている奴がいたんだけど、結局そいつが表に出てきて独立を宣言し、できたのが、この国。」俺って物知りだろ、と胸を張る青年。

「でも、どうして独立できたんですか？すぐに制圧されそうなのに……。」マリアさんが疑問を口にする。

「それはだね……。」

「それは、この街にそこまでの価値がないと判断したからだ。」青年を遮って、ヘイルが応える。

「ここは土地も痩せていて、作物も取れない。名産品と呼べるものもないし、国にとって利益となるものはなかったのだ。それに兵を

派遣するには遠い上に、道中危険な道を通らなければならない。そこまでして取り返すほどの土地ではないと判断したのだ。そうだろう？」ヘイルはすました風で横目に青年を見る。

「あ、ああ。その通りさ。だからこの街はこうも呼ばれるのさ。」彼はわざとらしく咳をすると、低い声で町の呼び名を唱えた。

『捨てられた街』

「ついたぞ。ここが、宿だ。」角を曲がり、坂を上り、建物の間をすり抜け、屋根から飛び降り……と、道ならぬ道を歩き続けて日が沈みかけたころ、青年は足をとめて目の前の建物を指差した。

「ここが、宿……？」茫然と呟くヘイル。

「酒場兼だけどな。嫌だなんて言うなよ、ここじゃ宿を見つければで運がいいのに、この辺りで一番いい宿につれてきてやったんだからな。」

確かに、周囲の家や店を見ても、一番ちゃんとした建物だ。

屋根や壁にぽっかり大きな穴があいている家や、扉がなく、窓が全部割れている店、道にまで悪臭が漏れてくる酒場などがあったのだから、ところどころひびが入っていて、古ぼけていることくらいは全く文句がないのだが。

「傾いてない……？ものすごく。」

そう。クリスが言う通り、傍目でわかるほど宿は傾いていた。一方が地面に沈んでいた。

「この辺は地盤が緩い上に、でか亀のせいでしょうっちゅう地震が起きるもんだから、地面が沈んじまったのよ。まあ中はしっかりしてるし、こうすれば……。」体を横に傾ける青年。僕らも真似をしてみる。

「ほら、平坦だろ？」

「……構わん。雨風がしのげるのなら、それでいい。」どう見ても仏頂面だった。

「気に入ってくれて何より。じゃ、俺はこの辺で。」ヘイルの顔を気にすることもなく、青年は踵を返した。

「何？何処へ行くつもりだ。」宿に入ろうとせずに立ち去ろうとする青年を、ヘイルは呼びとめた。

「何処へ？と言われても。家に帰るんだけど。」青年は振り返り、きよとした顔をする。

「剣の弁償はどうした。あれだけしつこく言っていたじゃないか。」

「ああ、そのこと。それはもういいよ。だって……。」彼は右手に持っていたものを目の高さまで放り投げた。金属のこすれる音が小さく鳴る。

それは、ヘイルの財布だった。

「もうもらったからね。」財布をキャッチし、ニヤツと笑って見せる。まるでいたずらを楽しむ子供のように。

「いつの間に！」

「気をつけなきゃ駄目だぜ？今日は俺がいたから誰も手だししなかったけど、この街にはわんさか泥棒がいるからな。俺みたいに。まあアンタら強いみたいだし、チンピラごときにやられるとも思えないけど……って！」

「それを、返せ！」ヘイルが跳んだ。以前見せた跳躍で、剣を抜きざま振り下ろす。

青年は完全に油断していた。まさか助走なしの一步で、五歩以上の間を詰められるとは思っていなかったのだろう。すぐさま後ろに飛びのいた反応は素晴らしかったが、それでも遅すぎる。特別製の片手半剣が脳天に振り下ろされる。

「何！？」驚愕の声はヘイルから。

金属のぶつかり合う甲高い音が響いた。

「つつ！腕がしびれる。なんちゅう打ち込みだよ、殺す気満々じゃねえか！って、あゝあ、刃が欠けちゃったよ、高かったのに。」悪態をつく青年。

交叉された両手には、それぞれ短剣が握られていた。

「武器は持ってないはずじゃ……！」

「俺は持ってないとは一言もいってないぜ？まあ、見せてもいなかったわけだけど。」青年はにやりと笑い、短剣を腰の後ろに隠し、駆け出した。だが、走り去る背中に短剣は見当たらない。

「丈の合わない服を着ていたのはそのためか。つて、感心してる場合じゃない、早く追いかけないと！」追いかけようと走り出す。そのわきを、ヘイルがあつという間に追い越していく。

相変わらず凄いい速さだ。重い剣を持っているのに、僕よりも全然速い。

「ちょ、早！」青年はぐんぐん迫っていくヘイルを見て、慌てて角を曲がった。

「そこは行き止まりだ！」ヘイルが勝ち誇って叫ぶ。確かに先ほどみた時は、長い直線の先は行き止まりだったはずだ。

ヘイルより少し遅れて角を曲がる。二人の距離は予想に反して、縮まるどころか離れていた。どうやらさっきまでは全力ではなかったらしい。マリアさんを助けてくれたのも、あの足あつてのことなのだろう。だが、ヘイルを引き離して走っていく先は、住居が道をふさいでいる。人が通れそうな隙間もなく、完全に行き止まりだ。

だというのに、青年はさらに速度を上げ、壁に迫っていく。

その勢いのまま、壁の隅に向かって飛び上がった。壁を蹴りあげ、さらに飛び上がる。それでも屋根を越すには至らない。

「な……！」ヘイルが、足をとめた。青年は、家の屋根に軽々と登った。隣接する家の壁を交互に蹴って。

青年は振り返り、ヘイルに向かって舌をつきだすと、また駆け出した。家々の屋根を飛び移りながら、どんどん遠ざかっていく。これ以上、追いかけて行くのは不可能だった。

「くそ！」ヘイルが悪態をつき、抑えられない怒りを住居にぶちまける。朽ちかけた家の壁が拳に粉碎され、中から住人の悲鳴が上がった。

ちょうど、遅れてきたクリスたちが追いついた。

「あいつは！？」首を横に振る。

「そう……この街で探し出すのは無理そうね。ま、仕方ないわね。マリアを助けてくれたお礼だと思って、あきらめましょう。」クリスは拳を叩きつけたままうなだれているヘイルの肩に手を置いた。「そんなに落ち込むことないじゃない。お金を取られたのは痛いけど、私たちにだって路銀はあるんだから、旅を続けられないことはないわ。」珍しくヘイルにやさしい言葉をかけるクリス。よく考えたら、喧嘩腰以外で話しているのは初めてじゃなかるうか。

だが、ヘイルはかぶりを振る。

「だめだ。あれは、あれだけは取り戻さなきゃならん。」

「そんなこと言ったら、どうやって見つけるつもり？この街じゃ見つかりっこないわよ。見つけても、また逃げられるのが落ちね。あなたより速いんだもの。」

「だが、あきらめるわけにはいかないんだ。あれを失くしたら、大変なことになる。」

「別にいいじゃない、お金くらい。国に戻れば、いくらでもあるでしょう。」

「あの……もしかして、お財布の中にすごく大切なものを入れてらしたんですか？」マリアさんが不安げに尋ねる。

「そうだ……。私にとって命よりもというべきものが……。あの中には、指輪が入っている。」

「指輪？」嫌な予感が走る。そして大概、こういった予感はいえしてあたってしまったものだ。

「そう、指輪だ。王家の紋章が入った、王族であることを示す指輪だ。」

第十話：見捨てられた街（後書き）

どうも、こんばんわ、じよんです。二週間かかってしまいました。ネタに詰まっています。中身が薄いです。でも文字数は増えている。何故だ。

文字数の目安としては、最低四千字を目安にしているんですが、最近文字数ばかり増えて中身がなくなっている気がします。もっと精進せねば。

第十一話：盗賊

「……ハア。」一日はまだ始まったばかりだというのに、今日何度目かもわからないため息を、重量たつぷりに吐き出す。昨日のハイなテンションはどこへやら、気分はがつくり落ち込んで、青空が憎たらしくて仕方ない。

「ったく。ついてないぜ、本当に。」思わず愚痴が口をついて出た。だが、愚痴でも言っていないとやってられない。

「まあ、やる気はさらさらないんだけどね。」真つ青な空と対照的に、いつも通り辛気臭い街をうるつきながら、誰に言うでもなく咳く。というか、誰かに聞かれたら困るのだが、幸い近くにそう言った輩はいなかった。

四人組から逃げたその足で頭領に会いに、中心部へと向かった。ユピテルは中心に行くに従って街並みがきれいになっていく。中心部には一握りの富裕層が住んでおり、外側に住む乞食達の家とは比べ物にならないほど大きく、立派な家々が連なる。頭領は其中でも一番大きく、場所もちょうど町の中心に居を構えている。

この街には珍しい守衛つきの門を通って、正門から中に入った。中は外から見た通り、神殿みたいな作りで、でっかい柱が何本も立つてるし壁には絵画が等間隔に掛けられている。どれも有名な画家によるものだが、それらすべてが盗品であることを俺は知っている。そのうちのいくつかを盗んできたのは俺だし。

無駄に広くて入り組んだ屋敷の廊下を右に左と、慣れた足取りで通りぬけ、広い部屋に出た。「謁見の間」なんて呼ばれているが、俺からしてみれば、他の広い部屋と何の違いがあるのやらさっぱりだ。頭領はいつものようにその部屋にいた。部屋の奥、小さな階段を上ったところに、平たいクッションを敷いて片膝を立てて座っ

ていた。東方の珍しい品らしいが、藁に似たものを編んで作られたそれはきらびやかな部屋の雰囲気とそぐわず、貧相にも感じるのだが、本人が気に入っているのだから、それをとやかく言うのは野暮ってmondarou。

「誰かと思えば、お前か。」頭領は入ってきた俺にちらと眼をやるだけで、すぐに視線を一枚の紙に戻した。多分盗品のリストだろう。以前見たことがあるが、いつ、何が手に入ったかを細かく書き記されていた。これだけ豪華な家に住んで、お宝に囲まれているというのに、金への執着心は相変わらず、というより前よりひどくなった気がする。

「お前はないぜ、せつかく収穫を見せに来てやったつてのに。」盗んだ財布を放り投げる。頭領はそれを片手でキャッチすると、中身を毛むくじやらの手にぶちまけた。かなりの枚数の金貨が出てきたが、頭領の人並み外れたでかい手は、一枚もこぼさない。頭領はそれを見て満足そうに笑う。

かと思ったが、何やら難しい顔をしている。

「四人組の旅人だけど……。もしかして、まずいのに手を出しちゃった、俺？」だが、頭領はうなるだけで何も答えない。

そんな状態でいつまでも待たされるものだから、いい加減怒るなら早くしてくれと、言いかけた俺より先に頭領が口を開いた。

「お前、これが何か知っているか？」頭領は金貨の中から何かをとりにだして俺にみせた。毛深い頭領の手のひらには、指輪がちょこんと乗っていた。

高そうな指輪だな、とは思った。長いことやっているもんだから、物の真贋がどうかはわかんねえが、それがいいものか悪いものの判断はつく。目の前にある指輪は、間違いなくいいものだ。高値がつくだろう。

「ただの指輪だろ。高く売れそうだ。」

「お前の言う通り、指輪だ。それも、とびつきり高く売れるな。だがそれだけじゃねえ。」頭領は指輪の、普通なら宝石がはめられて

いるところを指差した。そこには宝石の代わりに、複雑な紋様が描かれた円形の金板がはめられている。

「こいつは王家の指輪だ。サン国の王族のみが持つ、王家の証なんだよ。」

「……は？」

「だから、これを持っているのは王様と皇子サマだけのことだ。お前、四人組って言ったな。どんな奴らだった？」頭領は目をぎらつかせている。

「えっと、男女各二人組だよ。女はショートとロングで、ロングは礼服みたいな着てたな。多分協会のだと思っけど。男は背が高く、ゴツイ金髪と、黒髪のパツとしない奴。財布は金髪から取ったけど……。」

「ヘイルだな。」突然、後ろの方から誰かが会話に割り込んできた。振り返ると、開け放たれた扉のわきに、一人の男が寄りかかっていた。確かに部屋に入るときに扉は閉めたはずなんだが、音はおろか気配もなかった。

しかし、そのことよりも別のことに驚かされた。

「あれ、お前なんでここに……？」言いかけた瞬間、首が縮まるような衝撃と痛みが脳天を直撃した。

「馬鹿野郎！ 客人になんて態度とりやがる！」頭を殴ったのは頭領だった。無駄にでかい拳で殴りやがった上に、無駄にでかい声で怒鳴りやがる。

「……！」怒鳴り返したいところだが、頭を抱えて痛みに耐えることしかできない。それをいいことに、頭領はこれでもかと罵詈雑言を浴びせかけ、かと思うと揉み手をして入ってきた男にこびへつらった。

「旦那、うちの若いのが失礼しました。何分おつむの弱いやつでして、どうか……。」

「気にするな。それより、その四人組のことだが、やつらとは少し因縁があつてな。」客人と呼ばれた男は壁から背を離すと、こちら

に歩いてきた。ただ歩いているだけなのに、一步一步威圧感が強くなってくる。

なにより、仕事柄鍛えられた俺の第六感、虫の知らせがびんびん反応していた。

こいつはやばい。今まで危ない橋はいくつも渡ってきたつもりだし、この街に危ない奴は事欠かない。

だが、こいつは規格外だ。こんな、近くにいるだけで全身の毛が逆立つような、危険に足を生やした奴になどあったことがない。や見たことがある顔ではあるのだが、同一人物であるはずがない。あいつは逆に邪気がなさすぎると言うか、影が薄いというか、そんな感じだった。目の前の男のような、濃密な気配をまとってなぞいなかった。

「ここに連れてこい。多少強引でも構わないが、殺さぬように。」男は床に倒れ伏す俺ではなく、頭領に話しかけていた。明らかな命令だった。

「で、ですが、ヘイル皇子といえば勇猛さで知られております。あなたの頼みとありまして、部下の命を危険にさらすのは惜しいものでして……。」頭領は下手に出ている。人の下につく、人に命令されることを何よりも嫌うのに、だ。男の迫力にビビっているのかとも思ったが、頭領はそんなタマじゃないし、そういった様子もない。もしかしたら、こいつは俺が知らないだけでかなり偉い奴なんだろうか？

「少し話がしたいだけだ。あとは好きにすればいい。」

「話のわかる方で助かります。おい、ガウエイン。そういうことだ、とっとと探して来い！」

と、頭領に命令されたのが昨日のこと。一日たった今でも、俺はぶらぶらと町を歩いているだけで、探そうなどとは全くしていなかった。そもそも、自分が宿にまで誘導したのだから、あのあたりを探せばすぐに見つかるだろうが、宿を尋ねるところか近辺には絶対

に立ち寄らず、昨日彼らを案内した道にも近付かなかった。当然頭領にも知らせていない。教えていたら、きっと部下を連れて大挙として押し寄せるだろう。

「……気にいらねえんだよなあ。」多分、いやきつと、頭領は皇子を売るつもりだ。サン国に身代金を要求するのか、お隣に売り飛ばすのか、それとも別のところか……。何にせよ、頭領は皇子でもうけるつもりだ。そしてほかの仲間もきつと売り飛ばすのだろう。

俺はそれが気にいらない。別にあいつらがかわいそうだとか思ってるわけじゃない。これでも餓鬼の頃から盗みをやってきた、人だつて殺した。今更善人面するつもりもない。だが、人をさらって売りさばく、というのが気に入らないだけだ。

それに、ふに落ちないこともある。最近、この街から消える人間が増えた。ほとんどが貧民窟に住む、家すらもない者たちだ。それに比例して、頭領の金遣いが荒くなった。今のでつかい家を立てたのも、半年くらい前の話だ。どうやらかなりの金が頭領に流れ込んでいるらしい。消えた人間たちと頭領の羽振りの良さは関連していると考えて間違いないだろう。

問題は、どこの誰が彼らを、何の目的で必要としているのか、だ。人攫いなら以前からあることで、別段珍しいことじゃない。消えても誰も困らない奴らが狙われるのも、変わらない。

だが、数が多すぎる。ここ最近の人の減り方は異常だ。これだけの人間が消えれば、大抵どこに連れていかれたかはわかるはず。なのに、それが分からないのもおかしい。

それが気に食わない。どこか俺の知らないところで、何かが起きている気がしてならない。とてつもない何かに……。

柄にもなく考え込んでいたので、周りのことがまるで見えていなかった。自分が宿の通りに入ってしまったのにも気づいていなかった。

「なあ、あきらめるわけにはいかないのか？」

「ならん！あれがなければ、私の身分は証明されない。それに、あれは王家に代々受け継がれる国宝だ。建国当初から受け継がれてきたものを失ったとあつては、先祖様に顔向けできん。」ヘイルは応えながら、周囲に視線を走らせる。朝から何時間も町をさまよい歩き、盗んだ犯人を探しているのだが、一向に見つかる気配がない。町は思ったよりも広いし、道も複雑すぎるので、手分けして探すこともできない。

おまけに治安が悪かった。彼が残した忠告通り、昨日は姿も見せなかったガラの悪い連中が、既に五回以上絡んで来ている。グラムの剣技を失った僕には、度重なる戦闘はきつく、旅でくたびれてしまった服がさらにボロボロになってしまった。当然けがもしたが、それはマリアさんがすぐに治してくれた。

「指輪云々よりも、これじゃあ町を出ることもできないわね。」クリスは弦の調子確かめるように軽く指ではじいた。唐突に襲われるので、彼女は常に弓を携えていた。

「それなら、ガウエインさんに案内してもらえばいいじゃないですか。そしてら手間も省けますよ。」

「確かに。見逃す代わりにはといえば、あっちも下手なことはいないだろう。そういうことだ、ヘイル。見つけたからって昨日みたいにいきなり斬りかかったり……。」「するなよ、と忠告をしようとヘイルのほうを向いたが、僕の声は彼には届いていなかった。彼が唐突に走り出したからだ。それもものすごい速さで。

ヘイルの向かう先を視線で追う。いた。俯いているが、顔はしっかり見える。ヘイルの指輪を奪った盗賊、ガウエインと名乗った青年だ。まだヘイルに気が付いていない。

それをいいことに、ヘイルはどんどん青年に迫る。その手が、腰の大剣にかかる。

「待てヘイル！そいつを殺しちゃ……。」「言い切る前にヘイルは青年に飛びかかっていた。聞こえていたにせよ、彼が止まることはな

かつたろうが。

だが、僕の声はガウエインには聞こえていたらしい。彼ははつと顔を上げて飛びかかってくるヘイルに気付くと、はじめたように飛びのき短剣で防いだ。そこまでは昨日とまったく同じだった。

だがヘイルは同じ轍は踏まなかった。ガウエインが着地するのと同じタイミングでもう一度地を蹴り、一息に間合いを詰めた。そして振り下ろした勢いを反発させるかのように切り上げた。振りあげられた剣は文字通り大地を削った。ガウエインはヘイルの一撃の衝撃から立ち直つておらず、咄嗟に順手に持ち替えた短剣をそのまま下げることにできなかった。

当然、ヘイルの一撃をそんな体勢で防ぎきることはできない。ガウエインの両手は天に掲げられ、ふた振りの短剣が空高く宙を舞った。

完全に無防備になったガウエインに、ヘイルが無骨な大剣を振りかぶる。

「だめだヘイル、殺すな！」だがヘイルは止まらない。無慈悲な、断罪の一撃を振りおろそうと一步を踏み出し……。

「今だ！やれ！」突然号令が飛び、ヘイルの頭上から大きなものが降ってきた。ヘイルはそれに気を取られ、振り上げた姿勢のまま上を見上げる。

そしてそれに覆われた。

「何だこれは！？網……！？」降ってきたのは網だった。漁に使うような目の細かいものではなく、ちょうど人の腕くらいの網目だった。それが余計にヘイルの腕やら足やらに絡みつき、体の自由を奪う。

「ヘイル！」助け出そうと駆け出す。ヘイル自身も、剣で網を切ろうと躍起になっている。

「動くな！」制止の声と同時に、矢が目の前の地面につき立つ。放たれた元をたどって見上げると、周囲の建物の屋上全てに弓を構えている男たちが並んでいた。矢先はすべて僕らに向けられていた。

男たちの中で、ただ一人武器を構えていない男がいた。

お世辞でも恰幅がいいと呼べない巨軀。だが、体つきもしっかりしていて、むき出しの腕は筋骨隆々と言っていいほどだ。ヒョウタンを彷彿とさせるしもぶくれの顔には、黒ひげが口の周りを覆っている。頭に赤いバンダナを巻き、腰に幅広の、反りの強い剣を指している姿は、いかにも盗賊の頭、といったいでたちだった。

「よし、それでいい。おとなしくしていれば危害は加えない。」男は優位に立ったものの特有の勝ち誇った笑みを浮かべてこちらを見下している。片手は軽くあげられており、奴の合図一つで一斉に矢が花たれることだろう。四方八方を囲まれている僕らに、それをかわすすべはなく、おとなしく従うしか選択肢はなかった。

「貴様、私をはめたな！」ヘイルは憎々しげに叫んだ。網に絡まれたまま仁王立ちする彼の前には、ガウエインが立っていた。彼は網にとらえられることはなかったらしい。

ガウエインは何も言わなかった。その顔は勝ち誇るでもなく、無表情で、どこか憤っているようにも見える。

彼は踵を返すと、そのままどこかへ去って行った。代わりにひょうたん顔の男が降りてきた。その体の割に、軽々と屋根から飛び降り、静かに着地した。

「さあ、ついてきてもらおうか。お前たちに会いたがっている人がいる。」

両手を後ろ手に縛られて連れていかれたのは、町の他の家々に比べて明らかに異質とも呼ぶべき豪華な街並みの一角だった。まるでそこだけ別の街から切り取ってきたようだ。地面はしっかりと石畳がはめ込まれ、街路も整然としている。

背中をつつかれながら入ったの建物は、その中でもひととき大きな建物だった。中も外見に劣らず豪華で、巨人が通るために作ったのかと思われるような扉を抜けた先には絵画やらタペストリーやらが並んでいる廊下が続いていた。

「驚いたか？長年かけて俺が集めたコレクションだ。」先頭を歩く黒ひげが、自慢げな表情を浮かべて首を巡らす。

「ふん。盗賊の分際でコレクションなどと、笑わせる。」ヘイルが吐き捨てるように呟いた。

「どういうことだ？」

「サン国で盗まれて騒ぎになったものがいくつもある。ここにあるものは全て盗品だろう。」

「盗んだ、とは人聞きの悪い。頂戴したのだよ。」

白い石板がはめられた廊下を右に左に曲がっていくうちに、自分が今屋敷のどの辺にいるのか全く分からなくなった頃、ある部屋に通された。

作りとしては、サン国の玉座の間にとてもよく似ていた。左右に走る数本の円柱、床に敷き詰められた絨毯、部屋のつきあたりに、数段高く設けられた場所。比較してみれば、こちらははるかに小さいし、絨毯の質も違う。何より、玉座のあるべき場所には、何とも奇妙なものが置かれていた。

だが、そんなことはどうでもいい。のんきに部屋の様子を観察する時ではない。今大事なことは、

「グラム！」ヘイルが宿敵の名前を叫ぶ。呼ばれた相手は、腕を組んだまま不敵な笑みを浮かべた。

「随分と早い再会だな、ヘイル。そして……。」視線を僕に向ける。死にぞこない。」

圧力が増す。ただ見ているだけで体中の毛が逆立つ。筋肉がこわばり、寒くないのに震えが走り、熱くないのに汗が噴き出る。

何より、僕を睨むグラムには、憎悪しかなかった。ヘイルにしたような、からかうような笑みはない。純然たる殺意のみを持って、全力で僕の存在を否定しているのが、言われなくても伝わってくる。

グラムは壇を降り、こちらに歩いて来る。一步一步、具現化した殺意を揺らめかせながら。

「随分と面白いことになっているな、ヘイル。その死にぞこない

が追ってくるのはわかるが、何故お前までここにいる？」

「お前を殺すためだ！」

「国境を越えてまでか？貴様の身分を考えれば、愚行というものだろう。今頃貴様の国は大騒ぎになっているはずだ。貴様の行為は、優秀な兄にさらなる負担をかけたただけだ。」

「く……。」「ヘイルにも思うところがあったのだろう、何も言い返せないまま、齒を食いしばることしかできないでいる。」

「そしてお前。」「ヘイルが僕に視線を移す。先ほどと同じ、拒絶と否定の目で以て。」

「さあ、僕にもわからない。君が生きているから、じゃないか？」
自分でもびっくりするくらい、変善とした声が出た。殺意に気圧されて、立っているのもやっとだというのに。

でもそれは、自分のどこかが、彼に屈してはいけないと言っていたからだ。グラムに屈してはいけなないと。屈した時、僕は僕でなくなってしまうと。

「そうか。なら今ここで、引導を渡してやる。」「グラムが右手をのばす。その手には、もはや彼の象徴になった、黒い刃がある。」

自らを二つに分かつ外法のためか、刀身を覆う闇は霞のように薄れ、空間を黒で塗りつぶしたような刃が露わになっている。そこだけ光が届かないのか、グラムの周囲が薄暗く感じる。だというのに、彼の影は濃く、長くなっていく。

「ま、待ってください！話が違うじゃありませんか。」「突然、僕らの会話に黒ひげが割り込んだ。

「何がだ。ヘイルは貴様にやる。それで十分だろう。」「グラムは右手を上げたまま、彼を見ようとしめない。だが頭領もひるまなかった。

「いや。あんたは連れてくるだけでいいと言った。あとは好きにすればいいとも。なら、こいつら全員は俺のもんだ。大事な商品を勝手に傷つけられちゃ困る。」「

「……。」「グラムは束の間考え込んでいたが、やがて右手を下ろし

た。その手に剣はなかった。

「好きにしろ。」グラムは僕らの間を通り抜け、部屋を出て行くとした。

「待て、グラム。聞きたいことがある。」その背中に呼びかける。止まらないとは知りながらも。

だが、意外なことにグラムは足をとめ、こちらに振り返った。

「何だ。」

「小さな女の子が君と一緒にいると聞いた。その子はどうしたんだ？」

グラムはああ、とつぶやき、

「殺した。もう用は済んだからな。」部屋から出て行った。

第十一話：盗賊（後書き）

すみません、遅くなりました！じょんです。

なんだかよくわからない忙しさと、ネタのつまりもあつて随分時間がかつちやいました。最近想像力がなくなってきた気がします。本読んでないからかな。でも、残念ながら読んでいる暇はなさそうですorz

次回も少し遅くなるかもしれませんが。どうか気長にお付き合いください。

では、また次回。

第十二話：牢

ただっ広い部屋を、壁に掛けられた松明が照らしている。だが、松明があるのは格子を隔てた向こう側だけで、部屋全体を照らすには全く足りず、闇が部屋の隅々に滞留している。自然、五感は視覚よりも嗅覚、聴覚が澄まされ、余計に冷たく乾いた空気に交じる埃と、体臭の臭いを意識せずにはいられない。

連れていかれたのは、地下牢だった。グラムと相對した部屋と同じくらいの広さがあるが、こちらには装飾やそういった類のものは何一つなく、あるのは無機質な石の床と壁、部屋を横断する格子だけだ。諸手を後ろ手に縛られたまま僕はそこに放り込まれた。

「そこでおとなしくしている。なに、すぐに出してやるさ。身代金と一緒にな。」黒ひげは笑いながら手下と共に階段に消えていった。それが数時間前。換気のために一つだけ天井際に設けられた壁の隙間から、傾き始めた月が望めた。

「くそ。」ヘイルが悪態をつく。最早何度目になるかもわからない。最初はグラムが眼と鼻の先にいるのにとらわれたことに怒っていたが、今はただ悪態をつくことしかできない自身を呪って悪態をついているようにも思える。

憤るヘイルともめていたクリスは、今はその元氣もなくなったのか、さつきからずつと黙りこくっている。マリアさんも何もしゃべらず、疲れ切った顔をしている。

部屋を見渡す。暗がりのあちこちに、膝を抱えたり、横になっている人達が目につく。埃にまみれた服からのぞく体はやけに細い。

ここにいるのは僕らだけではなかった。恰好から察するに、この街で貧民街と呼ばれるところから連れてこられたのだろう。彼らはできる限り身を寄せ合ってひと塊りになっている。まるでそうすることと恐怖が薄れるというように。その手足に枷はない。

ヘイルは彼らに縄をほどいてくれれば、きみたちも助けると頼ん

だが、彼らは大きく開かれた目でこちらを見つめるだけで、何の反応もよこさなかった。

「私たち、どうなるんでしょう……。」「マリアさんがぼつりと呟く。誰も答えない。マリアさん自身、答えが知りたくて聞いたわけじゃない。答えなどとうにわかっている。」

「？何をする気だ？」立ち上がり、後ろに回った僕に、ヘイルが声をかける。

「今できることをする。それだけだ。」「跪き、ヘイルの縄にかみつく。縄は思ったよりも太く、歯が通らない。できるだけ端を噛んで、切れ目を作ろうとする。」

「どれだけかかると思ってるんだ。」「

「知らない。だけど、ただぼつと何もしないでいるよりましだ。」「無駄だと思うけどなあ。」「

「何とでもいえ。ただ待っているだけじゃ何も……。」「応えて、相手がヘイルの声じゃないことに気付いた。」

「や。」「格子の向こう側に、見慣れた青年が立っていた。」

「ガウエイン！貴様、何しに来た！」ヘイルが弾かれたように向き直る。その拍子に手が僕の鼻を打つが、ヘイルは気づいてない。」

「何しに来た、はないんじゃないか。わざわざ助けに来てやったというのに。」「ガウエインはポケットに突っ込んだ手をおもむろに抜き取ると、目の位置にひらひらとかざした。鍵束が無機質な金属音を響かせる。」

「貴様、一体何のつもりだ。」「

「別に。気紛れだから、感謝とかそういうのはいいよ。」「鍵束から一本を選び出し、格子を開けるガウエイン。彼は他に捕らわれている他の者達を一瞥したが、そちらには声もかけず、こちらに向かってきた。そして腰から例の短剣を抜き去ると、手早く僕らの戒めを解いていく。」

「いいのか？君は、あの黒ひげと仲間なんじゃないのか？ばれてしまったら……。」「

「ばれなきや大丈夫さ。鍵を盗むところも見られてない。俺の盗みの手際の良さは、きみが一番よく知っているだろう。」彼の軽口は相変わらずで、そこには焦りも不安も感じさせない。

全員の縄を解くと、ガウエインは大きめの麻袋を地面に放った。金属やら何やらいろんなものがこすれ合う音が袋の口から洩れた。クリスが袋に手をつ突っ込むと、彼女の弓が出てきた。

「ほら、君らの荷物だ。屋敷の見取り図も入ってる。これを取ってさつさと逃げな。俺がしてやるのは、それだけだ。」

「待て。金印が入ってないぞ。」中身を手当たり次第取り出し、顔まで突っ込んでいたヘイルが袋から勢いよく顔を抜き出した。

「そんな疑い深げな顔をするなよ。金印は頭領が持ってたんだ、装備を持ってきただけありがたいとおもいな。」

「ふざけるな！あれは大事な……！？」ガウエインに掴みかかるうと伸びたヘイルの手が、寸前で引きもどされる。同じタイミングで、短剣が彼の手があつた虚空を切り裂いた。

「勘違いするな。俺はあんたらの味方でも何でもない、こうして手を貸してやっているのもただの気紛れだということ忘れるな。」さつきの安穩とした雰囲気を瞬時に切り替え、両の短剣を前後に構えるガウエイン。凍るような鋭い目つきで睨む彼は、感情なく人を殺せる者の目だ。

でも。そうなら何故。

「……なぜ、僕らを助ける。」

「だから気紛れだと言つたろう。」ヘイルと相對したまま答えるガウエイン。

「本当にそれだけか？気紛れなんて理由で、自分の身を危うくしてまで脱走の手助けをするのか？」

「そうだ。俺はそんな人間だ。気紛れで助けもすれば、殺しもする。殺した数のほうが圧倒的に多いけどな。」

「だったらなんで、君はそんなに怒っているんだ。」

ガウエインは構えを解いた。やっと、僕に向きなおった。

「……怒っている？俺がか？」それは棘があるというより、純粹な問いかけだった。僕はうなづいた。

「少なくとも僕にはそう見える。彼らを一瞥した時も、僕らが捕らえられた時も、君はどこか憤っているように思えた。理由はわからないが、君はあいつのしていることを快く思っていないはずだ。違うか？」

そう。あの時、彼の感情は赤く染まっていた。

視線で暗闇にうづくまる貧民を指す。彼の顔が一瞬歪み、彼の影が揺らいだ。褪せた赤が色を取り戻す。

「……気のせいだ。」否定の言葉は低い呟きとなって虚空へと消えた。

「さっさと逃げな。気付かれないとも限らないからな。」しつと、僕らを外に出るように促すガウエイン。

だけど、僕は……。

「なあ、僕らと……。」

「私たちと一緒に行きませんか？」

「へ？」

「は？」

「え？」

「あ？」

あっけにとられた声は全員から。いや、彼女を除く、全員からだ。つた。

「ガウエインさん、私たちと一緒に来ましょう。」ガウエインの袖をつかんで、マリアさんは繰り返した。

「あのさ、なんでそんな流れになるわけ？」驚きを通り越してあきれ顔で、ガウエインは尋ねた。

「ガウエインさんはいい人です！こんなところで泥棒なんてやめた方がいいです！」対してマリアさんは、当然でしょう、という顔で答える。……凄いな、こんな積極的なマリアさんを見るのは初めて

かも。

ガウエインは深々とため息をついた。

「さっき言ったことを聞いてないわけ？こうして助けてるのもただの気紛れだって。何か勘違いしているみたいだけど、俺は根っからの悪党で……。」

「行っちまえ。どうせお前らは、ここから出られないけどな。」僕らの会話に、新たな人物が加わった。

そいつは、格子の外にいた。誰よりも早く相手の存在を認めたガウエインが、愕然と声を漏らした。

「頭領……。」

「その名前を呼ぶんじゃない。てめえはもう、仲間じゃない。」巨漢がはつきりと拒絶の言葉を口にする。階段に立ちふさがる彼のわきから、ぞろぞろと武装した者たちがわいてきた。多くの者はクロスボウを装備している。一人が開いた扉をかちり、と閉めた。

僕らは再び閉じ込められた。

「悲しいぞ、ガウエイン。あれだけ目をかけてやったお前が、この俺に逆らうなんて。お前の働きは素晴らしいものだった。実の息子のようにも思っていたというのに。」ああ、と嘆息を漏らして巨漢が憐れみたつぷりの瞳でガウエインを見つめる。その手は反りの強い幅広の剣をもてあそんでいる。

ガウエインは何も答えず、ただ身構えている。クロスボウの矢先は全て彼に向けられていた。

「所詮蛙の子は蛙にすぎない、ということか。」

「親父のことを悪く言うな！」突然、ガウエインが叫んだ。

「親父は立派な人だった！人身売買なんかやるあんたよりも何倍も！」

「だから仲間に裏切られた。」頭領の顔が意地悪く歪む。そして懷から何かを取り出すと、これ見よがしにガウエインに見せつけた。

「なんで、それを……。」ガウエインは茫然と、頭領が取り出したそれを、見つめている。

それは鞘におさめられたふた振りの短剣。長さはガウエインの持つそれとほぼ同じ長さ。黒塗りの鞘に、二匹の蛇が交差しながら鰐元へと登っていく様が描かれているのが印象的だ。

「俺が持つているかって？俺が殺したからに決まっているだろう。」
頭領は平然と言つてのけた。彼の父親を殺したのは、自分であると。ガウエインはもう、何も言わなかった。ただ、バリバリと、かみ砕きかねないほどの音を立てて歯ぎしりをしている。人を食ったような表情は消え、つりあがった眉が、見開かれた蒼い瞳により迫力をもたらしている。まるで視線だけで殺してしまおうというかのよう。

実際、格子の向こう側でクロスボウを構える幾人かが武器を取り落とし、幾人かが構えを崩した。しかし、その視線を一身に受ける頭領はどこ吹く風、といった表情だ。

「お前とのおしゃべりもここまでだ。今までよく働いてくれたよ。」
片手を上げる。部下たちがクロスボウを構えなおす。

「さようならだ」手を下ろす。十数の矢が一斉にガウエインに放たれた。いくら彼といえども、この数をはたき落とすことなど不可能だった。

「盛り上がっているところ悪いがな。」ヘイルがおもむろに口を開く。

「僕らもいると言つことを忘れないでほしいな」ついでとばかりに付け加える。

ガウエインに放たれた死。そのことごとくは、彼の前に立ちふさがったヘイルと僕の足元に転がっている（大半はヘイルのところに）。

「お前ら、なんで……。」

「そんな話は後だ。今はあいつらを倒す」

「どうするの？私たちは閉じ込められているのよ？」クリスがもつともな疑問を口にする。彼女の言う通り、ガウエインを助けたはい

いが、事態が好転したわけではない。

「借りるぞ」そういうと、ヘイルは僕の手から剣を取った。

「え、ちよっと！」僕が止める間もないまま、ヘイルは格子の前まで駆けていくと、扉のかぎの部分を切りつけた。僕の剣で。

鈍い金属音が響いた。それは部屋中に響き、誰も音が響いている間に動くものはいなかった。

ヘイルが扉を押す。扉は何の抵抗もなく開いた。

「な、何……ぎゃあ！」最初に驚愕の声は、言い切らないうちに悲鳴へと変わった。

ヘイルはすでに戦闘を始めていた。彼は僕の剣で扉を壊し、反撃に映ったのだ。盗賊たちはまさか扉を壊されるとは思ってなかったように泡を食っている上、ほとんどのものがクロスボウしかもっていないので、反撃しようにもできないでいる。

「って、みてる場合じゃない、僕も加勢しないと……。」数人が彼の振るう刃に倒れていたが、敵はまだまだいるし、全員がクロスボウ、というわけでもない。近接用の武器を持った数名が彼と交戦しており、その間に落ち着きを取り戻した者たちがクロスボウに矢をつがえている。

とりあえずヘイルの置いて行った剣を代わりに……。

「って、重！」何だこれ！僕なの五倍はあるぞ！

ヘイルの剣は持ち上げるのがやっとで、とてもじゃないが降りまわせる代物じゃなかった。重さだけで肩に食い込む剣を何とか担ごうとする僕の横を、黒い影が走る。ガウエインが一陣の風となってヘイルに加勢していった。そのあとに続いて、クリスが弓をつがえたまま走りぬけた。

敵はバツバツと斃され、残るはやつと矢をつがえた男が三人と、頭領のみ。それもヘイルが瞬く間に二人倒し、一人はクリスの矢に眉間を打ち抜かれた。

「待て。そいつは、俺にやらせてくれ。」部下全員を倒した勢いそ

のままに飛びかかろうと身構える皇子に声をかける。

皇子は無言のまま振り返る。戦いのときは普段より冷静になる夕イプらしく、血しぶきがかかった顔は無表情だ。

「頼む。」皇子は何も答えないまま、退いてくれた。俺は小さく感謝を口にした。

「頭領。言い残すことはあるか。」短剣を構える。握りしめる柄が手に馴染む。

「言い残すだと？貴様、俺に勝てるつもりで思っているのか？」頭領がうすら笑いを浮かべ、剣を構える。

頭領の自信ありげな態度に不審な点を覚える。だが、そんなこと、今はどうでもいい。

今はただ、湧き上がる黒いものを叩きつきたい。

一足で間合いを詰める。と同時に一方の短剣を投げつける。

顔を狙った短剣はあっさりと弾かれる。だが、それでいい。目的は弾かせることにある。

懐に入る。狙いは上段に構えてガラ空きの胸。

一閃。全身を使つての、気合を込めた一撃。どす黒い腹を？つ捌く。

だが、裂けたのは服だけだった。金属のこすれる音が耳に届く。

「鎖帷子か！」自信のもとはいったのか。だが、気付くのが遅かった。

「死ぬ！」反った刃が空気を震わせながら振り下ろされる。咄嗟に短剣で防ぐ。一撃はそれ、なびいた髪の数本を切り裂く。

防いだはいいが、今の衝撃で短剣が折れてしまった。あの皇子の一撃で欠けてしまったのが原因か。そうしている間にも、頭領は剣を引きもどしている。

「終わりだ！」頭領の顔が殺しの狂喜に歪む。

俺も、同じ笑みを浮かべていた。

左腕を伸ばす。最初に短剣を投げた手を、頭領の首へ。右から左

へと、首をなぞる。血しぶきが迸る。

狂喜が、疑惑へ。俺の左手には、短剣がある。あるはずの無い、短剣がある。

「誰もあれだけとは言っていないぜ？」俺の手には、かかどに隠していた短剣が握られていた。

「親父は義賊だったんだ。盗んだ金を決して使わず、全部貧しい人に還元していった。」

「でも、やっていることは泥棒だろう？それじゃ、いいこととは言えないじゃないか。」

「……おい。」

「確かに。でも、そのおかげで何人もの飢えた人々を救ったのも事実だ。それに、親父は一度も言い訳しなかった。そうしなければ救えないと言いながら、それでも自分のやっていることは悪いことだと、いつも俺に聞かせてくれた。」

「おい。」

「立派なお父さんですね。」

「そうだろ。俺は親父を尊敬していたんだ。親父のようになりたいと、いつもあとを追っかけようとして怒られていたよ。」

「おい！」

「何だよ、ここから俺の少年時代の話が始まるのに。」話の腰を折られて、ガウエインはむくれた。

しかしそんな顔をしてヘイルが抑えられるはずもなく、むしろ火に油を注いだ形となった。

「何だよ、はこちらのセリフだ！何故お前がついて来る！何食わぬ顔で、あっさりと溶け込んでいるのだ！」

「誘ったのはそっちだぜ？それに、それを言うのは随分と遅すぎるんじゃないか？」ガウエインは親指で後ろを指した。地平のあたりに、彼の故郷が晴天の太陽に照らされている。既に数十キロは離れ

ている。

「それは、貴様が町を出るまで案内をしようから、仕方なく……。」次第に言葉尻を濁すヘイル。

「実際、ガウエインがいないと出られなかったな。」クリスがつぶやく。わざとらしく、聞こえるくらいの大きな声で。

「道を知っているガウエインさんがいれば、この先迷わないで済むと思います。」マリアさんが追い打ちをかける。

「役に立ちますよ、皇子。」ガウエインがにやりと笑う。

「皇子はやめる。……ヘイルでいい。」ヘイルはそういうと、そっぽを向いて歩きだした。どうやら折れたらしい。

僕の後ろで、三人がハイタッチをしている。……いつの間に仲良くなったんだろうか。

先に行くヘイルに駆け寄り、肩を並べる。

「いいじゃないか。正直、この先何があるかわからない。仲間は一人居ても多い方が心強いだろう。」僕は前方を指した。草木も生えないう荒野は起伏の激しい道となり、空は早くも厚い雲が覆っている。

「わかつている。気乗りがしないのは、ただの私的感情だ。」ヘイルがため息をつく。右手は、奪い返した金印をまさぐっている。彼としては、まだ許せることではないらしい。僕はヘイルの肩に手を置いた。

「今は認めてくれただけでいい。いつか、二人が仲良くなる日が来るさ。」

「仲良くなるだと？天使と悪魔が手をつなぐほど、あり得ない話だ。」

「ヘイルは一笑に伏した。」

第十二話：牢（後書き）

ご無沙汰してます。じよんです。

間があいてしまい、大変申し訳ないです。忙しいのに加えて、ネタにも詰まる有様で。それは読んでいただければわかったかと思えます。手抜きっぷりが。ええ。

最近、友達の小説を読む機会がありまして。それも随分と。大体は予想通りで、こいつはやっぱりこれくらいか、とか、やっぱり凄いなーとか。基本的に皆自分よりうまいです。金取れるんじゃないの、みたいなのもいっぱいあります。自分の力不足をひじょくに痛感しております。

イヤ、ワカツテタndaヨ？自分に文才とか、そういった類がないことはネ……？わかっていても、見せつけられるとつらいというか、やめて批判しないで、みたいな。

ガンバリマス。でも来週もちょっと無理だった（オイ

第十三話：帰還

巨大な質量がうなりを上げて、一瞬前に地に伏せた頭上を掠めすぎる。それは勢いを緩めることなく岸壁を叩き、大地を震わせた。轟音は谷の中に重たく響き、別の崖から小石が転がって行くのが視界の隅に映る。

その視界のほとんどを、目の前の巨体が遮る。みたくは蠍そのものだが、大きさは家ほどもある。

「今だ！行け！」ガウエインの声を聞くより先に、僕の体は走り出していた。起き上がる時間も惜しくて、地に伏せたままの低い姿勢で相手の懐に入る。

剣を胸の前に構える。狙うはガラ空きの胴体下部、そこに剣を突き上げ……。

「な……！」突然、胴体から無数の刃が生え、僕に襲いかかった。胴体と思っていたところは、畳まれたハサミだった。突き上げた剣は鋏に阻まれて弾かれた。

ハサミが出たことであらわになった腹部は白い、やわらかそうな部分で、体表を覆っている硬い甲殻らしいものもなく、明らかな弱点ではある。だが、新たに現れた十数本の鋏が振り回されて、剣を突き出しても弾かれる。

「何をもたついてるんだ！」ヘイルの怒声が僕をせかす。彼は注意をそらせようと真っ向から敵に挑んでいる。結果、岩のように巨大なふた振りの鋏を、前後左右に文字通り飛びまわってかわしている。時折隙について剣を振りおろしているが、岩を叩くような鈍い音にするだけで全く切れるそぶりがない。

何とか一撃を加えようと鋏を打ち払う。だが、せっかく一本の鋏を反らしても、すぐに別の鋏が、別の方向から襲ってきて、攻めているつもりがいつの間にか凌ぐのが精一杯になってしまった。

「俺がやる」いつの間にかいたのか、ガウエインが脇から現れ、僕に

襲いかかった鋏の一本に斬りつけた。

鋏はあっけなく切れた。

別の鋏が飛んでくる。切る。鋏が地面に落ちる。

飛んでくる。切る。落ちる。

切る。落ちる。

切る。落ちる。切る。落ちる。

切る落ちる切る落ちる切る落ちる切る落ちる……。――

鋏に合わせてガウエインの腕が、双剣が奔る。その度に鋏がひとつ、また一つと落ちてゆく。

気がつけば鋏は全て斬り落とされ、短くなつた脚が虚しく宙を掻いていた。

「今だ！」剣を突き上げる。今度こそ剣は弾かれることなく胴体を貫いた。柄を握る手には肉を裂く時よりも柔らかな感触が伝わり、次いでぬめりとした温かさが手を湿らせた。

思わず剣を引き抜く。刺した個所から、見るからに粘度の高い白い液体がぼとぼとあふれ出し、僕らの上に降り注いだ。

「ぬわぁ！」ガウエインが甲高い悲鳴を上げる。視界が白に埋め尽くされ、魚が腐つたような生臭さが鼻をつく。僕らは体液の気持ち悪さをいち早く取りはらおうと、顔を拭いた。その一瞬が命取りになった。

広がった視界の隅に、影が揺らぐ。

「あつ」

「やば」僕らの声とほぼ同時に、蠍の巨体がのしかかった。

「……臭い」化物の巨体から這い出てきた僕らに対して、ヘイルの第一声はそれだった。後ろで、クリスたちも顔を歪ませ頷いている。僕らは反論せずに黙ったまま、タオルでべたべたの体を拭いた。

「それにしても、君の剣はそんなにすごい業物だったっけ？」若干臭いが残ったものの、大方体液をふき取ると、動かなくなつた巨大蠍とガウエインの双剣を交互に見比べた。

「ああ、これか？親父のと取り換えたんだよ」ガウエインは自慢げに双剣を掲げた。

それは、彼が使っていたものと刀身は同じくらいだった。だが、刃自体が黒く、よく見ると溝が彫つてある。幅が葉のように薄いものにもかかわらず、だ。

「すげえだろ？こんだけ薄いのに、強度は前のと比べ物にならないんだぞ。ちよつと重いのが難点だけだな」確かに、これだけ薄ければあつという間に刃毀れしてしまうはずだ。しかも、さっきの相手はヘイルの剣も入らない硬い甲殻を持っていた。だが、この剣は刃毀れするどころか缺を切り落としている。

「見せてくれ」ヘイルが僕らの間に割つて入る。

「いいけど。盗むなよ」

「するか！いいから貸してみろ」差し出すヘイルの手に、ガウエインは何やらブツブツ呟きながらも黒い短剣の一方を手渡した。

ヘイルは渡された短剣を両手で目の高さを持っていき、厚さを調べると、刀身を指でなぞり、軽く振って重さや重心のバランスを確かめたりした。

「ふむ……」何やら考え深げな表情をしたかと思うと、自分の剣を抜き出し、短剣で刀身を軽く擦るように切りつけた。

ヘイルの剣に小さな傷がついた。

「やはり。この薄さでこの重さ、鋼鉄の剣にあつさりと傷をつける切れ味。間違いなくアダマントだな」

「何だつて！？」ガウエインは驚愕の声を上げると、ヘイルの手から短剣を取り上げた。

「アダマントつて何だい？」同じ驚き方をされるとわかりつつも、尋ねる。案の定、皆アダマントだとわかった時と同じくらい僕がそれを知らないことに目を丸くした。

「通称黒い金と呼ばれる希少金属だ。同じ重さの金と取引されることからそのあだ名がついた。最も強い金属の一つだが、加工が非常に難しく、通常の金属加工は行えないと聞く。以前一度だけ見たこ

とがあるが、これほど精巧に作られてはいなかった。それをまったく同じのがふた振り、値をつけることができるかどうか……」言いながら、ガウエインの短剣に目を移すヘイル。

「な、なんだよ」ガウエインは短剣を腰の後ろに隠した鞘におさめた。

「お前の父親は、一体どうやってそれを手に入れたのだろうな。」

「さあ。誰かから譲り受けたとは聞いたけど……。」「言葉を途中で区切ったまま、ガウエインの視線が一点に固まる。巨大な蠍の死体の先、峡谷を登る坂に。

嫌な予感がしたのは僕だけではなく、誰も彼もが返事しないのを尋ねないまま、その視線の先を見る。

「……うそでしょ？」

「僕も嘘だと思いたい」

「奇遇だな、私も同意見だ」

「あんたと同じ意見になるとは思わなかったよ」

「ど、どうでしょう……？」

坂の頂上、曇天の空とかれた大地の境界に、蒼が立つ。それは群れを成して坂を下り、或いは崖を這い、こちらに向かってくる。巨大な缺を力チ力チと鳴らして近付いて来る。巨大な蠍が群れをなして迫りくる……！

「逃げるに決まってる！走れー！」叫ぶと同時に、一目散に來た道を逆戻りする。後ろから蠍がガサガサと地面を擦りながら迫ってくるのが聞こえる。

アングマルの地形は今僕らのいるような、下り坂と上り坂だけがあるような小さな峡谷が乱立している。うまくすれば、蠍を巻くこともできるだろう。だが、確実に旅の行程は伸びてしまう。

グラムとの距離はいつ縮まるのだろうか。息を切らして坂を駆け上がりながら、ふとそんなことが脳裏をよぎった。

くらいかぜが、荒れ地を泣いて吹き抜ける。歩くたびに削れていく地面も一緒に運び去って。前を歩くあの人の地面からも、エレンと同じように茶色い煙が舞う。

病気はどこかへ行ってしまった。きっと、苦いお薬が連れて行ってくれたんだと思う。久しぶりの元気な体は、羽が生えたように軽くて、どこまでも歩いていけそう。火みたいに熱かった頭もすつきりして、ちゃんと考えられるし、今が夢かどうかもはっきり分かる。空気は少し冷たいけど、そんなのはへっちゃら。知らないうちに、前に来ていたボロボロの服から、あたたかな、分厚い服を着ているから。

それなのに。それなのに、エレンは元気が出ない。病気が治って、体が軽くて走り出したい、って言っているのに、なんだか一步一步歩くのも嫌で、地面に座り込んでしまいたくなる。

どうしたんだろう、私。

削れる地面をぼんやりと眺めていた顔を上げて、あの人の背中を見る。

堂々とした歩き方。ゆったりしていて、すごく力強い。おじいさんはふらふら、ゆらゆらして歩いていて、風が吹いたら倒れそうだった。あの人の歩き方は一步一步に力があつて、何があつても止まらない。どんなに重いものを背負ってたって、きっと同じ歩き方をするのだろう。

広い背中。あの背中が、エレンを背負っていた。今でも思い出せる。凍えそうな体に、背中のぬくもりが気持ちよかった。小さな揺れが、なんだか懐かしい気持ちにさせてくれた。あの人に触れているだけで、なんだかとっても……。

その背中が、遠い。

あの人はいつものように。今までと同じように、エレンの三步前を歩いている。エレンは三步後ろから、驢馬を引いて歩いている。

一歩が、重い。あの人が、遠い。

振り返ってくれないかな。またあの笑顔を見せてくれないかな。

名前を呼んでくれないかな。

そんな思いであの人を見つめる。思えば叶うんじゃないか、なんて考えたりする。そんなことはあり得ないと知っているのに。裾をつかんでみようかな。そしたら振り返ってくれるかな。並んで歩いてみようかな。そしたら見てくれるかな。手をつないでみようかな。そしたら温かくなれるかな。

背中に抱きついてみようかな。そしたら名前を呼んでくれるかな。「エレン」って、呼んでくれるかな。また笑ってくれるかな。

でも、できない。

伸ばそうとした手が、上がらない。

並ぼうとする足が、重たい。

あの人の手が、つかめない。

あの人の背中に、届かない。

あんなに近かったのに、どうしてだろう、今はこんなにも遠い。

まるであの時のことが、エレンの夢だったみたいに。

もしかして、本当に夢だったのかな？柔らかなベッドも、苦い薬も、頭を撫でてくれた手の感触も、背中の温もりも、名前も、笑顔も。ぜんぶ、ぜんぶ夢だったのかな？ぜんぶエレンの夢で、エレンは私じゃないのかな？

私はエレンじゃないのかな？

確かめたい。あの人に聞いて、確かめたい。あの日あったことは本当だったのか。

私にエレンをくれたこと、ほほ笑んでくれたこと。

エレンに、私に聞く言葉はない。

聞くのが怖い。確かめるのが怖い。否定されたらどうしよう。並んでも無視されたら、掴んでも振り払われたら、抱きついて怒られたらどうしよう。

否定されるのが怖い。怒られるのが怖い。だって、それはあの日のことを否定されることだから。あれはただの夢だって言われるのと同じだから。

胸の中で何かが痛む。もどかしいくらいに微かな刺激なのに、痛みはじわじわと広がっていく。体はあったかいのに、中が冷たさに満たされていく。

じわじわ、ばきばき。じわじわ、ばきばき。

これが何なのか、私にはわからない。わかるのは、痛くて、寒いこと。

あの人は、わかるのかな？これが何なのか、知っているのかな？聞いてみたい。あの人に伝えたい。私の痛みのこと、私の寒さのこと。教えてほしい。

私には聞く言葉がない。あの人を振り向かせる声がない。

私には、ただあの人の後についていくことしかできない。

うつむいていたら、いきなり目の前にあしがあった。私はあわてて立ち止まった。危うくあの人にぶつかるところだった。

「着いた」一言、突然立ち止まったあの人が呟いた。私は何の事を言っているのか（そもそも、私に言った言葉なのだろうか）分からず、あの人の影から身を乗り出した。

数歩先は崖になっていて、ここからちょうど崖の下を見下ろせた。そこには、見たことのない大きさの街があった。それは、夜には見えなくなってしまうのではないかと思うほど黒い街だった。黒い城壁、黒い屋根、黒い城。城壁の上や街を歩く人さえ黒く見える。大きな堀が掘つてあるのに、水はなく、空っぽだ。城壁は奇妙な形をしていて、何のためかいくつも出っ張りがある。門は開け放たれたままだ。夢うつつで通ったどこかの街と違って、門で見張っている人もいない。なのに、なんだかはいりづらく感じる。人だけじゃなく、全てのものを。どうしてそう感じるのか分からないけど、こうして眺めている間にも、入って行く人は一人もいない。出て行く人も、一人もいない。

何もかもを拒絶する、冷たい街。それが、この人の街。この人の故郷。

「フードを被れ」何日かぶりに少女に声をかけると、自らもフードを目深に下ろした。狭まったフードの視界には、見慣れた黒い壁が全体を覆い尽くし、正面に開け放たれた門が映る。崖から見下ろした時は、街にはいるものは一人もいなかったが、今は近隣の村から来たのか、細い影を伸ばした者たちがぼつぼつと門に吸い込まれていく。

門番はいない。正確には門の上にいるのだが、彼らは入ってくるものをいちいち見定めようとはしない。その必要がない。この国は、建国当初から一度も、人間に攻め込まれたことがない。

それでも、この街には堀が、城壁が、戦うための兵士が、武器が必要不可欠だ。それは戦時中だからではなく、もっと身近な問題のため。頻繁に現れる化け物から身を守るために、必要なのだ。

それは城壁にも色濃く出ている。いくつかある出っ張りは、城壁を這い上る化け物を拒むため。出っ張りで動きをとめているすきに、城壁の溝に油を流し込む。それは出っ張りに遮られずに城壁を伝うから、出っ張りに隠れた化物にも攻撃することができるようになっている。

影と共に門をくぐる。作物の見当たらない小さな農地を足早に通り返けると、モノクロの世界に入り込む。

ユピテルの貧民街よりいくばくかましな作りの建物が、肩を寄せ合うように軒を連ねる。城までの一本道には露店が構えられ、少ないながらも人々が行き来している。

住居、露店、人々。それらすべてが、単一色に、黒に統一されている。家の壁も、屋根も、店の道具も、衣服も全て黒。濃さや若干の色合いはあれど、ここに色はなく、無機質な黒が支配している。それは鉄の色。鉱山資源は豊富にあるアングマルは、生活に鉄を大量に使っている。住居の壁や屋根、城壁でさえ、鉄鉱石が使われている。

それは獣の色。紡績産業が存在しないこの国の衣服のほとんどは、

獣皮をなめしたものだ。この国の生き物は黒色をしているものが多い（聞いた話では、弱い日差しを少しでも体に取り込もうとした結果らしい）。自然服も黒くなる。

外套のひもを締める。下にきている服は白地も混ざっている。目立つようなことはしたくなかった。

後ろを振り返る。少女が黙したまま、驢馬を引きずり歩いている。俯いているので表情はわからない。

白銀の髪に蒼と碧の瞳だ、否応なしに周囲の視線をかき集めてしまっただろう。それらが隠れてしまっているのは、非常に都合がよかった。

……なぜ、俺はこんなに見つかることを気にしているのか。ここは自国だ、もう敵地ではない。胸を張って町中を歩いているのだ。こそこそと罪人のように振舞う必要などない。

だが、俺は今もこうして隠れるように通りを歩いている。何故、と問えば、答えはすぐに返ってくる。

それは、できる限り早く城に戻りたいから。死んだはずの男が帰ってきたとなれば、大騒ぎになる。そのせいで王への報告が遅れるのは困る。

単純な羞恥でもある。仮にも一国の將軍である自分が味方に何も告げないまま敵国に長期間潜りこんだ挙句に何の結果も上げられないまま、おめおめと舞い戻ってきたのだから。

それらの気持ちは嘘ではないと断言できる。だが、つらつらと理由が頭に浮かんでくるのが、まるで何かをごまかすために言い訳をしているように思えてならない。誰に……？他人に？自分に？

露店通りに入ると、道行く人も増えた。イギリスほどではないが、絶え間ない人の流れがある。なのに、活気はなく、どこかさびしささえ覚える。行き交う人々は俯き、雨も降っていないのにフードを被っている。商人さえ言葉少なにものを売っている。子供はいなかった。

まぶしい太陽。人の熱と呼気で満たされた息苦しさ。絶え間ない

掛け声、値切りの論争。走り回る子供たち。絶え間ない笑い声。活気ある市場。灯の絶えない街。騒がしい酒場。満天の星空。

広大な高原。命溢れる森。緩やかな丘。馴らされた道。和やかな朝。穏やかな夜。

襲われることのない、敵への恐怖におびえることのない日々。

名は体を表すとはよく言ったものだ。サン国は、その名の通りまぶしい国だった。憎いほどに。

露店通りを抜けると、目の前には目指すものがそびえたっていた。黒く、飾りのない四角い建物。王が鎮座する、不落の城。数か月ぶりにみるそれに、感慨を沸かせている余裕はなかった。

「止まれ」城門よりもはるかに小さな、それでも馬車が通れるほどの門にいる門番が二人、槍で壁を作るようにして立ちふさがる。顔全体を覆っている兜の隙間からのぞく目からは、殺意しか感じない。その視線に、誇りを覚える。兵士とはかくあるべきだ。あの弛緩しきつた国に、ぎらついた目をした兵士は一人もいなかった。そんな国に負ける道理はない。

「王に謁見したい。通してくれ」

「何者だ。顔を見せて名を名乗れ」門番が有無を言わせない口調で命ずる。逆らえば、敵対者とみなされるだろう。そう訓練されている。そう訓練したのだから。

フードを取る。門番は予想通りの反応をした。殺意は驚愕に代わり、口が大きく開かれる。

「サー・グラム、ただいま帰還した」

第十三話：帰還（後書き）

皆さん、お久しぶりです。長いようで短い夏を乗り越え、戻ってきました。予定していたより遅い復活になってしまいました。たいしてうまくない腕も鈍ってしまいました。以前に増してガリガリ書いて、皆さんが楽しめる小説を書いていきますので、よろしく願います。

第十四話：手

侍女たちを追い払い、扉を閉める。が、人は締め出せても音までは遮断しきれないようで、今だ扉の前でしゃべり続ける女どもの声はくぐもった響きとなり、あわただしく行き来する人の足音が振動となって伝わってくる。

俺の予想は当たり、城内は死んだはずの將軍が戻ってきたことであつてない大騒ぎとなつてしまつた。幸い、そのことで足止めを食ふこともなく、準備ができ次第すぐに王に謁見することが許され、旅で汚れた格好のまま会うわけにもいかなないので、着替えるために実に数力月ぶりに自室に戻ることになつた。

部屋は最後に出た時と何も変わつていなかった。戦死とされて数カ月経つというのに、掃除はいきとどいており、まるで俺が戻つてくるのを知つていたかのようだ。

「おい」扉の影に隠れるように、うつむいて立っている少女に声をかける。

「着替えを手伝え」衣装棚の服を取るよう指示し、自分は汚れた衣服を脱ぐ。本当は湯にでも浸かりたいが、そこまでの時間はない。侍女が用意したお湯に布を浸し、顔や体を拭う。布が黒いので、どれだけ汚れや垢が落ちたのかはわからないが、少なくともべたつきは無くなつた。

黒地に赤い糸で刺繍が入れている服に袖を通しているころ、ノックの音が響いた。

「準備ができました」侍女が端的に告げる。

「すぐにいく」パツと衣服に乱れがないか確認した後、扉に向かう。鎧を着ず、武器さえ携えていないのには些か手持無沙汰な、それだけで無防備な気にさえなつてしまふが、仕方がない。鎧は、壊れて無くなつてしまつたのだから。

それに、俺の剣に鞘は必要ない。

扉を開けて、ふと振り返る。果たして、いつものようについでにようとしている少女の姿がそこにはあった。

「ついて来るな」言い残して、部屋を出る。扉が閉まるまで、俺を見つめている少女。

それが、いつもより儚げに見えた。

タペストリーはおろか、絨毯すらもない謁見の間。縦に長い部屋だが、広さにしてみれば広場ほどの広さもないであろう。これが普通であった俺にとって、サン国のあれは驚くほど豪華であったことを認めざるを得ないのだが、あの広さは実用的でなく、装飾の一部であるのだと、再びこの部屋を訪れて考える。

その、無駄のない広さの奥。両脇に甲冑で身を固めた兵士をたたせ、王が鎮座していた。

背恰好は俺と同じほど。手こそ細いが、骨ばってはいない。栗のように大きな目に、線を引いたように細く長い眉。特徴的な水色の髪が、明るい印象を与える。

が、今は眉間にしわを寄せ、目を半月にしている。

「よくぞ戻った。余は嬉しく思う」おもむろに口を開く王。そこに表情の変化は見られない。

「ありがたきお言葉。」

「して、グラムよ。お前はどうかって生き残り、ここに戻ってきた？お前が槍で貫かれ、崖から落ちるのを確かに見たと証言する者が数多いのだが。」

「その通りです。私は負傷し、崖から落ちました」

「ならばどうやって」

「魔剣を使って。今魔剣は私の体と一体化しています」証拠を見せるために、剣を出すように念じる。

体から黒い靄が陽炎のように漏れだす。それは右手に収束され、形を大きくしていく。

前触れもなく、靄がかき消える。右手には、実体化した魔剣が握られていた。

「おお。これは」王が思わず声を漏らす。

「魔剣と呼ばれることはあるな。どうやら、お前に授けた余の判断は正しかったようだな」

「それについては、感謝してもしきれません。これがなければ、こうしてもう一度故国の地をふむことはなかったでしょう」言いながら、過去を思い起こす。

ある日突然、王から呼び出され、幾重にも布に巻かれた上にバツクルで止められていた棒状の包みを差し出された。王には褒美だと言われ、促されるままに包みを解いた。

この大陸では見られない、反り身の剣。鞘から柄、鐔にいたるまで黒一色。

刀身を確かめようと、柄を握る。手が滑らないようになのか、柄には奇妙な手触りの布が巻きつけられていた。薄く、ざらつく感触。異様なほど、気持ち悪いくらいに手に馴染む。

鞘をつかみ、剣を引きだす。音さえ立てずに露わになっていく刀身。それは、常識で考えればあり得ないことだった。どれだけゆっくりと引きぬこうとも、必ず音は立つ。構造上、仕方のないことである。

だが、それすら俺には気づかなかった。

黒。混ざりものなしの、黒。

夜。

闇。

黒。

その剣は、全てが黒だった。

俺は、黒が好きだ。それは夜の色であり、闇の色であり、この国の色だ。何物にも染まらない、単一で変わることのない色。

それが黒。

気付けば、剣を食い入るように見つめていた。

同時に、ぞつとさせられた。思い返してみても、その一度しかなかったことだけれども。

確かに、剣が、脈を打ったのだ。

「……！」思わず、剣を取り落としそうになった。だが、落とさなかった。手を離さなかったのではない。

手が、離れなかったのだ。

それが、まだ、魔剣であるとわかる前のこと。それが命を吸い取る魔剣であるとその時知っていたとしても、俺は手放すことはなかったらう。

既に。俺は魔剣に、魅入られてしまっていたのだから。

「それで、数カ月もいたのだから、少しはみてきたのだらう」「王の言葉で現実に戻される。

「はい」

「ならば話せ。できるだけ仔細にな。暗殺に失敗したことも聞き及んでいる。そのことも聞きたい」

扉の向かいに二つある大きな窓からは、どんよりと曇った空が見える。部屋にいた人たちが（あの人はずぐに追い出したけど）つけてくれたらうそくのおかげで、部屋は暗くない。だけど、そのらうそくは普通のと違うみたいで、真っ黒な煙を出すし、すごく臭う。窓を開けようとしたけど、窓も普通とは違って、上のところしか開かないし、わたしでは届かなかった。

おつきなベッド。一つきりの衣装棚。書き物机。低いテーブルに椅子が二脚。壁と一体になった、立ち見鏡。

それだけ。他には何もない。絵画も、置物も、本すらもない。あの人の部屋はがらんとしていて、ものというものがない。

ふと、旅に出てからずっと、あの人と一緒にいたことに、今更ながら気付いた。

寒い日も、暑い日も。

晴れの日も、雨の日も。

疲れた時も、眠る時も。

病気の時も。名前をくれた時も。

ずっと、ずっとそばに、いてくれた。誰よりもずっと、わたしのそばにいてくれた。ずっと一人だったわたしのそばに、いてくれた。うれしかった。

でも、今はいない。出て行ったきり、帰ってこない。どうしていつてしまったのだろう。どうして、わたしをおいていったんだろう。「おいていかないで」って、いえなかったんだろう。

ふと、書き物机に積まれていたものに目がついた。あの人が、脱いだ服。旅の間、ずっと着ていた服。わたしたちと一緒に旅をした、この部屋で唯一、あの人を感じることもできるもの。わたしとあの人の記憶。

手を伸ばす。あの時つかめなかった、袖をつかむ。そうっと、机から服を離す。

皺にならないように、優しく抱きしめる。砂埃が舞ったが、そんなことは気にならない。

まだ温かい。汗のにおいが鼻をついたが、嫌ではない。汗に混じって、あの人の匂いがする。

顔をうずめる。肘で挟むように、胸に押しつけるように、ぎゅっと抱きしめる。

皺になっちゃう。頭の片隅で、そんなことが思い浮かぶ。

でも、いいや。怒られても、かまわない。こわいかおをされたっていい。

早く帰ってきて。

突然、扉がノックされて、思わず飛び上がった。慌てて服を後ろ手に隠す。

あれ、なんで隠しているんだろう、わたし。

「失礼します」その答えを考える間もなく、扉が開いて、人が入ってきた。さっき追い出された女の人たちの一人で、バケツや雑巾を

抱えている。

「あら」その人は、すぐにわたしに気がついた。当然だ、こんなに何も無い部屋で、目立たないはずがない。

「あなた、新しい子？勝手に入ったらだめでしょ。しかも、よりによつてこの部屋なんて。ばれたらあなただけじゃない、私だって何されるかわかったものじゃないのに。」

誰と間違えているのか、つかつかと歩み寄ってくる女の人。

「……その後ろに隠しているものは何？」突然伸ばされる手。

その手を、はたいた。啞然とする、女の人。

「なにをするの、早くそれを渡しなさい」女の方はすぐに我に返り、服をつかむと、強引に取り上げようとする。

いやだ。取らないで。あの人を、取らないで。

「痛！」噛みついた。精一杯、掴んできた手に、噛みついた。

「なにをするの！」噛みついたわたしのほほを、平手が打つ。おかげで服を離してくれたが、ぶら下がるように引つ張っていたので、勢い余って床に転がった。

生暖かい鉄の味がする。慣れ親しんだ、血の味。でも、自分のでないものも混じっていた。

女の方は、怒っているのか、驚いているのか、わからない顔をしている。多分どっちもだろう。噛まれた右手からは、ぼたぼたと血が垂れている。後ろに、扉があった。

扉に飛びついて、廊下に出る。

女の方が追ってくる。

怖い。

道は三つ、どこに行けばいいかわからない。

右の道を選ぶ。

女の方が部屋から飛び出す。次の角を左に曲がる。

女の方は追ってこない。あきらめたのか。わからない。振り返らない。

階段を下る。

鎧姿の、兜だけかぶってない人とすれ違う。目が合う。中途半端に髭を生やした男の人。わたしをじっと見ている。

脇を通り過ぎる。次の角を右へ。別の人とすれ違う。女の人。

右へ。左へ、右へ、前へ、上へ、下へ、後ろへ……。

これ以上走れなくなつて、立ち止まった。前も後ろも、人はいなかった。女の人は、追ってきていなかった。

わたしはどこにいるのか、わからなくなった。

謁見の間を出ると、廊下の薄暗さに目を細めた。ぶすぶすと黒煙を上げているたいまつが等間隔につもされてはいるが、黒一色で統一された世界は闇と光の境界を曖昧にしている。暗がりにかくれば、すれ違つても気づかないかもしれない。

そんなことを考えながら歩いていたせいか、突然陰から声が聞こえてきても、それが壁に寄りかかっている人物であると気づいていた。

「お久しぶりです」場所が違えば、快活であるとさえ感じさせるような、高く若い男の声。

「何の用だ」

「つれないですね。自分はただ、我が国が誇る將軍様が数力月ぶりにお戻りになつたと聞いて、わざわざ様子を見に來ただけなんだけどなあ」わざわざ、をことさらに強調する。

ぬつと、人影が動く。松明が大きな影を作り、目の前を覆う。

分厚い胸板。擦れる鎧は重低音。逆光に照らされた頬に、深い切り傷が癒えた後も痛々しく残っている。

黒い髪を短く刈り込んだ、見上げるほどの大男。

「全くお変わりないようですねにより。もつとも、自分としてはいささか残念です。腕の一本や二本、失くしてくれると思っていたのですがね」器用に眉と頬を左右対称につり上げる。

「用が済んだのならそこをどけ、木偶。貴様とのおしゃべりに付き

合っているほど、俺は暇ではない」目線を切り、脇を通り抜けようとする。それをふさぐように、男が一步横にずれる。

「……何のつもりだ？」

「いや、まだ気になることがあつて。將軍は崖から落ちたんですよね？しかもその前に手傷を負われて。その割には、大きな怪我也見受けられないし」大げさに首を横に振りながら、全身をくまなく観察する大男。

「何が言いたい」

「いや、だから何というか……」言葉を掘り出すように、右手で頭を掻き始める。ぼさぼさの髪が、余計に乱れる。

「あんた、本物？」その右手が、柄をつかんだ。

踏み込みが足を揺らす。腰の回転に連動して突き出される肘。その先、暗闇に溶けている右手が掴むものが、火花を散らしながら壁を削り、その姿を垣間見せる。

ギロチンのように幅広の刃。照らし出されるは白い刀身。それはまごうかたなく剣の形をしている。だが、それを剣とよぶのは憚られる。

なぜなら。目前にして全容を明らかにしたそれは、剣という枠から逸脱した代物だったから。

刃渡り百五十、柄も含めれば百八十を超える、槍にも匹敵する長さを持ちながら、普通のものには持ち上げることすら困難な肉厚の刃。

クビカリ。トロールの首すら両断した片刃の剣。それを軽々とふるう臂力の持ち主。

トロール殺しのラキ。千人長を務める、アングマルでも一、二を誇る将である。

「どうやら、偽物ではないらしいな」無精ひげを生やした口から低い声が漏れる。本来の声と口調を戻したラキが、薄笑いを浮かべる。

首には黒霧の剣。蛇の舌のように明確な意志を持って伸びようとする鬨が、太く筋肉質な首筋を舐める。

対する俺の首にもギロチン。重さだけで鎧ごと人間を切り裂く刃が、鋼の匂いを感じさせる位置に制止している。

動けば互いの首が飛ぶ。完全な膠着状態で、同じ顔をする。

「貴様も、腕は落ちてないと見える」

その言葉を合図としたのか、剣を引くラキ。俺も剣を引く、もといかき消す。ひゅう、とラキが口笛を吹く。

「便利だな。こういう仕組みになっているんだ」心底羨んだ声を出す巨人。自身はクビカリを留め金に嵌める。

剣の枠から外れたクビカリには、鞘はない。鰐に取り付けられた留め金を、専用の留め金につけているのだが、剣の重みに耐えられるようかなり丈夫に造られている。そのため、それ自体も大した重さらしい。以前、ラキがぼやいていたのを覚えている。

「教えるつもりはない。知ったところで、貴様ができることではない」

「そうかい。旅行は楽しかったか？」

「眩しくて目が痛む。澄んでいて喉が渴く。そんなところだ」

「あんたには合わないのがよくわかった。……それで、二人のことは聞いているのか？」

「ああ」誰、とは聞かない。俺にとっての二人とは、他にはいない。グルンベルド。

デリシュ。

アングマルの将、俺の腹心の部下。

戦死した、二人の戦友。

「なら、わかつているな、お前の立ち位置を？元々お前を快く思わない連中はたくさんいる。王と幼少から付き合いがあると言っても、それがどこまで通用するかどうか。実際、あの方は表立ってあんたを擁護したりはしない。ぼうつとしてしていると足元すくわれるぞ」

「問題ない。誰が將軍に相応しいか力で示すだけだ。忘れたという

のなら、思い出させてやるまで」

「相変わらずだな。あんたらしい。後でいない間にたまった書類を届けておく。感謝しろ、あんたがやらなかった仕事の大半を、俺が終わらしておいたんだからな」道を開け、俺とは反対方向へと歩き出すラキ。

と、何かを思い出したかのように足を止め。

「なあ、あの女の子はなんだ？」一番触れられたくない話題を振ってきた。

「ついてきた。それだけだ」端的に答える。

「特別な感情は何もないと？噂になっっているぞ、『將軍は特殊な趣味をお持ちだ』とな」ほくそ笑むラキ。妙に癪に障る顔だ。

「あんな小娘にもならん子供に湧く感情などない」

「そうか？なかなか可愛い子じゃないか。不吉な容姿をしちやいるが、今時あんな迷信を信じるものもないだろう。將軍様の特殊な趣味を考えますと、連れて帰ってきたのも頷けるというか」先ほどの慇懃無礼な部下を演じるラキ。

「だから違うと……なぜエレンを知っている？」異常に気付く。ラキがエレンを知っているはずがない。ラキとすれ違って気付かないことは絶対じゃないし、そもそも彼女はずっとフードを被って俯いていた。顔を知っているはずがない。

「へえ、エレンね。可愛い名前じゃないか」

「質問に答える。何故貴様がエレンを知っている」

「何故って、さっき階段ですれ違ったからだよ。侍女に聞いたら、あんたの部屋にいたっていうから。違うのか？」

最後の言葉を聞く前に、体が既に動き出していた。ラキが呼びとめている気がしたが、仮にそうだとしても止まる気はない。

手すりを飛び降り階下へ。もう一度降下し、自室へと向かう。

扉を開け放つと、部屋で掃除をしていた中年の侍女が小さく悲鳴を上げた。右手に包帯を巻いている。

「す、すいません、すぐに退室致します」侍女がそそくさと道具を

まとめ、部屋を出ようとする。

「エレンはどこへ行った」その前に立ちふさがる。侍女の顔が引きつる

「エレン？誰のことでしょうか、私は存じ上げないのですが」

「ここにいた少女だ」心当たりがあつたのか、目を大きく見開く侍女。

「し、失礼しました！所、將軍様がお連れした方とはつゆ知らず…

…」侍女はしどろもどろで、目線を彷徨わせながら汗をかき始めた。「何処に行ったと聞いている」

「は、はい！あの、えと、この部屋を飛びだして下の階に行ったまではわかるのですが、みうしなつてしまい」

「ここが俺の部屋で幸いだったな」

「え？」侍女の疑問は悲鳴に変わる。

首を鷲掴みにし、振りまわす。遠心力をそのまま投げる力に相乗させ、廊下に叩きつける。

「エレンに何かあつてみる。どこであろうと貴様を刻んでやる」侍女は頭から血を流しながらうめいた。それが返答なのか聞いている暇はない。部屋を飛び出し階段へ向かった。

「俺が思う以上にご執心でしたか。噂も何もあつたものじゃないな」風のように走りぬけて行った將軍を見送り、呟く。階段に差し掛かったところで彼の姿はふっと消えた。

城の階段は廻り階段（踊り場で折り返して下る階段のこと）なので、確かにやろうと思えばできることだが、それは一階分を飛び降りるのに等しい。

それをわかつての上か、それともそんなことを考える余裕もないのか。將軍は手すりを飛び越え、階段も踊り場も通らずに階下へ移動した。

「御伽噺も馬鹿にできないかもな。死神をあそこまで魅了するあた

り、魔女といったほうがいいかもしれないが「次はどうからかってやろうか。あいつのことは好きではないが（むしろ嫌いだ。あいつのせいで俺は將軍になれないし、頼の借りもある）、珍しくからかうネタができたのだから、それを逃す手はない。焦るあいつは思ったよりも面白いことが分かった。

あいつは元々無愛想だったが、二年ほど前からか、前にも増して残忍になり、人を寄せ付けなくなった。そのころからだ、『死神』などと呼ばれるようになったのは。

その名は、褒め称えていたのでも、称賛していたのでもない。忌み嫌われていたのだ。

そのあいつが、一人の少女に取り乱している。誰かのために走っている。

「エレンちゃんには感謝しないとな」今度菓子でも持っていくとしよう。あいつをからかうついでにでも。

湿った丸い空気。獣と糞尿、餌と糞の入り混じった何とも言えない臭いが鼻を突く。頭だけを突き出してくる馬たちが、小屋に入ってきた見知らぬ者の匂いを嗅ごうと鼻を押し付けてくる。

身をよじりながら厩舎の奥へと入っていく。

みつけた。一番奥の個室に、のんびりと飼葉を食んでいる。周りより一回りもふた回りも小さいのに、やたらと堂々としているその子は、間違いなくお爺さん驢馬だ。

臭いに気付いたのか、飼葉桶から頭を出す驢馬。近付いて手を差し出すと、湿った鼻を擦りつけた拳句に涎だらけの下で舐めてきた。柵を潜って個室に入る。臭いが急にきつくなった気がするけど、気にならない。元々厩舎に住んでいたのだから。

そう。あの人と出会うまでは。

一生ああやって暮らしていくんだと思っていた。朝早く起きて、畑のお仕事して、水を汲んできて、驢馬の世話をして、叩かれて、

食べ物を探して、掃除して、蹴られて、食べ物を探して、放り出されて、腐りかけた藁の中で眠る。

不幸だとは思わなかった。普通だと思ってた。比べることはできなかった。バケモノだから、あきらめていた。

あの日、全てが変わった。わたしの狭い世界を、こわした。

オブロクさんたちが死んだ。襲われた。汚されそうになった。目の前で人が死ぬのを見た。

あの人に、出会った。

初めて、家を飛び出した。

初めて、暴力に抗った。

初めて、助けられた。

初めて、病気になった。

初めて、お薬を飲んだ。

初めて、看病してもらった。

初めて、おんぶしてもらった。

初めて、名前をもらった。

初めて、誰かと一緒にうれしいとおもった。

初めて、ひとりはさみしいとおもった。

初めて、『あの人』と一緒にだからうれしいのだと、きづいた。

握りっぱなしでしわくちやになった服を、引き寄せる。よく見なくてもわかる、染み付いた汚れ。同じ汚れが、わたしの服にもある。わたしとあの人の、一緒に旅をした証。つながり。そう思うだけで、ただの汚れが失い難いものに感じる。

「ついてくるな」と、あの人は言った。あの人についていこうとして、初めて言われた時と同じ言葉だった。

わたしとあの人は、あの日から何も変わっていなかった。変わったと勝手に思い込んでいただけだった。自分に都合のいいように解釈していただけだった。

もしかしたら、本当に夢だったのかもしれない。あれはただの白昼夢で、わたしはただついてきただけで。

看病も、おんぶも、名前も、本当は何も貰ってなかったのかもしれない。わたしがただそう思いたかっただけで、そんなことは何も起きていなかったかもしれない。

わたしにあるのは、これだけ。旅の間についた服の汚れだけ。あの人と共にしたのは、そんなちっぽけなものだけ。

物音に目を覚ます。知らない間に眠っていたらしい、辺りは真っ暗で、そばにいるはずのお爺さん驢馬でさえ輪郭がぼやけている。

厩舎が何やら騒がしい。馬が興奮していななき、落ち着きなく足音を荒くする。

厩舎の入口が明るくなる。誰かがろうそくをつけたらしい。わたしが入ってきたときは頭を突き出してきた馬たちが、後ずさりして個室の壁に腰をくつつけている。

明かりが移動する。闇をかき分けて、奥へ、わたしのいる個室へと近づいて来る。

あの女の人だろうか。それとも別の人？どちらにしても、見つかったらいけない気がする。隠れないと。

でも、わたしの体は動かない。怖くて足がすくんだわけじゃない。動けないわけでもない。動く必要がない。

この足音を知っている。この歩調を知っている。動物が怯えるのを知っている。お爺さん驢馬が怯えないのを知っている。

わたしは、あの人を、知っている。

夜を被ったような髪。闇より黒い瞳。誰もが畏れる人。

「エレン」わたしを、呼んでくれる人。

あの人、目の前に立っていた。

どうしてここが分かったんだろう。どうしてわたしを探しに来てくれたんだろう。どうしてわたしを呼んでくれたんだろう。

どうしてがいっぱい。全部知りたい、聞きたい、教えてほしい。

でも、わたしにはそれはできない。

わたしに声はない。わたしに言葉はない。

だけど、今はいい。いつものそのことに悩むけど、今はそんなこと、気にならない。

だって。だって、あの人は、手を差し出している。あの時つかめなかった右手を、わたしに差し出している。

エレンを呼んでくれて、エレンの手を掴もうとしている。

エレンは右手を差し出した。あの人がエレンの手をしっかりと握った。

「もう離れるな、エレン」歩き出したあの人が、一言つぶやいた。返事ができないエレンは、暖かい右手を、握り返した。

第十四話：手（後書き）

エネルギー切れです。どうもこんにちは、じよんです。

復帰二回目、でも前のはある程度書いておいたもので、厳密には今回が復帰一回目といった感じです。

……なんか、キャラ崩壊してねえ？書いていて、こいつこんなキヤラだったつけど、何度頭をひねったことか。わたしの頭が崩壊しているのかもしれない。

今更ながら西尾維新にハマりました。前々からアニメは見ていたんですが、原作はノータッチでした。読んでみて後悔、もっと早く読めば、いや読まないほうがよかったのか？オタク度を加速させる本ですね、まったくもってけしからん。

ブログじゃないので、本の話はここまでにして。久々に書くと、全然進みませんね。ここまで苦痛を強いられるとは。でも書くのは楽しい、そんなジレンマ。

今回はやっと主人公たちに戻りますよ。私の中でもどっちが主人公なのかわからなくなりつつありますが。

では、次回もお楽しみに！

第十五話：潜入作戦

晴れることのない薄く黒い雲を抱えた空を背景にしてそびえたつそれは、夜という闇がそのまま暗さをおいて行っただかのように黒一色だった。城だけでない、城壁も、家も、人も、全てが黒い服を着ている。灰色と黒しかない、色覚を失ったのではと錯覚を引き起こさせる街、アングマル。追いかけている相手の終着地点へと、僕は足を踏み入れていた。

「ついにここまで来てしまったか」背後でヘイルがぼそりと呟く。黒色の外套を着込んだヘイルは、フードを目深にかぶり、気落ちしたように肩を落とし、珍しく猫背である。それでも上背のある彼は、僕らが集団でいるのも相まってか、浮いて見える。

「なんだか不満そうね」独り言ともとれる呟きに、クリスが反応する。彼女も目立たぬようフードを被っているが、茶色の髪が少しだけはみ出ている。

「不満そうじゃない、不満なんだ。そもそも、この旅は奴がここにたどりつくまでに終わらせることが条件だったはずだ。なのに追いつくどころか、先に着かれた。最早これは潜入だ」話が違々と鼻を鳴らすヘイル。

「何も努力しなかったわけではないだろ。少なくとも、寄り道をしたらとは僕は思わない」

「寄り道をしなかったことは認める。だが最速であつたかといえはどうだ？行軍の足を速めることもできたろうし、必要なら馬も使うべきだったのではないか」

「そうかもしれないけど……」言葉尻が濁る。僕だって、それをおぼろげに思わなかったことはない。可能な限り早く先に進もうとしていたが、もっと急ごうと思えば急げたのではないかと。

「まあまあ、過ぎたことを悔やんでも仕方ないぜ。大事なものはこれからどうすべきか、ってことだろ？」僕らの間にガウェインが首に

腕をまわして割り込む。

「足止めを食わせた張本人が言うんじゃない！貴様が私の財布を盗まなければ今度は追いついていたのだぞ」苛立たしげにガウエインの腕を振り払うヘイル。

「それはあんたも悪いんじゃないの？あとき盗んだのは俺だけど、俺がやらなくても絶対に別の誰かが盗んでいたことだろうさ。そういう街だしな、かえって俺が盗んだことに感謝してほしいくらいだ。他だったら今度は転売に次ぐ転売で、取り戻すことはできなかっただろうな」俺のおかげだろ？と誇らしげに胸を張る。

「いや、そもそも普通の盗賊だったら今頃斬り伏せられていると思うけど……」

「とにかく、今俺らが悩むべきは、どうして追いつけなかったかじやなくて」僕の言葉を見無視し、ガウエインは城を指差した。

「あそこに、どうやって入るか、ということだろ？」

「そうね。流石に街にはいるようにはいかないみたいだし」小さくため息をつくクリス。先ほど城門の前まで行ったときにはちゃんと衛兵が立っていた。町の入口には誰もいなかったこともあって、かすかに望みを抱いたりをしていたが、やはりそううまくはいかないらしい。

「荷物に紛れて入るのはどうだ？荷馬車とかに乗ってとか」ガウエインは手を上げてこたえた。

「結構長い間通りにいるけど、城に入っていくのはみてないわね。」

第一、私たち全員が隠れるのは無理があるわよ」

「兵士になり済ますのはどうだ？」ヘイルが提案する。

「五人も兵士が入れ替わったら気づくでしょうが。大体、そんな都合よく人が捕まるとおもうわけ？」

「なら別の誰かになり済ます」

「誰かって誰よ」

「それは……」頭をひねるヘイル。眉間のしわがさらに深くなる。元々厳しい顔が余計に険しくなっていて、睨みつけているようにさえ

見える。

「あの……」皆がうんうんとうなっている中、二人よりも明らかに自信のない声で、

「なり済ます必要は、ないのではないのでしょうか」一番確実な方法を、マリアさんが説明し出した。

アングマルは日中でも暗いことが多い。それはめったに晴れることがなく、曇りの日が多いせいだ。今日はそれでも明るい方で、うす雲からなんとなしに太陽を拝むことができるが、元々窓の少ない城内においては何の関係もなく、光度の足りない蝋燭が墨をまいたような壁を舐めるように照らしている。通るだけで人の気分を暗くさせる、間違っても心躍る場所でない城内を、俺は珍しく軽い足取りで歩いていた。おそらくそんな奴は城内でも俺一人だけだろう。

勿論、俺は普段からこんな上機嫌な奴ではない。陰鬱な輩が多いこの国では比較的明るい性格をしているとは自分でも思うが、それでも城内にいる時では気を張るし、しかも今は戦時下だ。他の兵士に見られたら間違いなく顰蹙を買うだろう。

にもかかわらず顔がにやつくのは、向かっている先があのグラムのところだからである。別にあいつと合うのが楽しみだからではない。寧ろ普段なら逆に足取りは重く、これ以上ないほどに陰鬱な気分には違いない。

だが今日は違う。名目としては奴が不在の間にたまった仕事の報告のためだが、実際は、あいつをからかうためにある。

三日前、唐突に戻ってきたグラムは、小さな女の子を連れていた。「ついてきた」とだけ答えていた。が、死神と恐れられ、堅物で知られ、噂すらされなかった男が、たかが小娘ひとりのために城内を駆け回った。あの時の取り乱しようはどう見てもただの連れとは考えられない。一体何があるのか、是非とも聞いてみたい。というか聞きます。

最上階より二階下の居住区画にある、將軍の部屋にたどりつく。観音開きの扉は厚く、廊下は静まり返っている。兵士が噂するような声も物音もしない（最も、今は昼だからなのかもしれないが）。ノックをしようと手の甲を扉にあてがう。が、逡巡した後、扉を叩かずにドアノブに手をかけ、目いっぱい扉を引いた。

「グラム將軍！約束通りたまった書類を持ってきました……た？」奇襲のとき来訪に、無駄に元気いっぱいあいさつ。あわよくば、何か面白いものが見れたらと思つての行動だった。

そしてそれは成功した。しかし問題がひとつあった。衝撃的すぎて、俺自身が事態を受け止められないことを視野に入れていなかったのである。

「ふん。相変わらず書類仕事というのはわからん。必要性が全く見いだせない」グラムは俺が持ってきた書類の束に一通り目を通すと、それらをテーブルに放った。書類はばらけて広がった。いつもの仏頂面をしたまま湯気の立つカップに口をつける。そこに慌てふためくとか、動揺といったものは見られない。寧ろ、俺の方が変な汗をかいていて、どうしても視線を別のほうに向けてしまうのを禁じ得ない。

彷徨った視線の先には、銀髪に緑と青の目を持つ少女。彼女は今、ベッドのシーツを敷き直しているところで。

なぜか、黒白のエプロンドレスを着ていた。

先ほど入ってきたときはグラムが少女に服をかぶせていた。驚いたのは俺と、少女だけだった。

視線をグラムに戻す。グラムは視線の意味が分からなかったのか、はたまたわからないふりをしたのか、

「なんだ？」とカップを下ろさずにつぶやいた。

「あれはなんだよ」別段やましい話ではないはずなのに、なぜか小声になりながら、視線をもう一度少女に移す。

「エレンだ」

「じゃなくて！あの恰好はなんだよ！」この野郎、わざとやってないか！？」

「あれか。侍女たちに女もので、仕事ができる服をよこせと言ったら、あれを届けてきた。それだけだ」何を騒ぐ必要がある、ともう一口啜る死神。奴が飲んでいると水のように冷たいのでないかと錯覚してしまいが、つられて口をつけた瞬間に火傷した。何故飲めるのか不思議でならない。

特にさつきから気になっているのはベッドだ。部屋のどこを見ても一組しかない。布団も一組しかない。一体どうやって寝ているのか。からかってみようかとも思ったが、平気な顔して飛んでもない回答をしてきそうではない。

「そうだ、渡すのを忘れるところだった」手にぶら下げてもつてきたのに存在ごと忘れているとは、我ながらあきれてしまう。

「何だ、それは？」テーブルの上に置いた白い袋をいぶかしげに見つめるグラム。

「菓子折りだよ。目上の人には手見上げを持っていくのが常識だろう？」この国にそんな習慣はない。俺もどこでこの話を聞いたのか覚えてないが、多分どうか知らない国の面倒な儀礼といったところだろう。

「知らん。俺は甘いものは嫌いだ」

「あんたにじゃないよ。これはエレンちゃんにだ」聞こえていたのか、俺が視線を彼女に向けると、ぱったりと目があった。そしてすぐにおびえた表情を浮かべてベッドの影に隠れた。気を利かせて笑いかけた俺にその対応は酷くなろうか。

「エレン」グラムが一声かけると、彼女はゆっくりとだが、ベッドの影から出てきた。そのままこちらへと歩いて来る。

というか、聞いたこともないくらい優しい声がそんなものとは全く無縁の人物から聞こえた気がしたのだが。

「お前にだ」グラムは袋を無造作につかむと、少女に差し出した。

少女は当惑しながら、まるで割れ物みたいにそうつと両手で受け取る。

「開けてみる」言われるままに、白い袋を開ける少女。中に入っていたものを取り出して、小首を傾げた。

「クッキーだよ。心配しなくても変なものは入っていないから食べてご覧」不安げにグラムに目を向ける少女。グラムは小さくうなづいた。

少女は取りだしたものの、一口サイズのクッキーを恐る恐る小さくかじった。小さな音を立てて、飲み込むと少女の表情が変わった。下がり気味だった眉は上に跳ね上がり、目を見開いた。口の端が緩やかに弧を描く。

「うまいか？」俺の質問に笑顔でうなづくエレンちゃん。

「そりゃよかった。持ってきたかいがあったってmond、なあ？」と視線をグラムに戻す。グラムはああ、と短く答えた。その視線は一つのクッキーを味わうために何度も小さくかじっている少女に向けられていた。

その顔が、ほほ笑んでいるように思えたのは、ただの錯覚だったのだろうか。

それを確かめることはできなかった。ちょうどその時に、礼儀正しい誰かが扉をたたいたからだ。

「グラム將軍、お時間です」

「わかった。すぐにいく」グラムはすくつと立ち上がった。そこに見間違えるような表情はなかった。

「何だ、もうそんな時間か。先に出ているぞ」グラムに倣い席を立つ。これから練兵場で集会がある。それには俺も出席しなければならぬのだ。

外にはひとりの兵士が待っていた。俺に気付くと慌てて略式の礼をとった。片手だけで返礼をする。

ほどなくしてグラムが出てきた。全身に黒の甲冑を着込んだ姿は、こいつが死神であることを改めて実感させられる。

「さて、行くとしましょうか」先に立って歩き出して、グラムがついてきてないことに気付く。首を巡らすと、少女が戸口に立ってじつとこちらを見ていた。

細い体を締めこませて。

今にも泣きだしそうな、儚い顔をして、グラムを見ていた。

グラムは少女のもとへとゆっくり戻り。

そうつと、少女の頭を撫でた。

「すぐに戻る」俺に聞こえないくらい微かな、だが毅然とした声で囁いた。

あいつは、笑っていた。

それが、なぜか。

いつかあった何かと――全然違うのに。

ともに在った誰かと――全く似ていないのに。

重なつて。

あの子は彼女じゃない。

あいつは俺じゃない。

似ているところなんてどこにもない。

俺とあれとは、こんなじゃない。

なのに。

どうして。

こんなに、焼きつくほどに、ちらつくのか。

「どうした？」グラムに声をかけられる。目は覚めていたはずなのに、いつ目の前に来たのか分からない。

「すまない。違うものを見ていた」

「違うもの？」俺の言葉に、グラムは眉間にしわを寄せる。やはり見間違えたのか、そこに俺が見た表情を持つ者はいなかった。

「何でもない。行こう、あんまりのんびりしていると遅れてしまう」

「意外とばれないものなんだな。少くくは疑われるかと思っただけだ」

「当たり前じゃない、同じ顔なんだもの。あなたはあつたことないからわからないだろうけど、並んでいたってわからないくらいなんだから」

「いや、確かに話は聞いていたけど、なんていうか、実際には半信半疑だつたというのが本音なんだが」

「無理もないよ。僕だつて自分のことじゃなかったら信じていなかつただろうし」

「静かにしろ！ここはもう、敵の懐なんだぞ」押し殺した声でヘイルに叱責され、僕らは口をつぐんだ。暗い廊下はしんと静まり返つており、松明の燃える音だけが聞こえる。すれ違ふものはおらず、僕らの他に足音は聞こえなかつた。

城内には何事もなく入り込めた。忍び込むことなく、堂々と、正門から。

マリアさんの言う通り、言い咎められることはなかつた。少なからず疑われはしたのかもしれないが、兵士たちはすんなりと中に通した。

だが、考えてみれば当然のことなのだ。元々僕はグラムの一部であり、故に（少なくとも外見上は）全て同じである。仮に不審に思つたとしても、違ふ個所を見つけられないのなら意味がない。

「さて、どうやってグラムの部屋を探そうか」

「そんなの、人に聞けばいいじゃないか」何をばかなことを、といった表情でガウエインが答えた。

「な……！？」僕が言い終える間もなく、ヘイルがガウエインの胸ぐらを掴んだ。

「何を言っている！？將軍が自分の部屋の場所を聞くわけがないだろう！」

「馬鹿、声がでかい！」言われて、はつとあたりを見渡すヘイル。

反対側の通路を一人が横切って行ったが、幸い声は聞こえなかったらしい。

「大丈夫だって。大事なのは、『何を聞くのか』じゃなくて、『どう聞くのか』さ」しぶしぶ手を離れたものの、不満の残る顔をしているヘイルに、ガウエインは片目をつぶって見せると、今さっき通りすぎて行った人の後を追いかけて行った。

「行っちゃったけど、いいの？追っかかなくて？」とクリス。

「知らん。今更追いかけても無駄だ。待つしか無かるう」勝手な奴め、と鼻を鳴らすヘイル。それでも、いきり立って後を追いかけない辺り、少しは信用しているということなのだろうか。単にそんなことをしている余裕がないだけなのかもしてないが。

十分後。僕らは、大きな扉の前にいた。

「本当にここで間違いないのか？」とヘイル。

「教えてくれた人が嘘を教えてなければね。まあ、疑われた様子は皆無だったから、それはないと思うが」

「それにしても、どうやって聞き出したんだい？僕には怪しまれずに聞きだすなんてこと、全く思い浮かばないけど」

「別に特別なことはしてないぜ。ただ、『將軍の部屋が分からないのだが、本人には怖くて聞けない』とつけくわえただけさ」ガウエインはいささか得意げに答えた。……それくらいで本当に怪しまれなかったのだろうか。

「うだうだ言っても仕方ないか。……皆、準備はいい？」気を引き締めて、皆の顔を順々に見る。

ヘイルは利き手を外套で隠してある剣に添えている。

ガウエインは既に短剣を抜き、刃が見えぬよう手首を返している。クリスは弓を取り出し、マリアさんは胸の前で手を握りしめている。

僕はうなづくと、扉に手をかけた。

どくどくと、心臓が脈打つのが耳に響く。鼓動が速いのが嫌でもわかるのに、腕は痺れたように感覚がなく、握っている取っ手の感

触さえ希薄だ。足は鉛のように重く、膝を曲げるだけで座り込んでしまいそうだ。

この扉の先に、グラムがいる。もう一人の、いや、本来の自分。死神と恐れられる、自分とはまったく別の存在。

僕は、会ってどうする気なのだろう。自分の感覚にひかれるようにここまでできていながら、こうして扉に手をかけている今でさえ、自分が何をしたいのかわからない。

戦うのか。話し合うのか。それすらも思い浮かばない。

それでも、思い切って扉を開け放った。

そうすることしか、僕は前に進めないから。

「グラム！」

部屋に飛び込む僕に、皆が続く。足音高く部屋に乱入し、戦闘準備は万端。

だったのだが。

「……あれ？」呆氣にとられたまま、部屋を見渡す。応接用の机と椅子、ベッドと衣装箆笥だけの、元々ふた部屋だったのを仕切りを取り除いたかのような、奇妙なだっ広さを持つ部屋。それら家財の他に、個人を特定する物はなく、がらんとしている。

グラムはいない。いるのはひとりだけ。小さな女の子が、部屋の中心でポツンと座っているだけだ。

少女と目が合う。黒と白二色の給仕服を着込んだ姿が、肩まで伸びた銀色の髪に映える。僕をとらえた青と緑の瞳を見るだけで、少女が固まってしまっているのがわかる。かくいう自分自身もそうだ。何故グラムの部屋に小さな女の子が？部屋を間違えたのか？でも彼女の格好を見るに部屋の持ち主に見えないし。ならここは誰の？仮にグラムの部屋だとしてグラムは……。

「貴様、何者だ」ヘイルの声で現実を引き戻される。ヘイルは既に抜きはらっていた幅広の剣を、座り込んだ少女の眼前に突きつけていた。

「ちよっとヘイ」

「この国の人間は子供でも戦い方を知っている、戦場では女の兵士に十人の兵が殺された」クリスの言葉を遮り、ヘイルは柄を握りしめた。

「言え。お前は何者だ。グラムはどこにいる」剣先が少女の喉元に触れる。

「やめるんだ、ヘイル」彼の肩に手を置く。

「止めるな、これは必要なことだ」ヘイルは僕に目もくれず、少女を睨み続ける。彼の背中はまだ燃えているように赤い靄が上がっている。

「いいから剣を引いてくれ。その子をよく見てみる」肩から手を離し、少女を指差す。

「震えている。この子はお前が危惧するような女の子じゃない。普通の、小さな女の子だ」

ヘイルはしばらく黙っていたが、やがておもむろに口を開いた。

「だとしても、ここにいますと言う事実を無視はできません。少なからず、グラムのことを知っているだろう」

「だったら普通に聞きだすだけさ」

「……勝手にしろ」ヘイルは鼻を鳴らすと、剣を納めて後ろに下がった。炎はもう消えていた。

「おーし！それならおれに任せろ」パンパンと手を叩き、ヘイルと立ち替わりで前に進み出るガウエイン。

「なんであなたなのよ」

「おれは子供に懐かれることで有名なんだぜ？」

「初耳なんだが」

「いいから見てろって。ほらお嬢ちゃん、お腹空いてないか」ガウエインはポケットをまさぐると、中からビスケットを取り出して少女に差し出した。が、後ずさりされただけだった。

「物で釣ろうとするからよ。こういうのは安心させるのが大事なのに」クリスは自信満々に言っただけでガウエインを押しつけると、少女の前にしゃがみこんだ。

二歩後ずさりされた。

「ぷっ！」思わず吹き出してしまう。

「ちよつとイエリシエン！」

「ご、ごめん。つい」

「あら。この子、随分とイエリシエンさんを見つめてますね」不意にマリアさんが言った。

成程、少女に視線を移すと、僕をじっと見つめていた。しかも不思議そうに、怪訝そうに眉を寄せて。

「む。すごい熱視線だ。まさかお前幼女に好かれる体質だったのか？」

「訳の分からないことを言わないでくれ。そんな体質なんてないし、そもそもどうやってわかるんだ、その体質」寧ろなぜ『子供』に好かれると言わないのか。が、確かに少女は僕に一番興味があるらしい。ならば僕が話を聞きだすのが道理だろう。

クリスに倣って屈んでみる。少女を刺激しないように、ゆっくりと。少女は逃げなかった。

同じ目線になって、改めてその顔をじっくりと見ると、なかなか可愛い顔立ちをしている。子供らしいどこか柔らかそうな頬とか、血色のよい唇をしているが、どこか大人びた雰囲気もあり、特に左右で異なる青と緑の瞳は深く、宝石のようである。

「えっと、君の名前は？僕はイエリシエンだ」僕の名前を聞くと、少女はぽかんと呆氣にとられたような顔をした。

「もしかして、あなたをグラムと間違えているのじゃないかしら」クリスの言ったグラム、という単語にピクリと反応する少女。その予想は外れてないようだ。

「そうか。うーん、なんて言ったらいいのか。グラムと僕は、兄弟みたいなものなんだ。君はグラムを知っているかい？」少女は首を縦に振った。それも勢いよく、元気に。心なし顔も緊張から解放されたように晴れている気がする。

「彼が今どこにいるかわかる？」今度は少女は首を横に振った。対

照的に表情も沈んでいる。

「ここは彼の部屋で間違いないかい？待っていればここに来るかな？」ゆつくりと頷く少女。それだけは間違いがないというように、重々しく、まっすぐと僕を見つめ返して。

「

「え？いまなんて？」ガウエインが聞き返す。少女が何かを言ったが、僕にも聞こえなかった。

「少女はもう一度、ゆつくりと口を開いた。が、声が聞こえない。聞き取れないのでない、音を認識できない。僕には少女が口をパクパクしているようにしているようにしか見えない。

いや、見えないのではない。僕らが聞き取れないのでなく。

「もしかして、君はしゃべれないのか」少女がコクリと頭を縦に動かす。そもそも、音を発してなかったのだ。

「成程。寡黙なのでなくて、文字通り無口というわけだ。そりゃ内気にもなるか」ひとり納得して頷いているガウエイン。

「しかし困りましたね。せつかく部屋を見つけ出したのに、当の本人がいないとなると」とマリアさん。

「部屋は間違っていないだし、この子が保証した通り戻ってくるのを待てばいいんじゃないかな」

「待てばいい、なんて随分と気楽なことを言うぜ。その辺お前から何か言いたいことが……」ガウエインが固まる。意見を求めようと首をひねった形で、まるで石にされたかのように停止する。

それは僕らも同じだった。ガウエインと同じところに視線を向けたまま、正確には視線を向けた瞬間から、体も、思考も、一切が停止し、部屋の中に部屋の中に一瞬ではあるが完全なる静寂が訪れた。その中でただ一人、時が止まらなかった人が、全員を石化させた原因を呟いた。

「あれ、ヘイルさんは？」

番人という仕事は、たとえそれがどんな物、または者のためであっても名誉ある仕事である。ましてや、その対象が王であるならば、これ以上名誉ある番人の仕事はないだろうと思う。

しかし、私はそんな仕事を退屈と感じている。

決して王に対して忠誠心がないわけではなく、むしろ人並み以上の忠誠心を買われてこそこの役職につけたのである。

であるのだが、番人という仕事は、簡単にはなることのできない割に仕事は少ない。ほとんどないと言っても過言でない。一日中扉の前に立ち、日に数度尋ねに来る相手を確認し、それを王に伝え、中に通す。

それ以外には何もすることがないし、何もしてはいけない。話してもいけないし、動いても、ましてや座り込んでもいけない。ただ黙って直立不動で立ち続け、交代の時間を待つのみである。暇な割に重労働なのだ。

元々私は最前線に立つ兵士の一人だった。その中で武勲を立て、番人に任命された。

が、どうやら私には不向きだったらしい。いつ来るかわからない、そもそも来ることさえないかもしれない相手を警戒して待ち続けるより、戦場で走り、叫び、剣を振るい、槍を突き出し、矢を放ち、傷つけ、傷つき、敵の首を取るほうが性に合っている。任命されて随分たつが、近々移動を願い出よう。鍛錬は欠かしていないが、こうしてただ立っているだけでは、腕は鈍る一方だ。

そんなことを考えていたからだろうか。それとも、本当に腕が鈍り、危機に対しての感覚が薄れてしまっていたのだろうか。

どちらにせよ、油断していたのだろう。廊下を一人の兵士が歩き、そして目の前を通り過ぎていくことに気付かなかった。視界に入っていたのに、意識に入らなかった。

だから、異常にも気付かなかった。通り過ぎて初めてそれに気付いたが、それは遅すぎた。

決定的に遅すぎた。

「普通の兵士の剣の大きさではない」という事に気付いた時には、まさにその異常によって、隣の間僚の首が兜ごと宙を舞っていた。

思考が瞬時に戦闘態勢へと切り替わる。同時に、右手にずっと握ったままの、石突きを地面につけていた槍を繰り出した。その動作は一瞬前まで考えていた心配を吹き飛ばすほど、自分でも鮮やかとも呼べる一撃だった。

それでも、自分の最高とも呼べる一連の動作でさえ、『意識の遅れ』を覆すことはできず。

槍が相手の胸を貫くよりも早く、規格外の剣が鎧を抵抗なく裂き、まるで体内で爆発が起こったような衝撃が腹部から生じ、炸裂した痛みが全身を埋め尽くし、視界を白く灼きつくす。

火のついた紙のように自分があつという間に黒く燃えて消えていくのを感じながら、紙片となった思考で。

最高の動きでも戦いにすらならなかったのは油断したからであり。そんな油断をしている時点で、私は戦士として堕ちていたのであると。

自分の劣化を嘆いて私は燃えた。

「フリー……」 這いの空気を一気に吐き出すとともに固まった疲れ、緊張をも吐き出す。二人目の衛兵がこと切れる前に突き出した槍は腹部をとらえたが、鎧を貫くまでの力はなく、脇に伸びていく細い傷をつけただけだった。

それでも、鎧をつけていなければ危なかっただろう。流石はアングマルの精鋭、奪った鎧であっても、敵のものであっても感謝せずには居られなかった。一瞬の斬り合いだったというのに、兜を被った額から汗が噴き出ている。

額を拭って、扉に向き直る。

この中に王がいる。アングマルの王が。

何故今までこの思考に思い至らなかったのか。何故敵地にもぐり

こみ、あまつさえ城内まで侵入せしめたというのに、思いつかなかったのか。

それほどまでにグラムとの決着をつけようとしていた自分を情けなく思う。いや、もしかしたらあの連中に感化されてしまっていたのかもしれない。イエリシェンという、もう一人のグラムに。

が、私は皇子だ。サン国の第二皇子、ヘイル・ファルゲオだ。皇子である私は、国のために戦う。

戦争を終わらせる。

アングマル国王を、暗殺する。グラムが兄を暗殺しようとしたように。

第十五話：潜入作戦（後書き）

……。凄くお久しぶりです。

じよんです。生きてます。サボってました。すいません。

ほんとにどれだけさぼるんだ俺！と自分でも思っていました。別に鬱になってたとかそういうわけじゃないんですが、確かに忙しかった時もあったにはあったけどここまで休む理由にはならないというか。

……はい、ごめんなさい。次は頑張ります。といいところですが、毎回言ってくる癖に約束を破る辺りもう信用しなくていいです。そこ祖も自分が信用できん……。

とりあえず本をたくさん読もうと思ってます。ここ二年ほど本を読まなさすぎるので。二年で十冊くらいって……。そりゃ想像（創造）力もなくなるわな……。

いつも呼んでくれている皆様。期待せずに、気が向けば覗くくらいな気持ちでいいので、これから読んでいただけると幸いです。

それでは、次回お会いしましょう。その日が早く来ますように。

第十六話：玉座の間

「ほう。どうやら、招かれざる客がきたようだな」外の剣戟の音が聞こえていたのか、全くの驚きを見せずに、石造りの硬い玉座に優雅に腰を下ろした人物が言葉を漏らした。

病人のように青白い顔。細い手。見た目には自分より少し上、兄と同じほどに思える。が、発せられた声は重々しく太く、眼光は冷たく光っている。

ムヒヤル・アングマル。現アングマル国王その人が、細長い部屋、赤絨毯を隔てた先にいる。おびえた様子や、外に助けを求めようとするそぶりは見られない。だというのに、不自然なほど落ち着いている。

左右に目を走らせる。装飾、カーテンの裏、どこかに誰かが隠れてはいないかと。物陰に不自然なところはなく、気配もない。ただ、王を挟むようにして仁王立ちしている二人の兵士だけがいる。手に持つのはハルバードだ。

問題はその大きさだった。長さもさることながら、刃の幅が人間の胴体ほどもある。一目で私がいまもっている武器よりも重いとわかる。自分が通常より重い武器を扱うだけに、その威力は容易に想像がつく。

加えて、兵士達も大きかった。巨人と言ってもいい。身長は有に二メートルを超している。分厚いプレートアーマーに身を包んだその姿は樽のようで、挟まれたアングマル王がとても小さく見える。あの体格ならばあの凶器を振るうのも容易であるだろう。だが、ただでさえ重いハルバードに、あの重装甲だ。動きは必ず鈍くなる。ついている隙は必ずある。それに、無理に倒す必要もない。奥に鎮座する王を倒してしまえば、それで終わるのだから。

私の考えを見抜いたのか、兵士の一人が前に出てきた。もう一人は王の前に陣取る。こちらに向かってくる兵士の歩みは重く、ゆっ

たりとしている。絨毯でも殺しきれない鈍い鉄の響きが、纏う甲冑の重さを伝えている。

肩の力を抜き、柄を握り直す。構えは取らない。動きが鈍いからといって先手を打てば、相手の思うつぼだ。あの鎧を一太刀で貫くのは無理がある。防御力を利用して、攻撃を鎧で受け、隙ができたところを一振りで潰す。相手の戦略はおそらくそうだろう。ならばこちらは逆に攻め手を誘い、避けて隙をつく。

果たして、巨兵はハルバードを大上段に構えた。攻め手は誘えた、後は避けるだけ。だが、相手はまだ間合いに入っていないかった。ハルバードと体格を考えても、まだ十歩ほど間合いの外にいる。

その疑問はすぐに答えを得た。

巨体が跳んだ。

文字通り跳躍し、一瞬で間合いに入る。同時にハルバードを、まるで重さを感じさせない速度で振りおろしてくる。以前、私が使ったのと同じ戦法だ。だが相手は何倍以上もの重さの武器と防具を着込んでいながら、助走なしでなしでそれをやったのけた。常識を覆すような身体能力だ。

それを反身だけずらしてよける。不意はつかれたが、どう攻撃してくるのかわかっていれば避けられないことはない。

ハルバードは勢いを殺せず、大砲のように激しい音を立てて床を叩き碎いた。碎けた破片が宙を舞い、頬を掠める。まさに必殺、当たれば鎧など関係なく両断されるに違いない。

が、今はその破壊力が災いし、刃の部分が完全に埋まって、引きもどせなくなっている。相手の胴は隙だらけだ。これ以上の好機はない。

懷に飛び込もうと足に力を込め……。

そのまま真横に飛んだ。

頭を衝撃が襲い、兜がはじけ飛ぶ。視界の端に絨毯のキレはしが映る。感じるままに回避行動をとったので何が起きているのかわかっていなかったのだが、それで何が起きたか理解した。

兵士が床に埋没した武器を引き抜いたのだ。床ごと。

金属が削れる時に出る、あの鼓膜を直接擦るような音が響く。視界の端に火花が散るのが見えた。刺先（槍の穂先にあたる部分）が壁を削っていた。

立ち上がる間も惜しく、膝をついたままの姿勢から宙返りするように後方に飛び退く。そのあとを追うように鉄の塊が唸りを上げて叩きこまれた。砕け散った破片が鎧に当たり、カツカツと軽い音を立てた。

着地と同時に身構える。だが、兵士は追撃してこなかった。ゆっくりと埋没した武器を引き抜いている。そこに抵抗を感じている様子は全く見られない。

「流石、というべきかな、ヘイル皇子。並の将なら今のをかわしきることは不可能だったろう」アングマル王が抑揚もなく言い放つ。感情を感じさせない声に反して、顔には残虐な笑みが張り付いている。

言い返す余裕はなく、眼前の相手に集中する。巨人はゆっくりと間合いを詰めることにしたらしく、一步一步にじり寄ってくる。

切れたこめかみから垂れた血が、首筋を伝っていった。

練兵場は城の中庭、ちょうど城門と反対側に位置する。練兵場といっても、そこはただの平地であり、幾か所に修練用的があるほかはただの空き地だ。その代わり広さとしては申し分ない。面積だけを見れば、城と同じほどだ。他国の練兵場がどれほどかは知らないが、かなり広い部類に入るだろう。

そのただっ広い広場を鉄が埋め尽くしている。その数約四千。警護の兵を除いて、城内にいる全ての兵士が甲冑を纏い、整列したまま直立不動の姿勢を取っている。彼らの視線は城の二階、ベランダ部分に注がれている。

「……確かに今回の戦闘では多くの同胞の命が奪われた。だが、相

手も無傷ではいられなかった。敵は千を超える兵を失ったのだ。奴らは疲弊してきている。次の戦に勝てば、われらの勝利は目前に迫るだろう！」身振りを激しくし、声を荒げる演説者。頭髪は既に白く染まり、顔には深々と皺が刻まれているが、練兵場に響き渡るその声は勇壮な戦士のそれだ。

モガン騎兵長。齢六十を越してなお、騎兵を先頭に立って率いる勇将だ。戦場での戦いぶりからか、一般兵からの信頼は厚い。が、お世辞にも演説は巧くない。彼は常に感情に任せて熱弁を振るうが、内容はさして変わらない。要は『もつと奮闘しろ』ということである。

兵もそれをわかっているのか、ただ単に退屈しているだけなのか。視線を明後日の方へと彷徨わせているものが上からだと特に顕著にわかる。

そしてそのいくらかは、モガン騎兵長の斜め後ろに立つ俺に向けられていた。

死んだはずの将軍が戻ってきた。その情報は、着いたその日に国内中に流布したはずだ。最早俺の帰還を知らない者は国内にはいないだろう。だが、それを真実と捉えたかどうかは別だ。多くの者はそれをただの噂と捉えるか、デマと考えたかもしれない。何せ、城に戻ってから俺は城内からは出ていない。城内にいる警護の兵や報告の為に城に入ってきたもの以外、俺を見たものはいない。この集会が、帰還して初めて公の場に姿を現したことになる。

そうした好奇の視線を感じながら、こちらもぼんやりと眼下の兵士たちを見渡す。

この戦争が始まった時より随分と減った。練兵場に見られる空白の部分がそれを強調する。あの頃あった隊は既になく、残った兵士たちは別の隊に補充され、また新たな隊を編成された。

見覚えのない顔がある。見知った顔が見当たらない。隊長の顔が一致しない。全く知らない隊がある。それらは俺がいない間に起きたことなのか、それよりずっと以前に変わったのか。

彷徨させた視線が、二つの隊をなぞる。正確には、そこに立つ隊長の顔を。

それは見たことのある顔だった。或いは、見たことのない顔だった。どこぞの戦場で叫んでいた兵士の気もするし、囲まれたところを味方に助けられていた兵士にも思えた。

どちらにしろ、どうでもよかった。大事なものは、そこに彼らはいない、ということだ。

グルンベルド。

デリシュ。

俺が『仲間』と呼べる、数少ない信頼の寄せられる部下であり、戦友だった。

視線を外し、空へと向ける。くだらない感傷に浸りそうになった。今するべきはそれではないだろうに。

視線を兵士たちへと戻す。だが、意識はまだ二人の事にとらわれて散漫だ。

そのせいだったのか、背後に聞こえた声に振り返った。

「だめだ。今は演説中だ、用があるなら少し待て」城内につながる入り口を、兵士がふさいでいる。その兵士が、ベランダへと出ようとする人物を押しとどめている。

相手はエレンだった。

「くそ！あいつどこに行きやがった！」ガウエインが悪態をつく。「決まっている。王のところだ。そもそも、こうならないことの方がおかしいんだ」疑問に答えながら、廊下の周囲に目を走らせる。見えるところに彼の姿は見当たらない。

ヘイルがいなくなったことに気付いてすぐ、僕らは部屋を飛び出した。近くの部屋を探していると、一室に死体が転がっていた。死体は首をへし折られていて、鎧はきていなかった。おそらく今はヘイルがきているのだろう。

あてもなく廊下を走り回る。行先ははっきりしているが、王の居場所が分からない。先ほどのように尋ねることも考えたが、流石に今回ばかりは何と言いつてもできない。

そもそも、城内は人がいなかった。給仕と思われる人を時折見かけはすれ、兵士とは出くわしもしない。幸い、こうしてグラムと同じ顔をした僕が走り回っていても誰も咎めないのだが。

「ねえ、王様ってどこにいますか？」後ろに続くクリスが尋ねる。肩には弦を張った弓を担いでいる。

「さあ。下の階にはいないと思うけど。最上階にいますか？考えるのが妥当かな？」答えた僕の足は既に階段にかかっている。先行するガウエインは跳ねるように階段を上っていく。

「じゃあとりあえず一番上を目指すぞ！」ガウエインはさらに速度を上げて駆け上がる。踊り場の影に隠れ、その姿はあつという間に見えなくなる。

「二人とも、大丈夫？」はやる気持ちを抑えて、後ろについてくる二人に振り返る。クリスは問題ないだろうが、マリアさんは……。

「だ、大丈夫です。それより、先に行ってください」案の定、彼女は息を切らして、壁に手をつきながら階段を上っていた。

「いや、一緒に行こう。離れ離れになるのは危ない」

「ならなおのこと、ガウエインさんを追いかけてください。先に行っているあのの方が、危ない、です」肩で息を荒げて、マリアさんが言う。

「でも……」反論しようとした僕に、クリスが首を振った。

「マリアの言う通りよ。あなたは先へ行って。大丈夫、私がついてるから」

クリスと目が合う。これ以上は余計だ。僕はうなづいた。

「ごめん」一言、二人に謝罪を残して階段を上る。外から見た城はそこまで高くなかったが、最上階まではまだあと数階はあるだろう。

息が切れ、疲れが出てきたころ、階段は終わりを告げた。階段を

見下ろすが、二人の姿は見えない。

廊下に目を走らせる。この階の廊下は一本だけで、真っ直ぐと伸びた先に、反対側の階段がかるうじて見える。

その、等間隔に明かりと暗かりを配置した廊下の中ほどに、ガウエインが立っていた。

彼の前には観音開きの扉。両脇の隅には死体が自らの血だまりに沈んでいる。ガウエインの諸手には例の短剣が握られている。

「ガウエイン！」名前を呼び、駆け寄る。その声に、死体を見下ろしていた顔を上げるガウエイン。

「イエリシェンか。二人はどうした？」ガウエインは既に息を整えていた。

「後で来る。これは君がやったのか？」

「見てわかるだろ。こんな殺し方、俺にはできない」死体を指差す。どちらの死体も一太刀で、鎧ごと叩き斬られている。

「じゃあヘイルは……。」もう中に、と扉に手をかける。

その手をガウエインが掴んだ。

「何を……」言いかけた言葉を飲み込む。ガウエインは睨むように僕を見た。

「いいのか？この扉を開ければ、お前も」王殺した、と。だからガウエインは扉の前で待っていたのか。僕がどういう選択をするのかと。

「僕は仲間を助けるだけだよ」扉に手をかける。視界の端で、ガウエインがやれやれと首を横に振っていた。

扉を開けたのとは同時に、何かが飛んできた。

「うわぁ！」突然過ぎて避けることもできず、飛来した何かにぶつかり悲鳴を上げる。それは大きい上に質量もあり、僕はそのままそれに押しつぶされた。

「貴様ら、どうしてここに!？」

「って、ヘイル!？」何と、飛んできたのはヘイルだった。

とにかくどいて、と僕が言うよりも早く、ヘイルは横に転がって

どいてくれた。

「ヘイル、一体何が……」

「来るぞ、避ける！」僕の言葉を遮るようにしてヘイルが叫び、飛び出す。その姿と入れ替わるようにして、視界に迫る白刃。反射的に横に転がる。

耳をつんざくような破壊音と共に、全身を震わせる衝撃が床を通して伝わる。砕けたつぶてが背中を叩いて痛い。が、このまま呆けて転がってはまずいと、とにかくゴロゴロと転がってその場を離れる。何とも格好の悪い体勢の立て直し方だが、仕方がない。

転がった勢いを生かして素早く立ち上がる。同時に扉に正対する。そうして初めて、僕は自分を襲った相手を視界に収めた。

相手はちょうど攻勢に移ったヘイルの相手をしていた。そのヘイルが並んでも胸ほどの高さしか届かない。それだけ相手は大きかった。そして扱っている武器もまた、尋常じゃない大きさだった。ヘイルを叩き切ろうと空を切る音は、離れた僕の耳にも届き、音だけでもその威力のほどを推測できる。というより、先ほどの床の残骸を見て、思わず自分と重ねてしまった。

「何だありゃ、バケモノじみてんな」何処に隠れていたのか、ガウエインがいつの間にか傍らに立っていた。

「うん、ヘイルの武器を見た時も普通じゃないと思っただけど、あれはいくらなんでも」おかしい、という言葉を読み込んで、剣を引き抜く。

「あれ見ても、まだやる気になるのか？」驚いた、と目を丸くするガウエイン。そういう彼の口は笑みを形どっている。

「さっきも言っただろ。仲間を助けるだけだ」その言葉と共に、戦いの真っ只中な玉座の間へと飛び込んだ。

そのまま敵と間をおいたヘイルと肩を並べる。ガウエインも反対側に並び、ヘイルを挟む形となった。ヘイルは一瞬だけ僕と目を合わせ、何かを言おうとしたようだったが、それを飲み込むように頷くと、僕らに囁いた。

「隙を作る」それ以上言う暇はなかった。巨人兵は立ち止まる僕らに容赦なく戦斧を振り下ろす。

鋼と鋼がぶつかり合う音が部屋中に鳴り響く。残響が耳朵を震わせる。ヘイルが真っ向からあの一撃を受け止めたのだ。

僕とガウエインは、申し合わせたように左右に分かれて相手に回り込んでいた。

「おおおおお！！！」 気合を乗せた一撃を、ひざ裏に叩きこむ。が、届かない。相手の鎧は思った以上に厚く硬く、貫通には至らない。

相手の肘が動く。避けなければ。でも、反応に体が追いついていない。背中を悪寒が駆け抜けた。

ヘイルは生きていた。傲慢の大剣は足元に転がっている。

空いた両手が、相手の武器を掴んでいた。

「やれ！」ヘイルが叫ぶ。体がそれに応える。喉から自然と雄たけびが振りしぼられる。腰が更なる力を絞り出そうとひねられる。

今度こそ、全身全霊をもって全力を振り絞った一撃を叩きつける。

刃に鋼の強い抵抗を感じた。

それに応えるように波紋を描いた刃が鋼を貫き、その下の脆弱な

肉を裂いた。

巨人兵の両膝から血が吹き出る。巨体が揺らぐ。支える力を失った巨人兵は、膝をついた。

「ちようどいい高さだ」ヘイルの、どこか不敵に笑っているような呟きが聞こえた。

それは、先ほど部屋を満たした金属音に比べれば、笑ってしまうような呆気ない音で。

巨人兵の頭部が、兜ごと宙を舞って、床を跳ねて転がった。

「やっと追いついた。ねエイエリシェン、これって一体……きゃあ！」クリスとマリアさんが入ってきて、二人同時に悲鳴を上げた。

頭を失った巨体が、轟音を鳴り響かせて倒れ伏した。

乾いた音が、部屋に響く。

玉座に座った人物が、骨ばった手を叩いていた。微笑を崩さず、玉座に悠然と座り、敵である僕らに賞賛の拍手を送ってくる。

アングマル王。グラムの仕える主であり、アングマルの国王。

「成程、成程。ここまでどうやってきたのか不思議には思っていたが、やはり仲間がいたのか。それに、それがグラムの……」アングマル王が僕を見据える。

……君の悪い目だ。切れ長の目をさらに細めた家からのぞく瞳が、充血でもしているのか赤く濁っている。

「それじゃない。こいつはグラムの影でも何でもない。ただのイエリシェンだ」

「え？」思わずこぼしたのは、誰の口だったのか。ヘイルが、僕をそんな風に言うだなんて。

「それよりも。随分と余裕だな、アングマル王。貴様を護る兵士はあと一人。その次は貴様の首が飛ぶぞ」ヘイルが大剣を突きつける。剣先には、巨人兵の血がべったりとついていて。

だというのに、アングマル王は、それを見ても全く態度を変えない。

いや、それどころか、高笑いをし始めた。

「何がおかしい！」ヘイルが怒鳴る。

「いや、いや。『あと一人』と言ったが、どうやら障害は一つ増えたみたいだ。そうだと、グラム？」

全員が後ろを振り向いた。それがもし畏だったら、もう一人の巨人兵に襲われていたら僕らはあつという間にやられていただろう。しかし、王はそれをしなかった。そしてそれは、畏でも何でもなかった。

床は苛烈な攻撃の跡を残して破片がそこかしこに飛んでいる。それらを踏みしめ、砕きながら、早めることなく歩いて来る影が一つ。

同じ腕。

同じ脚。

同じ背丈。

同じ顔。

僕と何もかもが同一である、鏡のような存在。グラムが、僕の目の前に現れた。

第十六話：玉座の間（後書き）

お久しぶりです。……やっぱり随分間が空きましたね。一か月くらいか？

色々ありました。ええ。地震もありましたしね。

被災した方々には心からお見舞い申し上げます。一刻も早い復興を願っています。幸い私も家族も全員何事ありませんでした。地震当日は家にいましたが、午前中は海上にいたので、午前中だったら、と考えるとぞつとします。

募金活動に参加してきました。入れる方もですけど、呼びかけの方で。いつもは募金とかあんまりしないのですが、規模が規模なのでね。皆さんも、余裕があれば協力してください。活動する身としては、入れてくれると凄くうれしいです。

話がそれましたね。（何度も言っている気がしますが）この章も本当に終わりが見えてきました。それだけに、今まで曖昧に考想ねっていた部分が災いしてなかなか進みません。決まればつつたかつたか書けるか、と言えばそうでもないんですが、ハハハ……。

正直、戦闘シーンが一番楽です。かいてて楽しいですしね。そもそも、最初に買いたいと思ったところですけど（グラムとエレンの話が一番書いて楽しいのは秘密です）。

地震も収まって、そろそろいろいろ始まりますね。それまでにこの章を終わらせられればと思います。あ、話はまだ続きますよ？まだまだ終わりまでは遠いです。

では、また次回。すぐに皆様に出会えることを願って、早く書きあげたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6522f/>

Last Game

2011年3月29日01時55分発行